

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書12

— 長野市内その10 —

えのきだ いせき
榎田遺跡

第1分冊（本文編Ⅰ）

1999.3

日 本 道 路 公 団
長 野 県 教 育 委 員 会
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書12

— 長野市内その10 —

えのきだいせき
榎田遺跡

第1分冊（本文編Ⅰ）

1999.3

日 本 道 路 公 団
長 野 県 教 育 委 員 会
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー



榎田遺跡 現況



S B1468 (弥生時代中期)



SG 3 (古墳時代中期～後期)



S K 4100 木棺墓 (平安時代)

序

上信越自動車道は、長野県の北部、善光寺平の千曲川東岸の山沿いを北進し、新潟県へ延びて行きます。この建設に伴い長野市内では平成元年度から平成4年度にわたり、11遺跡の発掘調査が実施されました。本書はこのうち長野市若穂綿内に所在する榎田遺跡の発掘調査報告書です。

長野市の綿内地区周辺は過去の発掘調査例が少なく、原始・古代の資料にやや恵まれない地域でありましたが、今回の調査により多くの新知見を得ることができました。

弥生時代から中世に至る数多くの遺構と遺物が発見されましたが、なかでも弥生時代中期の大型蛤刃石斧の製作関連資料は全国的にも類例の少ないものです。また古墳時代中期の河川址では大量の木製品が出土し、特に農具・耕作具などからは当時の農耕技術の一端をあきらかにすることができました。また古墳時代中期から後期にかけては500軒を超える住居址が発見され、当地に長期間集落が存在した事が判明しました。さらに平安時代の河川址からは、文字を記録した木簡や、大量の墨書土器などが発見されました。また中世の屋敷跡と思われる、溝に区画された建物群も見つかっています。

これらの資料は、この地域の先人の営みを知るための貴重な手掛かりを与えてくれるものと思います。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで、深いご理解とご協力をいただいた日本道路公団名古屋建設局・同長野工事事務所・同東京第二建設局・長野県高速道局・同長野高速道事務所・長野市・同教育委員会など関係機関、対策委員会を始めとする地元の地権者・関係者の方々、発掘・整理作業にご協力いただいた多くの方々、直接のご指導を賜った長野県教育委員会の皆様に対し、心より感謝申し上げる次第であります。

平成11年3月31日

財団法人 長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

所長 佐久間 鉄四郎

例 言

- 1 本書は上信越自動車道建設工事にかかわる長野市榎田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成元年度から4年度の4年次にわたり、整理作業は平成5年度と7年度から10年度の5年次にわたって実施した。
- 3 発掘調査・報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関のご指導・ご支援を得ている。お名前を掲げさせていただきます、感謝申し上げたい。(敬称略、五十音順)

相京建史 青木和明 青柳泰介 赤羽貞幸 浅岡俊夫 網干 守 飯島哲也 飯塚武司 石川日出志
石黒立人 石野博信 伊藤俊治 井上 巖 上原真人 梅崎恵司 大河直躬 岡原正明 小野紀男
小野由美子 尾見智志 風間栄一 風間春芳 加島次郎 柏原孝俊 加納俊介 神谷正弘 川村浩司
北野信彦 木下 実 桐原 健 工楽善通 小泉好延 高妻洋成 高野昌司 小坂昇司 小林宇壱
小林紘一 小山丈夫 斎野裕彦 坂井秀弥 酒井龍一 坂口 一 酒野晶子 佐藤信之 佐藤由紀男
寒川 旭 茂原信生 渋谷恵美子 島田哲男 清水康二 下條信行 助川朋広 鈴木敏則 鈴木三男
竹谷俊夫 田崎博之 田嶋明人 多田 仁 種定淳介 千賀 久 千野 浩 辻本崇夫 都出比呂志
寺島孝典 傳田伊史 富沢一明 外山政子 直井雅尚 中浦基之 中村由克 中山清隆 西尾太加二
二宮修治 禰宜田佳男 能城修一 野村一寿 蜂屋孝之 馬場伸一郎 原 明芳 原田和彦
平井典子 平井 勝 平川 南 平野進一 福島正樹 藤沢高広 穂積裕昌 前島 卓 松井一明
南木睦彦 宮島 宏 宮本長二郎 村田裕一 矢口忠良 矢島宏雄 山川守男 山口 明 山口譲治
山下誠一 山下泰永 山田真一 山田昌久 山田良三 山本孝司 若狭 徹 綿内四郎 渡辺博人
更埴市教育委員会 須坂市教育委員会 東国土器研究会 長野県考古学会古墳時代研究部会 長野市
埋蔵文化財センター 若穂郷土史研究会

- 4 本遺跡の調査・整理は10年間におよび、担当者の交代などにより十分な検討ができず、記述方法などに一貫しない部分が生じたが内容にかかわるものではない。
- 5 本遺跡の概要は、当センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』6～9、13、14他で既に一部を紹介しているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。
- 6 発掘及び整理作業の分担は、本文中に記した。

本書の編集は広田和穂が行い、土屋積が全体を校閲した。

執筆分担は次の通りである。第VI章(科学分析・鑑定)については、第I章第1節4で紹介する。

土屋 積 第I章第1節1、第V章第1節2

百瀬長秀 第I章第1節2

町田勝則 第V章第2節1・4、第VI章第3節1 (iii)

伊藤友久 第V章第4節

傳田伊史 第V章第8節1 (1)

福島正樹 第V章第8節1 (2)・2

山崎まゆみ 第I章第2節1・2 (1)、第II章第1・2・3節、第III章第6節第2表

贄田 明 第III章第2節1、第IV章第1節、第V章第1節1、第3節、第6節1・2

贄田 明・山崎まゆみ 第III章第2節2～6

広田和穂・山崎まゆみ 第III章第3節2～7、第4節2～4、第5節2～7、第7節2～4、第8節2・3

広田和穂 上記以外

- 7 本調査にかかわる記録及び出土遺物は、長野県立歴史館が保管している。

凡 例

1 本書に掲載した実測図の縮尺は、原則として下記の通りで該当箇所に記してある。

(1) 主な遺構実測図

遺構分布図 1 : 400 縦穴住居址・掘立柱建物址 1 : 80

土坑・焼土址 1 : 20~1 : 40 溝址 1 : 120

(2) 主な遺物実測図

土器実測図 1 : 4 土器拓本 1 : 4 特殊遺物(玉・紡錘車など) 1 : 1

木製品 1 : 4~1 : 8 建築部材 1 : 12~1 : 16

鉄製品・骨角器 1 : 2~2 : 3 石器 1 : 1~1 : 3

2 本書に掲載した遺物写真の縮尺は、原則として下記の通りである。

甕・壺・甌 1 : 4 坏・小型壺など 1 : 3 ミニチュア土器・鉄製品等 1 : 2

弥生時代中期土器は全て1 : 4に統一した。

紡錘車・銭貨・羽口・鉄滓・土製支脚 2 : 3 骨角器 1 : 3 玉 1 : 1

木製品 1 : 4~1 : 8 建築部材 1 : 10~1 : 20 石器 1 : 1~2 : 3

3 遺物実測図の番号は下記のように付し、個別遺構図中の遺物番号と一致する。

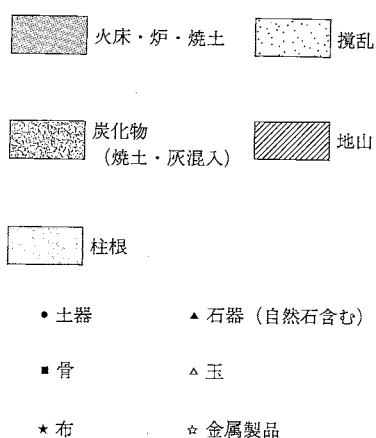
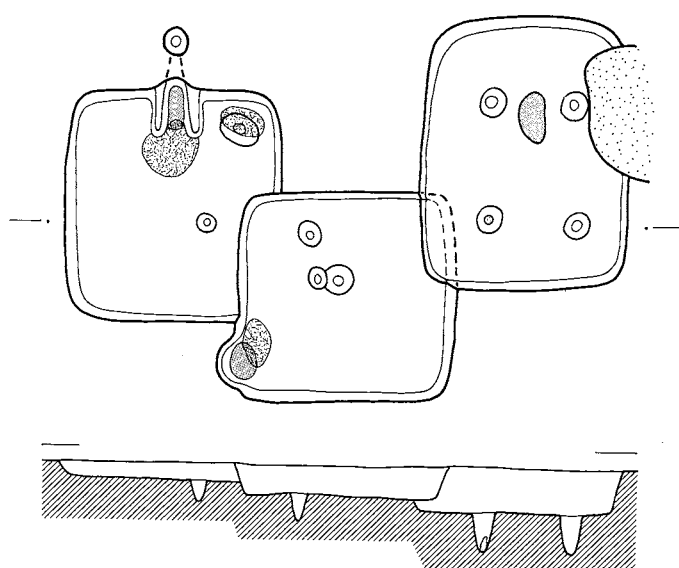
(1) 土器 各遺構ごとに1から通し番号 ただし弥生時代中期は一括して1から通し番号

(2) 木器 木製品・建築部材の順に1から通し番号

(3) 石器 各器種毎に1から通し番号

(4) その他 特殊遺物は時代順に1から通し番号

4 遺構実測図の表現は下記の通りである。



○個別遺構図中の土器は原則として1/12

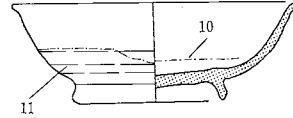
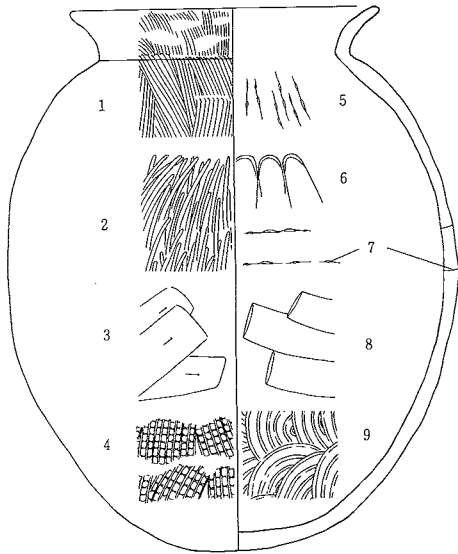
○個別遺構図中の石器は原則として1/6

○弥生時代中期・後期～古墳時代前期の遺構図中に示した土器は、印刷の都合上赤色塗彩が表現されていないものもあるが、正しくは遺物図版を参照願いたい。

5 遺物実測図の表現は下記の通りである。

(1) 土器

技法の表現は下記の通りとする。複数の技法が重なる場合（例 ケズリ後ミガキ）は実測図の中で切り合い関係を示している。ナデについては基本的に表現しない。

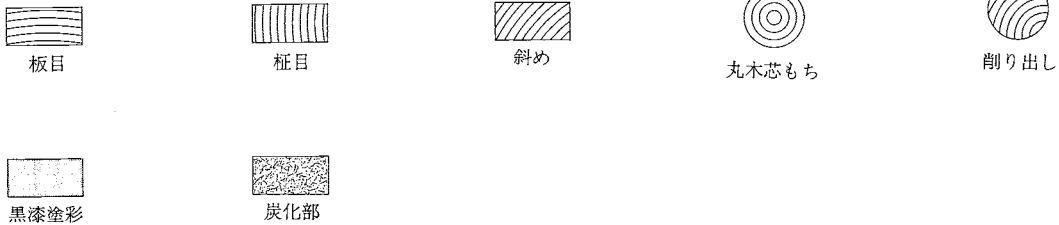


- 1. ハケ
- 2. ミガキ
- 3. ケズリ
- 4. タタキ
- 5. 絞り痕
- 6. 指ナデ痕
- 7. 輪積み痕
- 8. 工具ナデ
- 9. 当て具痕
- 10. 施釉範囲
- 11. 回転ヘラケズリ



(2) 木製品及び建築部材

実測図に用いたスクリーンパターンは下記の通りである。

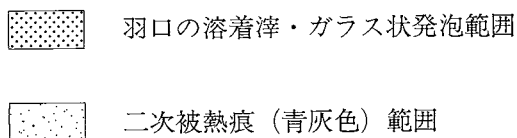


(3) 建築部材

丸太材については、柱材を除き材の元口を天に、末口を地とする天地の方向の配置を基本としたが、継手・仕口の加工を施されたものはそれを天に向けた。したがって、「第2分冊第V章第4節 建築部材」の項では杭状の削りは転用として解釈している。

(4) 甗の羽口

実測図に用いたスクリーンパターンは下記の通りである。



- 第1分冊 (本文編Ⅰ)
 第2分冊 (本文編Ⅱ)
 第3分冊 (遺物図版)
 第4分冊 (写真図版)

第1分冊 (本文編Ⅰ) 目次

巻頭写真

序

例言

凡例

目次

第Ⅰ章	序 説	1
第1節	調査の概要	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査における問題点	1
3	調査の体制と経過	2
4	委託事業等	5
5	整理作業の分担	6
第2節	調査の方法	7
1	発掘調査の方法	7
2	整理作業の方法	10
第Ⅱ章	榎田遺跡周辺の環境	13
第1節	遺跡の位置	13
第2節	自然環境	13
第3節	基本層序	17
第4節	周辺の遺跡	20
第Ⅲ章	調査成果	23
第1節	遺構の概要	23
遺構分布図		24
第2節	弥生時代中期	43
1	概要	43
2	竪穴住居址	44
3	平地式住居址	51
4	溝址	52
5	土坑	54
6	掘立柱建物址	55
弥生時代中期遺構観察表		56
弥生時代中期遺構図版		57

第3節	弥生時代後期～古墳時代前期	82
1	概要	82
2	竪穴住居址	82
3	溝址	93
4	焼土址	97
5	土坑	98
6	沼址	103
7	不明遺構	103
	弥生時代後期～古墳時代前期遺構図版	105
第4節	古墳時代中期～後期	145
1	概要	145
2	竪穴住居址	145
3	溝址	174
4	土坑	175
5	沼址	176
6	第3号沼址(SG3)	177
	古墳時代中期～後期遺構図版	219
第5節	奈良時代～平安時代	281
1	概要	281
2	竪穴住居址	281
3	溝址	285
4	焼土址	287
5	土坑	288
6	沼址	290
7	土器集中址	290
	奈良時代～平安時代遺構図版	291
第6節	掘立柱建物址	302
1	概要	302
	掘立柱建物址一覧表	303
	掘立柱建物址遺構図版	308
第7節	中世	318
1	概要	318
2	掘立柱建物址	319
3	溝址	319
4	土坑	320
	中世遺構図版	323
第8節	近世・時期不明	329
1	概要	329
2	近世	329
3	時期不明	329
	近世・時期不明遺構図版	332

第IV章	遺構考察	336
第1節	弥生時代中期の遺構について	336
1	竪穴住居址	336
2	平地式住居址	338
3	集落構成	339
第2節	弥生時代後期以降の住居址について	340
1	住居形態	340
2	床面積	340
3	炉・カマド	342
4	方位	343
第3節	榎田遺跡における集落の変遷	344
1	弥生時代中期	344
2	弥生時代後期～古墳時代前期	345
3	古墳時代中期～後期	346
4	奈良時代～平安時代	350
5	中世	350
付章	弥生時代後期以降遺構観察表	359

報告書抄録

第I章 序 説

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

従来より、長野県においては、高速道にかかわる埋蔵文化財保護は広域にわたる統一的措置が求められることから、長野県教育委員会（以下、県教委）が対応してきた。また、その発掘調査は(財)長野県埋蔵文化財センター（以下、センター）が実施してきた。また、側道拡幅などこれらと一体的に行われる開発についても市町村と協議の上、センターが調査を行うことが多い。

榎田遺跡の発掘調査は、日本道路公団（以下、公団）による長野市若穂綿内地区における上信越自動車道建設に関連して行われたものである。長野市内における上信越道関連の発掘調査報告書は、さきに、大室古墳群・大星山古墳群等・松原遺跡（縄文）を刊行済である。今年度、榎田遺跡の他に、松原遺跡・村東山手遺跡・小滝遺跡等・春山B遺跡等を刊行する。これらの事業は平成11年度に川田条里遺跡などの刊行によって完了予定である。

榎田遺跡は、高速道路路線決定以前からすでにその存在は知られていた。周知範囲は用地外の小面積で、過去に発掘調査されたことはなく、範囲・内容は未確定であった。高速道基本計画決定後、文化課による分布調査が行われているが、遺跡内容および範囲の確定、以後の調査計画策定のための試掘調査は、平成元年1月以降、県教委・センターにより断続的に行われた。その結果、遺跡の範囲は大きく拡大し、密度も予想を越えるものとなった。

初年度の発掘調査の協議が整ったのは平成元年3月であり、工事工程との競合が予想されるなか、平成元年～3年の3ヶ年で実施することとされたが、その後の調査面積・遺構密度の増大、松原遺跡の調査を優先させたことによる調査の中断、当初計画と施工優先順位の変更等による調査中断および新規地区の開始などもあって、平成4年度まで継続する事となった。さらに、上信越道の長野インターチェンジ以北は、当初、暫定2車線での施行命令が出されていたが、調査中に暫定解除となったことに伴う変更も調査の進行に大きな影響を与えた。工事と調査の工程が近接していたため、これらの条件の変化は調査環境の整備や効率の面で多大な困難をもたらし、その調整のために双方に大きな努力を強いることとなった。

2 調査における問題点

榎田遺跡の調査範囲の半分は高架橋部で、盛土工法による用地の半分の幅しかない。またこれまでは暫定2車線であっても、通常は全体を調査してきたが、終了を早めるために、当面の調査範囲を2車線分に限るという方策をとった。その結果、極めて細長い調査区域を設定することになった。また、調査範囲には水路や農道が数多く存在し、それらの切り回しの必要性和、工事工程との整合性を図る必要から、ただでさえ細長い調査区域を細かに分割して調査せざるを得なくなった。平成元年～3年にかけて、当面の2車線開業分の調査を終えるころ、オリンピック開催決定にも関連して暫定解除され、残りの2車線の着工命令が出され、平成4年度はその調査に迫られる事になった。以上が外的な要因である。

榎田遺跡は低湿地で湧水点が極めて高く、止水矢板を打設しても湧水を止めきれなかった。特に沼地は地下水の流路があって、矢板の下から水が吹き上がってきた。遺構は極めて密集し、検出も精査も容易ではなかった。また、短期間で完了を求められたため、数多くの調査研究員を配置したので、全体像の把握に苦慮する事になった。以上が内的な要因というべきであろうか。

以上のような内外の要因から、発掘調査は難航を極めた。その結果、遺構ひとつ々を取り上げても今一つ信頼性を欠く部分が残し、分割調査した調査区相互の整合性も十分とは言えないなど、報告書作成にあたっては克服できない課題を抱えることになった。本書の事実記載のなかに不明確あるいは不明瞭な点が存在するのは、こうした理由による。

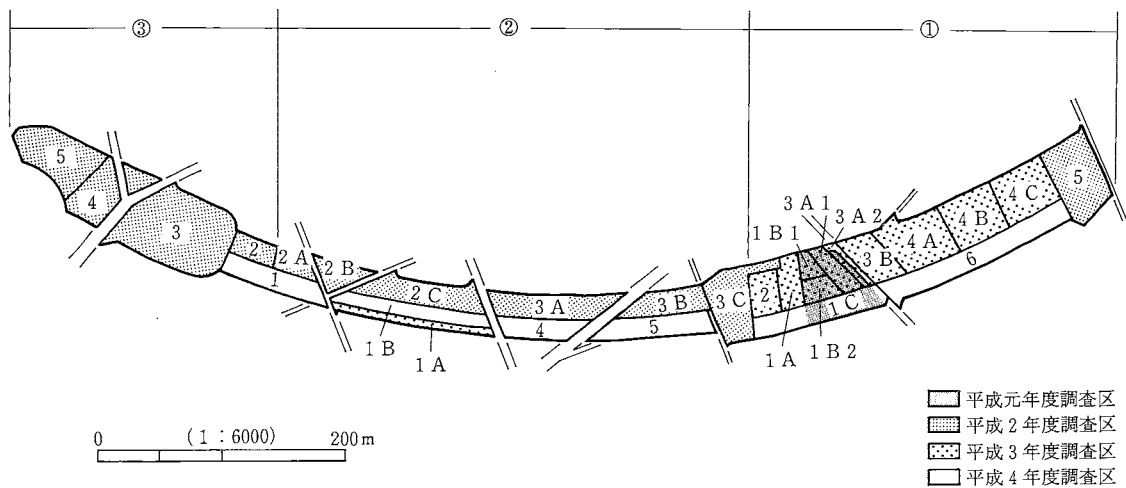
3 調査の体制と経過

発掘調査から整理作業及び報告書刊行にいたる全ての業務は、長野調査事務所が管轄した。以下に年度を追って調査体制と調査期間、調査の概要を掲げる。

*年度別の調査地区、面積は以下の通りである。

(年 度)	(発掘調査区)	(調査契約面積)
平成元年度	①-1地区	4,000㎡
平成2年度	①-5、②-2、②-3、③地区	18,800㎡
平成3年度	①-1~4C、②-1A地区	11,400㎡
平成4年度	①-1C、①-6、②-1B・4・5、③-1地区	10,270㎡

*整理作業の期間は平成5年度・7年度~10年度である。



第1図 榎田遺跡調査区

(1) 平成元(1989)年度

調査体制	常務理事 (兼長野調査事務所長)	塚原隆明
	事務局長	
	(兼総務部長兼長野調査事務所庶務部長)	半田順計
	同 庶務部長補佐	松本忠巳
	同 調査部長 (兼長野調査事務所調査部長)	笹沢 浩

長野調査事務所調査課長 白田武正
同 調査研究員 伴 信夫 上田典男 越 修一 山崎光顕

調査期間 平成元年4月14日～8月12日

初年度の調査は①-1地区を中心に行われ、中世遺構の全面調査と古墳時代～平安時代遺構の部分的調査が行われた。この際、調査区内では弥生時代後期の土器片が採取され、調査面の下層に該期の遺構が存在することが予測された。同時に①-1地区以南において遺跡の分布を確認するためのトレンチ調査を行い、弥生時代～古墳時代を中心とする遺構が密集していることが判明した。

(2) 平成2(1990)年度

調査体制 専務理事(兼事務局長) 塚原隆明
長野調査事務所長 峯村忠司
事務局総務部長(兼長野調査事務所庶務部長) 塚田次夫
同 庶務部長補佐 松本忠巳
同 調査部長(兼長野調査事務所調査部長) 小林秀夫
長野調査事務所調査課長 白田武正
同 調査研究員 伴 信夫 百瀬長秀 越 修一 野村一寿 深沢重夫 入沢昌基
藤原直人 若林 卓 広瀬昭弘 藤沢袈裟一 赤塩 仁

調査期間 平成2年4月2日～平成3年1月31日

前年度の継続として、①-1地区南側に接する②-3地区から調査区南端の③-5地区までと、調査区北端部の①-5地区の発掘調査が行われた。その結果、弥生時代後期～古墳時代の遺構が全面で確認され、②-3A地区と③-3,4地区では弥生時代中期の遺構も確認された。調査当初に想定した、奈良時代～平安時代・中世の遺構は僅少であった。また、①-5地区と③-5地区では遺構の数が非常に少なく、遺跡全体の南北両端を推測することができた。

(3) 平成3(1991)年度

調査体制 専務理事(兼事務局長) 塚原隆明
長野調査事務所長 峯村忠司
事務局総務部長(兼長野調査事務所庶務部長) 塚田次夫
同 庶務部長補佐 山崎今朝寛
同 調査部長(兼長野調査事務所調査部長) 小林秀夫
長野調査事務所調査課長 白田武正
同 調査研究員 伴 信夫 野村一寿 深沢重夫 藤原直人 若林 卓 広瀬昭弘
藤沢袈裟一 清水 弘 馬場信義 西島 力 宮島義和 福島正樹
町田勝則 澤谷昌英 稲場 隆 武居公明 贄田 明 谷 和隆 広田和穂

調査期間 平成3年4月4日～7月31日、10月21日～12月20日

前年度からの継続で、従来の調査区と並行する①-2～①-4C地区と②-1A地区の調査が行われた。その結果、前年度同様に全面から弥生時代後期～古墳時代の遺構が確認された。弥生時代中期については、前年度調査された②-3A区の南東側にのみ該期の遺構が存在し、遺跡中央部における弥生時代中期面の広がりが推測された。平安時代の遺構では残存状況の良い木棺墓(S K4100)が発見されている。

(4) 平成4 (1992) 年度

調査体制	専務理事 (兼事務局長)	峯村忠司
	参 事	樋口昇一
	事務局総務部長	神林幹生
	同 調査部長	小林秀夫
	長野調査事務所長	岡田正彦
	同 庶務課長	山崎今朝寛
	同 調査課長	百瀬長秀
	同 調査研究員	野村一寿 藤沢袈裟一 常永虎徹 太田和夫 馬場信義 徳永哲秀 井口慶久 酒井健次 町田勝則 澤谷昌英 贅田 明 谷 和隆 広田和穂 藤倉美登里

調査期間 平成4年4月6日～12月17日

前年度からの継続で、①-1C・6、②-1B・4・5、③-1地区の調査が行われ、遺跡全体の発掘調査も終了を迎えることとなる。本年度調査区においても弥生時代後期～古墳時代の遺構が大量に発見された。その中でも古墳時代中期に属する河川址 (SG3) の調査では、大量の土器・木製品が出土した。特に木製品については洗浄と台帳整理も行われた。弥生時代中期面の調査では大型蛤刃石斧の製作関連資料も発見された。また、弥生時代中期面はSG3以北には存在しない事が明らかとなった。

(5) 平成5 (1993) 年度

整理体制	事務局長	峯村忠司
	参 事	樋口昇一
	事務局総務部長	神林幹生
	同 調査部長	小林秀夫
	長野調査事務所長	岡田正彦
	同 総務部長補佐 (兼長野調査事務所庶務課長)	羽生田博行
	長野調査事務所整理課長	原 明芳
	同 調査研究員	野村一寿

本年度より整理作業となる。遺物注記、遺構図修正、全体図作成などが行われた。また平成6年度は整理作業を一時中断している。

(6) 平成7 (1995) 年度

整理体制	事務局長	峯村忠司
	事務局総務部長	西尾紀雄
	同 調査部長 (兼長野調査事務所長)	小林秀夫
	同 総務部長補佐 (兼長野調査事務所庶務課長)	外谷 功
	長野調査事務所調査課長	百瀬長秀
	同 調査研究員	広田和穂 贅田 明 徳永哲秀 山本 浩

遺物整理を中心に行った。土器は弥生時代中期～中世までの接合を行い、同時に各時代毎の遺構数を把握した。木製品はSG3出土木製品の整理と実測および、PEG処理が行われた。金属製品は保存処理が行われた。骨鑑定については京都大学霊長類研究所の茂原信生教授に依頼した。

(7) 平成8 (1996) 年度

整理体制	事務局長	青木 久
	総務部長	西尾紀雄
	調査部長 (兼長野調査事務所長)	小林秀夫
	同 総務部長補佐(兼長野調査事務所庶務課長)	外谷 功
	長野調査事務所調査課長	百瀬長秀
	同 調査研究員 広田和穂 贅田 明 伊藤友久 山崎まゆみ	
	徳永哲秀 西嶋 力 白田広之	

遺物整理は、土器の実測を弥生時代中期～中世まで行った。木製品はSG3出土木製品の実測とトレース及び図版組、同遺構出土建築部材の実測とトレースを行った。また、木製品の写真撮影も開始した。樹種同定については東北大学大学院理学研究科の鈴木三男教授に依頼した。PEG処理も前年度に引き続いて行われた。金属製品、骨製品、玉製品については実測、トレースおよび図版組を行い、弥生時代中期磨製石斧製作関連資料について接合を行った。遺構整理は、遺構の属性分析、遺構図の修正を行った。

(8) 平成9 (1997) 年度

整理体制	事務局長	青木 久
	事務局総務部長	山崎悦雄
	同 調査部長 (兼長野調査事務所長)	小林秀夫
	同 事務局総務部長補佐 (兼庶務課長)	外谷 功
	同 調査課長	土屋 積
	同 調査研究員 広田和穂 贅田 明 山崎まゆみ 西嶋 力	

遺物整理は、土器のトレースと図版作成、写真撮影と写真図版の作成。弥生時代中期石器類の実測、トレースおよび写真撮影。木製品のPEG処理も行った。遺構整理は、遺構分布図および時代毎の遺構図版の作成とトレース、原稿執筆を行った。

(9) 平成10 (1998) 年度

整理体制	所長	佐久間鉄四郎
	副所長兼管理部長	山崎悦雄
	管理部長補佐	宮島孝明
	調査部長	小林秀夫
	調査課長	土屋 積
	調査研究員 広田和穂 贅田 明 山崎まゆみ 町田勝則	

遺構・遺物の図版作成、原稿執筆を行い、報告書が発行された。同時に遺物・図版類の収納も行った。

4 委託事業等

委託事業等に関して下記の諸先生・諸機関に執筆を依頼し、玉稿を賜った。記して謝意を表する。

(敬称略)

土器の胎土分析：(株)第四紀地質研究所 井上 巖

石器の石材分析及び材質鑑定：パリノ・サーヴェイ株式会社・野尻湖ナウマンゾウ博物館 中村由克

石器・玉類・紡錘車等の石材分析：糸魚川市フォッサマグナミュージアム 宮島 宏
ガラス玉分析：東京大学アイソトープ総合センター 小泉好延
東京大学原子力研究総合センター 小林紘一
木製品樹種同定：東北大学大学院理学研究科 鈴木三男・農水省森林総合研究所 能城修一
人骨・獣骨鑑定：京都大学霊長類研究所 茂原信生
弥生時代中期の織物鑑定：奈良国立文化財研究所 高妻洋成
川島織物文化館 高野昌司・東大阪市文化国際課 酒野晶子
石器の実測用写真・大型木製品の実測：株式会社シン技術コンサル
石器の付着物分析：川崎テクノロジーサーチ株式会社 パリノ・サーヴェイ株式会社
昆虫同定・種実同定・珪藻分析・花粉分析・プラント・オパール分析：パリノ・サーヴェイ株式会社

5 整理作業の分担

本遺跡の整理作業では各作業を以下の調査研究員が担当した。

遺物実測トレース 土器・土製品・玉製品・石製品・金属製品・鍛冶関係…広田和穂・贅田 明
木製品…贅田 明
建築部材…伊藤友久
石器関係…町田勝則
遺構図・全体図作成、トレース・遺跡内基本層序・地形・地質…野村一寿・山崎まゆみ
土器の復元・補強…徳永哲秀
遺物写真撮影…西島 力
遺物保存処理・修復…白沢勝彦・山本 浩・白田広之

本遺跡の整理作業では以下の整理補助員に御協力いただいた。記して謝意を表する（五十音順・敬称略）。

阿部高子 安藤武子 飯島公子 池田圭好 宇賀村節子 白田知子 内山佳代子 内山文枝 内山美砂
大沢映子 大沢 豊 大田節子 片桐ゆかり 唐沢あや子 北沢節子 北島康子 窪田 順 熊木澄江
桑原はるみ 小出紀彦 小平道子 児玉昌之 小林タイ 小山勝子 佐々木勅美 佐藤 進 佐藤弘子
椎塚フサ江 宍戸静江 島崎信江 島田恵子 清水栄子 摺田伸子 高橋美穂 田川和枝 多羅沢美恵子
土屋京子 寺沢光子 豊田千咲 中沢さかえ 中村紀子 名取さつき 西川恵美子 西澤すみ江
西沢米子 西村美登子 長谷川征子 深沢恵子 保坂豊子 堀木照美 松沢まさ子 松林節子 丸山和子
丸山園枝 丸山裕子 三石恵子 三井美津子 峯村恵子 峯村敏子 宮入さち 宮沢晴子 宮下勝子
宮下孝一 宮島珠子 宮原明美 宮原ゆき子 八重田るみ子 八代聖子 柳原澄子 山岸隆男 山崎明子
山田理恵 山本洋子 横谷洋子 米田ちえ子 米山広美 渡辺恵美子

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

(1) 遺跡の名称と記号

遺跡名称は、長野県教育委員会の遺跡台帳に記載されている「榎田遺跡」としたが、調査過程において当初の範囲から大幅に拡大している。また記録の便宜を図るために、遺跡記号を与えた。当センターでは、長野県内を9地区に分けて記号を付しているが、そのうち長野市、上水内郡等の「B」、次に遺跡のローマ字表記から他遺跡との重複を避けて2文字をとり、「BED」とした。この遺跡記号は遺物の注記、図面、写真など全ての資料について使用されている。

(2) グリッドの設定

グリッドの設定は、国土座標のメッシュに従うことを原則とした。測量基準点は国土地理院の平面直角座標系の原点（第VIII系、 $X=0.000$ $Y=0.000$ ）を基点にした200m方眼を大々地区（ 200×200 m）とし、それを分割して大地区（ 40×40 m）・中地区（ 8×8 m）・小地区（ 2×2 m）の4段階とする。本遺跡は全長約930mに及ぶ調査範囲を対象とし、北西から南東に向かってI区、II区、III区……の順に10の大々地区を設定した（第2図）。この大々地区を25区画に分割して大地区とし、北西から南東へA、B、C……の大文字アルファベットを付した。更に大地区を25区画に分割し、北西から南東へ1、2、3……のアラビア数字を付した。実際上の測量基準杭は中地区のメッシュを基本とし、測量業者に委託して設定した。

調査で検出された遺構の記録および遺物の取り上げには遺構の個別名などの他に、中地区の基準杭、グリッド名称を用いた。

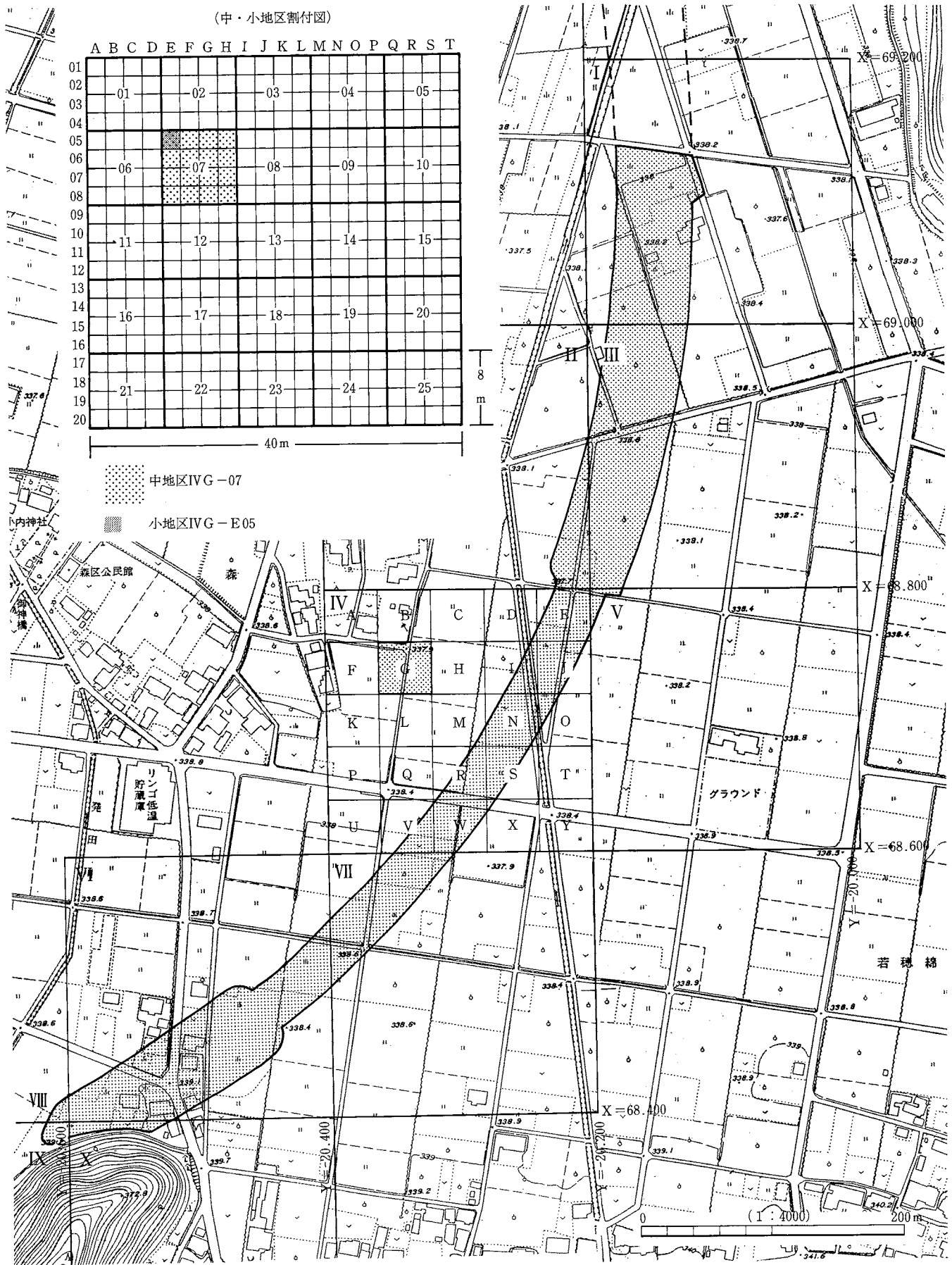
(3) 工程上の調査範囲と調査区

本遺跡の調査工程は、年次ごとの工事工程や用地買収などの制約により、調査の質、効率の上では極めて変則的な分割範囲を設定せざるを得なかった。さらに、排土処理の用地及び運搬道の確保、安全対策等調査実施にともなう諸問題により、年次ごとに調査範囲が限定され、また、調査班内の分担区域によって細分されている。そのため、調査進行上の必要から、上記グリッドとは別に地区名称として○区ー○を用いているが、上記のグリッド設定は一貫したものである。

本書では、平成元年度から4年間の発掘調査段階で設定された工程に従った調査区の略称を用いた。記載の上で区別するため、工程上の調査区の場合○内アラビア数字を用いている。挿図及び文章中においては、○地区とグリッドの2種の記載をもって調査範囲を明記した。

(4) 遺構記号と遺構番号

遺構名称は記録、遺物の注記等の便宜を図るため記号を用い、遺構番号は時代等にかかわらず種類ごとに検出順に付した。遺構記号は、基本的に検出時に、主として平面的な形態や分布の特徴を指標として決定するため、必ずしも個々の遺構の性格を示すものではない。本書では混乱を避けるため、記号・番号を付した遺構に関しては、原則として調査時のものをそのまま用い、変更は行っていない。このため番号には欠番があり、1桁数字から5桁数字など様々なものがある。最終的な遺構記号・番号の決定は整理作業



第2図 調査区位置図およびグリッド設定図

の段階で行われた。遺構記号を変更した場合は、変更内容とその理由を事実記載に示した。このような例は河川址（沼址で登録）や弥生時代後期～古墳時代前期の周溝墓（溝址・土坑などで登録）に多い。

また遺構として認められなかった場合や、番号が重複しているものなどについても変更を行っている。本書で用いた遺構記号は以下の通りである。

[SB] 2mを目安とし、それ以上の大きさの方形・円形・楕円形の掘り込み。（竪穴住居址、竪穴状遺構）

[SK] SBより平面形が小さな掘り込み。（土坑、貯蔵穴、井戸址）

[SD] 帯状に連続する掘り込み。（溝址）

[SQ] 遺物が面的に集中するもの。（祭祀址、ごみ捨て場等）

[SF] 単独で存在し、火を焚いたあとが面的に広がるもの。（火床、炉址、焼土址）

[ST] 小さな落ち込みや石が一定間隔で方形、円形に配列されるもの。（掘立柱建物址）

[SG] 湿地状の落ち込みが広範囲に広がるもの（沼址）

[SX] 以上の遺跡記号に該当しない不明遺構。

[NR] 自然流路

(5) 遺構の調査方法

現耕作土直下が遺物包含層という試掘調査の結果をふまえ、まず重機で現耕作土を除去した後、前述のようにグリッドを設定して、人力で遺構検出を行った。この際出土した遺物はグリッド名か帰属遺構名を付して取り上げた。検出された遺構は、平面形で重複関係を把握してから掘り下げ作業にかかった。精査する順番は、重複関係の新しいものから古いものへ、という流れで行った。竪穴住居址を例にとると、まず主軸方向とそれに直交する方向に先行トレンチを入れて、床・壁と覆土の堆積状況や埋没状況を確認する。次に覆土を十文字の帯状に残し、層位毎に掘り下げるといった方法をとった。この際出土した遺物のうち、完形品や大きな破片は出土位置に残し、他は一括した。土層記録後は帯状部を除去し、残した遺物の位置や出土状態を記録して取り上げた。その後、床面を精査して柱穴や炉などの検出を行った。竪穴住居址・掘立柱建物址の柱穴や土坑などは、二分割して土層断面を観察しながら同様の手順で調査を進めた。また溝址も溝方向に直交して裁ち割って土層観察を行い、同様の手順で調査を進めた。

(6) 測量の方法

遺構の測量は遺り方測量により、中地区（8×8m）単位に区切った割付図を作成し、また、個別遺構図として主に住居址と掘立柱建物址や土坑の一部を実測した。縮尺は1:20を基本とし、必要に応じ1:10とした。この他一部の地区では航空測量を業者委託して行った。

(7) 写真撮影

遺跡の景観や遺構、出土遺物の撮影には、ニコンFM2（35mm）とマミヤRB6×7、またはペンタックス6×7を使用し、いずれもモノクロとカラーリバーサルで撮影した。ただし、6×7カメラは遺構の状況により必要に応じての使用を原則とした。

写真撮影は調査研究員が行い、現像は業者に委託した。また、空中写真はすべて委託である。遺物写真の撮影および遺構・遺物写真の焼き付けは、当センターの写真セクションが実施した。

(8) 地図・航空写真

本書掲載の地図・航空写真については以下のものを使用した。

地図については、日本道路公団作成の上信越自動車道平面図(1:1,000)、建設省国土地理院発行の地形図(1:25,000、1:50,000)、長野市発行の長野市都市計画図(1:2,500)と防災基本図を使用した。

写真図版掲載の航空写真は、株式会社パスコに撮影を委託した。

2 整理作業の方法

(1) 遺構の整理方法

本文中で個別に記述した遺構に関しては、個別遺構図を掲げたが、観察表・全体図だけに止めた遺構も多い。

A 遺構分布図

弥生時代後期～平安時代・近世と時期不明の遺構は、切り合い関係で遺構を分離することが困難なため、該期を総て含んだ遺構分布図を掲載した(第III章第15図～第24図)。また弥生時代中期と中世については独自に遺構分布図を掲載した(第9図～第14図・第25図～第27図)。遺構分布図中の遺構記号は、密集度が激しいため、住居址の場合は「S B」を外して番号のみ示している。それ以外の遺構は頭に遺構記号を付けた。

B 遺構の記述方法

それぞれの遺構の性格に応じて、下記のように記述し、すべての遺構を同様の方法で記述しない。

住居址は時期を問わず、残存状況の良好なもの、または遺物の一括性の高いものについて、個別遺構図を示して事実記載をした。弥生時代中期の大半、弥生時代後期から平安時代の約1/3が該当する。

住居址以外では、周溝・流路・墓坑・井戸など性格の判明したものを同様に掲載した。溝址・土坑などは弥生時代中期を除き時期を確定できるものは少ない。掘立柱建物址は時期判定の材料が乏しいので、時期毎には記述しなかった。本文中で記載しても個別の遺構図を示さなかったものについては、遺構分布図を参照されたい。

以上の個別記載遺構の他、住居址のすべてと遺物図を記載した遺構について、それぞれ観察表を付した。そのため内容の不明確な遺構に関して、本文・個別図版・表のいずれにも記載されないものもある。

遺構図中に示した遺物は出土位置の明確なものであり、これらも含めて、覆土一括とされて出土位置を正確に示せないものなどは、別に第3分冊(遺物図版)に示してある。

本文中及び観察表では下記のように記載した。

a 竪穴住居址

主軸方位：カマドの中軸線を主軸として、座標北から東西方向への角度を計測した。

カマドを持たない住居址では長軸を主軸とした。

形態：短軸と長軸の比1:1.1をもって方形、それを上回るものを長方形とした。

規模：主軸上の床面差し渡しと、直交軸の床面差し渡しを計測した。全長が計測できないものは()を付けて表示した。

床面積：主軸×直交軸の数値を採用した。全体のプランおよび面積が明確でないものは()を付けて表示した。ただしカマド部分は含まない。弥生時代中期のものについてはプランメーターで計測し、3回の平均値を採用した。

炉・カマド位置：住居内部からみた位置であり、東西南北で表示した。

b 掘立柱建物址

記載は、一部を除いて原則的に竪穴住居址と同様であるが、建物の平面図の長軸を「桁行」、短軸を「梁行」とした。

主軸方位：桁行方向について座標北から東西方向の角度を計測した。

規模：例えば桁行3間、梁行2間の建物の規模は3間×2間と表す。

柱間間隔：柱穴の中心または掘り方の心々間の距離を測り、最小値と最大値を表示した。

面積：桁行×梁行の数値を採用した。

(2) 遺物の整理方法

A 土器

土器の整理は以下の手順によっているが、作業内容についていくつか補足しておく。

洗浄→注記→遺構別出土土器の確認→接合→時期別分類→実測用遺構選別→実測用土器補強復元→実測→法量計測→写真撮影用土器選別→写真撮影→計測用遺構選別→器種組成計測→収納

a 遺構別出土土器の確認

整理時の照合の結果、遺構図内の出土記録と出土遺物が一致しないものも存在する。できるだけ矛盾の解決を試みたが、混乱したままの部分もある。

b 接合

基本的に出土遺構ごとに接合作業を行い、遺構間の接合作業は実施していない。これは遺物量が2000箱を超え、時間的な制約からも接合関係を充分には行えないと判断したことが大きな理由である。SG3など大規模な遺構については、土器集中取り上げ地点や、調査グリッドごとに接合を行い、その後器種別に分類して、各層位ごとに接合し、最後に層位間接合を試みている。これも遺物量が膨大であるため、接合が充分とは言い切れない部分もある。

c 時期別分類

本遺跡においては遺構の切り合いが激しく、異なる時代の遺構を同時に調査したため、一つの遺構中においても複数の時代の遺物が混在することが多い。よって接合と同時に、当該遺構の主たる土器の時期と遺構中での出土状況を検討しながら、各遺構の時期を認定した。しかし同一遺構中の土器が特定時期にまとまらない場合や、出土量が少ない場合は、明確に時期を判定することが困難であり、時期不明とせざるを得ない遺構が多数存在する。

d 実測用遺構選別

上記の通り各遺構の時期を確定させた後に、土器を図化すべき遺構を選択した。遺物量からして、総ての土器を実測することは時間的制約からも困難であるため、時期の確実な遺構で、器種組成が比較的良好な遺構を優先的に実測した。この結果、弥生時代中期遺物は検出面が独立していることもあり、大半の遺構の遺物を図化した。弥生時代後期～古墳時代前期に関しては、搬入品が含まれるため、他の伴出品を含め、遺物が少量でも実測を行っている。古墳時代中期～後期に関しては時期の明確な住居址約300軒のうち約1/3について図化した。奈良・平安時代については認定した住居址の大半を図化し、緑釉陶器や墨書土器については破片を含めて図化した。中世については破片が中心となるが、時期の判別可能な個体を中心に図化した。

e 実測

基本的に1/4以上の破片で実測可能と判断したものを実測したが、搬入品など特徴的な破片などは残存率に関係なく実測した。しかし、紙幅の関係から実測図の一部を掲載できなかった。ま

た、土器の情報についても量が非常に多く、観察表の掲載にも限界があるため、技法や調整の特徴を、切り合い関係を含め、可能な限り図面中に盛り込むようにした。しかし、大量の土器を扱ったため、事実誤認の表記もあると思われる。

f 器種組成の数量化

本遺跡では遺構内の混入遺物が非常に多いため基本的に器種組成の数量的計測は行わない。ただし、古墳時代中期～後期の住居址については良好資料も幾つか見られ、何らかの傾向がつかめると判断して、集計を行った。実測個体と非実測片のうち、1/4以上の大きさで器種識別可能な個体を集計の対象とした。

B 石器

遺物の洗浄後、出土地区・出土遺構ごとに遺物台帳を作成し、注記作業を行った。注記後、石器の器種別分類、接合および計測作業を行い、業者委託による写真実測（撮影のみ）を導入した後、付加実測及びトレースを実施した。計測法・実測法については、『第2分冊本文編II』第V章第2節に記述してある。

C 木製品

木製品の整理方法及び保存処理については『石川条里遺跡 第3分冊』（長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書26 1997）第1章第2節に準拠する。

D 玉製品・紡錘車・土製品

これらは発掘調査段階で抽出が行われており、本報告でも可能な限り実測し、紹介している。この他一連の整理過程で発見されたものも多く、すべてを抽出していない可能性も残る。

E 骨類・種子

骨類の取り上げは、調査時に樹脂を塗布する方法と、ウレタンで周囲を固める方法などが用いられた。しかし整理作業までの期間が長かったために、調査時の状況を残す例は少なく、鑑定は明確に種類と部位が判明する骨のみについて行った。また小破片などは調査記録に見られても、残存しない例が多々存在する。

種子類は遺構調査時に肉眼識別して取り上げたものがほとんどで、採取方法に粗密がある。また整理作業時に発見されたものはほとんどない。発掘調査時に一括して鑑定しているものの、各遺構ごとの存否や数量比などは、自然条件や遺構の状況の他に、サンプリングおよびそれ以後の偶然に左右されている可能性がある。

第II章 榎田遺跡周辺の環境

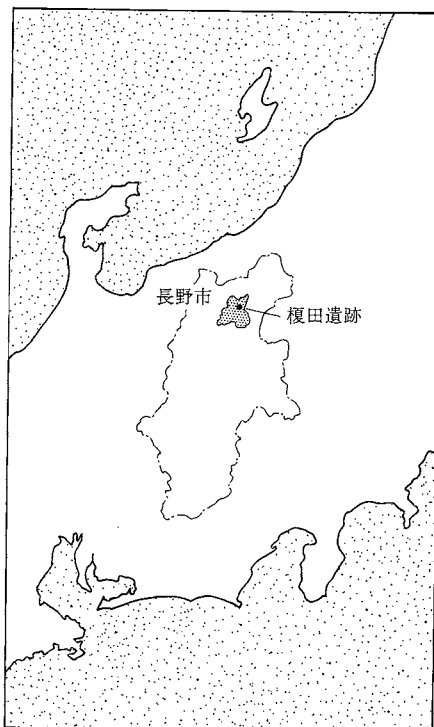
第1節 遺跡の位置

榎田遺跡は長野盆地東部の長野市若穂綿内に位置し、千曲川右岸の後背湿地と中州状の微高地上に立地する。調査地は、妙徳山北西部の太郎山山裾から須坂市に向かって、南西―北東―北方向に帯状に延び、長さ約930m、面積約44470m²を測る。従来、榎田遺跡と認識されていた地域は、今回の調査地より東側の位置であったが、本調査の結果、遺構、遺物が広範囲に分布し、遺跡の範囲がさらに広がることが確認されたものである（第3図）。

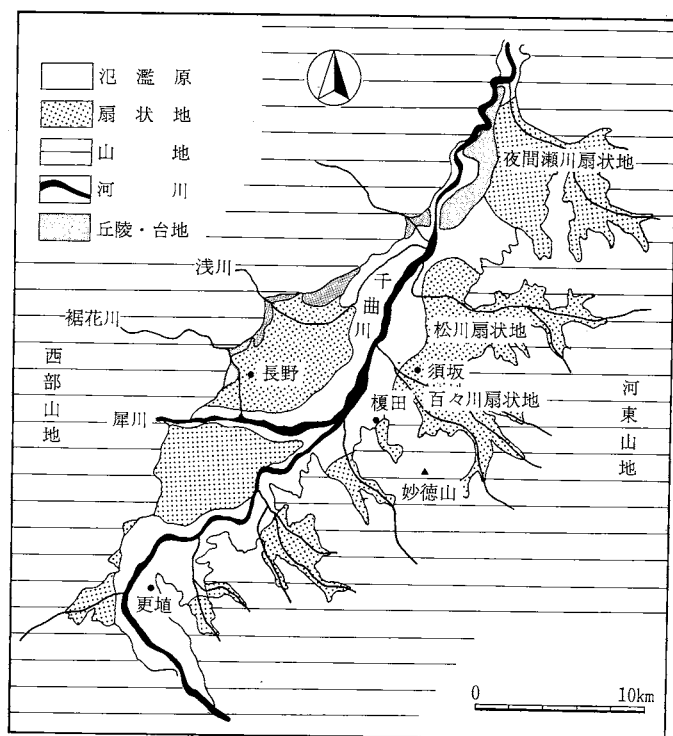
第2節 自然環境

長野盆地の地形

長野盆地は北東―南西方向に長さ約40km、東西幅8～10km、面積およそ250km²の規模を示し、標高330～400mの紡錘形を呈する盆地である。盆地の中央を南西―北東方向に千曲川が流れ、西側は西部山地、東側は河東山地に明瞭に区分される。盆地周辺には流入する中小河川の扇状地が見られ、盆地の西側には南から犀川、裾花川、浅川が流下し、それぞれ緩傾斜の扇状地を形成している。一方、東側には北から夜間瀬川、松川、百々川が、西側扇状地に比べ傾きの急な扇状地を形成し、綿内以南の山麓には急傾斜の押し出し地形が発達している。千曲川はそれらの扇状地の発達に影響され、蛇行しながら流下する（第4図）。



第3図 遺跡の位置



第4図 長野盆地の地形(「中部地方I」赤羽・花岡1988に加筆)

千曲川の氾濫原上には、自然堤防や旧河道の砂堆・中州などの微高地と旧河道・後背湿地などの微低地があり、微地形を形成している。左岸側には、更埴市八幡から長野市東福寺にかけて大規模な自然堤防が発達し、その西側には後背湿地が発達する。右岸側には雨宮、清野、松代、牧島の自然堤防が発達し、その東側に湾入低地が形成されている。千曲川は犀川と合流後、長野市若穂付近で川幅を広げて網状の流れとなり、盆地中央に広範囲な氾濫原を発達させている。

遺跡周辺の地形・地質

長野盆地東側の河東山地は、第三紀中新世の堆積岩類とこれを貫く火成岩類からなり、壮年期の地形を呈する。山地から北西方向に延びる尾根は、あたかもリアス式海岸のように複雑に入り組んだ山麓線を示し、千曲川の氾濫原および支流の扇状地下に没している。遺跡周辺の山地は保科玄武岩類よりなる。保科玄武岩類は、一部で変質した凝灰角礫岩や黒色頁岩を挟み、各所で輝緑岩の岩脈に貫かれている。また、変質安山岩や石英閃緑岩、玢岩などの貫入岩体も多くみられる。玄武岩溶岩は枕状構造を呈するものもあり、綿内大柳や須坂市井上との境界付近には良好な露頭が観察され、長野県の天然記念物に指定されている。弥生時代中期には、こうした後背山地の豊富な石材を用いて、様々な石器の製作がなされたものであろう。

遺跡北東側には、松川、百々川、鮎川の各河川が広範囲な扇状地を形成している。これに比して南側では保科川、藤沢川、関屋川、神田川などが、盆地東縁の湾入部を埋積する小規模な扇状地を発達させている。これらの扇状地とは別に、河東山地山麓では崖錐性の堆積物の供給が多く、急傾斜の押し出し地形が発達する。大規模なものとしては、須坂市八町の妙徳山北斜面、若穂山新田の集落が立地する妙徳山西斜面などがある。

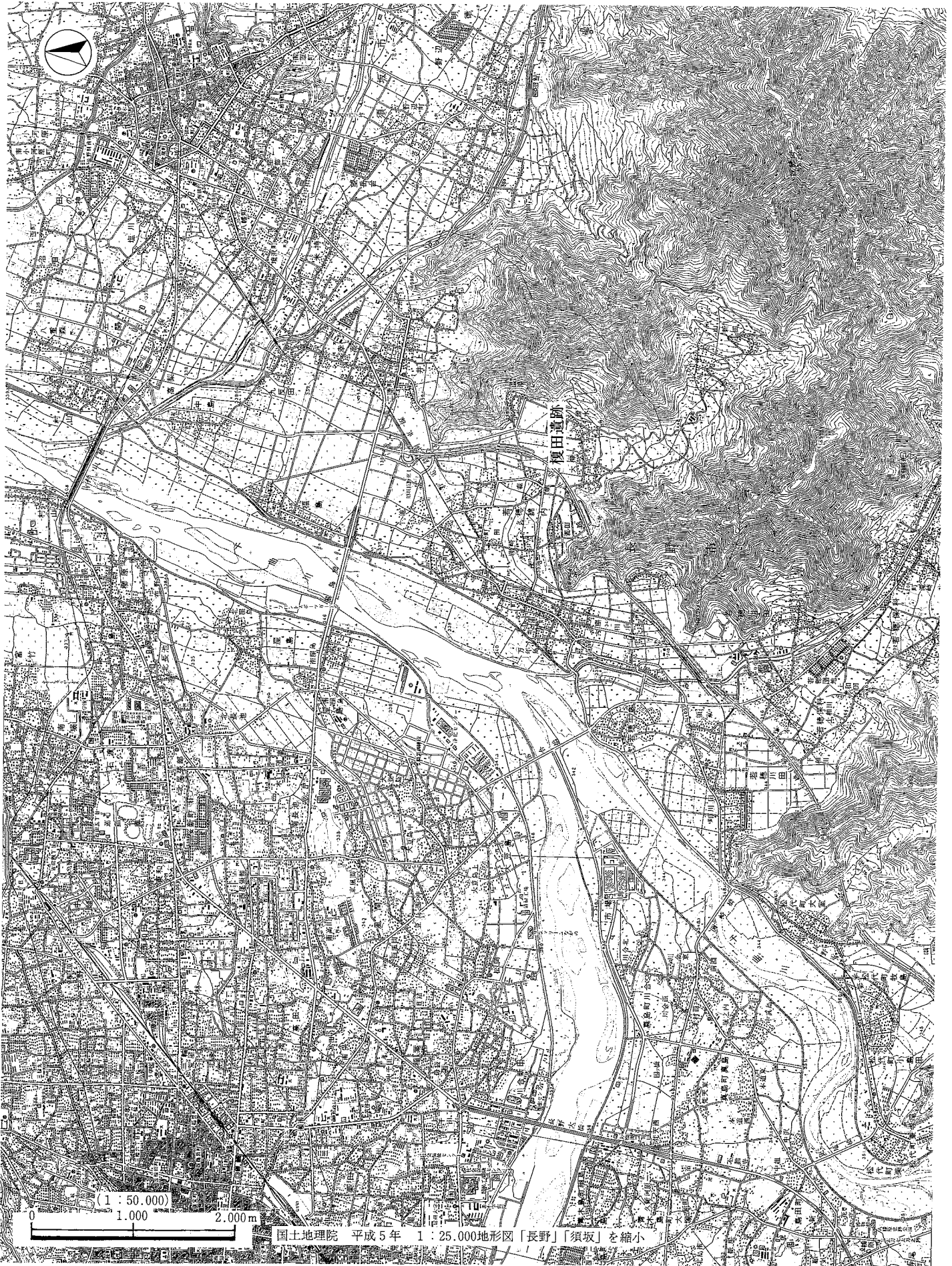
千曲川は若穂付近で犀川と合流し、流路をやや北に変更して両岸に広い氾濫原を持つようになる。このあたりの千曲川右岸の氾濫原は、自然堤防と後背湿地、旧河道に区分される(第6図)。特に合流点付近では、砂礫の運搬量が多く、かつ急勾配で流入する犀川の影響を受けて、現在の流路よりも東側を蛇行していたものと考えられる。遺跡周辺の春山や綿内でみられる微低地には明瞭な旧河道地形が認められる。旧河道は河東山地の山脚を洗い、湾入部に曲がり込んで流れ、多くの中州状の微高地を残している。このため、現在でもこのあたりには島、森、菱田、大橋、牛池、牛島などの地名が残っている。

榎田遺跡の立地する低地は、山新田からの押し出し地形の末端部と、旧河道及び後背湿地が交錯する位置にある。従って、山地の張り出しにより複雑に流れを変えた旧河道跡が多数みられ、古来より洪水の常襲地帯であったことが窺える。後背湿地には細粒の砂泥が堆積し、現在でも水田として利用されていることが多い。岩崎、菱田、森、島の集落を囲む水田域はかつての河道である。

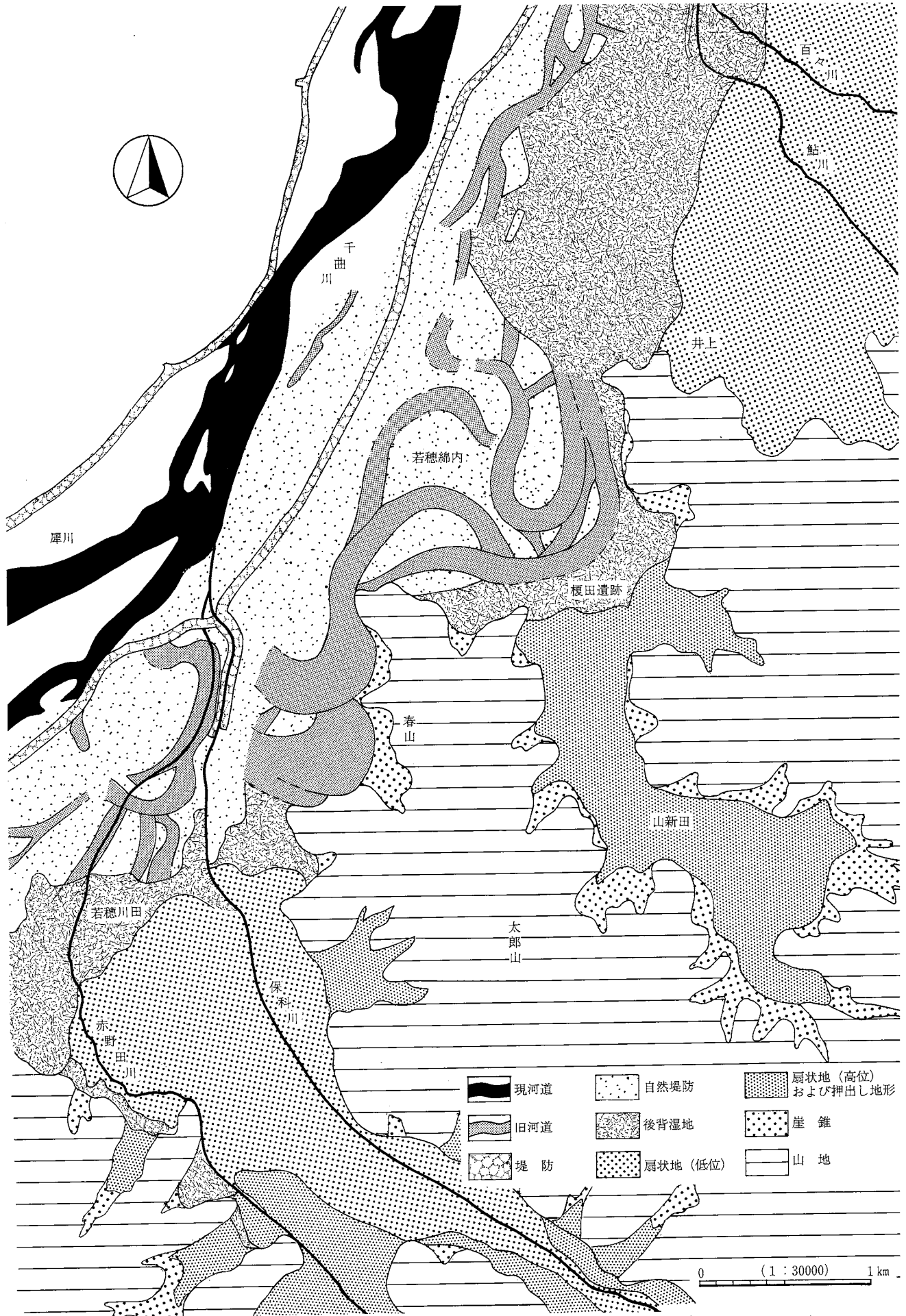
調査区のほぼ中央を横断する東勝寺堰付近には、旧河道であるSG3が南西―北東方向に検出されている。SG3は南岸の弥生時代中期の住居址を切っていることから、弥生時代中期以降に形成されたものであろう。SG3底部で確認された礫層は、南側に向かって急に落ち込み、さらに深部へと連続する。②-1B地区北側でのボーリング調査では、GL-28mまで中間部に有機質土を介在する粘性土層が堆積しており、礫層が確認されないこと等から、SG3以南には旧河道の存在が窺われる。

大柳、清水、温湯付近の低地は、斜面からの伏流水が湧水となり地下水位が高いため、江戸時代から蓮田として利用されている。調査区南端では、弥生時代中期の環濠集落や弥生時代後期の墓域が展開した後、集落の発展がなかった。これは居住域として不適な湿地状の土地に変化したためと考えられる。

①-1, 2, 3地区付近は微高地で、地表面下1.25m付近まで砂質土が分布し、それ以深は砂礫層となっている。この微高地上に弥生時代後期には墓域が形成され、以後古墳時代～中世まで断続的に集落が営まれた。微高地は砂質土や砂礫が堆積し、現在でも畑、果樹園として利用され、集落が立地している。



第5図 遺跡周辺地形図



第6図 遺跡周辺の地形区分図 (長野市防災基本図・1988に加筆)

第3節 基本層序

本遺跡は、千曲川右岸の後背湿地と中州状の微高地上に位置し、堆積土はシルトおよびピート質シルトや砂、砂礫などで構成されている。調査地区が広範囲に及び、かつ多年度にわたる調査のため、全ての調査区の土層断面について共通の分層や記録は実施されていない。従って、幾つかの地点での土層区分やテストピット、地質ボーリング柱状図を照合して、共通する土層名を設定した。また、弥生時代後期～古墳時代検出面以下の土層については資料が少ないため、各検出面のレベルを参考として図示した（第7図）。

- I 層：現耕作土および弥生時代後期～近世の遺物・遺構の包含層で、4層に分層される。
 - I A層：層厚15～40cm、黄褐色～暗褐色の砂質シルトを主体とした現耕作土である。
 - I B層：にぶい黄褐色シルトを主体とし、近世の遺物を包含する調査区もあるが、耕作による攪乱をうけ、調査範囲全体には連続しない。層厚10～20cmで、遺構はほとんど検出されていない。
 - I C層：褐灰色～黒褐色シルトを主体とし、下位層のくぼみにレンズ状に堆積する。連続性はなく、地区により色調、土質が変化している。酸化鉄の集積が顕著で、固結度は低い。調査地区によっては奈良・平安時代の遺物を包含するが、本層は面的にはほとんどとらえられていない。
 - I D層：褐灰色～暗褐色の砂質シルトを主体とし、酸化鉄の集積が顕著で強く締まっている。層厚は10～30cmで、弥生時代後期～中世の遺物が包含されている。本層上面を検出面としたが、遺構覆土が褐灰色土のため検出は困難で、調査地区によっては弥生時代後期～中世の遺構を同一面で検出する結果となった。ほぼ遺跡全体を覆っているが、①～6地区の一部で本層は欠落している。
- II 層：灰色～灰白色の均質な砂層で、粘性は少なく、下位はグライ化して青灰色を呈する。ほぼ遺跡全体を覆っており、S G 3以南の②地区では本層中に弥生時代後期の住居址が検出されている。
- III 層：ピート質シルト～細砂で構成される無遺物層。
- IV 層：オリーブ～暗オリーブ色の砂質シルトを主体とし、本層上面が弥生時代中期の検出面となる。

I B層～I D層は断面観察では分層されているが、色調、土質とも類似しており面的にとらえることは困難であった。従って、現耕作土直下を検出面としてI D層ないしII層に落ち込む遺構を検出した。

調査区のほぼ中央を分断する河川址（旧河道）S G 3の北と南では、様相をやや異にしている。S G 3以南では、シルトおよびピート質シルトが厚く堆積し、GL-28m以深まで礫層が確認されており旧河道の存在が窺われる。弥生時代中期面は、旧河道が埋積する過程で形成された微高地上に展開したものと考えられる。

②～3, 4地区以南は、ピート質シルトや砂層が繰り返し堆積する不安定な低湿地である。土坑や溝以外、該期の遺構が検出されていないことから、居住域として適さない地域であったと言えよう。③～1地区の珪藻分析結果による陸生珪藻と水生珪藻との比率から推測すると、弥生時代中期形成面は基本的には乾燥していたが、しばしば洪水の影響を受けていたようである。

③～3, 4, 5地区は山地に近接しており、旧河道による浸食をうけなかったためか検出面の標高は高い。そのため弥生時代中期～後期までの遺構が同一面で検出されているが、後背湿地でもあり、湧水も多く、常に湿地状の地帯であるため、居住域としての利用度は低かったと考えられる。

一方、SG3以北では弥生時代中期の包含層が存在せず、GL-1.5m付近には砂礫層が分布する。SG3が居住域の北限となっていたか、もしくは中期から後期への堆積過程において、洪水が当時の表層を掃流した可能性も考えられよう。その後、II層が遺跡一帯を被覆し、起伏のあった地形をほぼ平坦にした結果、居住・生活空間を拡大させたものと思われる。②-3,5地区ではSG3に向かって緩やかに傾斜してII層が堆積する。SG3の形成時期は、覆土にII層の堆積がみられないことから、弥生時代後期にはすでに流路として存在していたものと考えられる。

①-1,2,3地区はかつての自然堤防である微高地で、現耕作土下の包含層が薄く、弥生時代後期～中世までの遺構がほぼ同一面で検出されている。

参考文献

長野県建築士会	1973	「地盤図」
加藤碩一・赤羽貞幸	1986	「長野地域の地質」地質調査所 地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）
日本の地質「中部地方」編集委員会	1988	「中部地方I」共立出版
長野市	1988	「防災基本図」
（財）長野県埋蔵文化財センター	1989	「長野県埋蔵文化財センター年報6」
（財）長野県埋蔵文化財センター	1990	「長野県埋蔵文化財センター年報7」
（財）長野県埋蔵文化財センター	1991	「長野県埋蔵文化財センター年報8」
（財）長野県埋蔵文化財センター	1992	「長野県埋蔵文化財センター年報9」
松本市史編纂委員会	1996	「松本市史 第2巻 歴史編I」
（財）長野県埋蔵文化財センター	1998	「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書4 ——長野市内その2—— 松原遺跡 縄文時代」
（財）長野県埋蔵文化財センター	1998	「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25 ——長野市内その4—— 更埴条理遺跡・屋代遺跡群」

第4節 周辺の遺跡

長野市若穂綿内地区には千曲川右岸の自然堤防上と旧河道の中州である微高地上に幾つかの遺跡が存在し、綿内遺跡群として把握されており（第8図1,15~17,19~21）、榎田遺跡（1）もこの遺跡群に含まれる。近年、周辺地域では発掘調査が進んでおり、遺跡間の関係も明らかになりつつある。

本節では榎田遺跡と関連する時期で、発掘調査が行われた遺跡を中心に概観したい（第8図）。

縄文時代 本遺跡では縄文時代中期の土器片が数片出土したのみである。周辺では、保科扇状地において縄文時代後期～晩期の集落遺跡である宮崎遺跡（33）が調査されている。

弥生時代中期 本遺跡では約40軒の住居址が調査され、大型蛤刃石斧の未製品と製作関連址、そして大形溝に囲まれた環濠集落が発見されている。周辺では遺跡南方の尾根の反対側にある春山B遺跡（29）で、12軒の住居址が発見され、鉄石英を用いた管玉の未製品が出土した。また焼失住居である1号住居からは大型蛤刃石斧8点、扁平片刃石斧2点などと共に鉄斧が出土している。やや離れた松代においても松原遺跡が調査され、住居址300軒以上にも及ぶ中期の大環濠集落が発見されている。ここでも大型蛤刃石斧などが出土している。この他に川田条里遺跡（32）では水田遺構も調査されている。

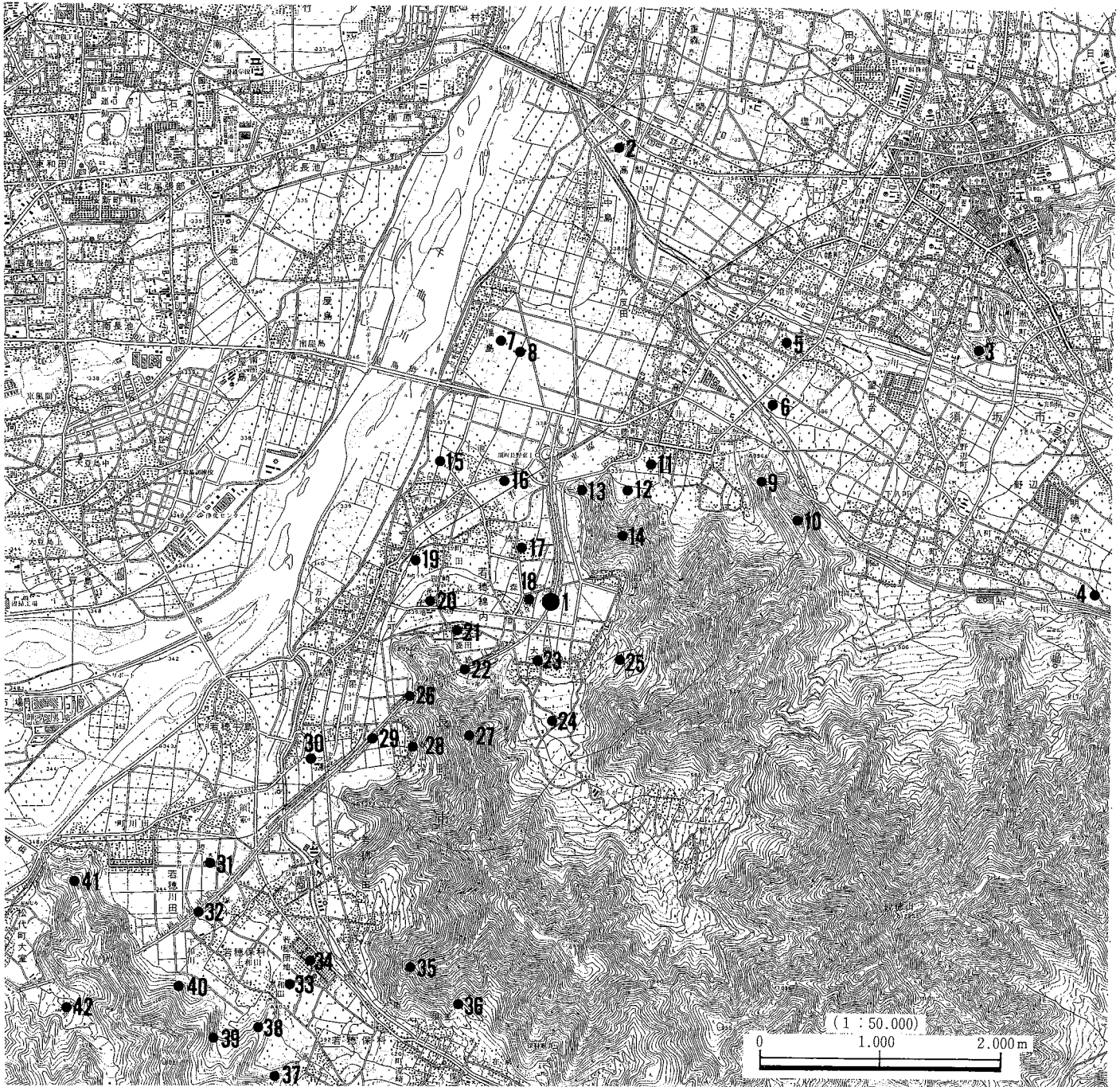
弥生時代後期 本遺跡では100軒以上の住居址と円形周溝墓を含む墓域が発見されている。周辺の綿内地区では高野遺跡（19）で40軒以上、春山B遺跡（29）では35軒の住居址が調査されている。川田条里遺跡（32）では水田も調査された。この他に、金口遺跡（12）、大柳遺跡（23）、岩崎遺跡（20）、長池遺跡（30）においても該期の遺物が確認されている。

古墳時代 本遺跡では、前期後半に遺構が激減する段階を経て、中期以降に住居址が爆発的に増加し、中期～後期を通して500軒以上が存在したと考えられる。近接した高野遺跡（19）で約10軒の住居址が調査されている。他は、古町遺跡（15）、金口遺跡（12）、塚本遺跡などで該期の遺構が確認されているものの、周辺地区における集落の調査は進んでいない。水田遺跡は川田条里遺跡（32）で調査されているが、綿内地区では不明な部分が多い。

古墳は榎田遺跡に近接して、大柳古墳群（24）と清水古墳群（25）が確認されている。いずれも積石塚の円墳で、直刀・金環・玉類・埴輪・須恵器などが出土している。時期的に最も関連性が深いと推測されるが、明確な記録は存在せず詳細は不明である。

一方、豪族や首長級の古墳（群）は榎田遺跡からやや離れた地域に存在する。遺跡から北へ約3～5km離れた須坂市の鮎川と百々川流域の扇状地においては多数の積石塚古墳が発見されている。まず鎧塚1号墳（4）は前期後半の築造と推測され、当古墳群の中でも最古に属している。続く天神1号墳（6）は中期後半の築造と推測され、円筒埴輪や形象埴輪（家形埴輪や椅子形埴輪など）が出土している。榎田遺跡では高床式建物と思われる建築部材が出土しており、建物の構造を推測する際に本古墳出土の家形埴輪を参考としている。鎧塚2号墳（4）は中期後半の築造と推測されている。出土品の中では獅子嚙文の帯金具・鈴杏葉など大陸系の影響も見られる。この地域の積石塚古墳は中期に盛行し、後期古墳は少ない。後述の地域とは対照的であり、榎田遺跡の集落の消長と関連して興味深い。

つぎに遺跡から南へ約5km離れた保科および川田地区に目を向けたい。ここでは丘陵部と扇状地に多数の古墳群が存在しており、北信地域の中でも有数な古墳密集地である。和田東山古墳群（38）は尾根上に3基の前方後円墳と2基の円墳があり、前期から中期にかけて築造されたと推測され、当地域の首長系列を示すと思われる。本古墳群の西方の尾根には大星山古墳群（40）が存在する。この古墳群は前期後葉～中期中葉の間に3号墳（円墳）→1号墳（方墳）→4号墳（方墳）→2号墳（方墳）の順で築造されて



第8図 周辺遺跡分布図

- 1 榎田遺跡 2 高梨氏居館推定地 3 須田城址 4 鐘塚古墳群 5 米持遺跡 6 天神1号墳 7 福島城推定地 8 東畑遺跡 9 藤山古墳 10 竹の城址 11 井上氏居館址 12 金口遺跡 13 十九ヶ塙城址 14 城の峯城址 15 古町遺跡 16 南条遺跡 17 島遺跡 18 小柳井上氏居館址 19 高野遺跡 20 岩崎遺跡 21 菱田遺跡 22 前山田遺跡 23 大柳遺跡 24 大柳古墳群 25 清水古墳群 26 北の脇遺跡 27 春山城址 28 春山遺跡 29 春山B遺跡 30 長池遺跡 31 川田氏居館址 32 川田条里遺跡 33 宮崎遺跡 34 長原古墳群 35 霜台城址 36 須釜古墳群 37 高下古墳群 38 和田東山古墳群 39 片山祭祀遺跡 40 大星山古墳群 41 大室古墳群(北山支群) 42 大室古墳群(大室谷支群)

いる。このうち4号墳は積石塚古墳である。大星山古墳群と東山古墳群の間には人面土器を出土した片山遺跡(39)が存在する。若穂地区にはこの他にも多くの古墳群が見られる。特に扇状地部には積石塚古墳である長原古墳群(34)が後期中葉以降継続して作られてゆく。また和田東山・大星山の位置する尾根の先端と反対側には長野県最大の積石塚古墳の集中地域である大室古墳群(41,42)が存在する。

奈良時代～平安時代 榎田遺跡においては奈良時代中期の住居址が数軒存在するものの、住居数が増加す

るのは平安時代（9世紀中葉～後半）に入ってからで、約30軒確認されている。近接地では南条遺跡（16）で平安時代以降を主体とする100軒以上の住居址、高野遺跡（19）においても奈良時代～平安時代の住居址100軒以上、岩崎遺跡（20）でも平安時代の住居址が数軒発見されている。これらの遺跡は現在発掘中であり、今後調査が進む中で当地の古代の様相はより明らかにされて行かろう。

中世 本遺跡ではL字状の溝に囲まれた掘立柱建物群が発見されている。遺物は14～15世紀代の陶磁器片が少量出土している。同時期に須坂～綿内周辺には井上氏が勢力を有しており、須坂市井上の居館址（11）以外にも綿内の小柳にも分家が存在したとされ（18）、榎田遺跡で発見された遺構とも密接に関連した可能性がある。遺跡周辺の北側丘陵上では城の峯城址（14）、南の峰には春山城址（27）が存在する。また前山田遺跡（22）や北の脇遺跡（26）の調査も行われ、掘立柱建物群が発見されており、周辺の資料も次第に蓄積されつつある。

参考文献

- | | | |
|--------------|------|-------------------------------------|
| 金井正三 | 1980 | 『井上氏城跡』須坂市教育委員会 |
| 須坂市史編纂委員会 | 1981 | 『須坂市史』 |
| 長野市若穂公民館 | 1983 | 『若穂の文化財』 |
| 岡崎晋明 | 1986 | 『須坂の古墳文化』須坂市立博物館 |
| 須坂市教育委員会 | 1986 | 『須坂市遺跡地名表』 |
| 矢口忠良 | 1988 | 『宮崎遺跡』長野市の埋蔵文化財第28集 |
| 長野県埋蔵文化財センター | 1991 | 『長野県埋蔵文化財センター年報』7 |
| 千野 浩 | 1993 | 『岩崎遺跡』長野市の埋蔵文化財第53集 |
| 矢口忠良 | 1996 | 『埋蔵文化財確認調査概要報告書』長野市教育委員会 |
| 土屋積・青木一男 | 1996 | 『大星山古墳群・北平1号墳』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書20 |
| 須坂市教育委員会 | 1997 | 『須坂市八丁鎧塚古墳』 |
| 小林秀夫 | 1997 | 『千曲川流域における古墳の動向』長野県考古学会誌82 |
| 飯島哲也 | 1998 | 『善光寺平南部の主要古墳見学資料』長野県考古学会古墳時代研究部会レジメ |
| 千野 浩 | 1998 | 『綿内遺跡群 南条遺跡』長野市埋蔵文化財センター現地説明会資料 |

周辺遺跡の情報については長野市埋蔵文化財センターの皆様から御教示をいただいた。記して謝意を表したい。

第Ⅲ章 調査成果

第1節 遺構の概要

榎田遺跡の調査範囲は全長約930m、幅約55m（一部約35m区間を含む）に及び、北から①～③区に調査区を大別し、更にもその中を作業工程に合わせて細分して発掘を行った。遺構が検出されたのは、基本層序のⅠD～Ⅱ層とⅣ層の2面である（第Ⅱ章第3節）。調査時の所見では若干ⅠC層でも奈良時代～平安時代の遺構が検出したとされるが、詳細は不明である。

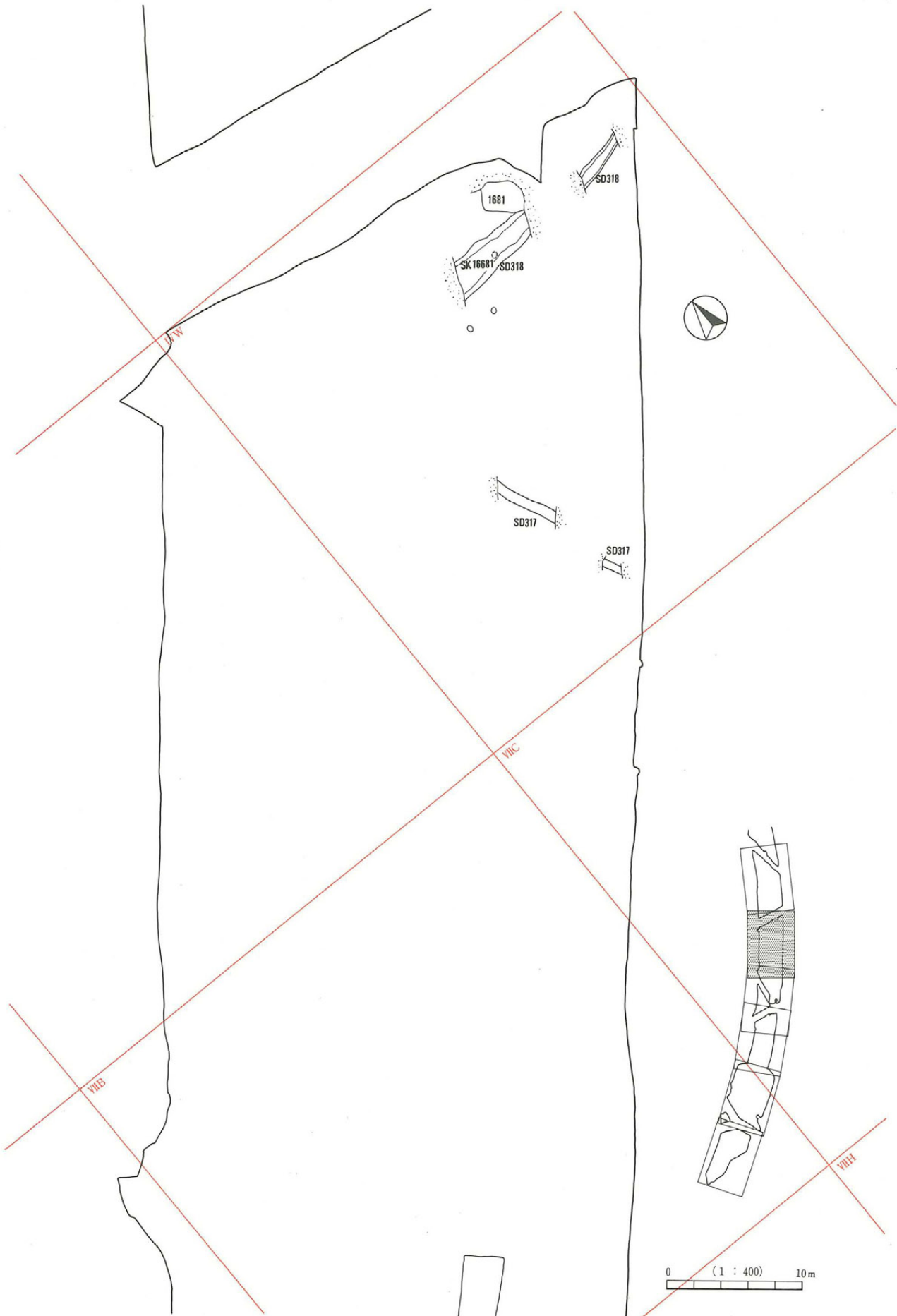
ⅠD層は調査区の全体に広がり、ほぼ全面を調査している。この層は弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期～後期、奈良時代～平安時代、中世、近世までの遺構・遺物を包含し、その数は住居址約1000軒、掘立柱建物址約110棟、溝址約230条、土坑2000基以上を数える。

これらの中で、中世遺構は黒色土層を覆土に持つことから分離することが可能であったが、弥生時代後期～平安時代までの遺構は、覆土も類似し、検出面を分離することが不可能なため、ほぼ同時に調査が行われた。また、遺構数が非常に多く、密集度も高いために、切り合い関係で時期を判別する事も困難な状況であった。よって遺構の時期については、遺構覆土から該期の遺物が一定量出土した場合、もしくは遺構の形態から確実に該期と判断できた場合のみ認定を行った。そのため覆土内の遺物量が少量であったり、切り合いが激しく、遺構の形状が不明な場合は時期を認定することには無理があり、時期不明と判断した遺構は相当数に上る。特に掘立柱建物址については、複数の遺構との切り合い関係に関する調査時での判断と、個々の遺構の時期とに矛盾があり、明確に時期が認定できた例は極めて少ない。このようにⅠD層の検出遺構は時期を明確にできたものもあるが、時期を判断しがたい遺構も多数あり、各時期における詳細な集落変遷や構造の解明には限界がある。

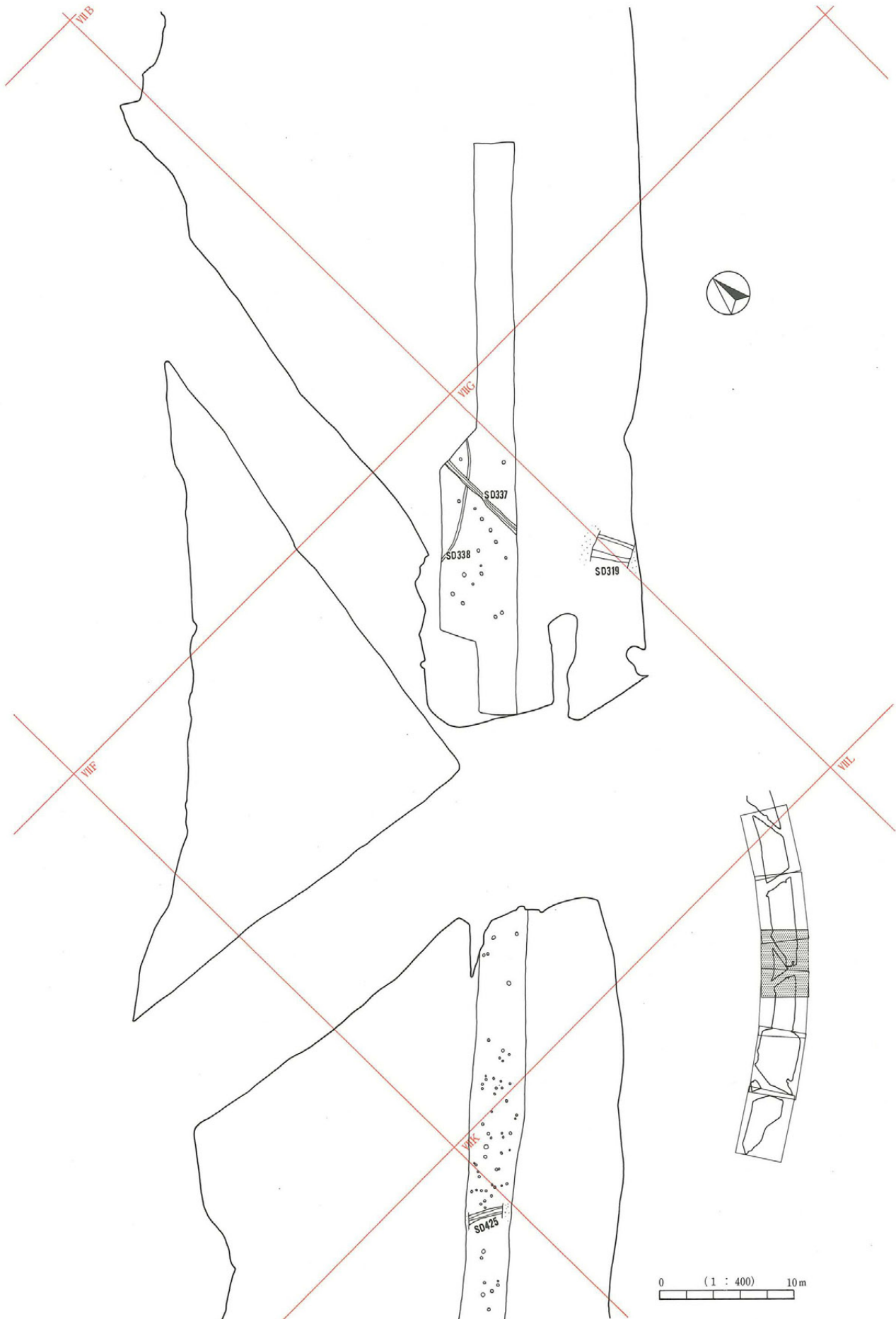
Ⅱ層は調査区全面に広がるものの、調査区中央部のSG3以南において弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が若干検出されたのみである。しかしこれらの遺構はⅠD層から掘り込まれており、Ⅱ層独自に遺構を抽出することは出来ない。

Ⅳ層は、調査区中央部の②-3A地区、②-4地区、②-5地区以南において部分的に堆積しており、弥生時代中期の遺構・遺物のみが包含され、その数は住居址43軒、掘立柱建物址1棟、溝址25条、土坑100基を数える。本層はⅡ層との間に無遺物層を介在させることから、該期の集落の様相を把握することが出来た。

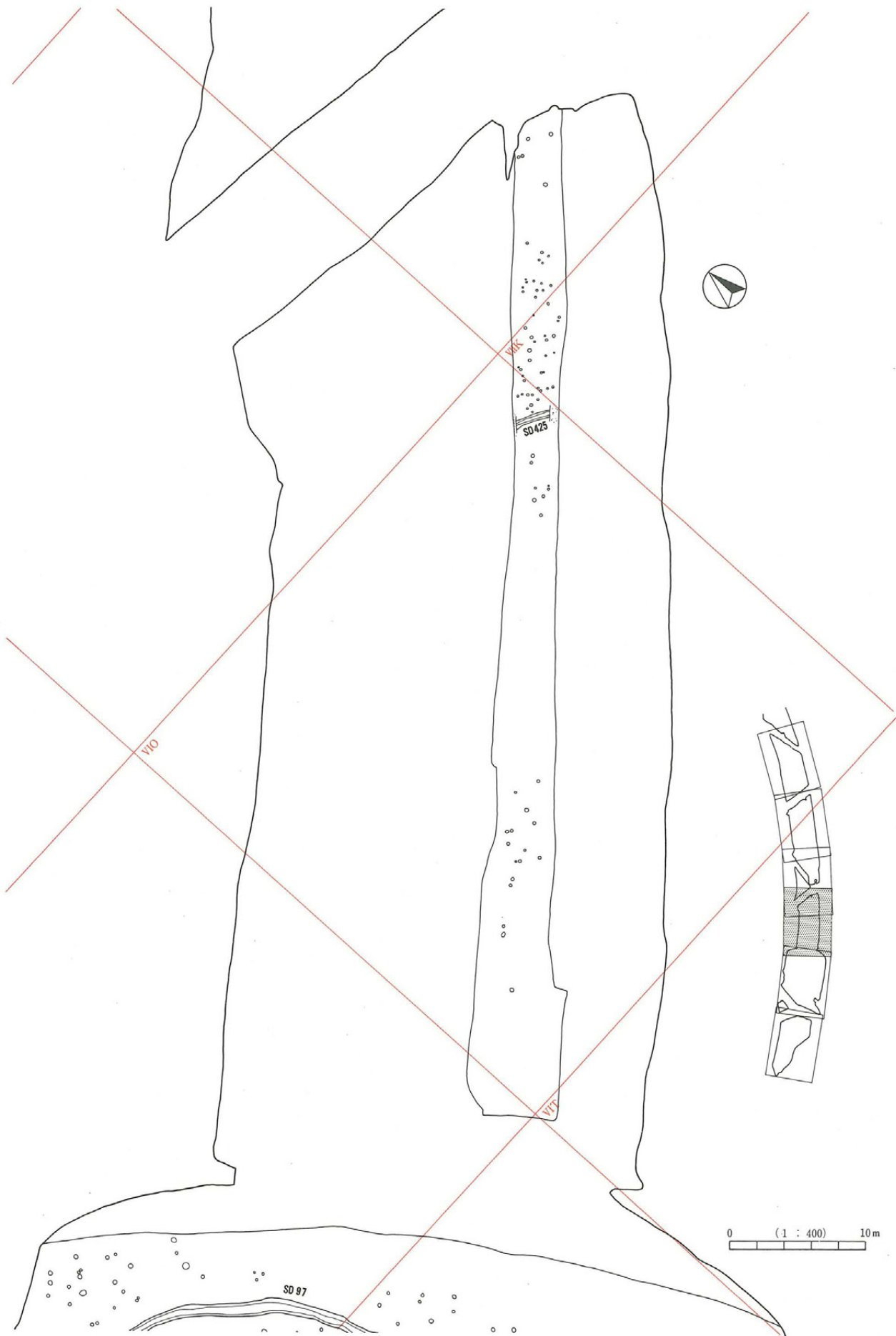
遺構分布図と遺構記号・番号と遺構の記述方法については第Ⅰ章第2節1を参照。



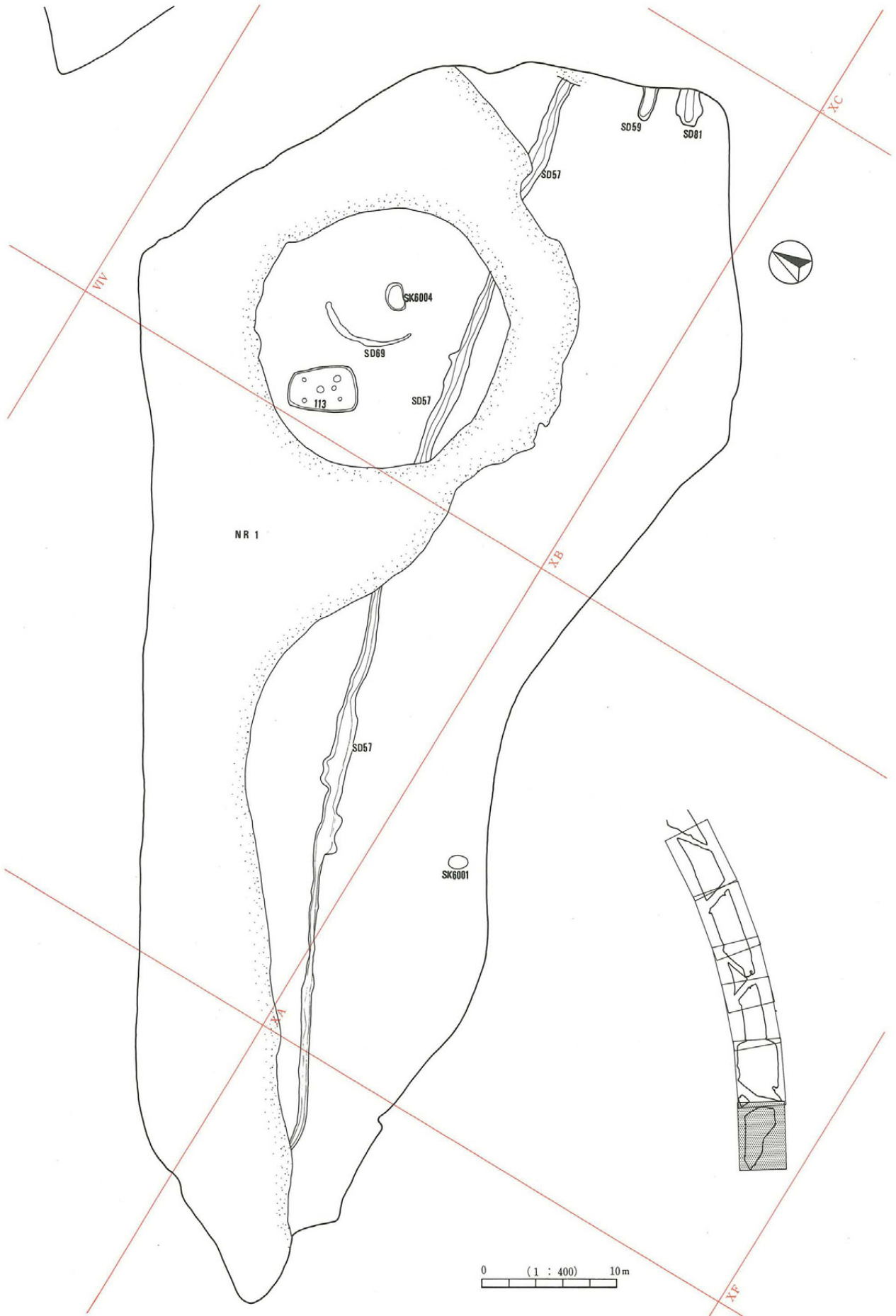
第10図 遺構分布図 弥生時代中期 (2)



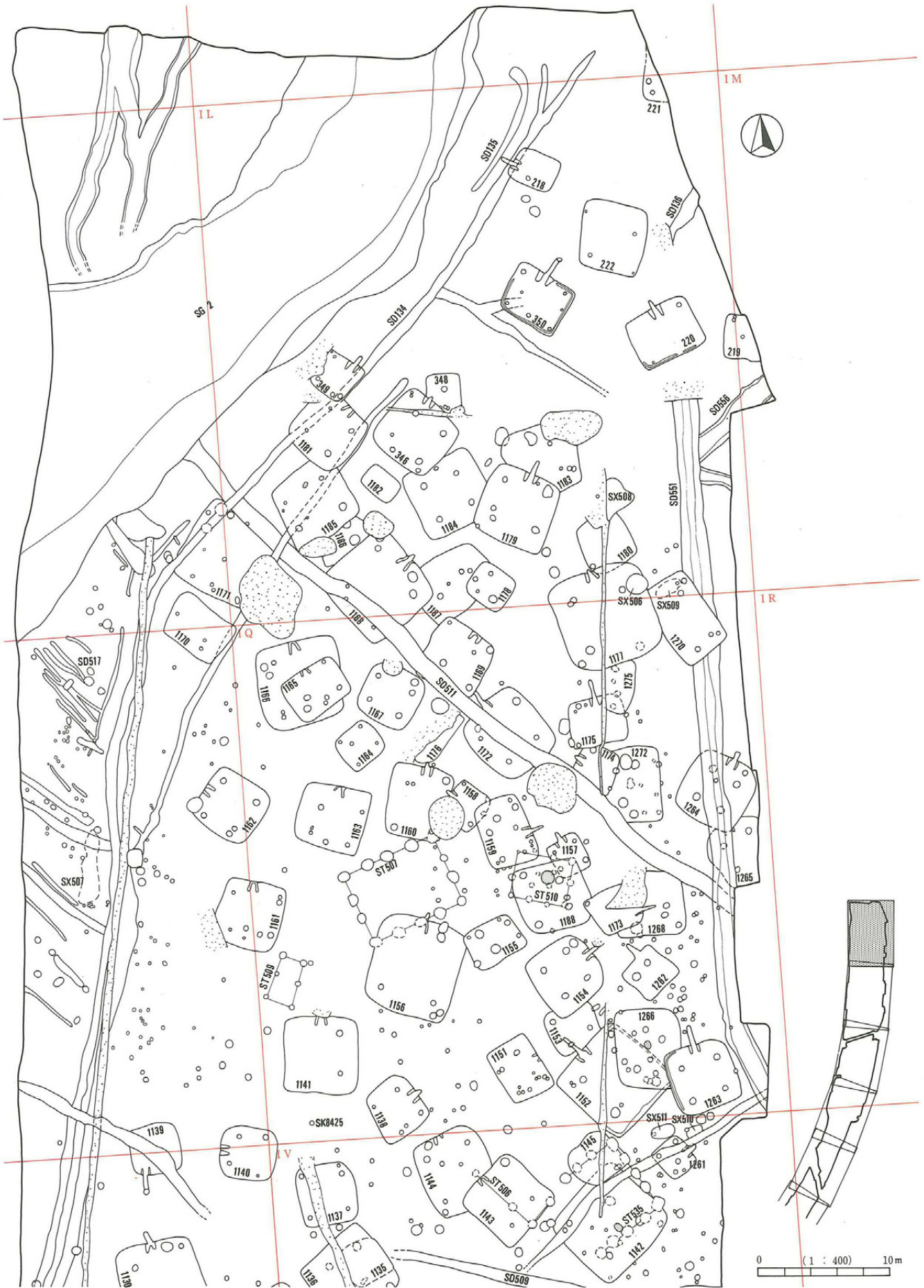
第11図 遺構分布図 弥生時代中期 (3)



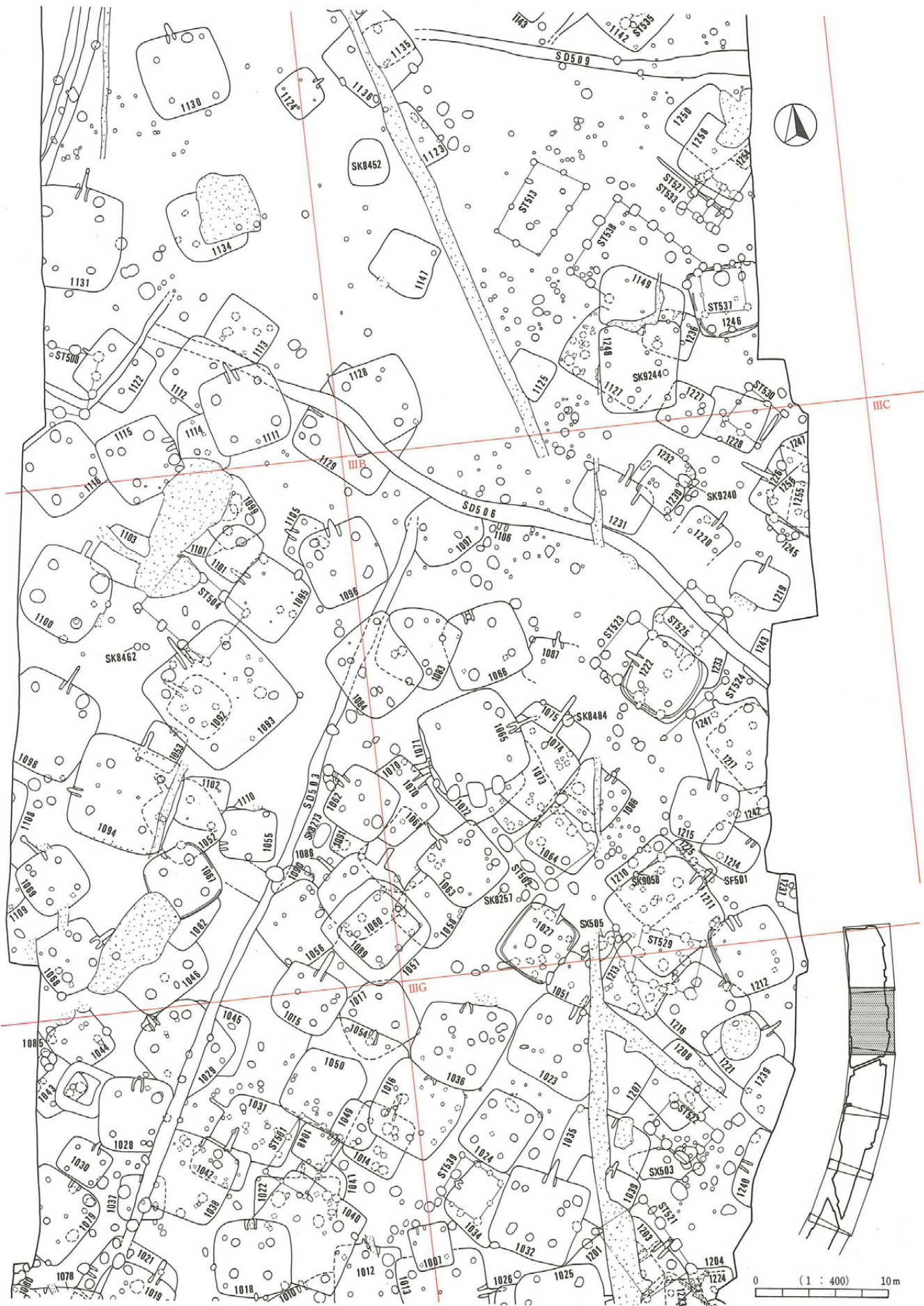
第12図 遺構分布図 弥生時代中期 (4)



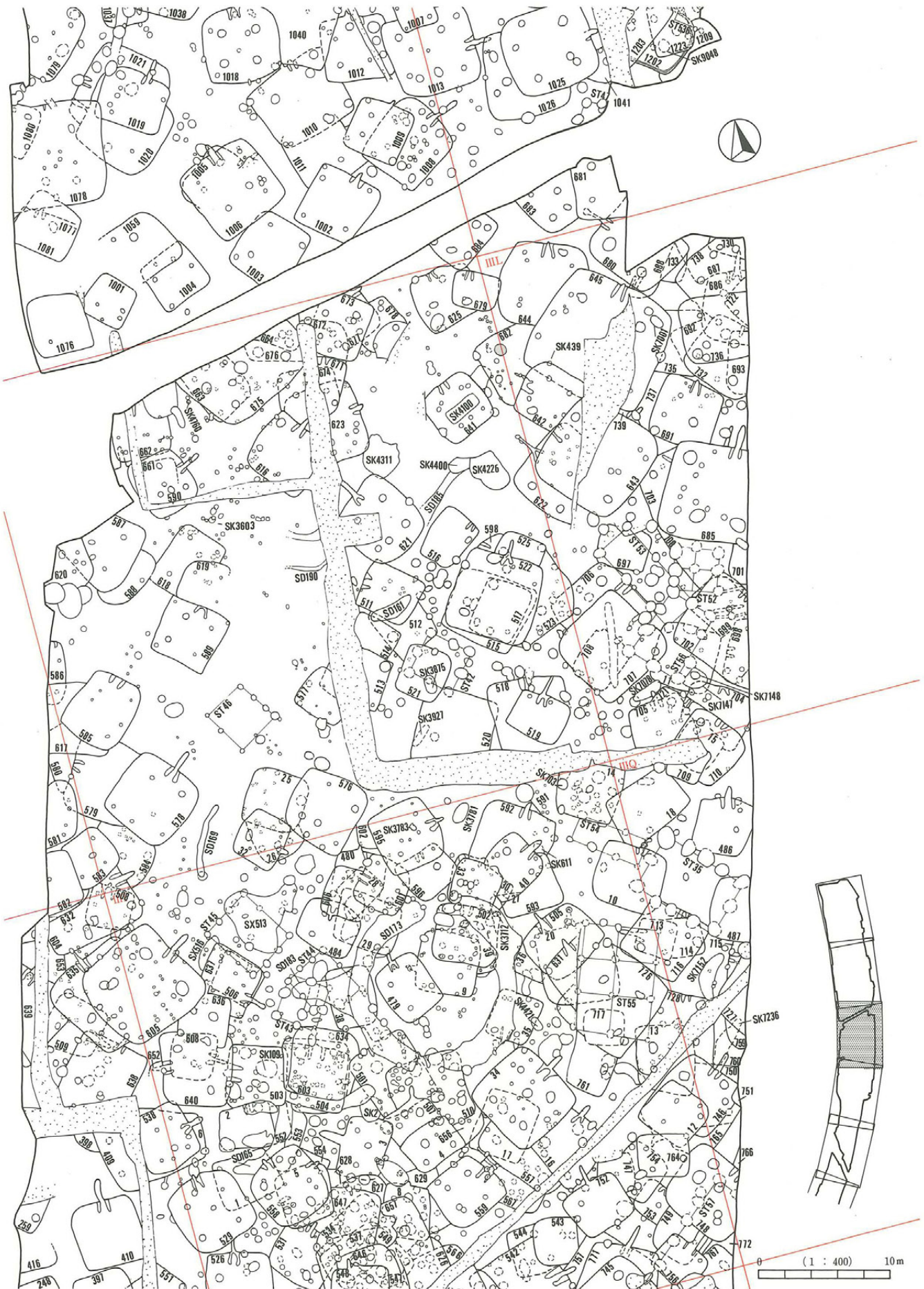
第14図 遺構分布図 弥生時代中期 (6)



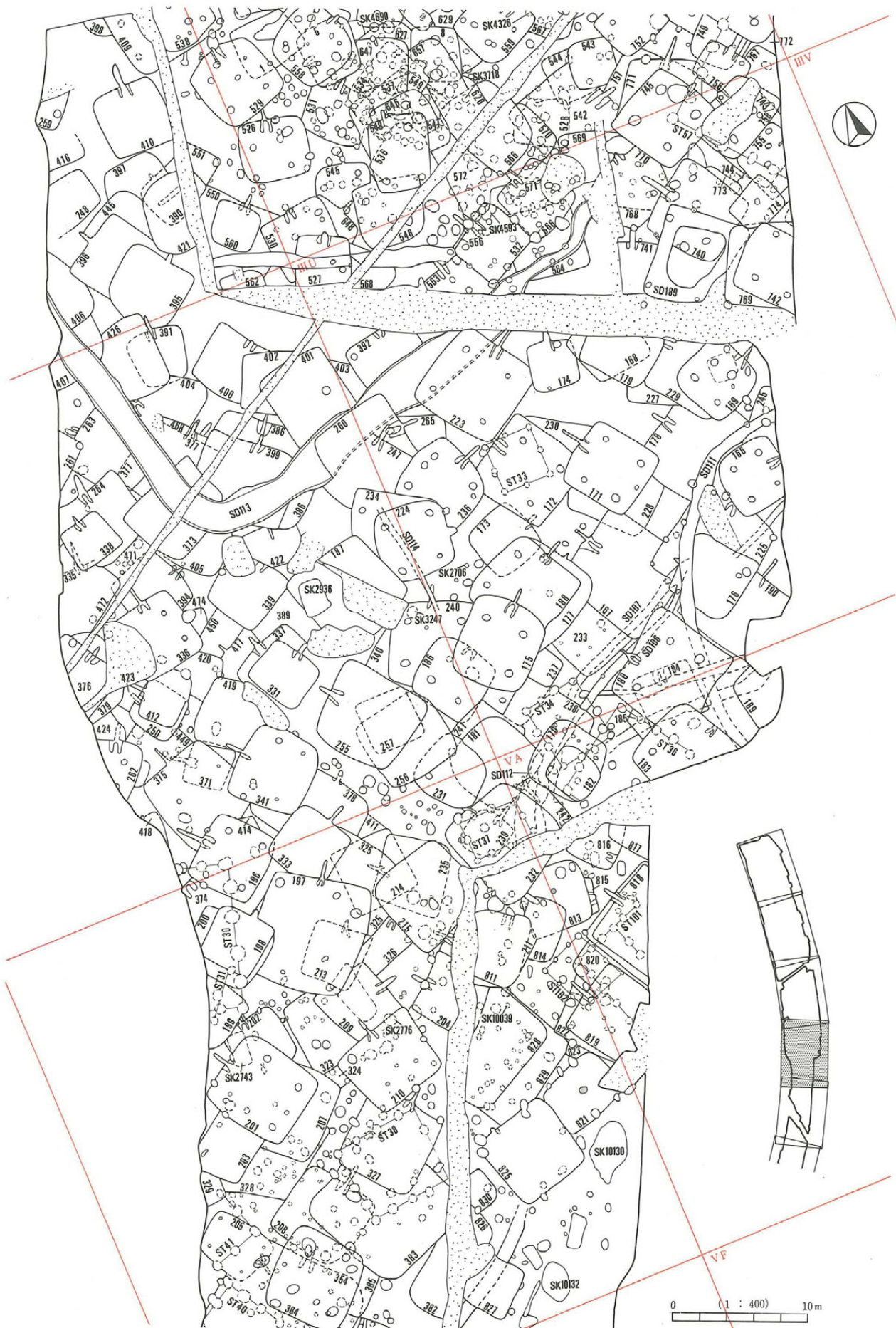
第15図 遺構分布図 弥生時代後期～平安時代 (1)



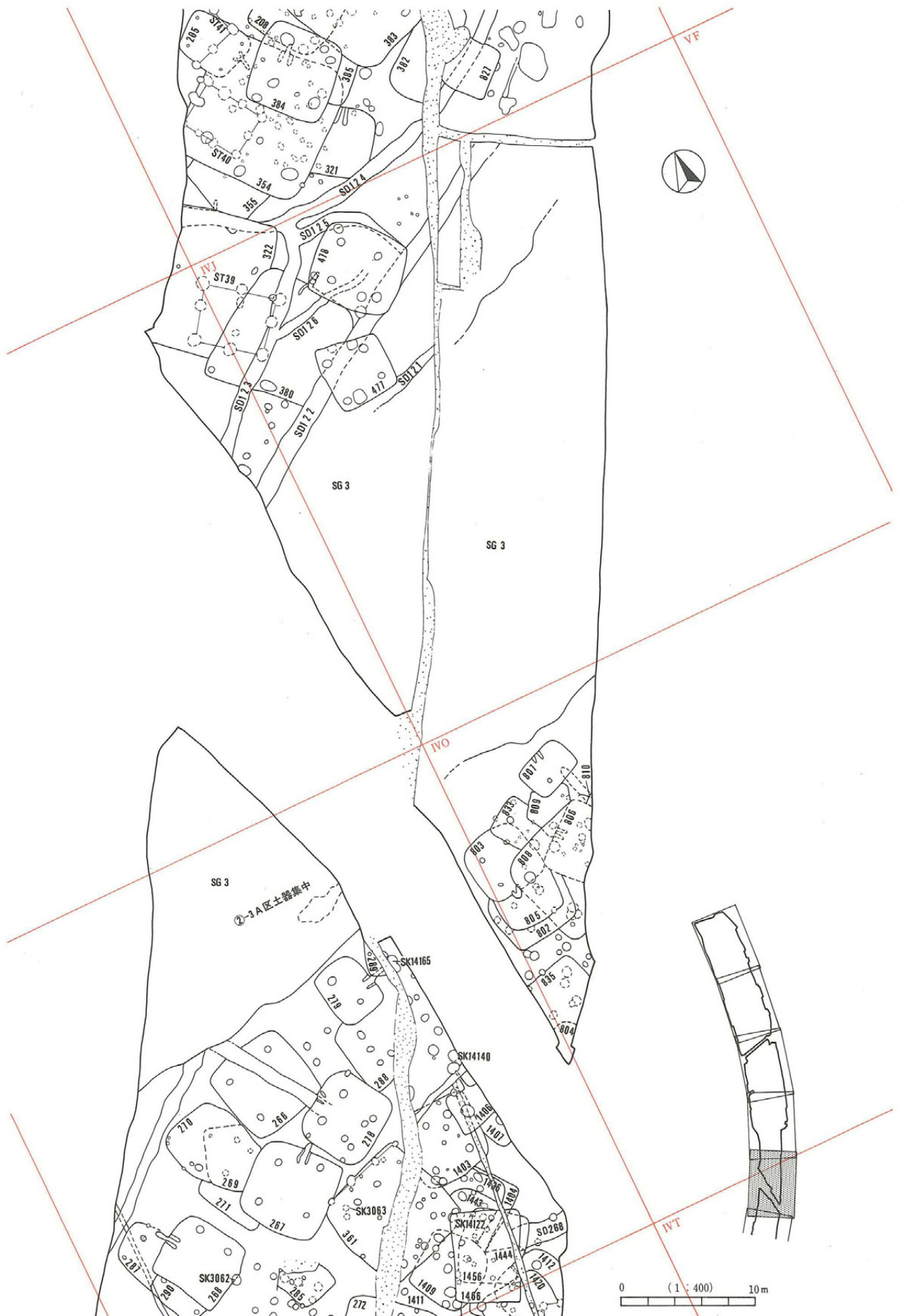
第16図 遺構分布図 弥生時代後期～平安時代 (2)



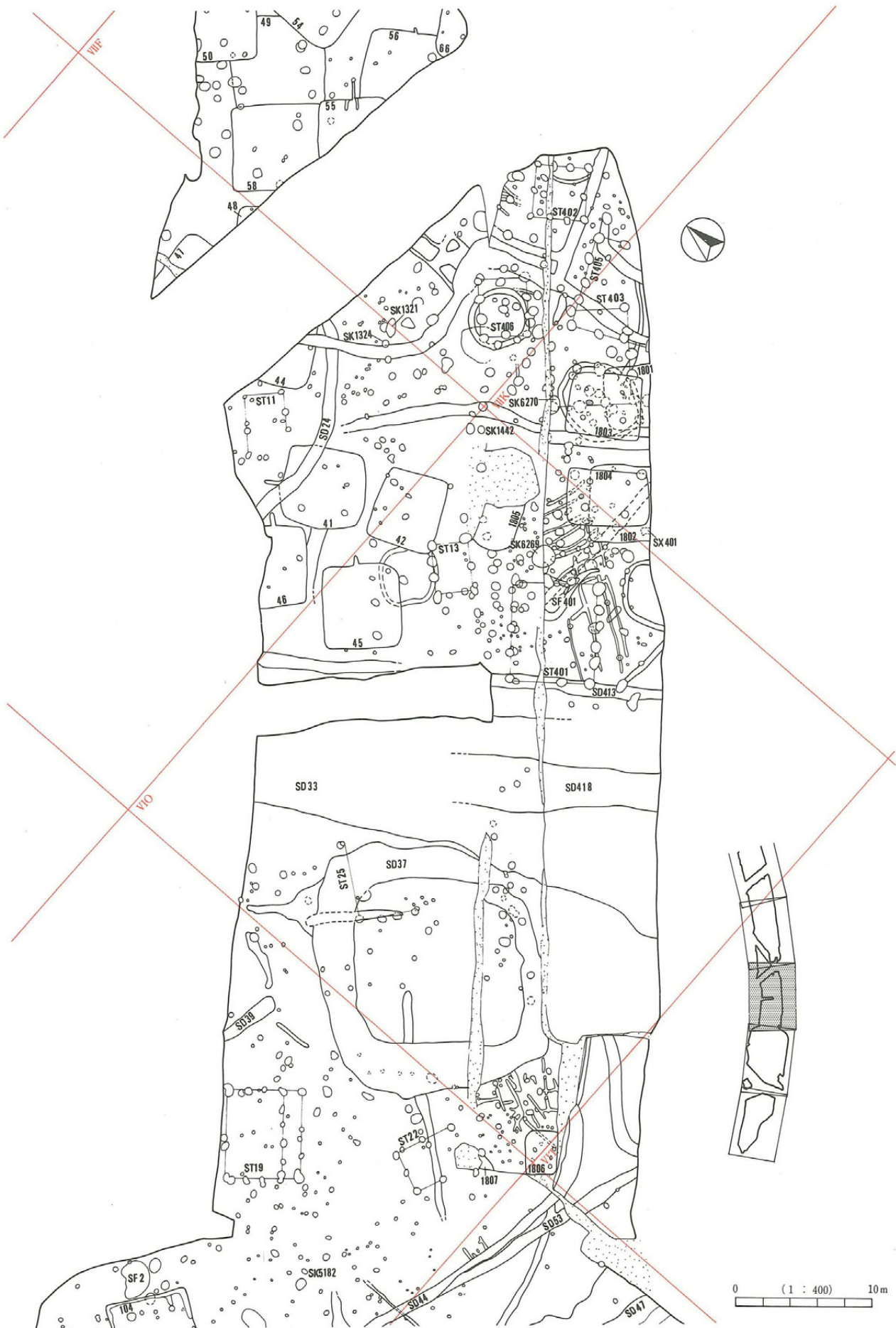
第17図 遺構分布図 弥生時代後期～平安時代 (3)



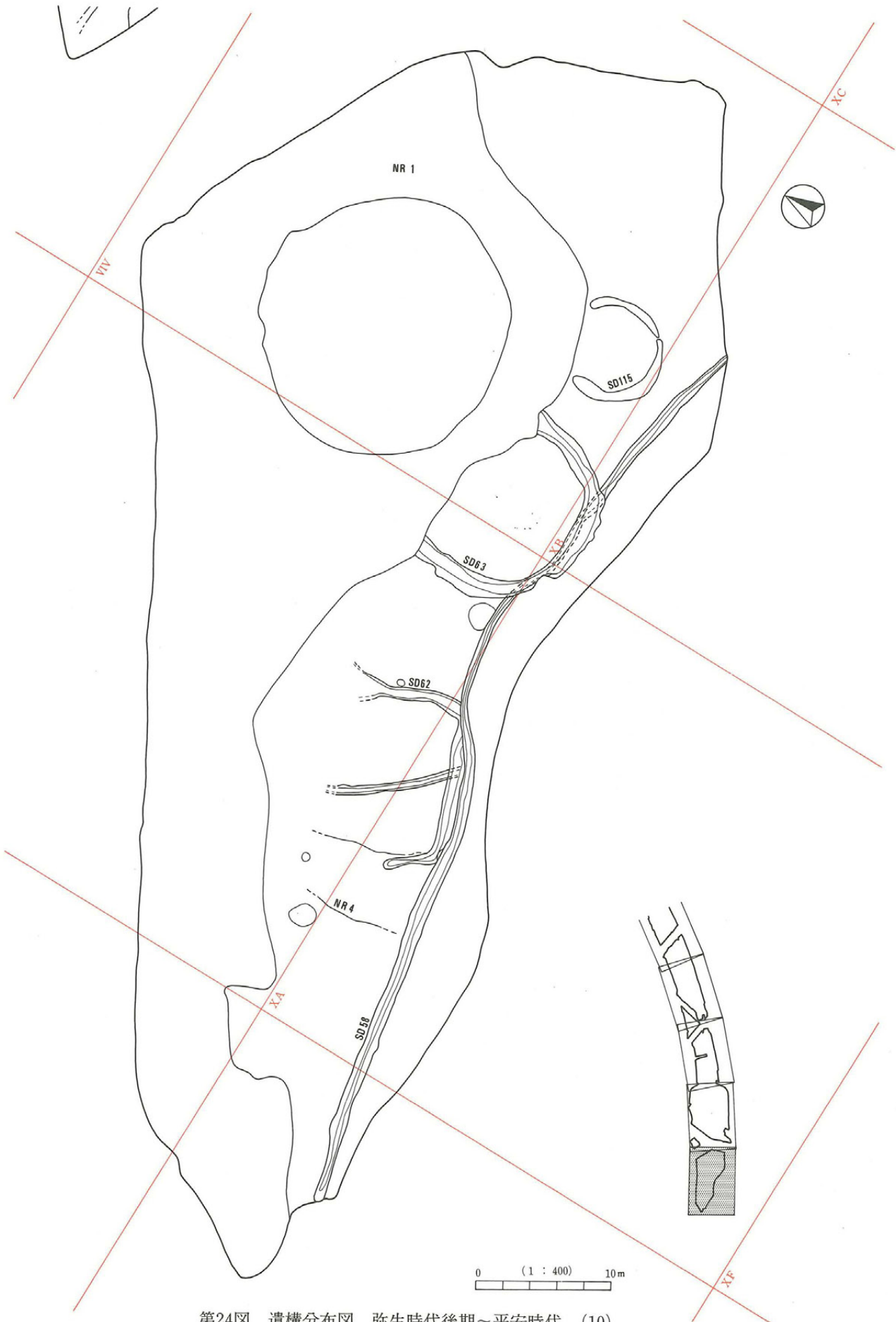
第18図 遺構分布図 弥生時代後期～平安時代 (4)



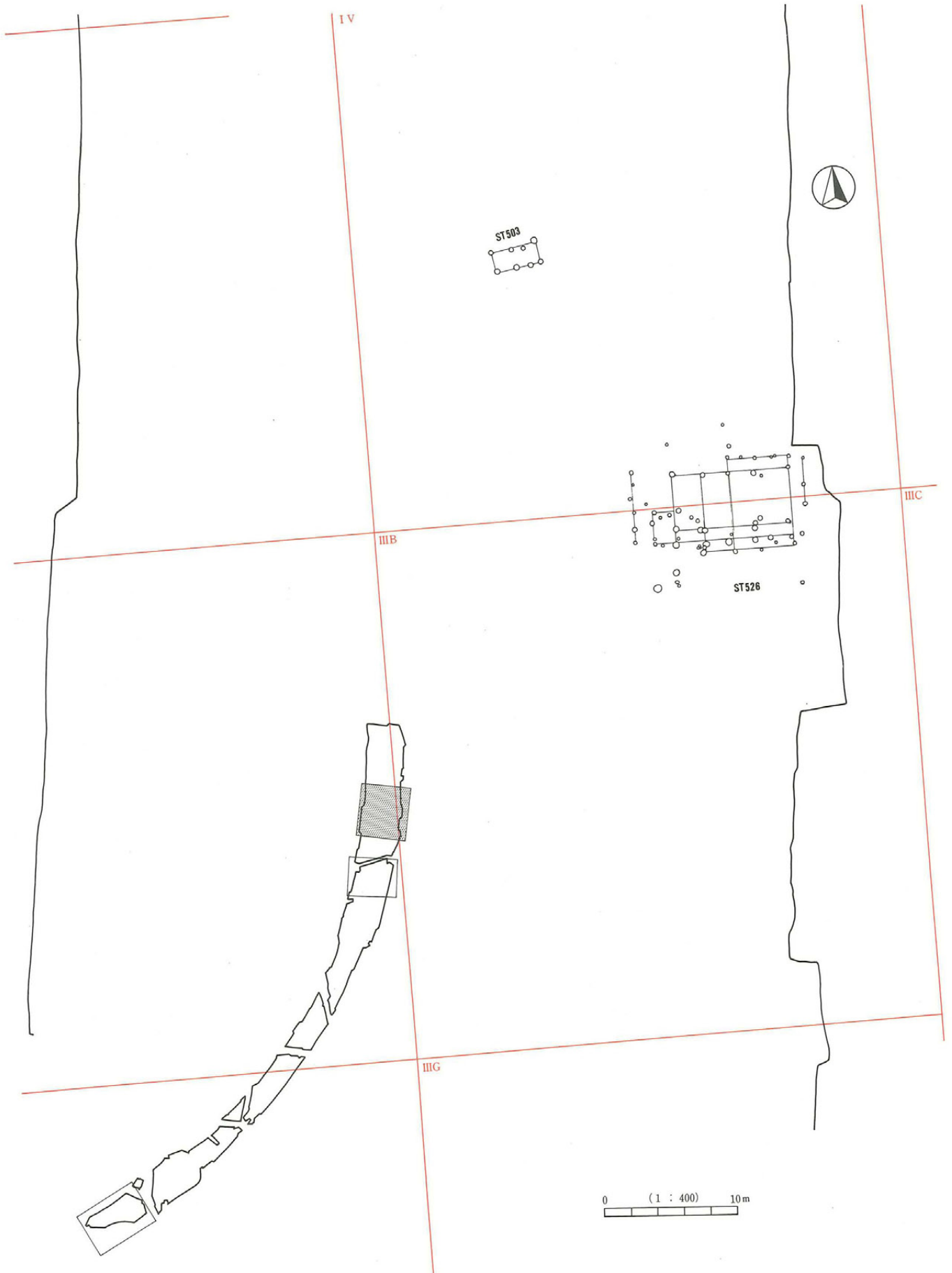
第19図 遺構分布図 弥生時代後期～平安時代 (5)



第22図 遺構分布図 弥生時代後期～平安時代 (8)



第24図 遺構分布図 弥生時代後期～平安時代 (10)



第25図 遺構分布図 中世 (1)



第26図 遺構分布図 中世 (2)



第27図 遺構分布図 中世 (3)

第2節 弥生時代中期

1 概要 (第9～14図)

弥生時代中期の遺構は、②～③地区で検出され、平成2～4年度に調査が実施された。諸般の事情から、年度毎に各地区を細分した分割調査となったが、遺構の状況は一様ではなく、弥生時代中期の集落像を把握するにあたって良好な成果を得ている。以下、各地区の調査状況を簡単に述べ、様相を整理しておく。

本遺跡では、②-3A、②-4～5地区と、③-3～4地区で集落址が確認されたが、その性格は大きく異なる。②-3A地区は、平成2年度に調査が行われ、竪穴住居址16軒、溝址4条、土坑約10基が検出された。平成4年度には、②-3A地区の東側に接する②-4～5地区で竪穴住居址19軒、平地式住居址1軒、溝址21条、掘立柱建物址1棟、土坑約90基が調査され、遺構が連続して分布する状況から、両地区に跨って集落址が存在する事が判明した。遺構の検出面は、基本土層の第IV層オーリーブ～暗オーリーブ色土で、第I層褐灰色土層および、第II層灰色土を検出面とする、弥生時代後期以降の検出面とは明確な差異が認められた。このため、遺物での時期判定が不可能な遺構も、第IV層で検出されれば、弥生時代中期所属の遺構と認識している。

②-3～5地区の集落址は、竪穴住居址、平地式住居址、掘立柱建物址、溝址、土坑で構成される。遺構間の重複が激しい地区であり、特に、②-4～5地区に集中する傾向が見受けられる。しかし、②-3A地区は、②-4～5地区から連続する溝址が検出されない等攪乱の影響を受けており、遺構分布にこうした状況がある程度反映していると思われる。遺構の主体は、竪穴住居址で、後述するとおり平面形態、柱穴配置、付属施設等に多様性があり、また、近年、中野市栗林遺跡(中島1997)や長野市松原遺跡(青木1996)で報告された平地式住居址が1軒確認され、竪穴住居址と併存する。竪穴住居址の遺物は、質、量ともに豊富であり、栗林式後半期に所属する良好な土器の一括資料が得られた他、磨製石斧の製作を示す資料が出土した。磨製石斧は、太型蛤刃石斧の未製品や原石が多数見られ、製作工程の復元およびそれらを保有する集落の性格が目ざされよう。調査範囲の限界から、集落域および全体の集落構成は明らかでないが、②-5地区を横切る河川址SG3以北では、該期の遺構、遺物が検出されず、検出面となった基本土層の第IV層自体が存在しない。また、SG3の南岸では、侵食を受けた竪穴住居址SB841、843が存在するため、河道が集落北端を流れ、これが北限になった可能性が高い。また、南限は、②-3A地区に近接する②-1A地区北端で溝址SD318が検出されており、SD318から南側のSD319に至る範囲は、遺構、遺物がほとんど検出されていない事から、SD318付近が集落の南限と推定されよう。なお、SD318では、土器および礫の投棄がなされている。

平成2年度調査の③-3～4地区では、住居址群を大形溝で囲む環濠集落が検出されている。調査区の西側には、沼地が大きく入り込み、その沼地をとりまく様に7軒の竪穴住居址および約30基の土坑が確認された。竪穴住居址と土坑は、東側を大形溝のSD81で囲まれ、また、SD81の内側には小形溝のSD92、94が併走する。SD81の外側は、約25mの距離を保ちながら更にSD97が巡り、SD81とSD97で構成される空間には竪穴住居址はなく、土坑、環状又は弧状の溝址のみで、住居址群とは一線を画している。SD318南側の遺構空白域を置いて、SD319が位置するが、SD319から③-3～4地区の集落址までの空間は、②-1A～B、③-1～2地区の調査結果から、溝址及び土坑が占拠する事が判明している。上述のとおり、居住域を囲むSD81の外側にも溝址および土坑が配置されるが、両者が連続性を有するかどうかは明らかではない。環濠集落の時期は、出土土器の様相から栗林式後半期に所属し、②-3Aおよび

②-4～5地区に展開する集落址と同時期と判断される。しかし、③-3～4地区では、土坑のSK5495、5497から住居址出土土器より若干古い栗林式前半期の土器が出土し、また、遺構外出土土器にも同様の資料が見受けられ、本地区がやや先行して利用された状況が窺われよう。SK5495出土土器は、蓋を持つ無頸壺であり、更に、女性の可能性が高い歯が出土した点から墓址の性格を帯びた遺構である。また、SK5497および遺物が出土しなかった他の土坑についても、同様の性格を有する土坑が存在すると考えられ、栗林式前半期は墓域が展開していた可能性が示唆される。

以上の様に、本遺跡では、栗林式前半期の墓域と、後半期に所属する環濠集落および環濠を持たない集落が、約250mの距離を置いて同時に共存していた景観が看取されよう。

遺構は、竪穴住居址、平地式住居址、溝址、土坑、掘立柱建物址が調査されたが、残存状態が良好な遺構を抽出して報告する。個別図を提示しない遺構についても、事実記載を行った遺構があり、この場合は、全体図(第9～14図)を参照されたい。また、竪穴住居址は、検出された全てに対し第1表にデータを示した。

2 竪穴住居址

第113号住居址 SB113 (第28図)

位置：③-4 VIV-11

形態・規模：IB 4.9×3.1m 床面積 13.70㎡

主軸の方向：N36W

新旧関係：なし

出土状況：住居内中央～周辺のほぼ床面直上から、壺、甕、台付甕、鉢が出土した。

床面：堅緻な部分や貼り床は認められず、全体に軟弱。

炉址：検出されなかった。位置的にはP6付近と考えるが、P6の記録がなく、詳細不明。

柱穴：4基の支柱穴を、長方形に配置する(P1～4)。また、中心軸線上にP5、6を検出したが、掘り込みが浅く性格不明。

第157号住居址 SB157 (第29図)

位置：③-3 VIR-14,15,19,20

形態・規模：IA 5.8×4.4m 床面積 23.46㎡

主軸の方向：N13E

新旧関係：なし

出土状況：土器は、炉址の北側に集中し、ほぼ床面直上から完形または完形に近い状態で壺、甕、鉢が出土した。また、石器は、磨製石鏃が炭化材の下位より出土した。

床面：堅緻な部分や貼り床は認められず、全体に軟弱。全体に灰および炭化物が分布し、炭化材は中央に向かって倒れた状態で出土。

炉址：中央よりやや北側に、径約40cmの地床炉を検出。浅い掘り込みを持ち、中央よりややずれた位置で火床を検出。

柱穴：北壁に1基(P4)、南壁に3基(P1～3)が検出されたが、全体の配置は不明。

備考：焼失住居。

第158号住居址 S B 158 (第30図)

位置：③-3 VIR-23、VIW-03

形態・規模：I C 4.3×2.95m 床面積 (10.61)㎡

主軸の方向：N23E

新旧関係：なし

出土状況：なし

床面：堅緻な部分や貼り床は認められず、全体に軟弱。

炉址：攪乱を受けて不明。

柱穴：3基の主柱穴を検出した (P1~3)。攪乱を受けた範囲に1基の柱穴が想定され、対称構造の長方形配置と思われる。

第160号住居址 S B 160 (第30図)

位置：③-3 VIR-18,19,23,24

形態・規模：その他 4.65×2.9m 床面積 10.27㎡

主軸の方向：N58W

新旧関係：S B 161を切る。

出土状況：なし。

床面：堅緻な部分や貼り床は認められず、全体に軟弱。

炉址：検出されなかった。

柱穴：検出されなかった。

第161号住居址 S B 161 (第30図)

位置：③-3 VIR-18,23

形態・規模：その他 5.65×3.5m 床面積 (10.53)㎡

主軸の方向：N12E

新旧関係：S B 160に切られる。

出土状況：覆土中から、土器の小破片が若干出土した。

床面：堅緻な部分や貼り床は認められず、全体に軟弱。

炉址：検出されなかった。

柱穴：検出されなかった。

第457号住居址 S B 457 (第31図)

位置：②-3 A IVR-15、IVS-11

形態・規模：I A 7.3×5.6m 床面積 (37.92)㎡

主軸の方向：N74W

新旧関係：S B 1481を切る。

出土状況：土器は、ほぼ全体に分布するが西側に集中する傾向があり、床面直上から完形または完形に近い状態で壺、台付甕、鉢等が出土した。また、石器は、東壁付近に集中して床面直上より太型蛤刃石斧の素材および未製品C1類と扁平片刃石斧未製品E1類が出土した。床面直上～覆土上層の範囲で出土し、土器と石器の間で出土状況の差異が認められる。

- 床 面：床全面が堅緻で、良く締まっている。全面に灰および炭化物が分布し、炭化材は中央に向かって倒れた状態で出土。
- 炉 址：攪乱を受けて不明。
- 柱 穴：1基の主柱穴（P4）および、中心軸上に2基の支柱穴（P1、3）を検出した。
- 備 考：焼失住居。

第458号住居址 SB458 （第32図）

- 位 置：②-3A IVR-13,14,18,19
- 形態・規模：IA 6.0×4.95m 床面積 (28.17)m²
- 主軸の方向：N74W
- 新旧関係：なし。
- 出土状況：覆土中から、小破片の土器が若干出土した。
- 床 面：堅緻な部分や貼り床は認められず、全体に軟弱。全面に焼土、炭化物が分布し、炭化材は中央に向かって倒れた状態で出土。
- 炉 址：攪乱を受けて不明。
- 柱 穴：4基の主柱穴を長方形に配置する（P1~4）。
- 備 考：焼失住居

第459号住居址 SB459 （第28図）

- 位 置：②-3A IVR-14,15,19,20
- 形態・規模：IA 7.35×4.95m 床面積 33.5m²
- 主軸の方向：N60W
- 新旧関係：なし。
- 出土状況：土器は、住居および柱穴（P3、6）の覆土から壺、甕、鉢または高坏が出土したが、個々の土器を出土位置に戻す事はできなかった。石器は、P1およびP4付近の床面直上から、磨製石鏃が出土した。
- 床 面：堅緻で良く締まっており、全面に貼り床が認められる。
- 炉 址：ほぼ中央に、径約40cmの地床炉を検出。浅い掘り込みを持ち、周縁部が焼ける。
- 柱 穴：4基の主柱穴（P1~4）および、中心軸上に1基の支柱穴（P5）を検出した。また、P3とP5の間に、性格不明のP6が存在する。

第460号住居址 SB460 （第32図）

- 位 置：②-3A IVS-01,02,06,07
- 形態・規模：IB? (6.8)×(3.3)m 床面積 (21.08)m²
- 主軸の方向：N59W
- 新旧関係：なし。
- 出土状況：南壁付近に集中して、床面直上から壺、甕、台付甕、鉢、蓋が完形または完形に近い状態で出土した。
- 床 面：地床炉およびP1を結ぶ線から、東~南側の範囲で硬化面が確認され、堅緻で良く締まっている。また、覆土2層下の床面直上に、炭が薄く堆積する。

炉 址：ほぼ中央に、径約60cmの地床炉を検出。
 柱 穴：3基の主柱穴を検出したが（P1～3）、攪乱をうけた範囲にもう1基の主柱穴が予想される。

第837号住居址 S B 837 （第33図）

位 置：②-5 IVO-06

形態・規模：II (5.3)×5.2m 床面積 (20.86)m²

主軸の方向：N66W

新旧関係：S B 838、S D 225を切る。

出土状況：床面直上および覆土中から、多量の土器および石器が出土した。土器は、特に床面直上のものが多く、炉址の西側および南東付近に集中する。壺、甕、台付甕、鉢、蓋等があり、完形または完形に近い個体が多い。石器は、磨製石斧製作に關係する資料（大型蛤刃石斧の素材・未製品D類・石杵）が、住居の南西部を除いてほぼ全体に分布し、床面直上付近で出土した。

床 面：堅緻な部分や貼り床は認められず、全体に軟弱。全面に、炭化物が分布する。

炉 址：中央よりやや北側で、30×40cmの地床炉を検出した。

柱 穴：検出されなかった。

備 考：焼失住居

第838号住居址 S B 838 （第34図）

位 置：②-5 IVO-06,11

形態・規模：不明 (1.8)×(5.1)m 床面積 (7.51)m²

主軸の方向：不明

新旧関係：S B 837に切られる。

出土状況：床面直上～若干浮いた位置で、壺、甕、台付甕、鉢が出土した。

床 面：堅緻な部分や貼り床は認められず、全体に軟弱。ほぼ全面に炭化物が認められ、炭化材は中央に向かって倒れた状態で検出された。

炉 址：調査範囲では、検出されなかった。

柱 穴：主柱穴と考えられる位置に、1基の柱穴を検出した（P1）。

備 考：焼失住居

第1468号住居址 S B 1468 （第35図）

位 置：②-4 IVN-19,24,25

形態・規模：I C 5.45×4.15m 床面積 18.67m²

主軸の方向：N52E

新旧関係：S B 1470を切る。

出土状況：土器は、炉址より北側に集中する傾向があり、床面直上および床から若干浮いた位置で、壺、甕、台付甕、有孔鉢、鉢等が出土した。石器は、磨製石斧製作に關係する資料（扁平片刃石斧未製品E1類・E2類）および剥片A類などが、ほぼ床面直上で出土した。またP4、5の間付近では炭化材の上に張り付くように織物片が出土した（第VI章第8節）。

第III章 調査成果

- 床 面：ほぼ全面が堅緻で、良く締まっている。床面直上には、炭化物が一面に分布し、炭化材は中央に向かって倒れた状態で出土した。
- 炉 址：ほぼ中央で、長径45cm、短径30cmの地床炉を検出した。
- 柱 穴：6基の支柱穴を長方形に配置する（P2～7）。また、中心軸上に1基の支柱穴（P1）を検出した。P4、5には、柱根が残存する。
- 備 考：焼失住居

第1469号住居址 SB1469 （第36・37図）

- 位 置：②-4 IVN-14,19
- 形態・規模：IB 6.7×3.85m 床面積（21.62）m²
- 主軸の方向：N24E
- 新旧関係：なし
- 出土状況：土器は、出土量が少なく、床面直上から壺、台付甕が出土した。石器の出土量は多く、磨製石斧製作に関係する資料が住居全体に分布し、ほぼ床面直上で出土した。磨製石鏃未製品、大形刃器、磨石、砥石、磨製石斧製作関連の剥片類、大型蛤刃石斧未製品B類・D類、扁平片刃石斧およびその未製品B類・D類・E2類・E3類、小形の柱状片刃石斧などである。
- 床 面：ほぼ全面が堅緻で、良く締まっている。床面直上に炭化物が分布し、炭化材は中央に向かって倒れた状態で検出された。
- 炉 址：中央よりやや北側の位置で、地床炉を検出した。
- 柱 穴：4基の支柱穴を長方形に配置し（P1～3、7）、中心軸上には1基の支柱穴（P6）が位置する。また、P3の下方に、P4、5が存在するが、性格は不明。
- 備 考：焼失住居。

第1470号住居址 SB1470 （第38図）

- 位 置：②-4 IVN-18,19,23,24
- 形態・規模：不明 (2.5)×(4.5)m 床面積（10.81）m²
- 主軸の方向：N55W
- 新旧関係：SB1468, 1482に切られる。
- 出土状況：出土量はわずかで、覆土全体から土器の小破片および磨製石斧に関係する資料が出土した。
- 床 面：ほぼ全面が堅緻で、良く締まっている。炭化材が、中央に向かって倒れた状態で検出された。また、壁際に焼土の堆積が認められた。
- 炉 址：住居西側が攪乱を受け、詳細不明だが、検出された位置は、住居のほぼ中央～若干北側に位置すると思われる。径約50cmの地床炉で、浅い掘り込みを持つ。
- 柱 穴：4基検出されたが（P1、2、4、5）、配置は不明。
- 備 考：焼失住居。

第1471号住居址 SB1471 （第39図）

- 位 置：②-4 IVN-14
- 形態・規模：不明 (1.7)×(3.8)m 床面積（4.31）m²

主軸の方向：N30W

新旧関係：S B442, 1480、S K14711を切る。隣接するS B1487との関係は不明。

出土状況：攪乱で住居のほとんどを壊されているが、南東～南壁付近に土器が集中する傾向を見せており、ほぼ床面直上から、壺、甕、高坏等が出土した。完形に近い個体が多い。

床面：堅緻な部分や、貼り床は認められなかった。南東の壁際に、炭化物、焼土が堆積する。

炉址：検出されなかった。調査範囲外に存在すると思われる。

柱穴：2基の支柱穴が検出された（P1、2）。両者に柱根が残存していた。

備考：焼失住居？

第1473号住居址 S B1473 (第39・40図)

位置：②-4 IVS-07

形態・規模：I B 6.65×4.95m 床面積 (28.83)m²

主軸の方向：N38W

新旧関係：なし

出土状況：土器は、住居内のほぼ全体に分布し、床面直上～覆土2層中で壺、台付甕、鉢が出土した。石器は、磨製石斧の製作に関する資料が住居中央～南東部分に比較的集中し、床面直上～覆土上層に亘って出土した。特に磨製石斧製作用の原石、大型蛤刃石斧未製品C3類の出土があるほか、磨製石鏃未製品、磨石、砥石などが出土している。

床面：ほぼ全面が堅緻で、良く締まっている。東壁付近では、床面直上に焼土、炭化物が堆積し、また、南西～南壁際では、床～壁にかけて著しく焼けた部分が見受けられる。炭化材は、中央に向かって倒れた状態で検出された。

炉址：中央に、径約55cmの地床炉を検出。浅い掘り込みを持ち、底面がしっかりと焼けていた。

柱穴：支柱穴と係わる、4基の柱穴を検出した（P6～9）。また、南壁際中央に、1基の土坑が検出され（P1）、その北側に4基の柱穴が1列に並ぶ（P2～5）。

備考：焼失住居。

第1474号住居址 S B1474 (第41・42図)

位置：②-4 IVS-12,17

形態・規模：I A 6.3×5.35m 床面積 29.97m²

主軸の方向：N35W

新旧関係：S D273を切る。

出土状況：土器は、壺、甕2点がほぼ床面直上で出土した。その他は、床面から若干浮いた位置での出土だが、床面直上から堆積する炭化物、灰の範囲内に収まる。石器は、両方の壁短辺付近に集中する傾向を見せ、大型蛤刃石斧の素材および未製品C3類、石杵、扁平片刃石斧、小形の柱状片刃石斧未製品E2類、敲石などが出土している。

床面：ほぼ全面が堅緻で、良く締まっている。床面直上には、焼土、炭化物が分布し、炭化材は中央に向かって倒れた状態で検出された。また、幅40cm、深さ10cmの周溝が壁際の全周に途切れなく認められるが、住居の掘り方を含めて掘り下げた可能性がある。

炉址：ほぼ中央に、長径約55cm、短径約37cmの地床炉を検出。浅い掘り込みを持つ。

柱穴：4基の支柱穴が長方形に配置され（P1～4）、中心軸上に1基ずつの支柱穴が確認された。

また、P 6 下方の南壁際中央に 1 基の土坑が検出された (P 8)。P 1、2、4、6、7 には、柱根が残存する。

備 考：焼失住居。

第1478号住居址 S B 1478 (第42図)

位 置：②- 4 IVN-25

形態・規模：不明 (5.2) × (2.4) m 床面積 (9.25) m²

主軸の方向：不明

新旧関係：S B 1483を切る。

出土状況：高坏は床面直上から、甕は床からやや浮いた位置で出土した。

床 面：特に、堅緻な部分は認められず、全体に軟弱。炭化物が全面に広がり、炭化材は中央に向かって倒れた状態で検出された。

炉 址：検出されなかった。調査範囲外に、存在すると思われる。

柱 穴：2基が検出されたが (P 1、2)、全体の配置は不明。

備 考：焼失住居。

第1482号住居址 S B 1482 (第43・44図)

位 置：②- 4 IVN-23,24、IV S-03,04

形態・規模：I C 6.25 × 3.7 m 床面積 26.93 m²

主軸の方向：N48E

新旧関係：S B 1484、S K 14708、14726に切られる。

出土状況：土器は、東壁を除いた壁際付近で出土する傾向があり、床面直上から壺、甕、高坏、鉢等が出土した。また、覆土出土の土器片も多い。石器は磨製石斧製作関連資料が多量に出土した。太型蛤刃石斧未製品 B 類・C1・C2・C3類・D 類・扁平片刃未製品 A 類・B 類・E2 類・E3類、石杵、石戈、敲石、磨石などが出土した。

床 面：ほぼ全面が堅緻で良く強く締まるが、壁際は硬化面がなく軟弱である。

炉 址：ほぼ中央に、長径約65cm、短径約50cmの地床炉を検出。炉周辺に、炭が分布する。

柱 穴：4基の支柱穴が、長方形に配置され (P 1、4、5、7)、中心軸上に1基ずつの支柱穴が認められる (P 3、6)。また、P 1とP 3のライン上に、P 2が存在する。

第1483号住居址 S B 1483 (第45図)

位 置：②- 4 IVN-24,25、IV S-04

形態・規模：不明 (5.7) × (2.8) m 床面積 (11.94) m²

主軸の方向：不明

新旧関係：S B 1478、S K 14708に切られる。

出土状況：床面直上から壺・鉢・甕等が破片で、また、紡錘車が1点出土。太型蛤刃石斧未製品 C3 類・D 類、扁平片刃石斧未製品 D 類、磨製石斧製作関連の剥片類、石製指環等が出土した。

床 面：特に堅緻な部分は認められない。コーナー付近を除いて不明確または軟弱。

炉 址：焼土の集中は認められるが、炉址になるか不明。

柱 穴：検出されなかった。

第1484号住居址 S B 1484 (第46・47図)

位置：②-4 IVS-03,04

形態・規模：I B 5.35×4.25m 床面積 19.36㎡

主軸の方向：EW

新旧関係：S B 1482を切る。

出土状況：遺物の出土量は少ない。床面直上で、壺が出土した他は破片の状態で、覆土中からの出土である。石器は、土器の出土量より圧倒的に多く、住居内のほぼ全体に分布し、床面直上～覆土上部の位置で出土した。磨製石斧製作の素材、太型蛤刃石斧未製品C2類、D類、扁平片刃石斧およびその未製品E1類、磨製石斧製作関連の剥片類、敲石、磨製石包丁、磨製石鏃未製品などが出土した。

床面：堅緻な部分や貼り床は認められず、軟弱。全面に、炭化物が分布し、炭化材は中央に向かって倒れた状態で検出された。

炉址：検出されなかった。

柱穴：4基の支柱穴が、長方形に配置されるが(P1、3、5、7)、P3～5およびP1～7のライン上に、P4とP8、9がそれぞれ存在する。また、中心軸上に、1基ずつの支柱穴が見られ(P2、6)、更にP5の左方にP10が検出されている。

備考：焼失住居。

第1488号住居址 S B 1488 (第47図)

位置：②-4 IVS-07,12

形態・規模：II 径5.4m 床面積 21.42㎡

主軸の方向：不明

新旧関係：S K 14684, 14728, 14741、S D 277, 278に切られる。

出土状況：全体的に、遺物の出土量は少ない。土器は小破片の状態で、東西の壁付近に分布するが、床面直上のものはなく、覆土中からの出土である。

床面：堅緻な部分や貼り床は認められず、全体的に軟弱。東壁際では、床面直上に炭化物が堆積する部分が認められる。

炉址：検出されなかった。

柱穴：3基の支柱穴が確認されたが(P1～3)、全体の配置は不明。

3 平地式住居址**第1481号住居址 S B 1481 (第48図)**

位置：②-4 IVS-11,16

形態・規模：II 径6.8m 床面積 (34.96)㎡

主軸の方向：不明

新旧関係：S B 457に切られる。

出土状況：住居の敷地内と想定される周溝の内側より出土した遺物を、本住居址出土の遺物と認定したが、出土量は少なく土器の小破片が若干出土したにすぎない。

床面：特に、堅緻な部分は認められなかった。

炉 址：中央のやや北側で、長径72cm、短径45cmの地床炉を検出。約10cmの掘り込みを持つ。
柱 穴：5基の支柱穴が検出された（P1～5）。攪乱の範囲にもう1基の支柱穴が存在すると思われ、全体で多角形の柱穴配置が想定される。P1、3、4には、板柱の柱根が残存。

4 溝址

第57号溝址 SD57 (第14図)

位 置：③-4、5 VIU-19~24、VIV-14~19、IXE-05、XA-01
形態・規模：全長87m、幅40~180cm、深さ25~45cm、断面形態はV字~すり鉢状。
新旧関係：NR1に切られる。
出土状況：覆土から、土器の小破片が若干出土。
備 考：SD92あるいはSD94の続きと思われるが、接点が攪乱を受けて不明。

第59号溝址 SD59 (第13図)

位 置：③-3、4 VIV-20、VIW-11~13
形態・規模：全長25.5m、幅100cm、深さ30cm、断面形態はV字状。
新旧関係：SD81を切る。
出土状況：覆土から、土器の小破片が若干出土。
備 考：SD97あるいはSD98と繋がる可能性がある。

第81号溝址 SD81 (第13図)

位 置：③-3 VIR-04~25、VIS-06~21、VIV-20,25、VIW-04~13
規模・形態：全長100m、幅55~90cm（平均80cm）、深さ30~55cm、断面形態はV字~すり鉢状。
新旧関係：SD59に切られる。
出土状況：覆土から、土器の小破片及び石器がわずかに出土。
備 考：SB156~161の住居群を囲む、環濠溝。

第92号溝址 SD92 (第13図)

位 置：③-3 VIR-09,10,15,20,24,25、VIW-03,04,07,08,12
規模・形態：全長80m、幅15~55cm、深さ13~20cm、断面形態は浅いU字状。
新旧関係：なし。
出土状況：覆土から、壺、甕、台付甕が出土したが、量は少ない。
備 考：SD81の内側を、SD94と共に併走する。5ヶ所の断絶が認められる。

第94号溝址 SD94 (第13図)

位 置：③-3 VIR-15,20,24,25、VIW-03,04,07,08,12
規模・形態：全長55m、幅6~15cm、深さ6~10cm、断面形態はU字状。
新旧関係：なし。
出土状況：遺物出土なし。

備考：SD81とSD92の間に位置し、併走する。

第97号溝址 SD97 (第13図)

位置：③-3 VIM-20、VIN-16,17,22,23、VIS-03,08,09,14,19,24

規模・形態：全長70m、幅44~108cm、深さ18~33cm、断面形態は浅いすり鉢状。

新旧関係：SD98と一部が重複するが、関係は不明。

出土状況：遺物出土なし。

備考：SD59と繋がる可能性がある。

第98号溝址 SD98 (第13図)

位置：③-3 VIS-19

規模・形態：全長5.5m、幅32~48cm、深さ11cm、断面形態はV字~すり鉢状。

新旧関係：SD97と一部が重複するものの、関係は不明。

出土状況：遺物出土なし。

第99号溝址 SD99 (第13図)

位置：③-3 VIS-22

規模・形態：全長10m、幅10~22cm、深さ11cm、断面形態はV字~すり鉢状。

新旧関係：なし。

出土状況：遺物出土なし。

備考：全体の形状は、弧状を呈する。

第100号溝址 SD100 (第48図)

位置：③-3 VIS-12,17

形態・規模：全長4.5~5m、幅15~25cm、深さ8cm、断面形態は舟底状。

新旧関係：14基の土坑(SK5552、5545、5546、5547、5548、5549、5550、5551、5553、5554、5587、5588、5589、5592)が、本溝の付属施設でなければ、重複関係にあると思われる。

出土状況：遺物出土なし。

備考：全体の形状が環状を呈し、3ヶ所に断絶が認められる。上記SKと本溝址との関係は不明。平地式住居址とは、柱穴配置、火処の有無等で異なる。

第318号溝址 SD318 (第49図)

位置：②-1A、1B IVW-08,09,10

形態・規模：全長16m、幅70~250cm、深さ38~50cm、断面形態はすり鉢~舟底状。

新旧関係：なし。

出土状況：遺物量が多く、壺、甕、鉢、台付鉢、高坏、ミニチュア土器、石器類が出土した。IVW-10グリッドでは、底面から浮いた状態で拳~人頭大の礫とともに土器が集中して出土するが、IVW-08,09グリッドにかかる部分は、完形個体の土器が存在せず、小破片の状態で出土量も少ない。石器は、磨製石斧製作の素材および剥片類、扁平片刃石斧未製品D類・E1類が出土している。

備 考：②-3～5地区に展開する集落の南限となる溝址か？

5 土坑

第3277号土坑 S K 3277 (第50図)

位 置：②-3A IVN-16

形態・規模：円形 径約200cm、最深部約175cm、断面形態はロート状。

主軸の方向：N73W

新旧関係：なし。

出土状況：多量の遺物が出土した。土器は、壺、甕、台付甕、鉢、有孔鉢、蓋が見られ、個体数の合計は25個体以上を数える。底面および覆土5層の出土土器はなく、覆土3層以上の出土となる。完形または完形に近い状態の土器が多い。石器は、大型蛤刃石斧未製品E1類、扁平片刃石斧およびその未製品B類が出土した。

第5495号土坑 S K 5495 (第50図)

位 置：③-3 VIR-13

形態・規模：不整楕円形 長径160cm、短径120cm、深さ約10cm、断面形態は皿状。

主軸の方向：N65E

新旧関係：なし。

出土状況：南壁際中央に接して、無頸壺および蓋が完形に近い状態で出土した。更に、覆土中より女性の可能性が高い歯を検出しているが、詳細は不明である(第Ⅵ章第7節)。

備 考：墓址の可能性がある。

第5497号土坑 S K 5497 (第50図)

位 置：③-3 VIS-01,02

形態・規模：不整楕円形 長径150cm、短径90cm、最深部の深さ10cm程度、断面形態は皿状。

主軸の方向：N25W

新旧関係：なし。

出土状況：南壁付近の底面直上から、3個体分の壺底部あるいは胴下部～底部が出土した。

第6004号土坑 S K 6004 (第50図)

位 置：③-4 VIV-12

形態・規模：不整楕円形 長径200cm、短径140cm、最深部の深さ約50cm、断面形態はタライ状。

主軸の方向：N53E

新旧関係：なし。

出土状況：土坑内中央部に、底面から浮いた状態で壺、甕、鉢、有孔鉢が出土した。また、壁に沿って、あるいは壁に接して炭化した板材が出土した。

第14706号土坑 S K 14706 (第51図)

位 置：②-4 IVS-03

形態・規模：楕円形 長径176cm、短径160cm、深さ30～35cm、断面形態は舟底状。

主軸の方向：N33W

新旧関係：なし。

出土状況：東壁中央付近より、底面から浮いた状態で甕、高坏等が出土した。

第14711号土坑 SK14711 (第51図)

位置：②-4 IVN-14

形態・規模：楕円形？ 確認された長さは(220)×(200)cm、深さ約15cm、断面形態は浅いタライ状。

主軸の方向：不明

新旧関係：SB1471に切られ、SB1480を切る。

出土状況：遺物は南側に集中するが、北側はSB1471に切られて、あるいは攪乱を受けて不明。底面直上の遺物は僅かで、壺、甕、台付甕、甗が覆土中位の位置で出土した。

第14726号土坑 SK14726 (第51図)

位置：②-4 IVN-23,24

形態・規模：楕円形 長径160cm、短径125cm、深さ約25cm、断面形態は浅いタライ状。

主軸の方向：N25W

新旧関係：SB1482を切る。

出土状況：覆土全体から、土器の破片が少量出土した。石器は、底面から太型蛤刃石斧未製品C3類が出土した。

第14770号土坑 SK14770 (第51図)

位置：②-3A IVR-20

形態・規模：方形又は長方形？ 確認された長さは160cm×(70)cm、深さ20cm、断面形態は浅いタライ状。

主軸の方向：不明

新旧関係：なし。

出土状況：土器は、破片の状態で、覆土中～上位の位置で出土している。石器も同様に、覆土中～上位の出土であり、太型蛤刃石斧未製品A類・C3類が出土した。

6 掘立柱建物址

第210号掘立柱建物址 ST210 (第52図)

位置：②-4 IVS-16,17,21

形態・規模：桁行3間×梁行1間 4.8×2.8m 面積13.44㎡

桁行の柱間距離は平均1.7mで、柱穴の形状は円形を呈し、P3には柱痕が認められた。

主軸の方向：N59E

新旧関係：不明

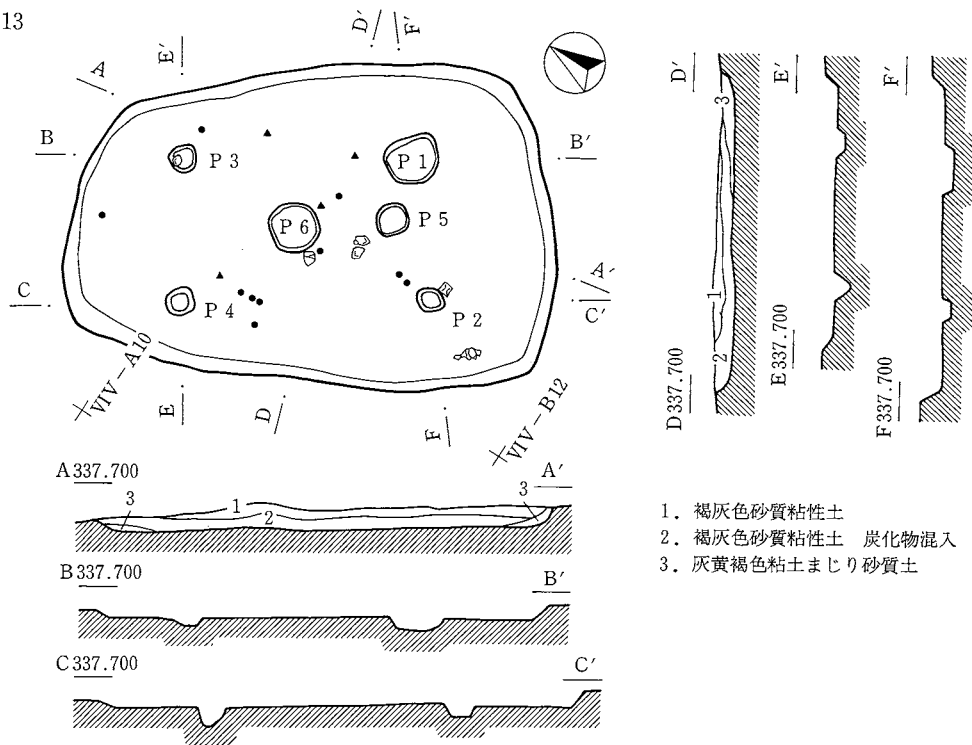
出土状況：遺物出土なし。

第三章 調査成果

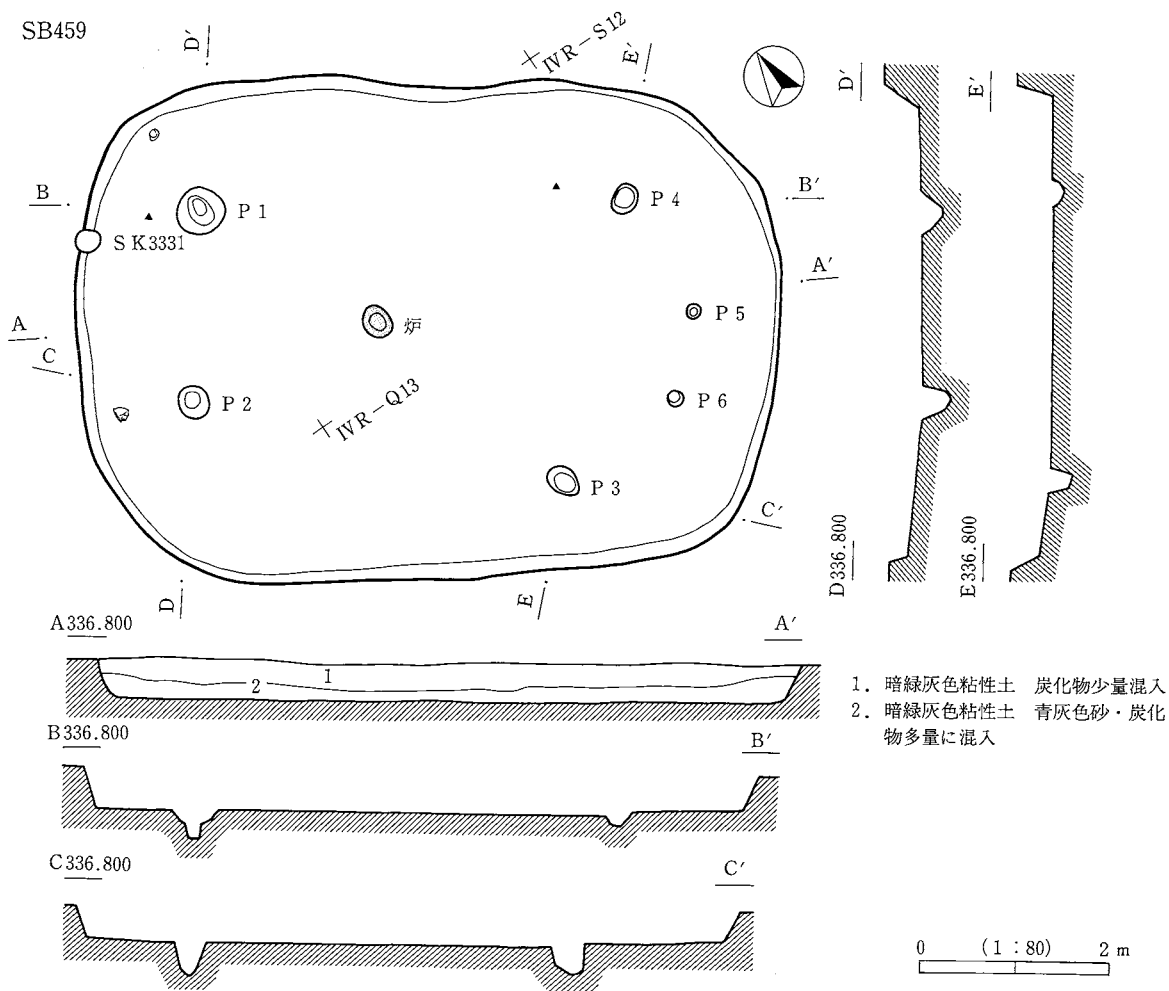
第1表 弥生時代中期遺構観察表(備考:弥生時代後期以降の観察表に準ずる。図版番号:個別遺構図または全体図番号を示す。)

遺構番号	グリッド	調査区	主軸方向	主軸	直交軸	面積	床標高	形態	炉位置	切る	切られる	備考	図版番号
SB113	VIV11	③-4	N36W	4.9	3.1	13.7	337.3	I B					28
SB156	VIR24	③-3	N30E	3.65	2.8	8.34	337.4	I C					13
SB157	VIR14	③-3	N13E	5.8	4.4	23.46	337.24	I A	中央北寄り			3	29
SB158	VIW3	③-3	N23E	4.3	2.95	(10.61)	337.5	I C				3	30
SB159	VIW2	③-3	N23W	3.95	3.05	9.26	337.4	I B				3	13
SB160	VIR18	③-3	N58W	4.65	2.9	10.27	337.47			SB161			30
SB161	VIR18	③-3	N12E	5.65	3.5	(10.53)	337.48				SB160		30
SB440	IVN11	②-3 A	N43W	(3.8)	4.75	(14.9)	336.3		ほぼ中央?			3,11,12	9
SB441	IVN17	②-3 A	N34E	7.05	4.75	(26.76)	336.3	I B					9
SB442	IVN14	②-3 A		7.2	(2.5)	(14.16)	336.2	I C			SB1471	3	9
SB443	IVN23	②-3 A	N50W	(4.5)	4.6	(12.54)	336.1		ほぼ中央?				9
SB444	IVN12	②-3 A					336.35						9
SB445	IVN21	②-3 A	N59W	6.25	4.25	(21.7)	336.3	I C	ほぼ中央			3,5	9
SB451	IVM25	②-4				(13.99)	336.6						9
SB452	IVM25	②-4				(14.29)	336.6						9
SB453	IVR5	②-4		(1.0)	(3.6)	(2.64)	336.4						9
SB454	IVR5	②-4		(4.4)	(2.7)	(9.87)	336.6					5	9
SB456	IVR9	②-4	N68E	6.2	4.5	(20.33)	336.3		ほぼ中央				9
SB457	IVR15	②-3 A	N74W	7.3	5.6	(37.92)	336.2	I A		SB1481		3	31
SB458	IVR14	②-3 A	N74W	6.0	4.95	(28.17)	336.3	I A					32
SB459	IVR15	②-3 A	N60W	7.35	4.95	33.5	336.2	I A	ほぼ中央			3,5	28
SB460	IVS1	②-3 A	N59W	(6.8)	(3.3)	(21.08)	336.3	I B?	ほぼ中央?				32
SB461	IVN22	②-3 A					336.3						9
SB837	I VO6	②-5	N66W	(5.3)	5.2	(20.86)	336.1	II	中央北寄り	SB838 SD225		3,5,12	33
SB838	I VO11	②-5		(1.8)	(5.1)	(7.51)	336.1				SB837	3	34
SB840	I VO6	②-5		(6.9)	(3.7)	(17.05)	336.1						9
SB841	I VO1	②-5		(1.3)	(4.0)	(5.49)	336.3						9
SB1468	IVN24	②-4	N52E	5.45	4.15	18.67	336.1	I C	ほぼ中央	SB1470		3,5	35
SB1469	IVN19	②-4	N24E	6.7	3.85	(21.62)	336.2	I B	中央北寄り			3	36
SB1470	IVN24	②-4	N55W	(2.5)	(4.5)	(10.81)	336.2		ほぼ中央?		SB1468,1482	3	38
SB1471	IVN14	②-4	N30W	(1.7)	(3.8)	(4.31)	336.2			SB442,1480 SK14711		3	39
SB1473	IVS7	②-4	N38W	6.65	4.95	(28.83)	336.0	I B	ほぼ中央			3	39
SB1474	IVS17	②-4	N35W	6.3	5.35	29.97	336.1	I A	ほぼ中央	SD273		3,5	41
SB1478	IVN25	②-4		(5.2)	(2.4)	(9.25)	336.1			SB1483		3	42
SB1480	IVN14	②-4				(0.89)	336.2				SB1471, SK14711		9
SB1481	IVS16	②-4		6.8		(34.96)	336.2	II	中央北寄り		SB457		48
SB1482	IVN23	②-4	N48E	6.25	3.7	26.93	336.2	I C	ほぼ中央	SB1470	SB1484 SK14708,14726	3	43
SB1483	IVN24	②-4		(5.7)	(2.8)	(11.94)	336.1				SB1478, SK14708	3,5	45
SB1484	IVS3	②-4	EW	5.35	4.25	19.36	336.1	I B		SB1482		3,5	46
SB1485	IVS4	②-4					336.1						9
SB1487	IVS4	②-4				(2.64)	336.1						9
SB1488	IVS12	②-4		5.4		21.42	336.0	II			SK14684 SD277他	3	47
SB1681	IVW9	②-1 B	N52W	(3.4)	(2.3)		336.2					3	10
SD57	VIU23	③-5									NR1		14
SD59	VIW12	③-3								SD81			13
SD81	VIS21	③-3									SD59		13
SD92	VIR10	③-3											13
SD94	VIR15	③-3											13
SD97	VIS9	③-3											13
SD98	VIS19	③-3											13
SD99	VIS22	③-3											13
SD100	VIS17	③-3											48
SD318	IVW9	②-1 A・B										3	49
SK3277	IVN16	②-3 A	N73W	2.0								3,12	50
SK5495	VIR13	③-3	N65E	1.6	1.2								50
SK5497	VIS1	③-3	N25W	1.5	0.9								50
SK6004	VIV12	③-4	N53E	2.0	1.4								50
SK14706	IVS3	②-4	N33W	1.76	1.6							3	51
SK14708	IVN24	②-4	N49W	2.3	0.7					SB1482,1483		3	9
SK14711	IVN14	②-4		(2.2)	(2.0)					SB1480	SB1471	3	51
SK14726	IVN23	②-4	N25W	1.6	1.25					SB1482		3	51
SK14770	IVR20	②-3 A		1.6	(0.7)							3	51
ST210	IVS16	②-4	N59E	4.8	2.8	13.44							52

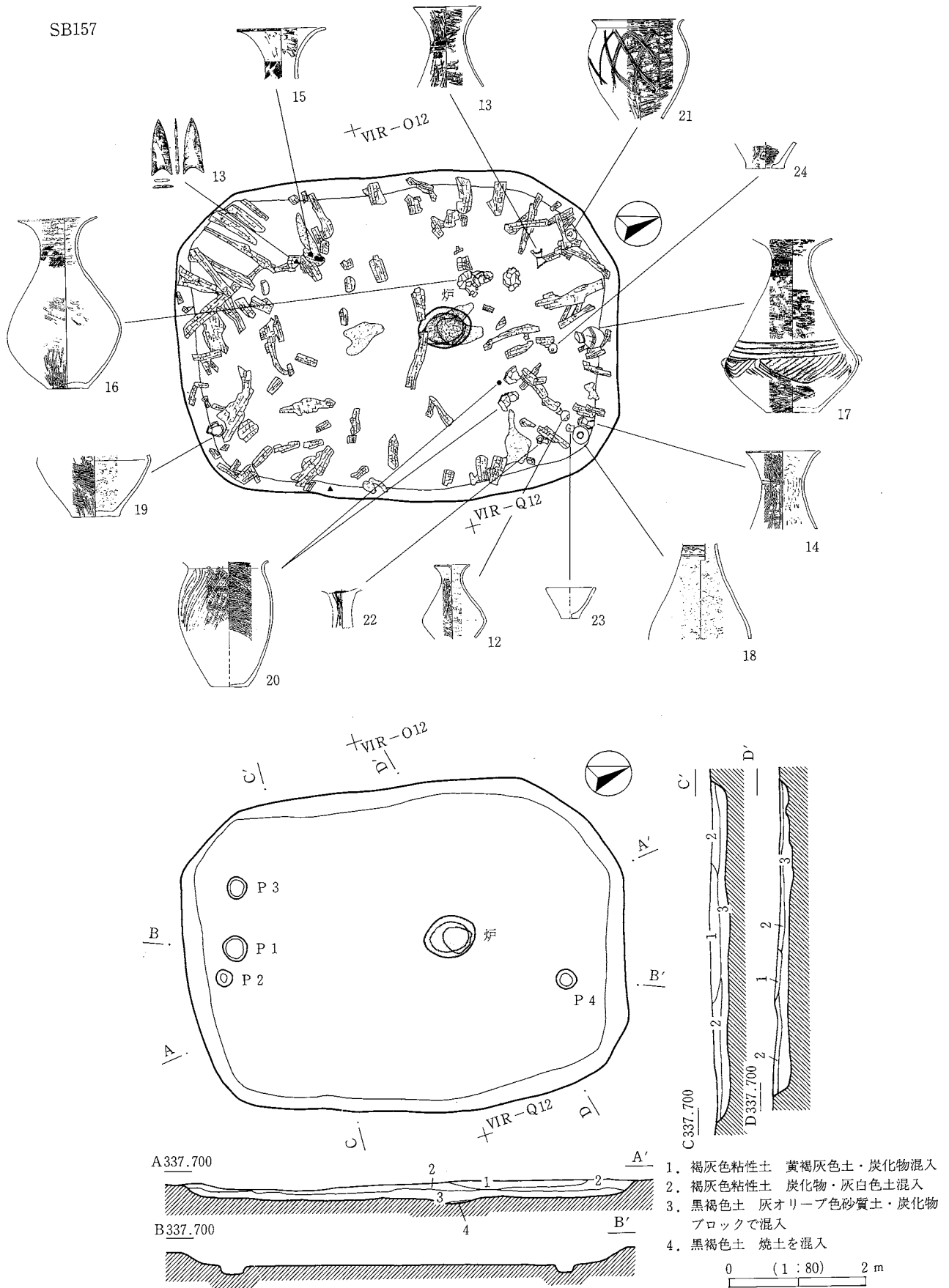
SB113



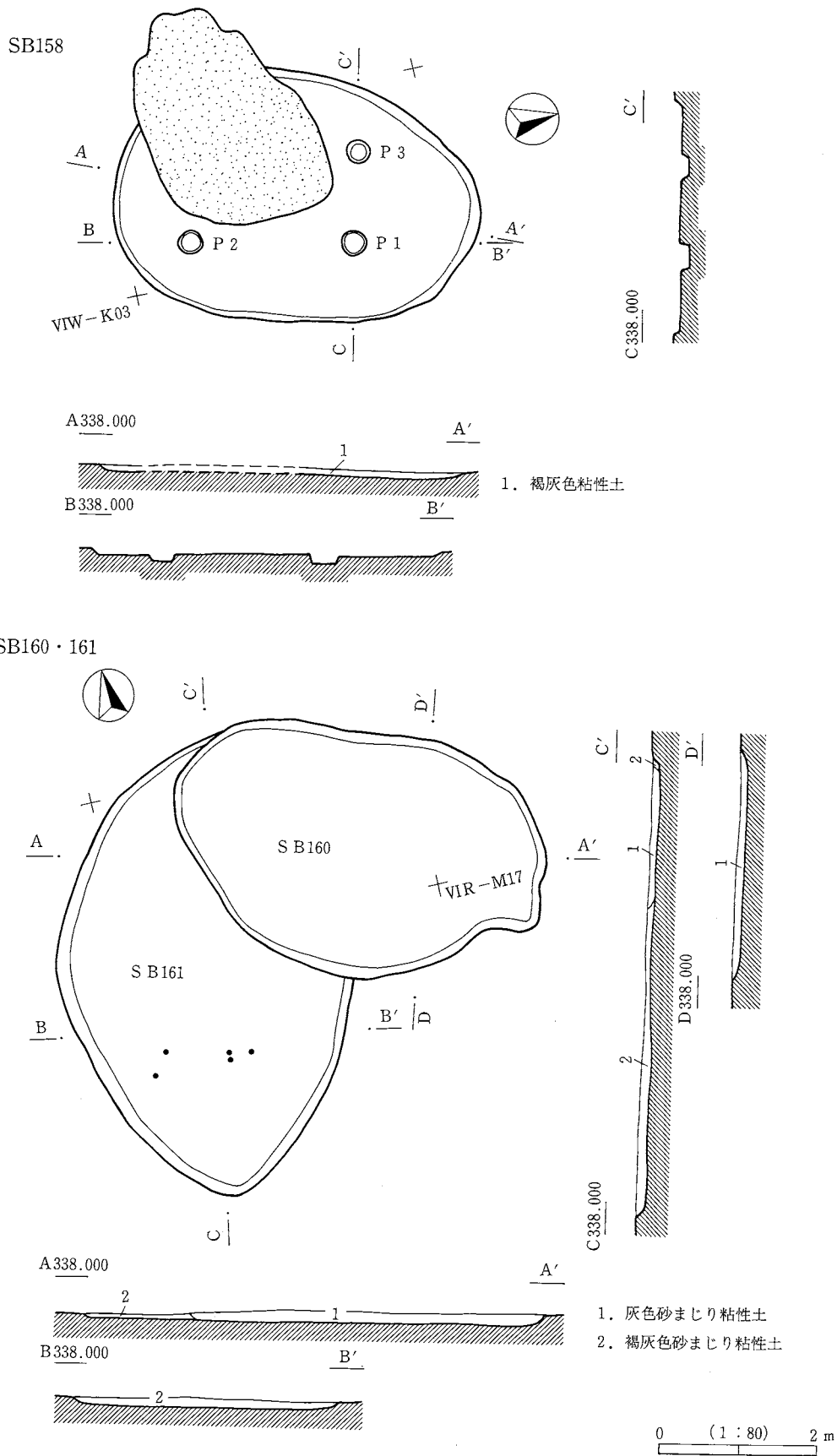
SB459



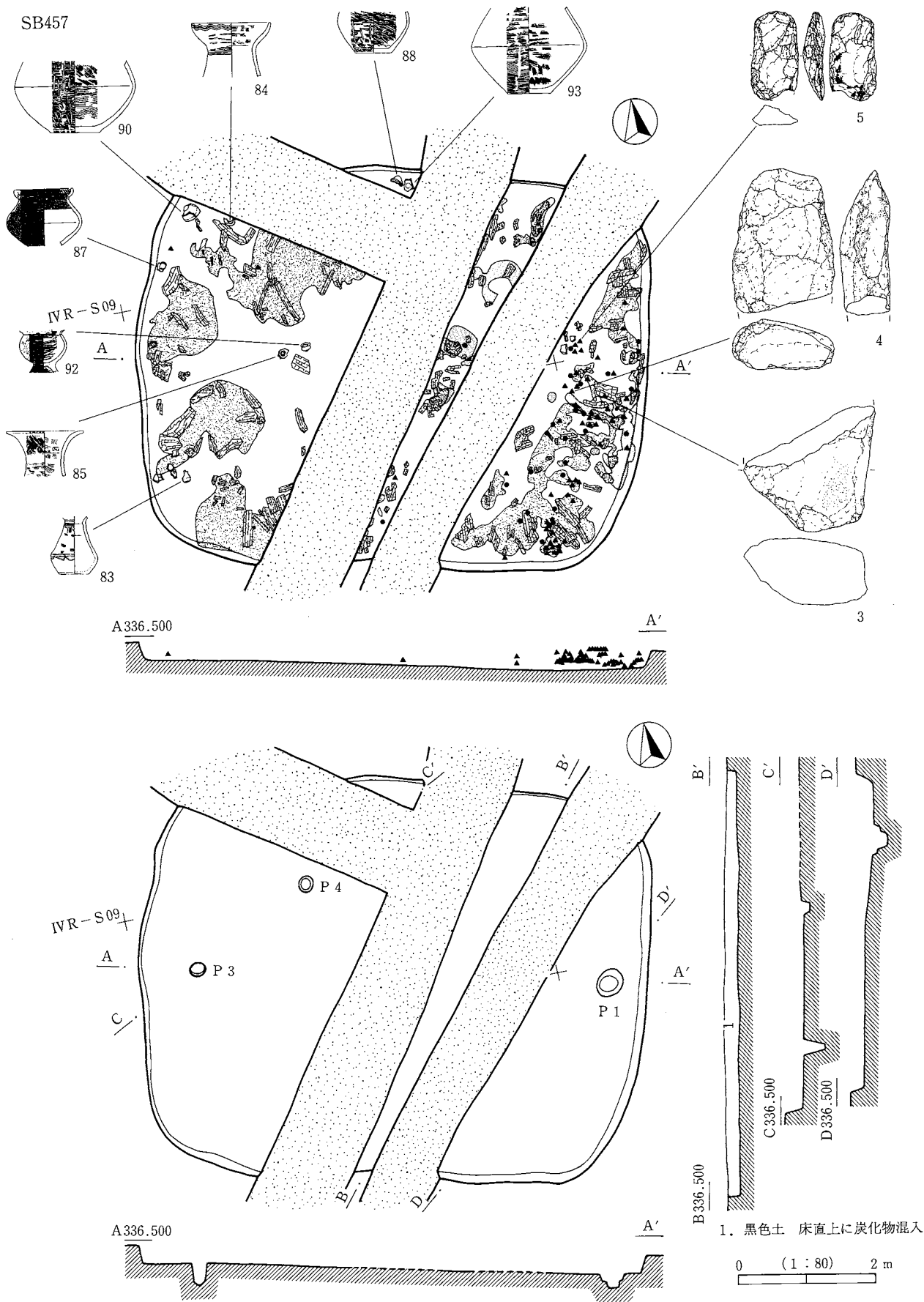
第28図 SB113・459実測図



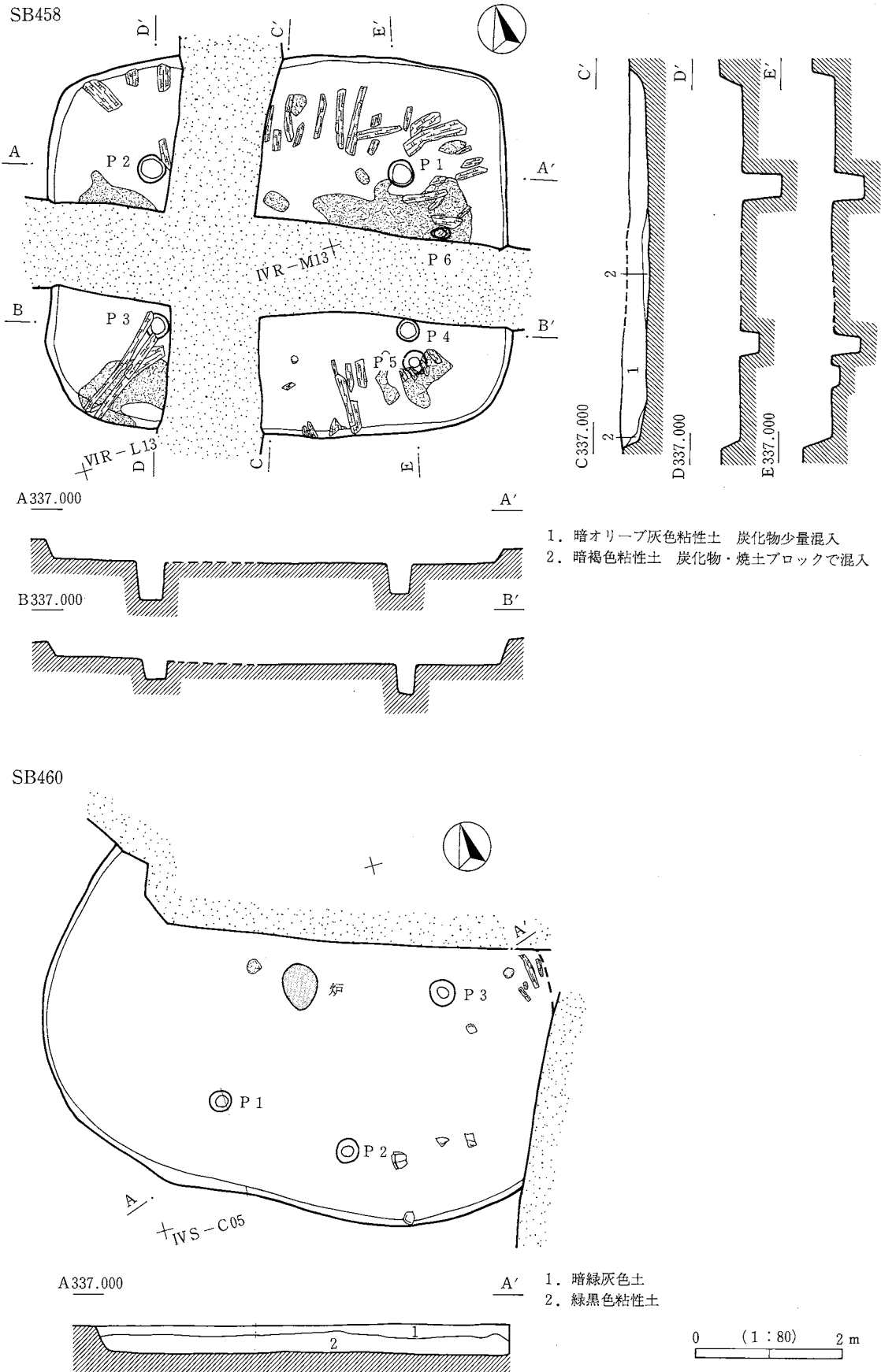
第29図 SB157実測図



第30図 SB158・160・161実測図

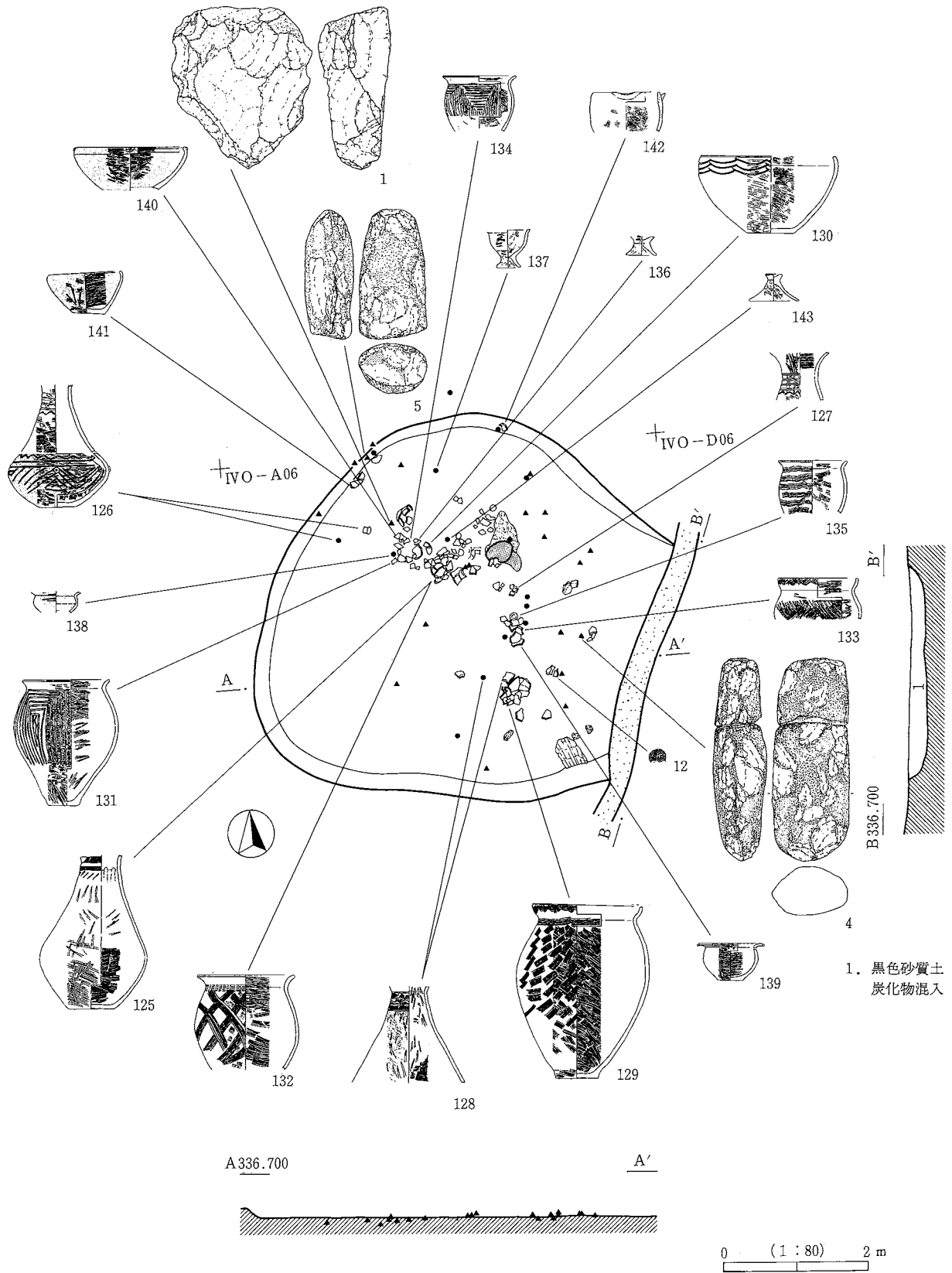


第31図 SB457実測図

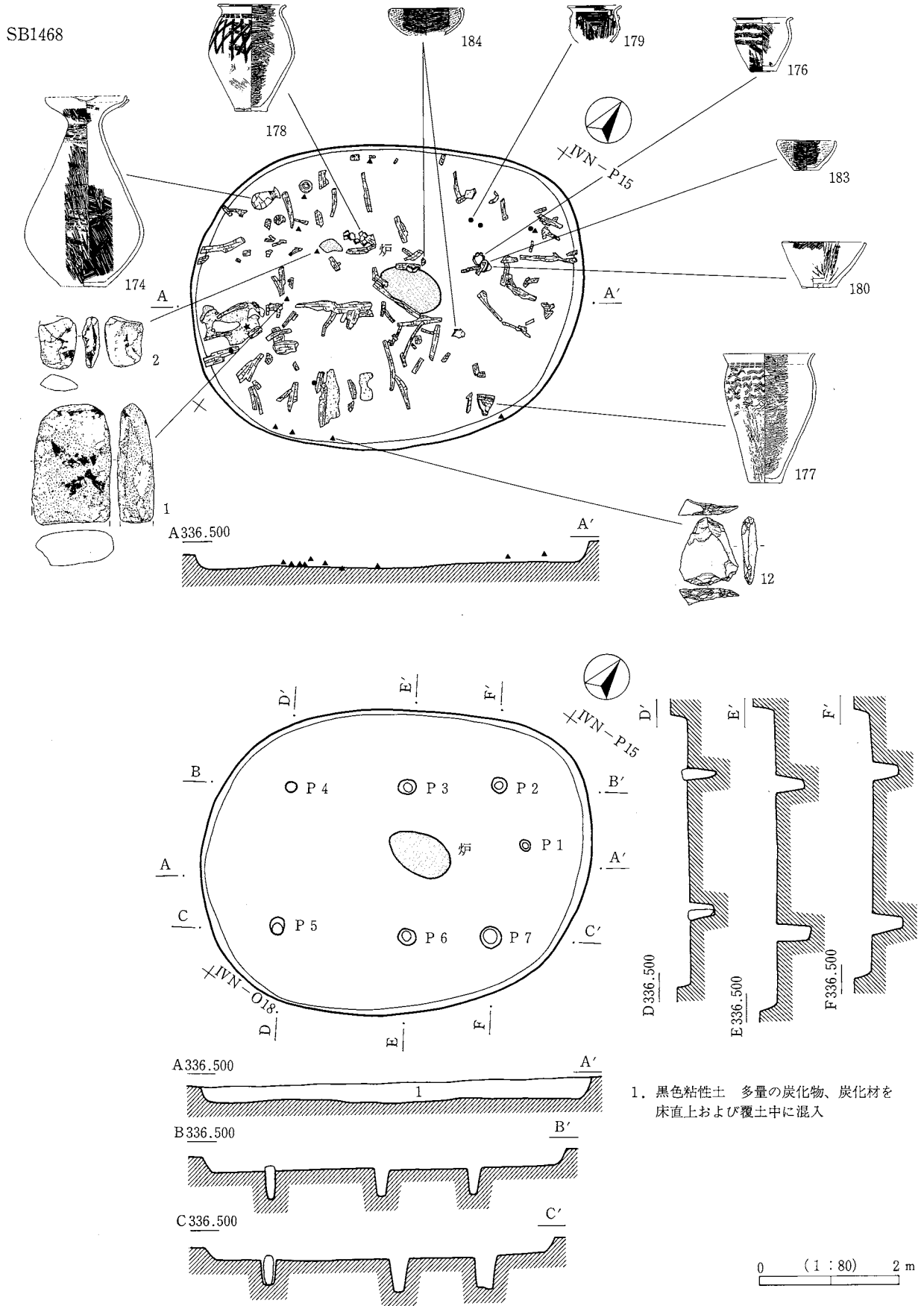


第32図 SB458・460実測図

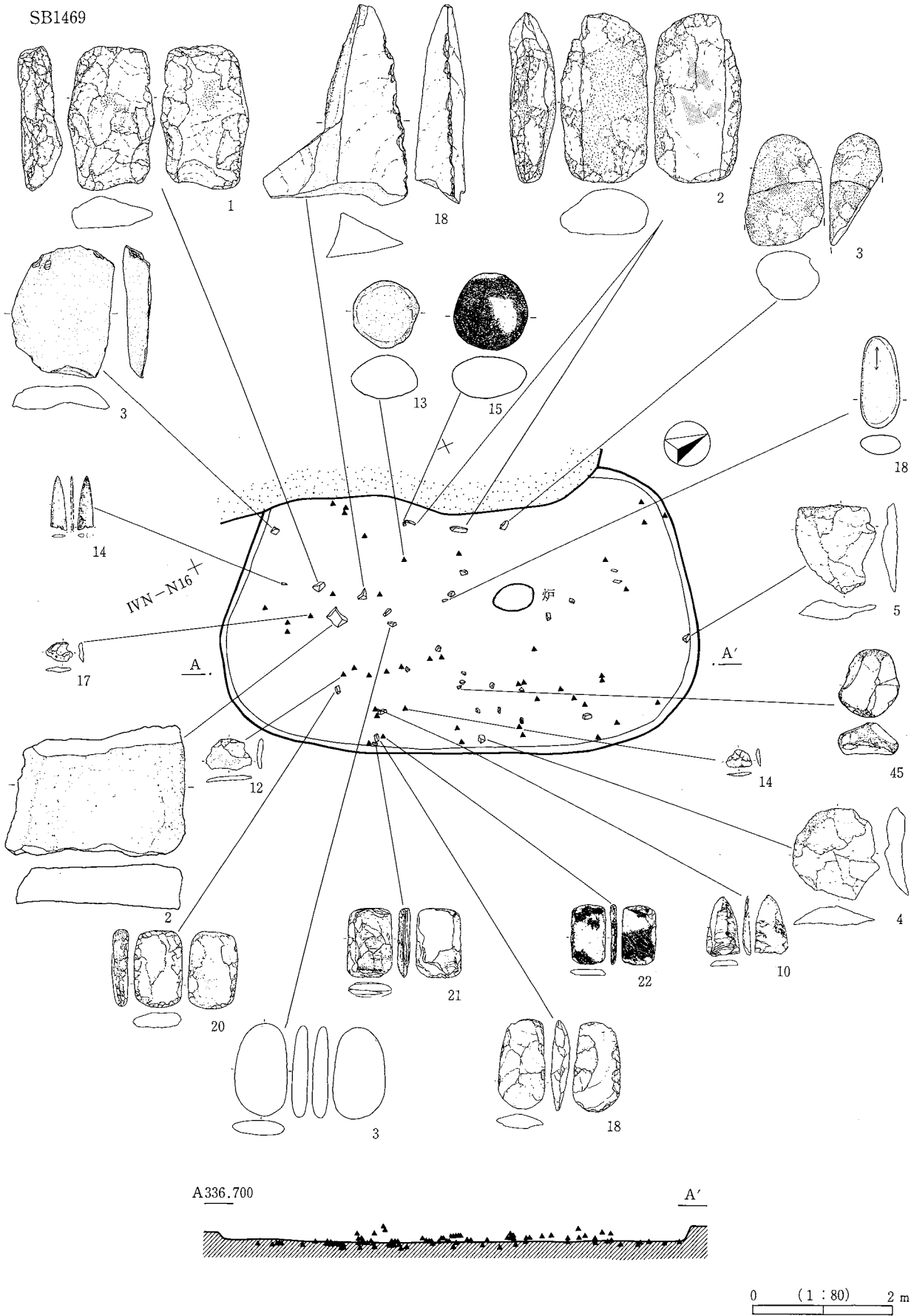
SB837



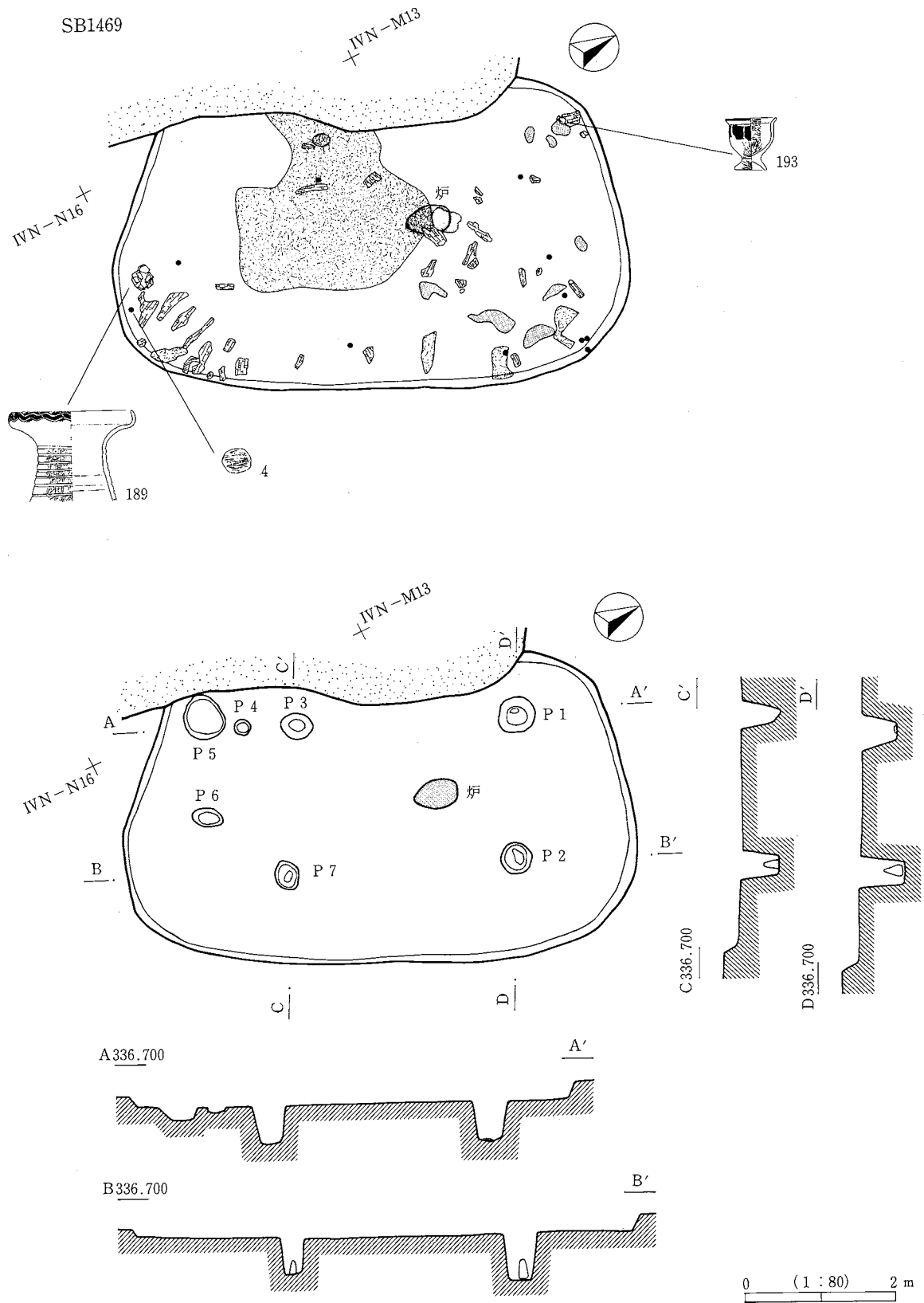
第33図 SB837実測図



第35図 SB1468実測図

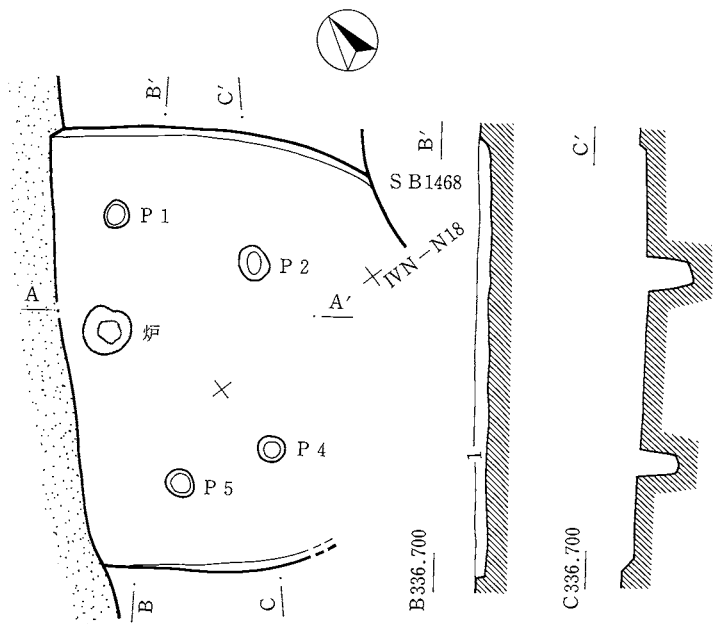
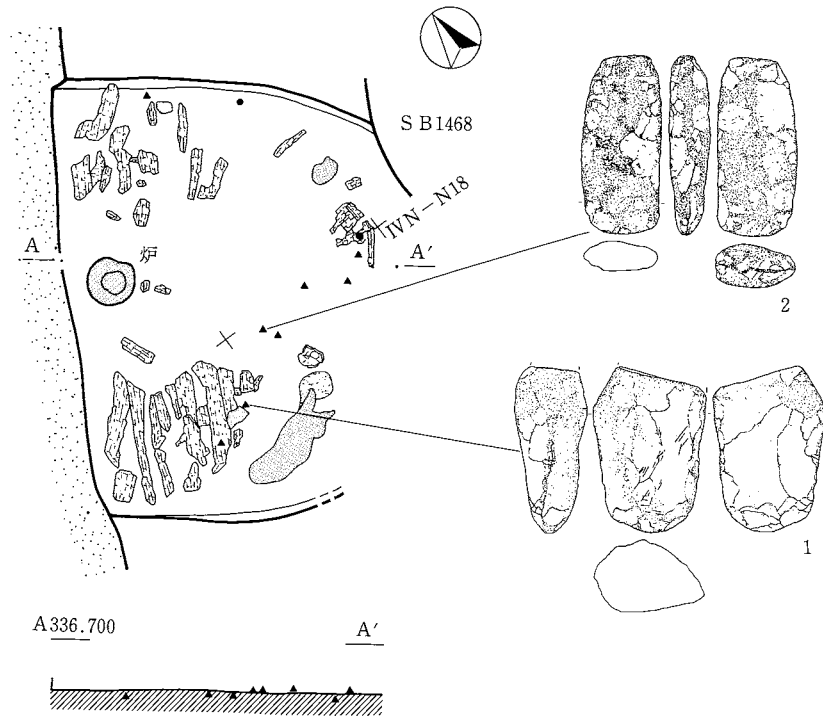


第36図 SB1469遺物出土状況図



第37図 SB1469実測図

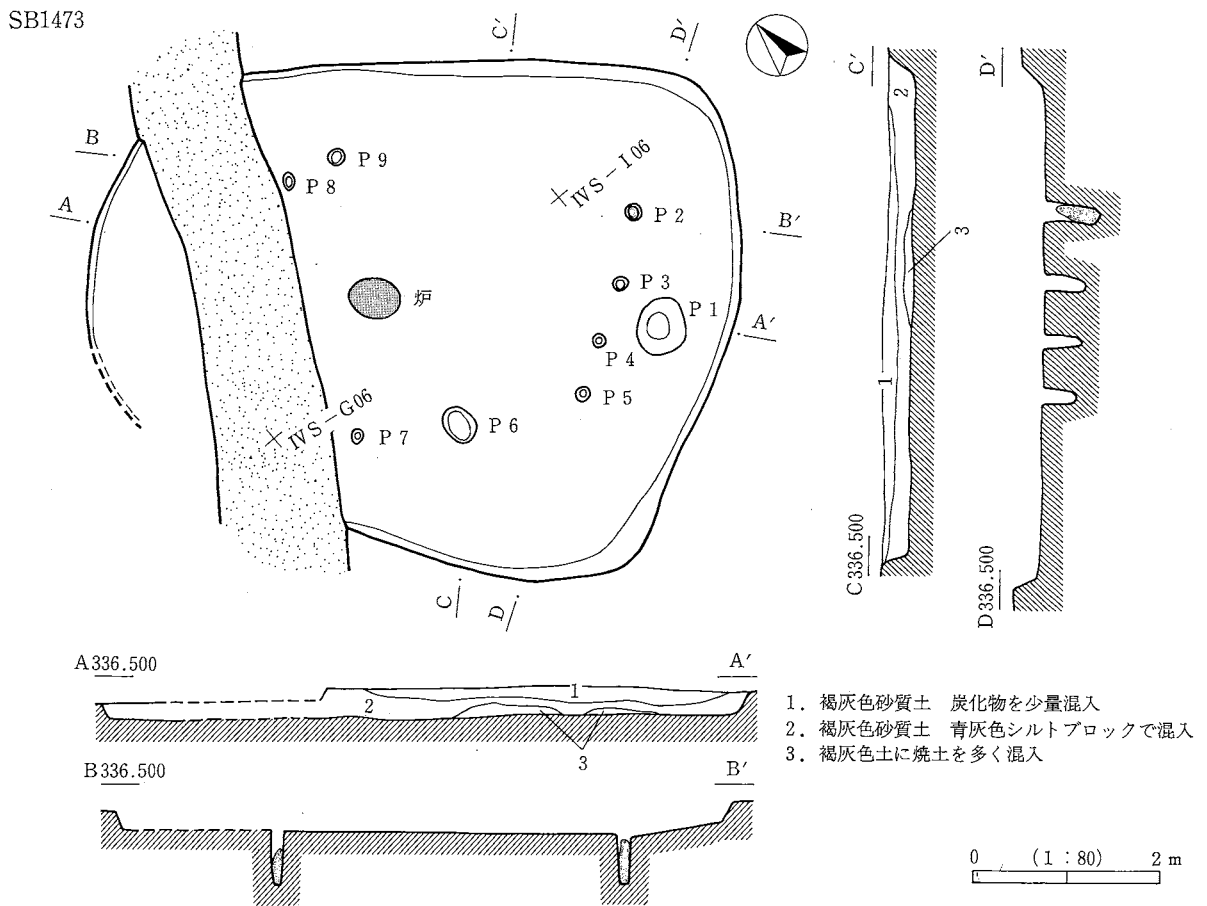
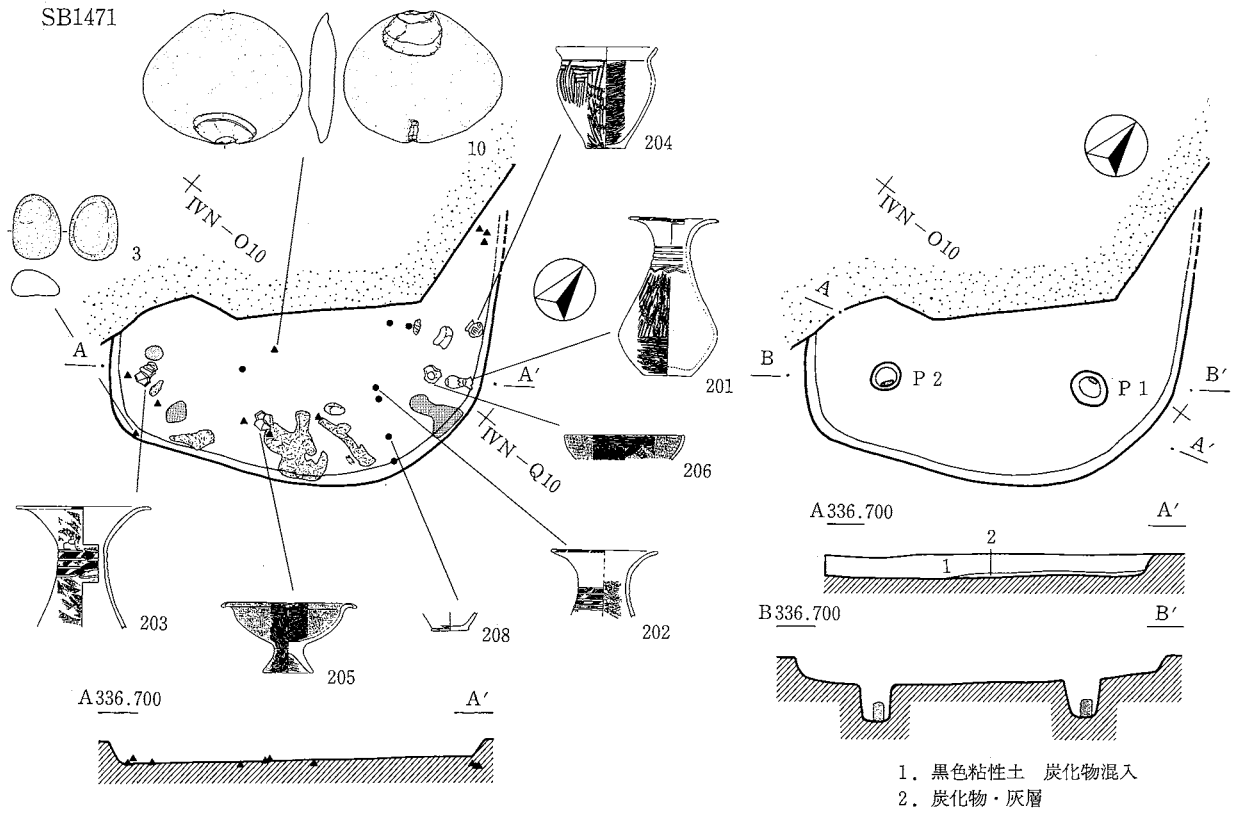
SB1470



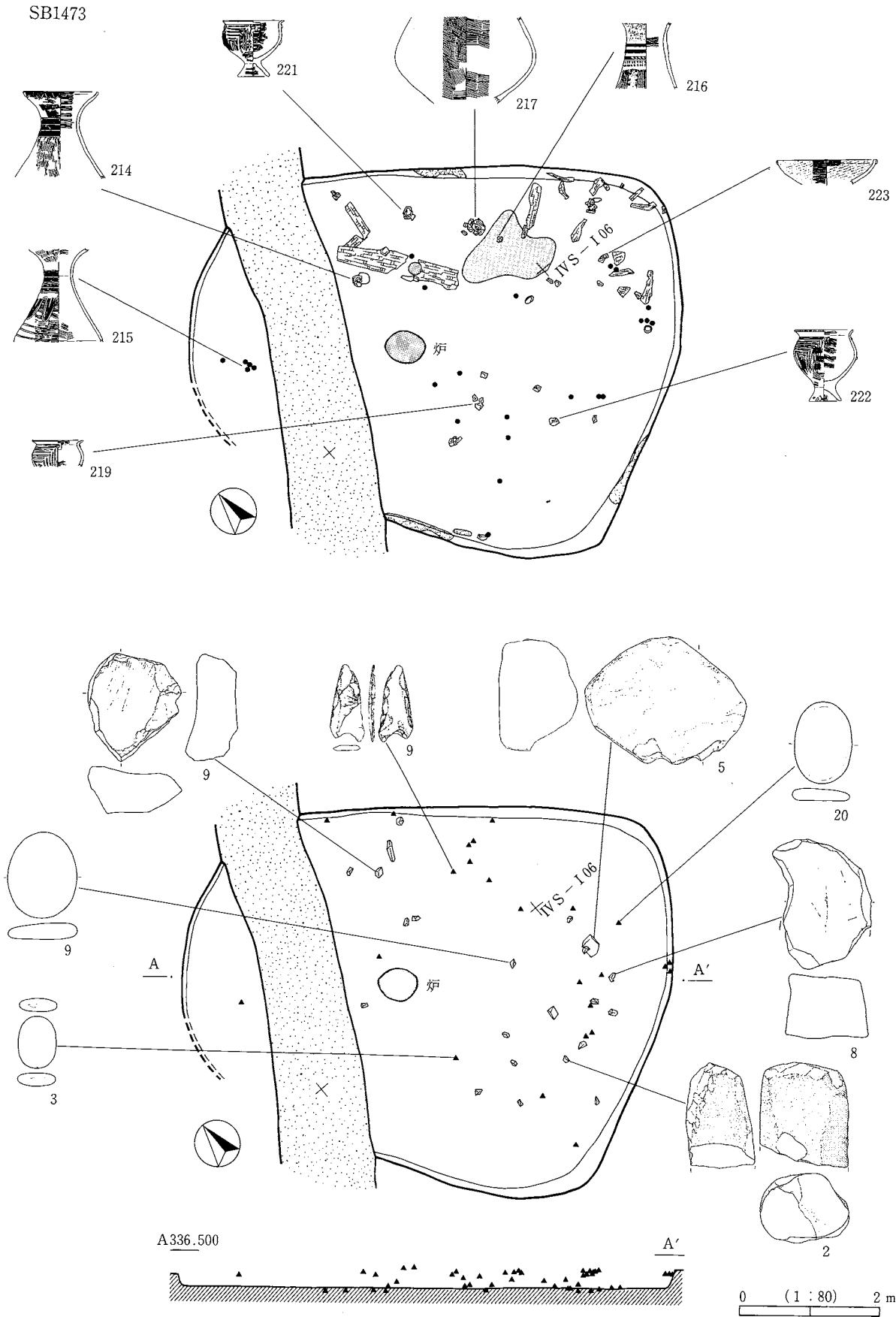
1. 黒色シルト 炭化物・焼土を混入
床直上に炭化材・炭化物多量に混入

0 (1:80) 2 m

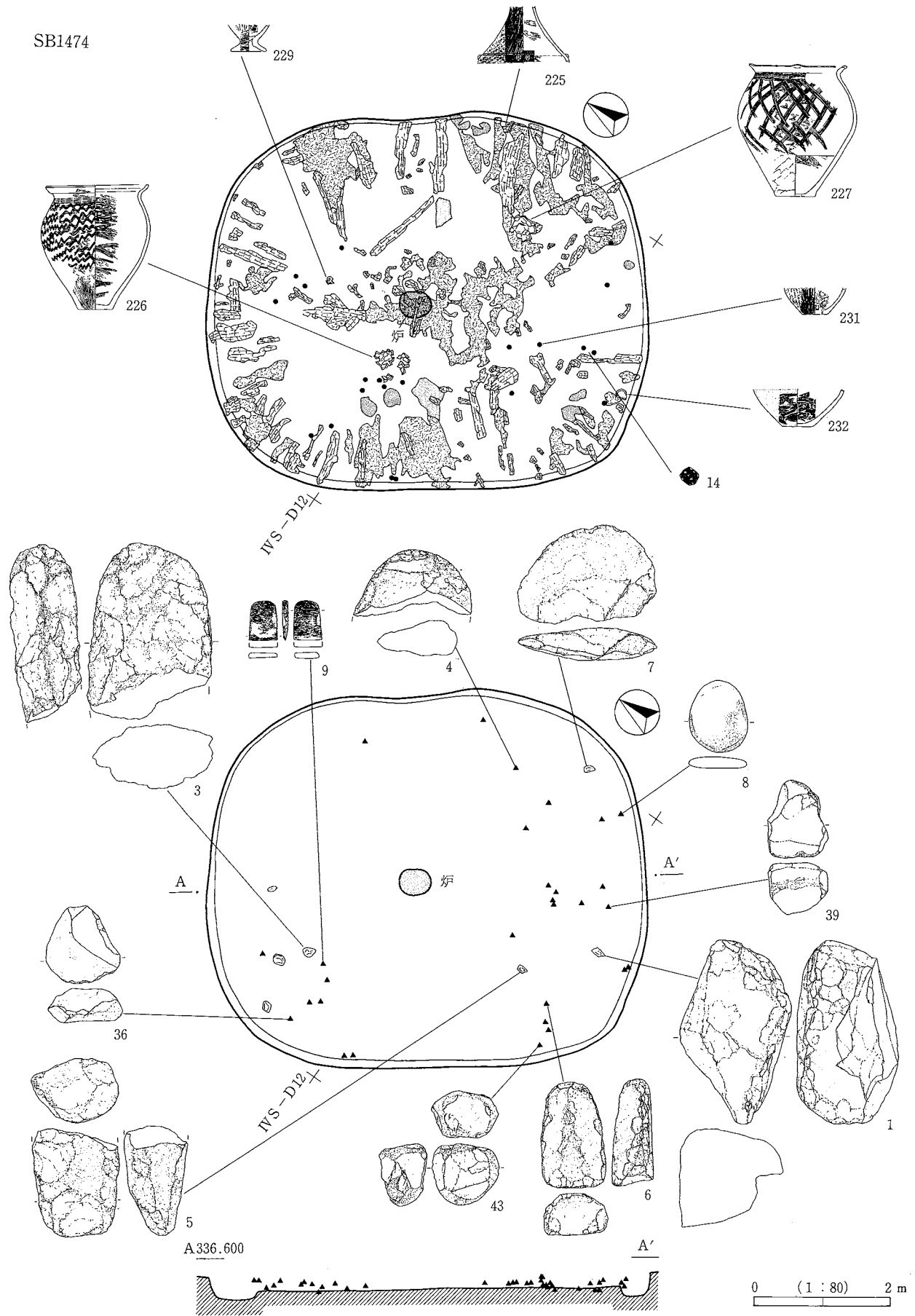
第38図 SB1470実測図



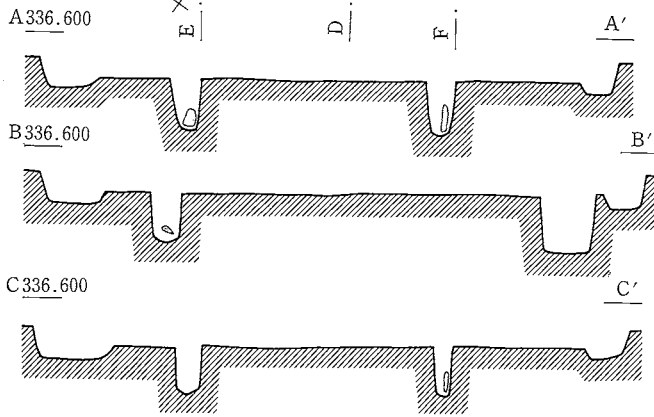
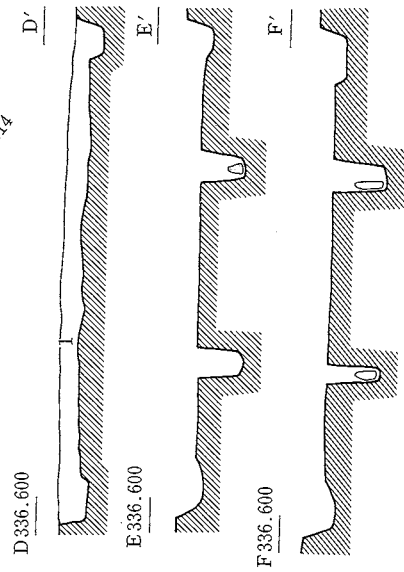
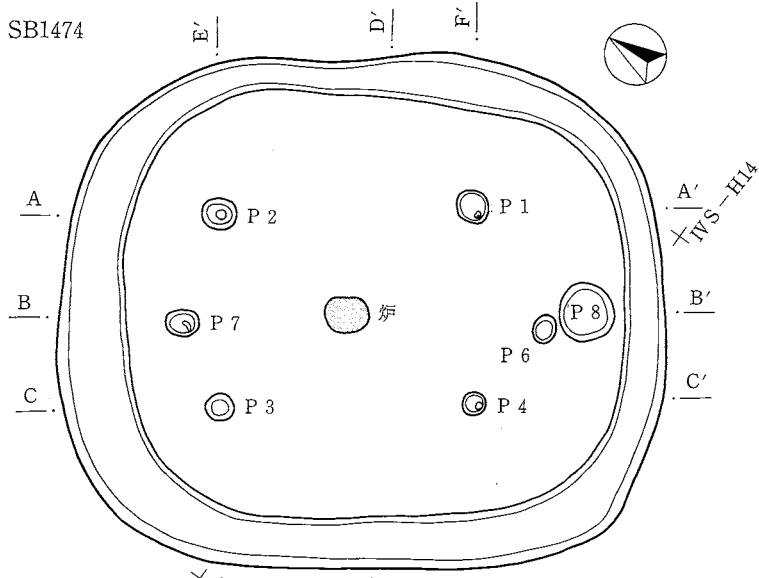
第39図 SB1471・1473実測図



第40図 SB1473遺物出土状況図

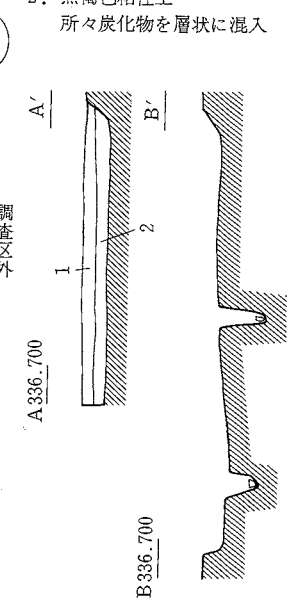
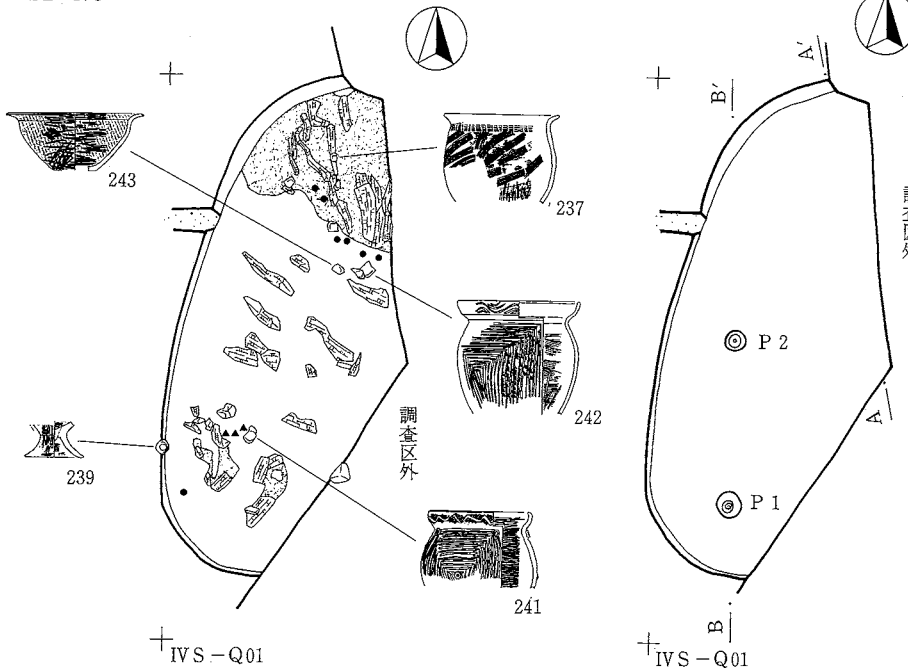


第41図 SB1474遺物出土状況図



1. オリーブ黒色シルト
床直上に炭化物・炭化材多量に混入

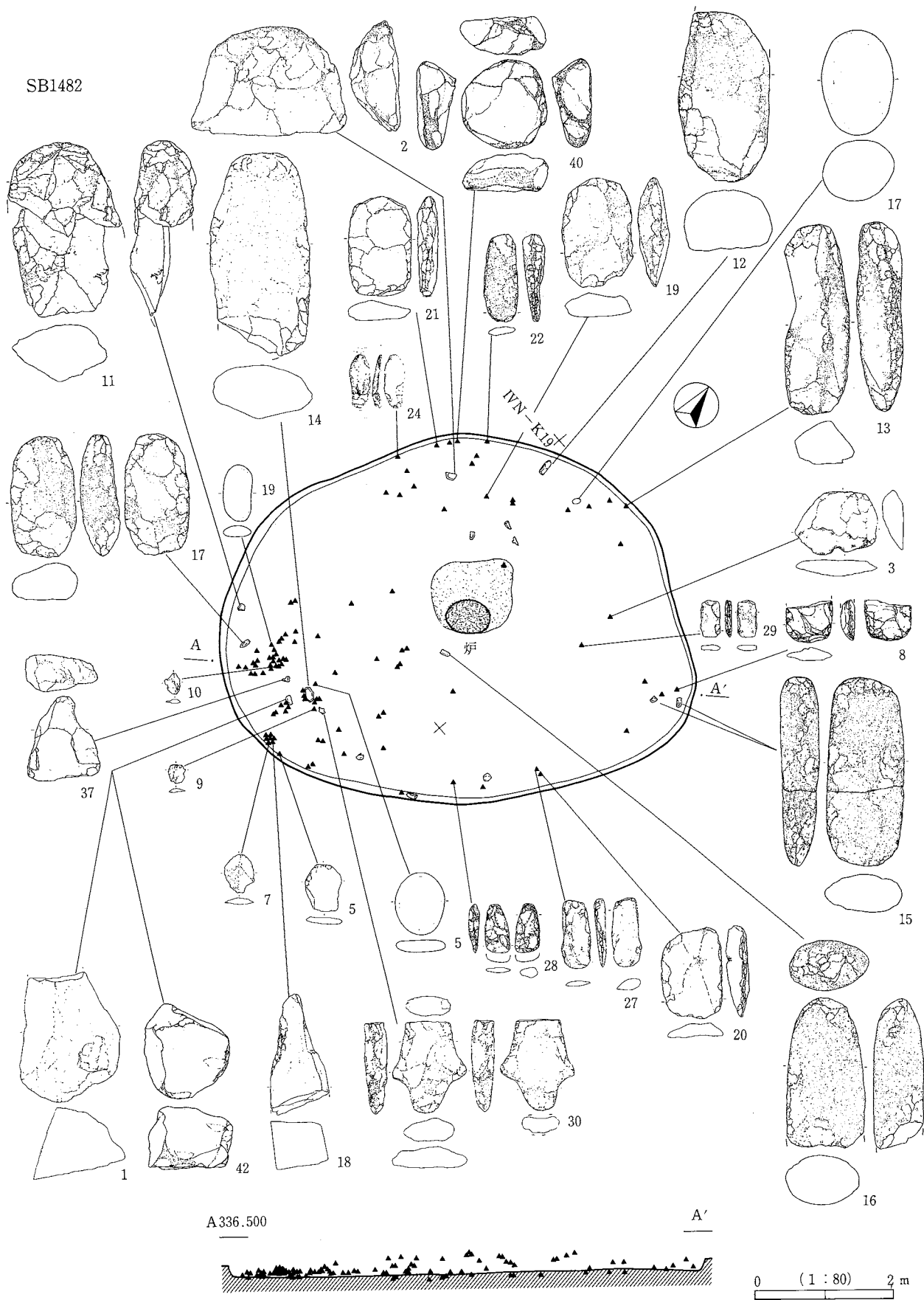
SB1478



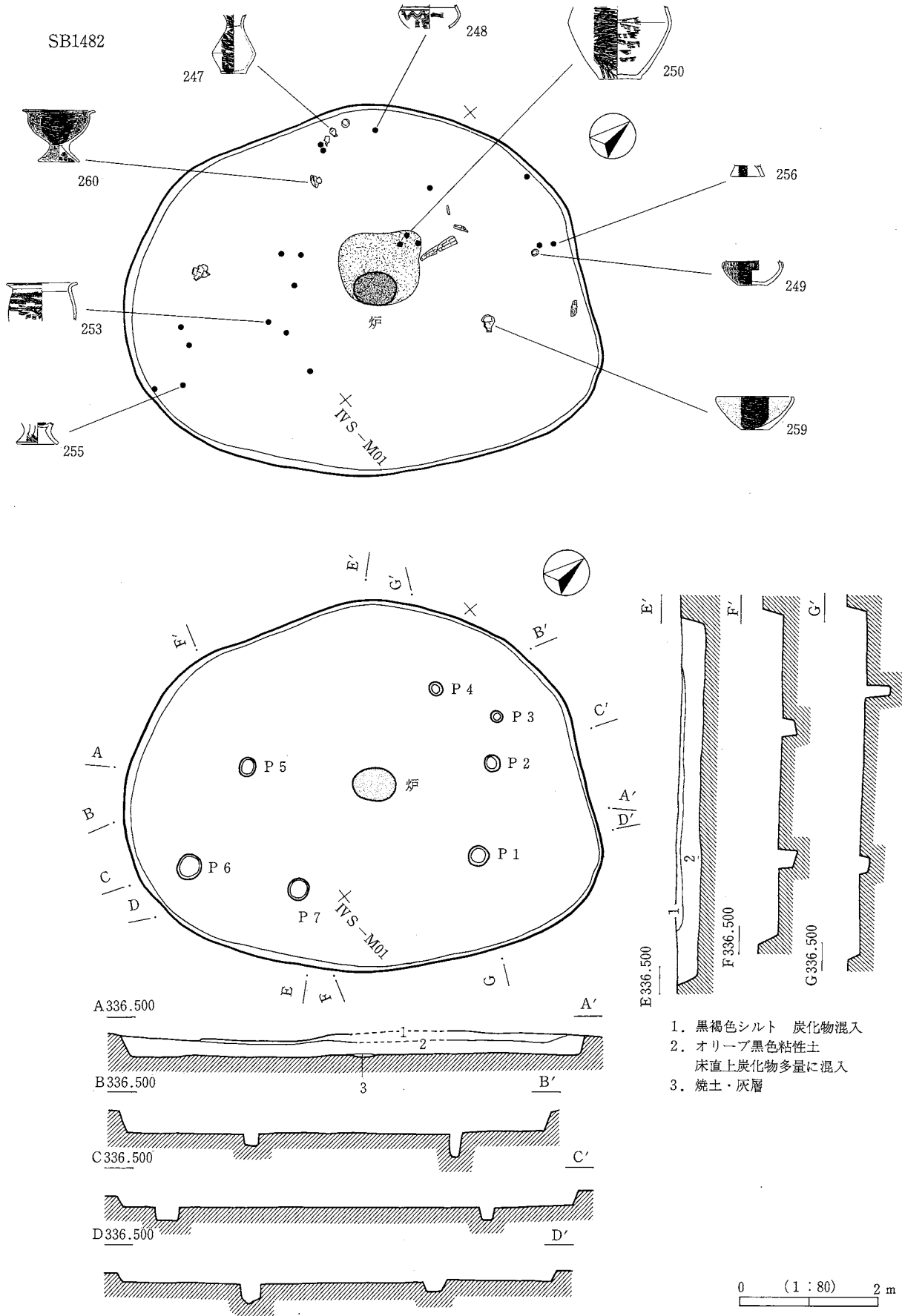
1. 褐灰色砂質土 青灰色シルト
ブロックで混入
2. 黒褐色粘性土
所々炭化物を層状に混入

0 (1:80) 2 m

第42図 SB1474・1478実測図

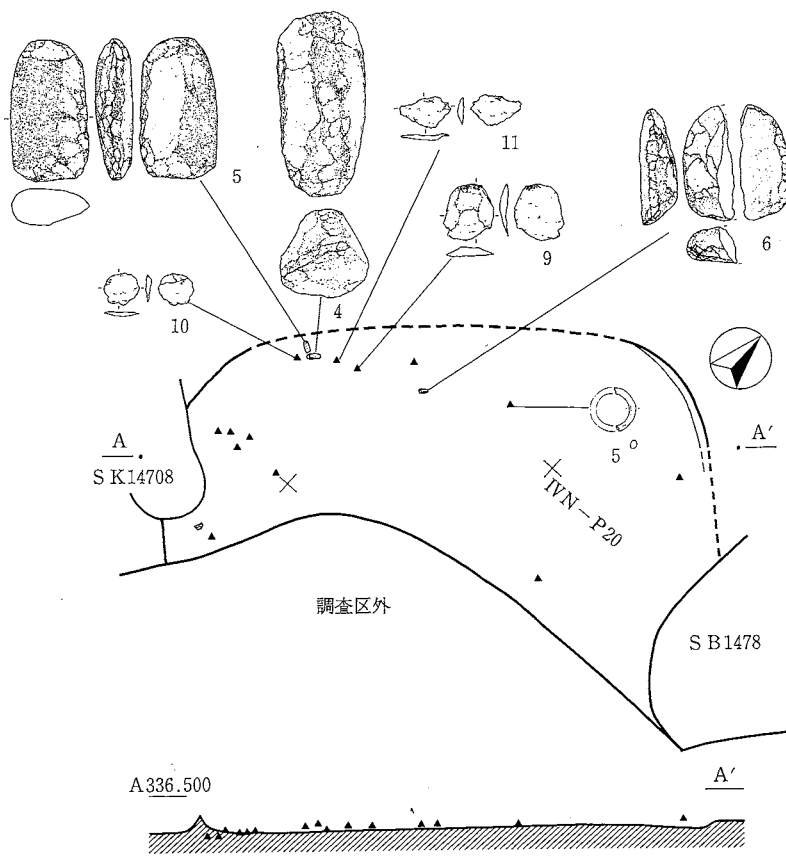
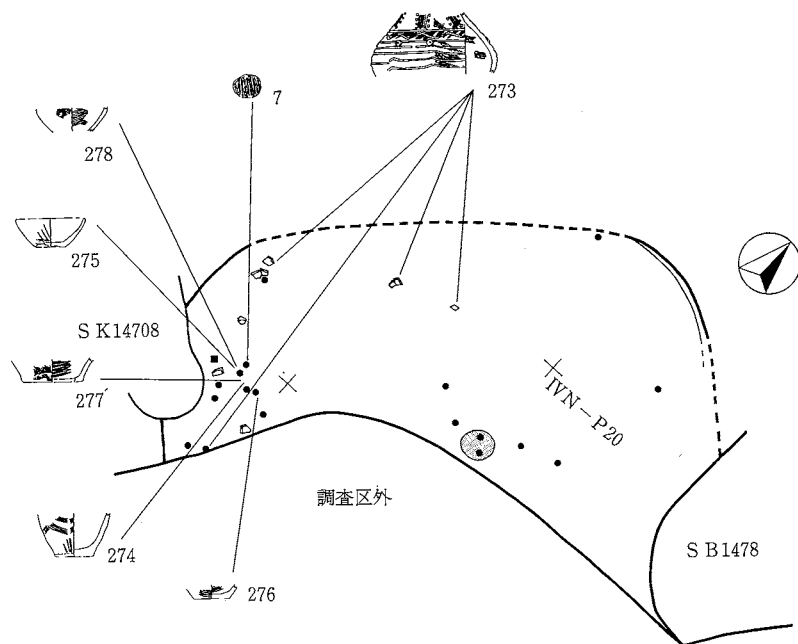


第43図 SB1482遺物出土状況図

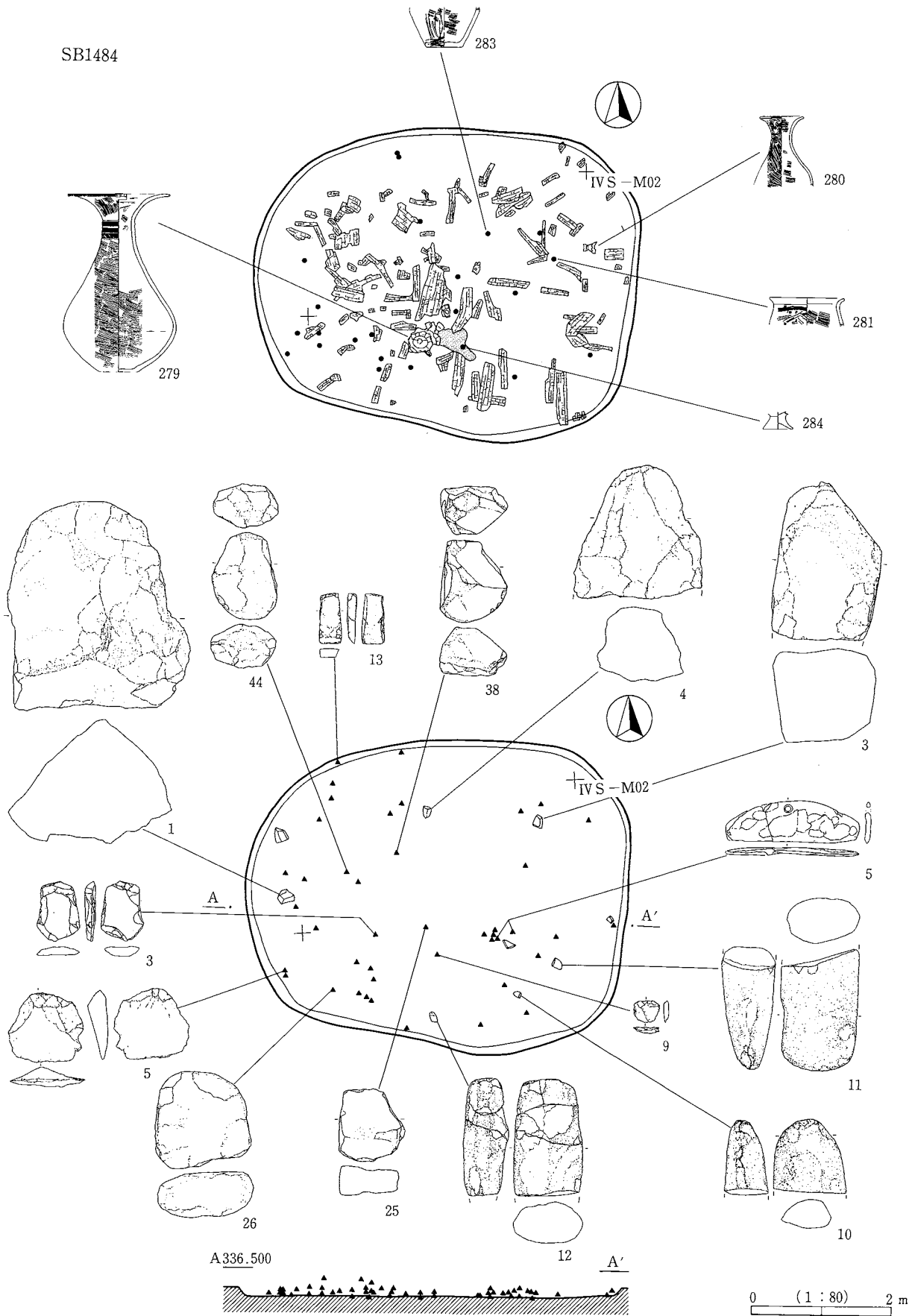


第44図 SB1482実測図

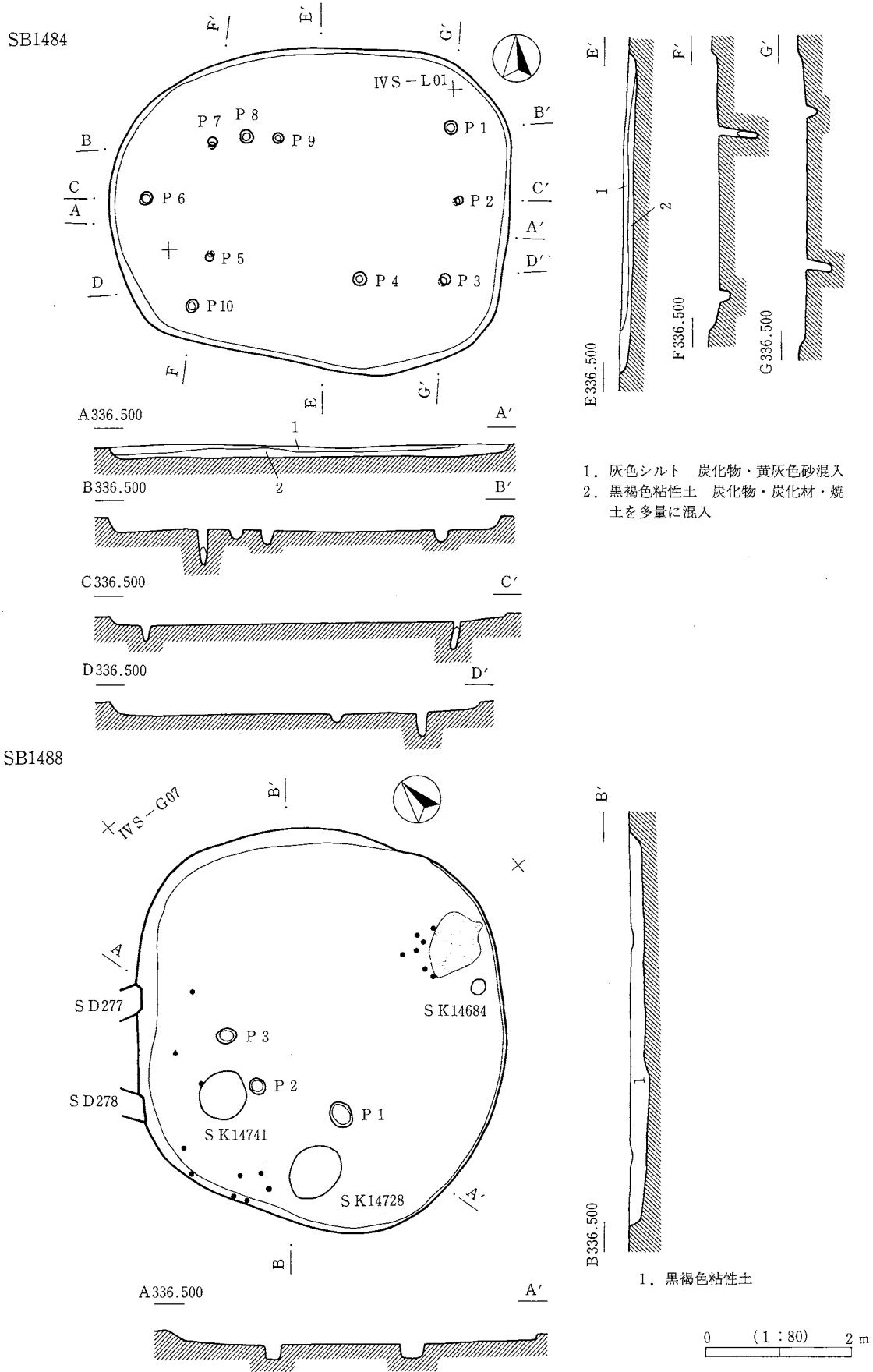
SB1483



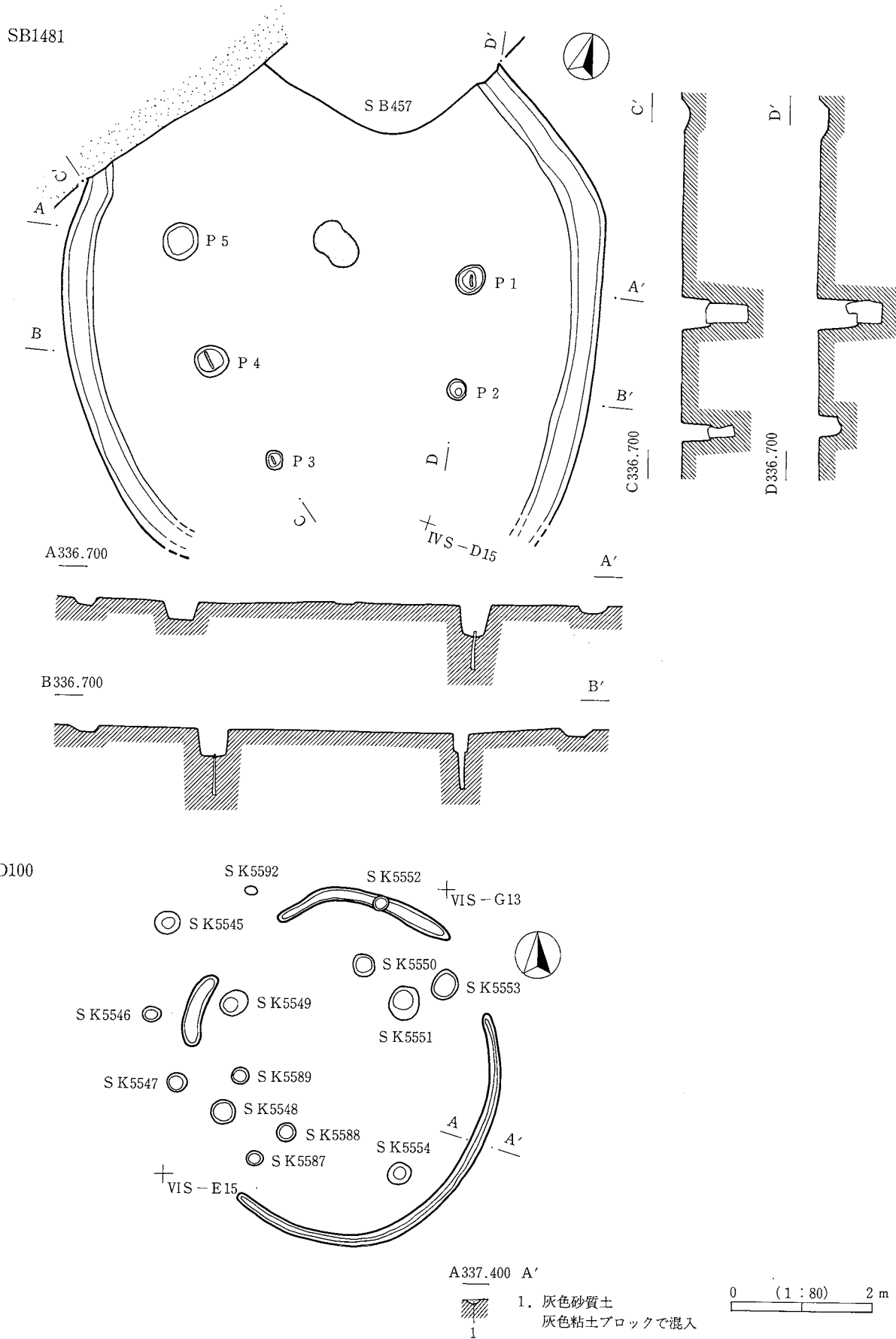
第45図 SB1483遺物出土状況図



第46図 SB1484遺物出土状況図

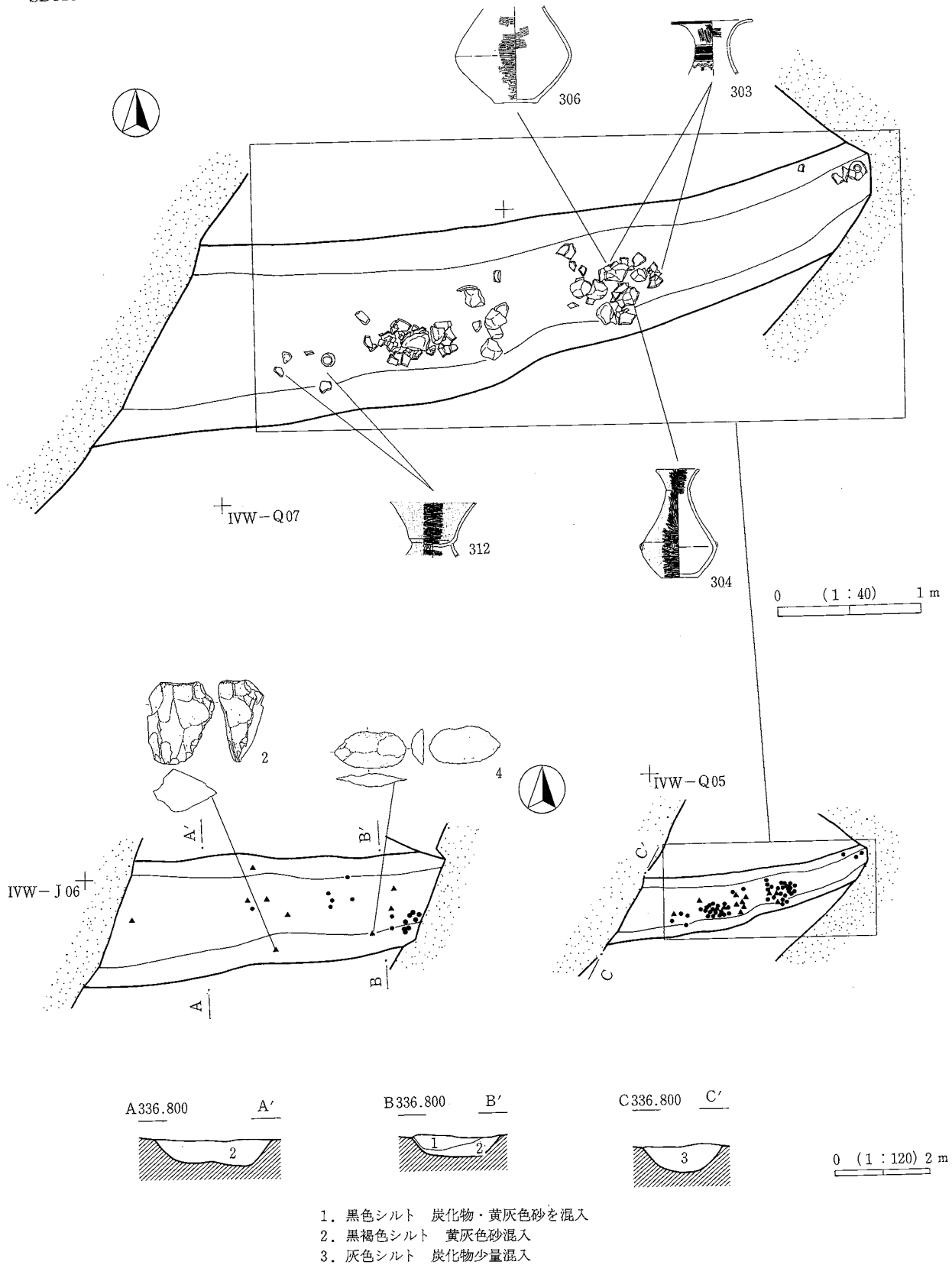


第47図 SB1484・1488実測図

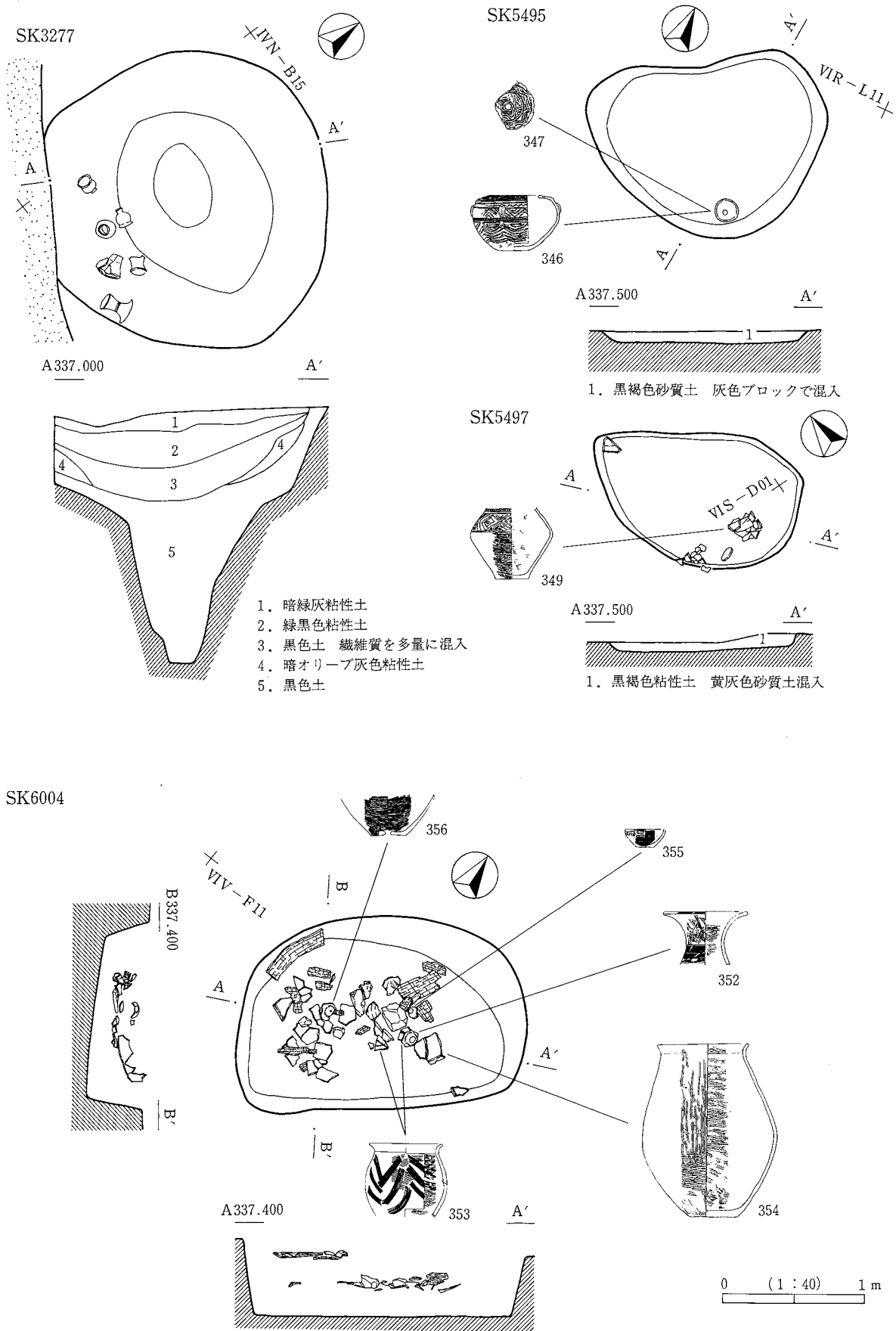


第48図 SB1481・SD100実測図

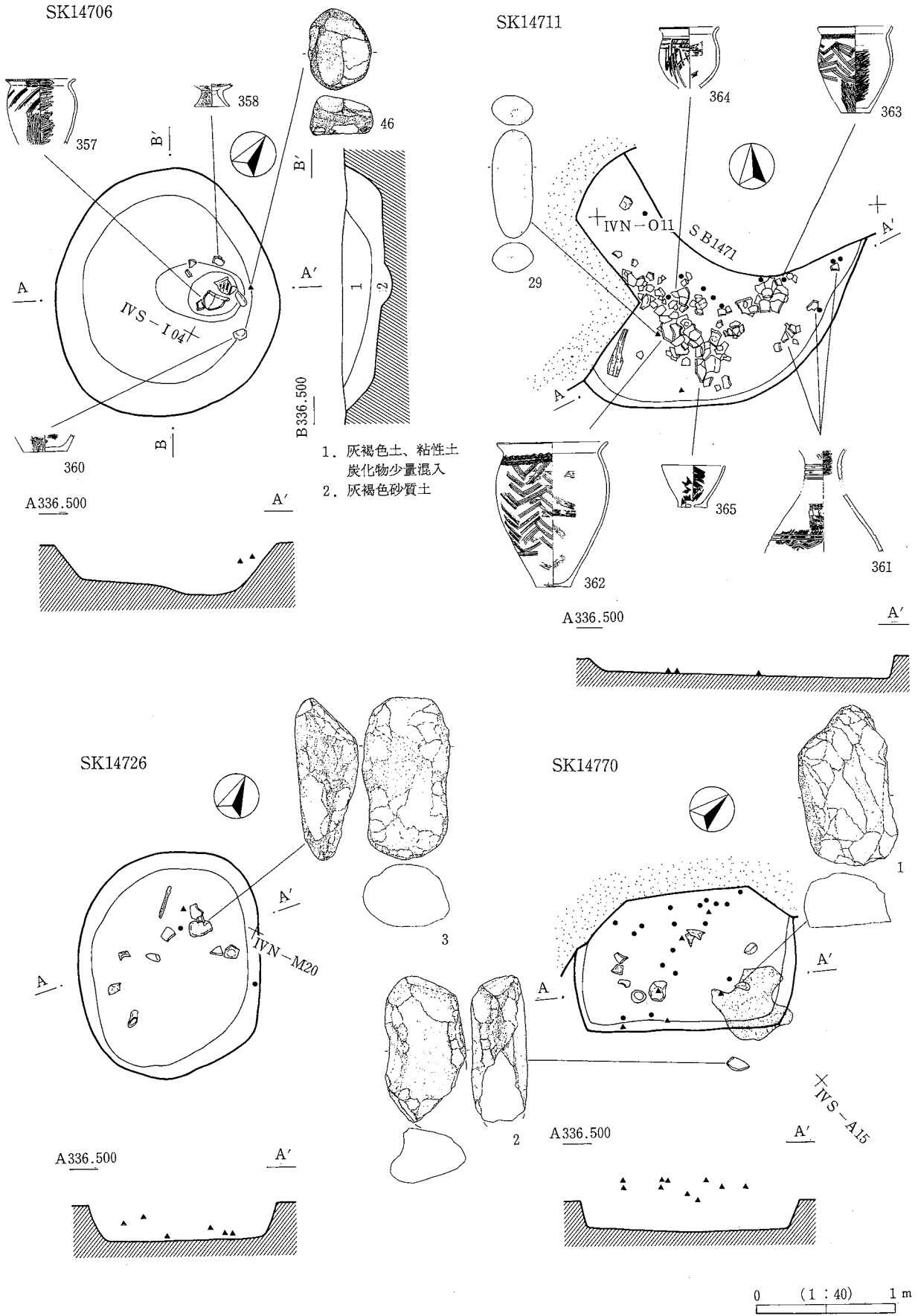
SD318



第49図 SD318実測図

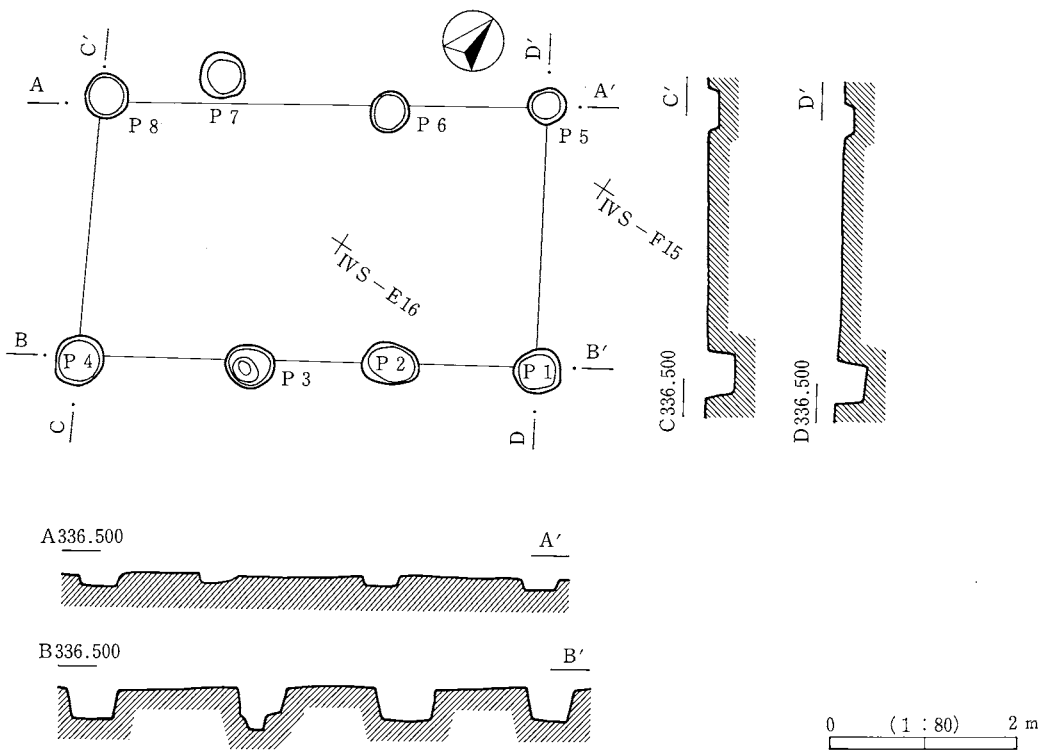


第50図 SK3277・5495・5497・6004実測図



第51図 SK14706・14711・14726・14770実測図

ST210



第52図 ST210実測図

第3節 弥生時代後期～古墳時代前期

1 概要 (第15～24図)

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構はⅠD層～Ⅱ層上面で検出され、該期の遺構と明確に認定されたのは住居址128軒、溝址28条、土坑(含む焼土址)約50基を数える。また掘立柱建物址や時期不明遺構の中にも該期の遺構が含まれる可能性もある(第Ⅲ章 第1節)。

抽出した遺構の時期については、各遺構で一括出土した土器の様相を善光寺平北部編年(第Ⅴ章第1節2)に対応させて紹介する。しかし本遺跡では、明確に時期が決定できる遺構が少ないため、集落の変遷を把握するには北部編年0段階以前～2段階をⅠ期、北部編年3～4段階をⅡ期、北部編年5～7段階をⅢ期に大別して紹介する。なお北部編年0段階以前は弥生時代後期(箱清水期)、7段階は古墳時代前期中葉を目安とする。以下この時期区分を用いて遺構の変遷について若干触れたい。

榎田遺跡では(弥生時代後期～古墳時代前期)Ⅰ期の段階には、遺構が大きく2つの地区に分かれて存在する。まず遺跡南部では②-4～③-2地区を中心に約35軒の住居址が存在し、約40m南の③-3～③-5地区には円形周溝墓や墓坑などが約12基存在する。これに対して遺跡北部では①-4A～①-5地区を中心に、7軒の住居址と土器を大量に出土した溝址(SD551)1条が存在し、約50m南には①-1地区を中心に円形周溝墓や墓坑などが約12基存在する。

続くⅡ期の段階になると、遺跡南部では住居址約20軒、遺跡北部では住居址3軒、墓坑3基と、両地区の遺構数は減少する。墓域についても円形周溝墓・墓坑などは調査区内でほとんど確認されない。しかし、遺跡南部のSB1447では住居址内で人骨と玉類が出土している。

最後にⅢ期になると、遺跡南部では住居址8軒と遺跡南端の③-5地区で方形周溝墓1基が確認された。遺跡北部では住居址1軒のみで、新たに遺跡中央部②-3B地区中心に4軒が確認された。

2 竪穴住居址

第72号住居址 SB72 (第53図)

位置：②-2C IVW-03

形態・規模：方形? 4.2×(3.8)m 床面積(15.96)m²

主軸の方向：不明

出土状況：床面及び覆土中から多量の土器が出土した。床面から壺(4、6)、台付甕(7)など、完形または完形に近い個体もあるが、破片が多い。覆土中から匙(31)、ミニチュア土器(30)なども出土している。

床面：出水が著しく、全体に軟弱。

炉址：調査区域内では検出されなかった。

柱穴：5基検出されているが、不規則に配列する。

時期：0段階以前

第81号住居址 SB81 (第54図)

位置：②-2C IVW-11,12

形態・規模：隅丸方形 2.95×2.95m 床面積 8.7m²

主軸の方向：NS

出土状況：覆土中より土器破片が多量に出土したが、完形の個体は少ない（8、12）。特殊品としてはP2から鹿骨が出土。ミニチュア土器（14）、勾玉（9）、鹿の歯が覆土中より出土している。

床 面：非常に軟弱で、堅緻な部分は認められない。

炉 址：検出されなかった。

柱 穴：2基検出されているが、いずれも浅く性格は不明。

時 期：0段階以前

第85号住居址 SB85 （第55図）

位 置：②-2C IVV-10,14,15

形態・規模：隅丸方形 5.7×5.55m 床面積 31.64m²

主軸の方向：N40W

出土状況：床面付近から多くの土器が完形または完形に近い状態で出土している（1、2、6、9、21）。破片は復元可能な個体が多い。住居址中央付近から直径約30cmの石皿も出土。

床 面：出水著しく、全体に軟弱。炭化物が床全面に分布し、炭化材が倒れた状態で出土。

炉 址：2ヶ所に焼土が認められたが、焼失住居であるため、炉としての決め手に乏しい。

柱 穴：7基検出されているが、配列は不規則である。（土坑の可能性も考えられる）

時 期：6段階

備 考：焼失住居

第122号住居址 SB122 （第56図）

位 置：②-2C VII B-01,02,06,07

形態・規模：隅丸長方形 5.8×5.0m 床面積 29.0m²

主軸の方向：N15W

出土状況：覆土および床面とも土器が破片で多量に出土している。炉1内からは甕と高坏（6、7、8、9、11、12）が破片で出土したが、周辺の床面出土の土器片とも接合する。炉1西側の床面からは壺、甕、高坏などが破片で出土（2、10、13、14）。炉2内では甕と壺（4、15）が破片で出土。壺破片（3）は覆土からの出土。

床 面：一部堅緻な部分もみられるが、全体に軟弱。炭化物が床面に分布し、特に炉周辺には集中する。また、炭化材が一部倒れた状態で出土している。

炉 址：2基の炉を検出。炉1はしっかりとした掘り込みがあり、炭化物や灰が集中する。炉2は掘り込みも浅く、補助的な炉と考えられる。

柱 穴：検出されなかった。

時 期：0段階

備 考：焼失住居の可能性が高い。

第124号住居址 SB124 （第56図）

位 置：②-2C VII B-11

第III章 調査成果

形態・規模：隅丸長方形 4.4×3.25m 床面積 14.3㎡

主軸の方向：N12W

出土状況：覆土中より土器が破片で少量出土。P 1から壺と鉢（3、5）、P 4から凸帯付鉢と壺片（1、2、9）が破片で出土している。

床 面：特に堅緻な部分は認められず、炭化物が一部に分布している。

炉 址：P 1は焼土ブロックや炭化物も多く、壺が埋設された状況で出土し、炉の可能性は高いが壁際でありやや疑問が残る。

柱 穴：4基検出されている。P 4は多くの土器が出土しており、貯蔵穴の可能性はある。

時 期：4段階

第222号住居址 S B 222 (第57図)

位 置：①-5 I L-09,10

形態・規模：隅丸方形 5.1×4.7m 床面積 23.97㎡

主軸の方向：N12E

出土状況：土器は覆土中破片で出土しているが、完形となる個体が多い。特に住居址の中央北寄部と北西コーナー部に集中している。

床 面：特に堅緻な部分は認められないが、比較的締まっている。

炉 址：中央部が攪乱されており、調査範囲では検出されなかった。

柱 穴：4基検出されているがいずれも浅く、配列も不規則である。

時 期：3段階

第297号住居址 S B 297 (第58図)

位 置：②-2C VII B-02、VII V-22

形態・規模：隅丸長方形 4.7×4.2m 床面積 19.74㎡

主軸の方向：N78E

出土状況：炉西側の床面から完形または完形に近い土器が集中して出土（1、2、4、7）。

床 面：やや堅く締っており、炉北側には炭化物が分布する。

炉 址：中央よりやや北寄りの位置に径約60cmの炉を検出。掘り込みは浅く焼土の分布は少ない。

柱 穴：4基検出され、径20～30cmの柱穴がほぼ規則的に配列する。

時 期：1段階？

第302号住居址 S B 302 (第58図)

位 置：②-2C IV R-19

形態・規模：隅丸長方形？ 6.2×(4.85)m 床面積 (30.07)㎡

主軸の方向：N19W

出土状況：覆土中より土器が破片で多量に出土。

床 面：特に堅緻な部分は認められず、北東側は特に軟弱で検出不可能であった。

炉 址：中央よりやや北西寄りの位置に径約70cmの炉を検出。西側は土坑によって切られる。

柱 穴：3基検出され、P 2、3が主柱穴と考えられよう。

時 期：3～4段階

第478号住居址 S B 478 (第59図)

位置：②-3B IV J -01,02,07

形態・規模：隅丸方形 6.6×6.15m 床面積 40.59㎡

主軸の方向：N46E

出土状況：覆土中より土器が破片で多量に出土したが、接合可能な個体は少ない。覆土中よりミニチュア土器、床面では壺、高坏の脚部などが出土した(1、5、6、7)。

床面：比較的堅緻で良く締まっている。

炉址：検出されなかった。

柱穴：8基検出され、主柱穴(P1、2、3、7)がやや不整な方形に配列される。

時期：7段階

第830号住居址 S B 830 (第60図)

位置：②-5 IVE -19

形態・規模：西側が調査区境による攪乱をうけ、全体のプランは不明だが、隅丸方形と考えられる。
2.55×(2.5)m 床面積 (6.38)㎡

主軸の方向：不明

出土状況：床面より完形に近い壺、甕(2、4、5)が出土。

床面：特に堅緻な部分は認められず、不明確。

炉址：検出されなかった。

柱穴：検出されなかった。

時期：4段階

備考：炉、柱穴を持たず、極めて小規模であり、住居以外の目的で使用された可能性がある。
S B 1090、S B 1091と同様の性格をもった施設と考えられる。

第1090号住居址 S B 1090 (第60図)

位置：①-4A III A -19,20,24,25

形態・規模：隅丸方形 2.55×2.3m 床面積 (5.87)㎡

主軸の方向：N43E

出土状況：覆土および床面より、甕、壺などが破片で出土。

床面：堅緻な部分は認められず、全体に軟弱。

炉址：検出されなかった。

柱穴：検出されなかった。

時期：0段階以前

備考：S B 830、S B 1091と同様の性格をもった施設と考えられる。

第1091号住居址 S B 1091 (第61図)

位置：①-4A III A -20

形態・規模：北東側をS B 1062によって切られるため、全体のプランは不明だが隅丸方形と考えられる。
2.6×(1.7)m 床面積 (4.42)㎡

主軸の方向：不明

出土状況：覆土中より壺、甕、高坏が多量に出土したが、すべて破片で、西コーナーに集中する。

床面：堅緻な部分は認められず、全体に軟弱。

炉址：検出されなかった。

柱穴：検出されなかった。

時期：0段階以前

備考：S B 830、S B 1090と同様の性格を持った施設と考えられる。大型の壺、甕等は破壊され
投棄されたものか？

第1101号住居址 S B 1101 (第61図)

位置：①-4A IIIA-04,05,09

形態・規模：隅丸長方形 4.0×3.25m 床面積 13.0m²

主軸の方向：N43E

出土状況：炉内から壺(2)が正位で出土。近接して壺(1)が出土。

床面：比較的堅緻で良く締まっている。

炉址：中央よりやや北東寄りに、長径80cm、短径65cmの炉石を伴った炉を検出。土器敷炉の可能性が考えられる。

柱穴：検出されなかった。

時期：0段階以前

備考：本址北側に位置するS B 1114と類似している。

第1102号住居址 S B 1102 (第62図)

位置：①-4A IIIA-14,19

形態・規模：隅丸方形(S B 1052の掘り方により中央部が攪乱されている)
3.9×3.6m 床面積(14.04)m²

主軸の方向：N19E

出土状況：床面より、壺の口縁部、甕、高坏などが多量に出土。すべて破片で、東側に集中する傾向がみられる。

床面：比較的堅緻で良く締まっている。

炉址：検出されなかった。

柱穴：2基確認されているが、性格は不明。

時期：3段階

備考：やや規模は大きいですが、S B 1091と同様の性格をもった施設と考えられる。

第1114号住居址 S B 1114 (第62図)

位置：①-4B IU-24

形態・規模：隅丸長方形 4.4×3.7m 床面積(16.28)m²

主軸の方向：N4W

出土状況：覆土中より土器が破片で多量に出土するが、接合出来る個体はほとんどない。

床面：特に堅緻な部分は認められず、全体に軟弱。

炉址：中央よりやや南西寄りの位置に、炉石を伴った炉を検出。床が若干焼けており、掘り込み

は認められない。

柱 穴：検出されなかった。

備 考：南側のS B1101と類似している。

第1185号住居址 S B1185 (第63図)

位 置：①-4C I L-16,17,21,22

形態・規模：やや不整な方形 5.6×5.5m 床面積 (30.8)m²

主軸の方向：N24W

出土状況：覆土中から壺、甕、高坏が破片で少量出土。また南東の壁際に長径15cm前後の石が集中して出土した。(こも編み石か?)

床 面：堅緻な部分は認められず、不明確。

炉 址：北側柱穴間に炉石を伴った炉を検出。掘り込みはみられない。

柱 穴：5基検出され、支柱穴(P1、2、4、5)は、長径20～60cmでいずれも浅い。

第1188号住居址 S B1188 (第63図)

位 置：①-4C I Q-13,14,18,19

形態・規模：隅丸方形 5.5×5.3m 床面積 29.15m²

主軸の方向：N80E

出土状況：全体に土器の出土量はわずかで、覆土および床面より、台付壺、甕、鉢、高坏などが破片で出土。炉東側のP2からは完形の小型壺(1)が出土している。

床 面：特に堅緻な部分は認められず、不明確。

炉 址：中央より北寄りに炉石を伴った炉を検出。長径110cm、短径95cmで掘り込みはみられず、焼土、炭化物が周辺に分布する。

柱 穴：5基検出されたが配置は不明。

時 期：0～1段階

第1266号住居址 S B1266 (第64図)

位 置：①-6 I Q-19,24,25

形態・規模：隅丸長方形 5.75×4.85m 床面積 (27.89)m²

主軸の方向：NS

出土状況：北西コーナー付近の、床面よりやや浮いた位置で、ほぼ完形の壺が出土(3)。覆土および床面からは、壺、蓋、甕、高坏が破片で出土している。また紡錘車が覆土中から出土している。

床 面：比較的堅緻で良く締まっている。

炉 址：ほぼ中央に長径80cm、短径70cmの掘り込みのある炉を検出。

柱 穴：8基検出されているが、比較的住居址の中心に集まり配列は不規則である。支柱穴はP2、5、7、8が考えられよう。

時 期：2段階

第1272号住居址 S B1272 (第64図)

第III章 調査成果

位置：①-6 I Q-09,14

形態・規模：隅丸長方形？ 5.6×(4.45) m 床面積 (24.92) m²

主軸の方向：NS

出土状況：覆土中より壺、甕、高坏、鉢が破片で出土。P 4からは高坏が2個体出土している（5、6）。

床面：比較的堅緻で良く締まっている。

炉址：北側の支柱穴間に炉石を伴う炉を検出。径50cmで、しっかりとした掘り込みがあり、周辺には炭化物や焼土が広がる。

柱穴：4基検出され、P 1、2、4が支柱穴と考えられよう。P 3は入り口施設の可能性が高い。

備考：西側はS B1174、S D511に切られる。

第1431号住居址 S B1431 (第65図)

位置：②-4 IV S-12

形態・規模：隅丸長方形 5.45×4.05 m 床面積 (22.07) m²

主軸の方向：N17W

出土状況：床面から、壺、甕、高坏が破片で出土し（1、2、3、4、5、9）、覆土上層からも土器片が多量に出土している。

床面：ほぼ全面が堅緻で良く締まっており、炭化物が分布する。

炉址：北コーナー付近に壺底部（1）を用いた土器敷炉を検出。周辺には炭、焼土が分布。

柱穴：14基検出され、P 1、2、3、11が支柱穴と考えられる。P 13、14は床下検出で、径50～75cmの土坑状遺構である。

時期：3段階？

備考：覆土上層と床面のやや上部には炭化物が多く分布し、焼失住居の可能性が考えられる。

第1441号住居址 S B1441 (第66図)

位置：②-4 IV S-11

形態・規模：隅丸長方形か？ (4.35) ×3.8 m 床面積 (16.53) m²

主軸の方向：N62E

出土状況：床面から完形に近い甕、壺、高坏、装飾器台、ミニチュア等が出土（1、2、4～9、11）。P 3からは小型の甕（3）も出土している。西側の床面より人骨1体が、良好な残存状態で出土している。頭位は東で、右横臥と思われる、膝は屈折する。人骨鑑定結果によると、壮年以上の男性と推定されている（第VI章第7節）。

床面：一部に炭化物が分布するが、特に堅緻な部分は認められず、不明確。

炉址：北寄りの炭化物集中範囲に、炉の存在した可能性がある。

柱穴：南側に集中して3基検出されたが、いずれも浅く性格は不明。

時期：3段階

第1447号住居址 S B1447 (第66図)

位置：②-4 IV S-08,09

形態・規模：(5.3) ×(3.0) m 他の住居址や調査区外によって切られ、全体のプランは不明だが、長

方形の可能性が考えられよう。

主軸の方向：不明

出土状況：床面よりやや浮いた位置で、壺、高坏、器台等が破片で出土。北西の壁際覆土中からは完形の台付甕（1）が出土し、床面からは3体の人骨が出土した。1号人骨は住居址の南に位置し、頭位は南で、残存状態は悪いが左横臥と思われる。人骨鑑定によると成人男性の可能性が高い。2号人骨は、頭位は西で頸骨付近から勾玉1、棗玉1、管玉3、ガラス玉4など、多くの玉類が出土している（6、7、11、12、13、21～24）。鑑定によると女性の可能性が高い。3号人骨は頭位は北で、右横臥している。胴上半から管玉2本が発見されている（8、14）。残存状態が悪いため、性別は不明である。この他に本址南側の調査区境で獣骨が出土している。

床面：全面堅緻で良く締まっている。

炉址：中央よりやや北寄りの位置に炉を検出。炉北側に石を検出したが炉石かどうか不明。炉はしっかりと掘り込まれており周辺には炭化物が分布している。

柱穴：2基検出され、いずれも浅いが、位置的に支柱穴と考えられよう。

時期：4段階

備考：榎田遺跡における弥生時代後期～古墳時代前期の中で、最も玉類を豊富に出土した遺構である。

第1448号住居址 SB1448 （第67図）

位置：②-4 IVS-16,21

形態・規模：隅丸長方形 4.9×4.45m 床面積 21.81m²

主軸の方向：N81W

出土状況：床面および覆土中から、壺、甕、高坏片が多量に出土し、完形の個体は少ない。床面より浮いた位置で、ニホンジカの頭蓋骨やイノシシ足根骨が散在するが詳細は不明。

床面：特に堅緻な部分は認められず、一部軟弱である。

炉址：北側支柱穴間に、壺の底部（4）を用いた土器敷炉を検出。炉の周辺には間層を挟んだ2面の炭化物・灰層が分布する。

柱穴：中央やや北寄りに径35cm、深さ60cmの支柱穴を2基検出。

時期：0段階以前

第1453号住居址 SB1453 （第68図）

位置：②-4 IVS-13,17,18

形態・規模：隅丸長方形 5.05×4.3m 床面積 21.72m²

主軸の方向：N63E

出土状況：西側の床面近くに完形に近い壺（4）、甕（1）、高坏（7）が出土し、炉北東側床面からは破片で、高坏（5、6）、甕（3）が出土している。

床面：ほぼ全面が堅緻で良く締まっている。

炉址：ほぼ中央に炉石を伴った炉を検出。周辺には2層の炭化物層が分布する。

柱穴：6基検出されているが配列は不規則。うち2基は、南西壁と北東壁の相対する位置にあり、棟持柱の存在も窺われる。

時期：0段階以前

第1454号住居址 S B 1454 (第68図)

位置：②-4 IVS-16,17,21,22

形態・規模：隅丸長方形 5.5×3.95m 床面積 (21.73) m²

主軸の方向：N8W

出土状況：床面からやや浮いた位置で、壺、甕、高坏などが破片で出土。

床面：ほぼ全面堅緻で良く締まっている。

炉址：北側主柱穴間に、炉石を伴った炉を検出。

柱穴：6基検出され、主柱穴(P1、2、3、4)が長方形に配列される。

時期：0段階以前

第1464号住居址 S B 1464 (第69図)

位置：②-4 IVS-16

形態・規模：他の住居址に切られて全体のプランは不明であるが、隅丸長方形と考えられる。

(5.3)×4.1m 床面積 (21.73) m²

主軸の方向：不明

出土状況：ほぼ床面から、壺、鉢、甕、高坏が破片で出土している。全体に土器の出土量は少ない。

炉付近からガラス玉(27)が割れた状態で出土している。

床面：特に堅緻な部分は認められず、不明確。

炉址：中央より北寄りの位置に炭化物が広く分布し、径20cm位の焼土が認められた。石を伴うことから炉と考えられるが、掘り込みは認められない。

柱穴：6基検出され、炉を挟んでほぼ等距離に2基ずつが配列される。P2、3が主柱穴、P1、4は補助柱穴、または建て直しとも考えられる。

時期：0段階以前

第1625号住居址 S B 1625 (第69図)

位置：②-1A VII G-01,02,06,07

形態・規模：不整な隅丸方形 5.3×(4.5) m 床面積 (23.85) m²

主軸の方向：N55E

出土状況：床面および覆土より壺、甕、高坏などが破片で出土。

床面：全面堅緻で良く締まっている。

炉址：中央より南寄りの位置に炉を検出。浅い掘り込みを持ち、底部はレンガ状に焼結し、周辺には炭化物が分布する。

柱穴：4基検出されたが、配列は不明。

時期：3～4段階

第1631号住居址 S B 1631 (第70図)

位置：②-1B IVW-17,18,22

形態・規模：隅丸長方形か？ 5.9×4.7m 床面積 (27.73) m²

主軸の方向：N29E

出土状況：床面より浮いた位置で、壺、甕、高坏、甗が破片で多量に出土したが、完形となる個体は少ない。また、北側壁近くから砥石、石皿が出土している。P1から鹿の足骨も出土している。

床面：ほぼ全面堅緻で良く締まっている。

炉址：北側主柱穴間に壺の底部(13)を用いた土器敷炉を検出。北側に炭化物層が分布する。

柱穴：4基の主柱穴(P1、2、3、4)を検出。(南コーナー付近P4に切られる径170cm、深さ30cmの土坑が存在するが、遺物も出土せず、本址に付随するものか不明である)

時期：0段階以前

備考：覆土上面は、重機の移動による土圧がかかり、かなり凹凸が激しい。また、調査区境のため北東、南東コーナーは確認できなかった。

第1632号住居址 SB1632 (第71図)

位置：②-1A IVW-13,14,18,19

形態・規模：南東側は調査区外のため全体のプランは不明 7.25×(3.3)m 床面積 (23.93)m²

主軸の方向：不明

出土状況：床面より完形に近い壺(1)、高坏(12)が出土。覆土中からは、紡錘車や壺、甕、高坏などが破片で多く出土している(4、6、14、15、16、17、19、21、22)。

床面：床直上に炭化物層があり、一部堅緻で締まった部分も認められた。

炉址：中央より西寄りの位置に炉石を伴った地床炉を検出した。

柱穴：検出されなかった。

時期：1段階

第1650号住居址 SB1650 (第72図)

位置：②-1B VII B-09,10,14

形態・規模：隅丸長方形 8.3×5.85m 床面積 48.56m²

主軸の方向：N16E

出土状況：南側の床面から完形に近い壺、高坏が出土し(1、3、5)、覆土中からも壺、高坏、甕などが破片で多く出土している。また北東コーナー付近から鹿角や、位置不明ではあるが、ガラス玉(28)、紡錘車(18)なども覆土中から出土している。

床面：床全面に炭化物が分布し、炭化材が倒れた状態で出土しているが、出水が激しく非常に軟弱である。

炉址：中央より北東寄りの位置に炉石を伴った炉を検出。火床面に高坏の坏部(7)が置かれており、土器敷炉の可能性が考えられる。

柱穴：検出されなかった。

時期：0段階以前

備考：焼失住居の可能性が考えられる。

第1672号住居址 SB1672 (第72・73図)

位置：②-1B IVW-08,09

形態・規模：隅丸長方形 4.6×4.05m 床面積 18.63m²

主軸の方向：N19W

出土状況：床面近くから土器が破片で多量に出土したが、完形または完形に近い個体となるものが多い。特に南西側には、壺、高坏、甕、鉢（1、9、14、15）などが集中する。

床面：特に堅緻な部分は認められず、やや軟弱。

炉址：北側支柱穴間に、3ヶ所の地床炉を検出。それぞれにレベル差、間層が認められた。炉1、炉2はしっかりした掘り込みをもち、北側に2層の炭層が分布する。炉3は浅い掘り込みを持ち、焼土化している。

柱穴：5基検出され、支柱穴（P1、2、3、5）が長方形に配列される。

時期：0段階以前

第1801号住居址 SB1801（第74図）

位置：③-1 VIIK-01,02,06,07

形態・規模：約半分が調査区外のため全体のプランは不明であるが、隅丸長方形と考えられる。
4.5×3.15m 床面積（14.18）m²

主軸の方向：不明

出土状況：覆土および床面とも、土器の出土量は少ない。

床面：炭化物、炭化材が床全面に分布するが、特に堅緻な部分は認められない。

炉址：北側の支柱穴間に浅い掘り込みを持つ地床炉を検出した。

柱穴：深さ70～80cmの支柱穴を2基検出。いずれも上部は炭化物を多く含み底部には柱根が残存した。

時期：2段階？

備考：炭化材は中心に向かって倒れており、柱根の残存状態からも焼失住居といえる。また壁線に沿って、炭化材を含む径5cmの小ピットが規則的に配列されることから、垂木ピットの存在が窺われ、住居の構造が推定される。

第1803号住居址 SB1803（第75図）

位置：③-1 VIIK-01,02,06,07

形態・規模：隅丸長方形 5.2×4.55m 床面積（23.66）m²

主軸の方向：N34W

出土状況：覆土から土器が破片で少量出土。

床面：一部焼土、炭が分布するが、特に堅緻な部分は認められず、不明確。

炉址：北側支柱穴間に浅い掘り込みを持つ地床炉を検出。

柱穴：支柱穴4基が長方形に配列される。

時期：2段階

第1804号住居址 SB1804（第75図）

位置：③-1 VIIK-05,06

形態・規模：隅丸長方形 5.9×3.7m 床面積 14.84m²

主軸の方向：N38W

出土状況：土器の出土量は全体に少ない。破片は炉の南側に集中して出土。
 床 面：一部堅緻で明瞭。
 炉 址：北側支柱穴間に地床炉を検出。掘り込みは認められなかった。
 柱 穴：4基の支柱穴が長方形に配列される。径、深さとも50cm前後で、柱痕が認められた。
 時 期：3～4段階

3 溝址

第62号溝址 SD62 (第76図)

位 置：③-5 VIU-22,23,24, XA-02,03,04
 形態・規模：北側をNR-1、南側をSD58に切られる。東西長約13mの方形周溝墓で、主体部は削平され残存しない。周溝は幅40～110cm、深さ20～40cmで、断面形状は南側V字状、東側は皿状を呈する。
 出土状況：南側周溝内と西側周溝外から高坏(3)などが破片で出土。出土地点が明確な資料は少ない。東側周溝内の角礫は、山側から転落したもので、本址に伴うものではない。
 時 期：5～6段階
 備 考：③地区の墓域に位置し、遺跡最南端で確認されている。開口部は東側とも考えられるが明確ではない。

第63号溝址 SD63 (第77図)

位 置：③-4 VIU-25, VIV-21,22, XA-05, XB-01
 形態・規模：東西径約14mの円形周溝墓で、北側をNR-1によって切られる。主体部は削平され残存しない。周溝は幅100～200cm、深さ35～50cmで、断面形状はすり鉢状を呈する。南西開口部は土橋の可能性が考えられる。
 出土状況：周溝内の底部より浮いた位置で、完形または完形に近い甕、壺、高坏が多量に出土している。調査時の所見によると、これらは正位で設置された可能性が高い。また、出土地点不明ではあるが管玉(18)も出土している。
 時 期：1～2段階
 備 考：遺跡最南端に位置するSD62の東隣で確認されている。周溝南側の多量の角礫は山側から転落したもので、本址に伴うものではない。

第77号溝址 SD77 (第78図)

位 置：③-3 VIR-15,20
 形態・規模：北西から南東方向に弧状を呈する。幅約100cm、深さ約15cmで、断面形状は緩やかなすり鉢状を呈する。
 出土状況：南側の底部よりほぼ完形の壺や甕が出土(1、2、4)。
 時 期：2段階?
 備 考：遺構の形状や、小型壺の出土状況から、③地区における円形周溝墓群の一部と思われる。

第88号溝址 SD88 (第78図)

第III章 調査成果

位置：③-3 VIW-02,03,07,08

形態・規模：直径約10mの円形を呈し、円形周溝墓である可能性が高い。周溝の幅は50～120cm、深さ20～35cmで、断面形状は西側で皿状、東側でU字状を呈する。

出土状況：弥生時代中期及び後期の土器片が少量出土。

備考：検出時に残存したのは周溝の下部のみと思われる。プランの不規則な北東側が開口部か？

第89号溝址 SD89 (第78図)

位置：③-3 VIW-06,07,11,12

形態・規模：SD88の西側に位置し、遺構の西側は調査区外である。直径約10m、周溝の幅100cm、深さ50cmで、断面形状は漏斗状を呈し、東側に開口部を有する。

出土状況：弥生土器片が少量出土

備考：③地区における円形周溝墓の一つである可能性が高い。

第91号溝址 SD91 (第78図)

位置：③-3 VIR-20

形態・規模：長径6.8m、短径6mでやや楕円状を呈する。幅約110cm、深さ約10cmで断面形状は浅い皿状を呈する。削平を受けて遺構の北部と東部に溝が途切れる部分がある。

出土状況：北側の周溝内外より高坏など弥生土器が破片で出土。

時期：1～2段階

備考：③地区における円形周溝墓の一つと思われる。開口部は東側か？

第115号溝址 SD115 (第76図)

位置：③-4 VIV-22,23

形態・規模：測量によるコンタ図や、写真から確認した。直径7～8m、溝幅50～100cmを測るが、詳細は不明。上部を削平され、痕跡のみの検出である。

出土状況：遺物は出土していない。

備考：③地区における円形周溝墓の一つである可能性が考えられる。

第136号溝址 SD136 (第15図)

位置：①-5 IL-10

形態・規模：北東～南西方向に約4m確認、幅約150cm、深さ約10cmを測る。

出土状況：覆土中から甕・高坏片が集中して出土(1～4)。

時期：6段階

備考：弥生時代後期～古墳時代前期の遺構の中では最北端で検出されている。付近では本溝と同時期の住居址(SB1268)も存在する。

第161号溝址 SD161 (第79図)

位置：①-1B2 IIIK-19

形態・規模：長さ約3.5m、幅100cm、深さ35cmで、ほぼ東西方向の溝である。周囲は遺構の切り合いが激しく、本溝も部分的残存と思われる。

出土状況：底部より高坏が2点出土している。

時期：0～2段階

備考：①地区では同規模・同形状の溝址が幾つか確認されており、円形周溝墓の一つである可能性が高い。

第165号溝址 S D 165 (第79図)

位置：①-2 III P-11,12,13

形態・規模：北東～南西方向の弧状の溝で、北側はS B 504によって切られる。長さ7 m、幅120cm、深さ20～30cmで断面形状は皿状を呈する。

出土状況：底部より完形の小型壺(1)などが出土している。

時期：0～2段階

備考：遺構が弧状の形状であり、小型壺が出土している点から、①地区における円形周溝墓の可能性はある。

第169号溝址 S D 169 (第79図)

位置：①-1B1 III K-21,22

形態・規模：北東～南方向の弧状の溝で、長さ5.5 m、幅50cm、深さ10cmで、断面形状は皿状を呈する。切り合い関係が激しく、本遺構も部分的残存と思われる。

出土状況：底部より小型壺(1)が出土している。

時期：2段階

備考：①地区における円形周溝墓の可能性はある。

第173号溝址 S D 173 (第79図)

位置：①-1A III P-03,04,07,08,13,14

形態・規模：円形周溝墓と思われる。直径は13 m。主体部は削平され残存しない。周溝の幅120cm～200 cm、深さ20～40cmで、断面形状は緩やかなすり鉢状を呈する。北側と南側が開口している。

出土状況：西側覆土中より壺、高坏が破片で出土。

時期：0～2段階

備考：①地区で円形周溝墓の形状が判明したのは本遺構のみである。

第183号溝址 S D 183 (第17図)

位置：①-1A III P-06

形態・規模：東西方向約4 m、幅約150cm、深さ約20cmの不整形を呈する。

出土状況：覆土中より台付壺(1)、高坏脚部など出土。

時期：2段階

備考：本址はS D 173の西側に接し、切り合い関係も不明である。しかし、本址で出土した台付壺は住居址ではほとんど確認できない資料であり、祭祀性を有する資料と思われる。本址も①地区の墓域の中に位置しており、付近の類似遺構との関連を検討する必要がある。

第185号溝址 S D 185 (第80図)

位置：①-1B2 IIIK-14,15

形態・規模：北東～南西方向の溝で、北東側をS K4400によって切られる。残存部はわずかであるが、周溝の一部と考えられる。周溝の幅は70～80cm。上部は削平され、明瞭な掘り方は認められない。

出土状況：完形に近い台付壺(2)、高坏などが集中して出土している。ほとんどの個体が接合可能である。

時期：1～2段階

備考：①地区における円形周溝墓の一部と思われる。付近には同様の出土状況を示すS D190が存在する。

第190号溝址 S D190 (第80図)

位置：①-1B1 IIIK-13

形態・規模：東～西方向の弧状の溝の一部。幅は270cmと広いが、明瞭な掘り方は認められない。東側をS D1に切られ、西側は削平を受けて不明である。

出土状況：溝内の約2m×1mの範囲に、完形に近い壺、高坏が集中して出土し、復元可能個体が多い。

時期：0段階

備考：調査時はIIIKグリッドの凹み部として記録されていたが、周囲にS D185など類似遺構が見られるので、①地区における円形周溝墓の一部と判断したい。

第323号溝址 S D323 (第21図)

位置：②-1B VII B-18

形態・規模：ほぼ東～西方向の溝の一部。長さ約6m、幅約160cm、深さ約15cmを検出。両端は調査区外に展開する。

出土状況：覆土中から土器が破片で出土。完形となる個体は見られない。

時期：1段階

備考：S D323周辺は、同時期のS D311、314など類似した溝が検出され、弥生時代後期～古墳時代前期の住居址も確認されている。

第330号溝址 S D330 (第21図)

位置：②-1B VII F-09,10,14

形態・規模：北東～南西方向の溝の一部。長さ約10m、幅約100cm、深さ約10cmで、北東側はS G1に切られる。

出土状況：覆土中から土器が破片で出土。

備考：本溝もS D323同様、弥生時代後期～古墳時代前期は小規模な流路であったのが古墳時代前期以降、付近が滞水し、S G1などの沼地が成立したようである。

第418号溝址 S D418 (第178図)

位置：③-1 VIO-13

形態・規模：北西～南東方向の溝で、長さ約15m、幅約2.5～4m、深さ100～120cmを測る。断面形状

は底部の平坦なすり鉢状で、北西方向は自然消滅する。奈良・平安時代記載参照。

出土状況：古墳時代前期の土器が2層を中心に出土。3層以下では弥生時代後期の土器片がわずかに出土。

時期：6段階

備考：調査時の所見によると、本址は調査区を横断するSD33の下部調査の過程で確認された。1層から奈良・平安時代の遺物が出土し、続く2層の黒褐色層から、古墳時代前期の遺物が出土したため、SD418として調査された。SD418は古墳時代前期までに堆積が進み、それ以降奈良時代までに溝の範囲が広がり、沼状のSD33に移行したものと推定される。

第509号溝址 SD509 (第16図)

位置：①-4B IV-07,08,09

形態・規模：ほぼ東西方向に延び、長さ約25m、幅約150～200cm、深さ約50cmで、断面形状はすり鉢状を呈し、北側が緩やかに立ち上がる。溝の東端は調査区外に延び、西端は途中で検出不能となる。

出土状況：覆土中から土器が破片で出土。

時期：2段階

備考：本溝の約16m北側にはSD551が位置する。SD551は南北方向の軸を持ち、多量の土器が出土している。対照的に本址は遺物の出土量が少ない。

第551号溝址 SD551 (第81・82図)

位置：①-6 IL-20,25、IQ-05,10,15,20,25、IV-05

形態・規模：調査区の北東端に位置し、南北に直線的に延び全長55mを測る。溝址の北端は攪乱により不明瞭となり、南端は南東方向に向きを変え、調査区外に延びる。幅150～220cm、深さ30～50cmで、断面形状はすり鉢状を呈する。

出土状況：底部より浮いた位置で、壺、甕、高坏、台付甕など約100点が出土している。ほぼ完形に近い個体も多いが大半は破片で出土している。遺物分布は他遺構と切り合う部分以外では、ほぼ均等に出土している。

時期：1～2段階

備考：本溝は弥生時代後期集落域の北東端で確認され、集落域の境界的性格が考えられる。

4 焼土址

第6号焼土址 SF6 (第83図)

位置：②-2C IVV-14

形態・規模：長径110cm、短径62cmの不定形な形状を呈する。深さ2～3cmと浅いが、底部に3ヶ所の凹穴が認められた。

出土状況：覆土中より銅鏃(25)が出土している。出土状況など詳細は不明。

第7号焼土址 SF7 (第83図)

位置：②-2C IVV-18

形態・規模：長径140cm、短径110cmの楕円形で、断面形状は深さ17cmの皿状を呈する。S B 253の覆土上面で検出されており、北西側は調査区外となる。上層は灰黄褐色土、下層は炭化物・灰を多く含む褐灰色土で、火を使用した可能性が高い。

出土状況：底部から高坏、鉢などの破片が出土している。

第303号焼土址 S F 303 (第83図)

位置：②-1A VII G-02

形態・規模：長径3m、短径2.5mのやや不整な楕円形で、底部がほぼ平坦なすり鉢状を呈する。深さは30cm程度で、南北の壁は緩やかに立ち上がるが、西側はやや傾斜がきつい。炭化物層は二層あり、褐灰色土を間層として挟む事から、埋没に時間差が考えられる。

出土状況：底部で壺、高坏、甕、鉢などの破片と径10～30cm程の礫が出土している。

時期：1～2段階

備考：S F 304と近接し、出土状況も類似する。

第304号焼土址 S F 304 (第83図)

位置：②-1A VII G-02

形態・規模：長径180cm、短径150cmの楕円形で、断面形状はすり鉢状を呈する。深さは40cm程度で、底部には炭化物が層状に堆積する。北西側は調査区外となる。

出土状況：底部から礫と弥生土器が破片で出土している。

備考：S F 303と近接し、出土状況も類似する。

5 土坑

第703号土坑 S K 703 (第84図)

位置：①-1B2 III P-05

形態・規模：長径90cm、短径80cm、深さ50cmの円形土坑で、断面形状はU字状を呈する。

出土状況：覆土中より小型壺が出土している。

時期：0～2段階

備考：①地区における土坑墓の可能性が考えられる。

第2561号土坑 S K 2561 (第84図)

位置：②-2C VII B-08

形態・規模：長径250cm、短径200cm、深さ約65cmの楕円形の土坑で、断面形状は上面がやや広がったすり鉢状を呈する。土層は5層に分かれ、下層ほど炭化物を多く混入する。

出土状況：覆土中より甕、壺、高坏、鉢などが破片で出土している。

時期：0段階

第3781号土坑 S K 3781 (第85図)

位置：①-1A III P-04

形態・規模：長径170cm、短径90cm、深さ約30cmの楕円形の土坑である。断面形状はタライ状を呈する。

出土状況：底部より膝を屈曲した人骨と、土器片が少量出土している。

備考：①地区における土坑墓である。人骨は成人と考えられるが残存状況が悪く、性別などは不明（第VI章第7節）。

第3783号土坑 SK3783 (第85図)

位置：①-1A III P-04

形態・規模：検出時に人骨が発見され、その範囲をプランとしている。規模は長径40cm、短径20cmを測る。

出土状況：残存状況が悪く、人骨の年齢・性別などは不明。覆土からガラス玉(32)が出土した。

備考：①地区における土坑墓である。

第3875号土坑 SK3875 (第85図)

位置：①-1B2 III K-19

形態・規模：長径140cm、短径90cm、深さ28cmの楕円形の土坑で、断面形状はタライ状を呈する。

出土状況：床面で壺(1、2)が出土している。

時期：0段階

備考：①地区における土坑墓と思われる。

第4421号土坑 SK4421 (第85図)

位置：①-1A III P-14

形態・規模：遺物分布や、周囲との土質の差をもってプランとした。長径120cm、短径60cmの楕円形を呈する。

出土状況：検出時から破片が確認され、底面より壺、小型壺(1、2)が出土した。

時期：0段階

備考：①地区における土坑墓と思われる。

第5331号土坑 SK5331 (第86図)

位置：③-3 VIW-05

形態・規模：長径148cm、短径80cm、深さ34cmのやや不整な楕円形で、断面形状はタライ状を呈する。

出土状況：底面より壺、台付甕、高坏などが出土している。

時期：0段階

備考：③地区における土坑墓と思われる。

第5340号土坑 SK5340 (第86図)

位置：③-3 VIR-18

形態・規模：直径45cm、深さ15cmの円形で、断面形状はタライ状を呈する。

出土状況：底部より小型壺、台付甕、高坏が出土している。

時期：1段階?

備考：小型であるが、③地区における土坑墓か?

第5341号土坑 S K 5341 (第86図)

位 置：③-3 VIR-18

形態・規模：一辺約100cmの隅丸方形を呈するが、上部が削平されているため明確なプランは不明である。深さ20cm程が残存し、断面形状は底部が平坦なすり鉢状を呈する。

出土状況：底部より壺、台付甕、高坏などが出土している。

時 期：1～2段階

備 考：③地区における土坑墓か？

第5343号土坑 S K 5343 (第86図)

位 置：③-3 VIW-10

形態・規模：長径約100cm、短径55cmの東西に長い楕円形で、断面形状は深さ約20cmのタライ状を呈する。

出土状況：底部よりほぼ完形の小型壺や大型壺(1、2)が出土。

時 期：0段階

備 考：③地区における土坑墓と思われる。調査時の記録では、スカシを有する高坏と中型の壺が本遺構出土とされているが、遺構図、写真共に確認されていない。従って、遺構外遺物として紹介する(図版86 VIW10-1 VIW10-2)。

第5345号土坑 S K 5345 (第87図)

位 置：③-3 VIX-01,06

形態・規模：長径200cm、短径120cmの南北に長い楕円形。断面形状は深さ25～30cmのタライ状を呈するが、南側は浅くテラス状となっている。

出土状況：覆土中より完形の小型甕と大型壺の口縁部が出土している。

時 期：0段階

備 考：③地区における墓坑の可能性がある。

第5367号土坑 S K 5367 (第87図)

位 置：③-3 VIR-22

形態・規模：長径180cm、短径110cm、深さ15cmの不整な楕円形で、断面形状はタライ状を呈するが、南西側の壁は緩やかに立ち上がる。

出土状況：覆土上部から、小型壺と大型壺が出土(1、2)。

時 期：0段階

備 考：③地区における土坑墓と思われる。

第5461号土坑 S K 5461 (第87図)

位 置：③-3 VIR-14

形態・規模：長径100cm、短径70cm、深さ15cmの楕円形で、断面形状はタライ状を呈する。

出土状況：覆土中から小型壺と大型壺が破片で出土(1、2)。

時 期：0段階

備 考：③地区における土坑墓と思われる。

第5490号土坑 S K 5490 (第87図)

位置：③-3 VIW-03

形態・規模：長径150cm、短径120cmの楕円形で、断面形状は深さ20cmの緩やかなすり鉢状を呈する。

出土状況：底部より壺、高坏、甕が破片で出土。接合可能な個体が多い。

時期：0段階

備考：③地区における土坑墓と思われる。

第7078号土坑 S K 7078 (第88図)

位置：①-1C III L-21

形態・規模：長径240cm、短径95cmの東西に細長い楕円形で、断面形状は深さ20～30cmの底部が平坦なすり鉢状を呈する。南西側はやや浅く、テラス状の部分が認められた。

出土状況：底部より完形の小型壺(1)が出土している。

時期：0段階

備考：①地区における周溝墓の一部、もしくは土坑墓と考えられる。

第7147号土坑 S K 7147 (第88図)

位置：①-1C III L-21,22

形態・規模：長径200cm、短径140cmの東西に長い不整形で、深さ10cm弱の浅い皿状の遺構である。

出土状況：覆土中より径9cm程のミニチュア坏(1、2)が完形で2点出土している。

時期：0段階

備考：①地区における土坑墓か？ S K 7148に切られる。

第7148号土坑 S K 7148 (第88図)

位置：①-1C III L-21,22

形態・規模：長径75cm、短径65cmのほぼ円形の遺構で、断面形状は深さ25cmのU字状を呈する。東側はやや浅くテラス状となっている。

出土状況：底部より甕が出土している。

時期：0～2段階

備考：S K 7147を切る。

第7152号土坑 S K 7152 (第88図)

位置：①-1C III Q-11

形態・規模：約4mの北東～南方向に弧状に延びる遺構で、長径方向は緩やかに立ち上がる。最も広い部分は幅120cm、深さ35cmですり鉢状を呈する。

出土状況：覆土上部より高坏の脚部が出土している。

時期：0段階

備考：土坑扱いではあるが、①地区における周溝墓の可能性が考えられる。

第7236号土坑 S K 7236 (第88図)

位置：①-1C III Q-11,16

形態・規模：北東～南西方向に延びる長径385cm、短径100cmの細長い遺構。断面形状は深さ15cmの皿状を呈する。

出土状況：底部より甕が出土している。

時期：4段階？

備考：土坑扱いではあるが、①地区における周溝墓の可能性が考えられる。

第14557号土坑 S K 14557 (第89図)

位置：②-4 IVS-03,08

形態・規模：長径200cm、短径120cmの楕円形で、深さ20cmのタライ状を呈する。

出土状況：底部より大型の台付壺、甕が破片で出土。

第16700号土坑 S K 16700 (第89図)

位置：②-1B IVW-13,18

形態・規模：本遺構は炭化米が半径5m以上の範囲に分布する状態で検出され、精査の結果、一辺約2.5mのほぼ正方形のプラン内に集中することが判明した。断面形状は深さ約50cmのタライ状を呈するが、壁上部は緩やかに立ち上がり、特に南側では上部が漏斗状に広がっている。北西の壁上部には径10～15cm、深さ5～10cmの小ピットが斜め方向に確認される。南東側にも同様のピットがテラス上に検出されていることから、上屋構造の存在が推定されよう。土坑の壁面に火を受けた痕跡はない。

出土状況：土器片と約63kgの炭化米が出土している。炭化米は検出面においても分布しているが、層位毎の出土量を見ると、1～4層で約16kg、5層が約41kgで、6層からは出土していない。残りの約6kgはトレンチからの出土である。5層が米の貯蔵層と考えられるが、米は粒状で出土し、稲穂状のものは確認されていない。また、木片や繊維なども検出されていない。出土した炭化米は計量した結果、下層ほど重量があることから、洪水などによって、貯蔵されていた米が溢したものと考えられよう。炭化米層上部から破片で壺・甕(1、2、4)と鹿角が出土し、底部から鉢、高坏、甕(7、8、9、10)などが破片で出土している。

時期：3～4段階

備考：出土状況から米の貯蔵施設と考えられる。本遺構や、井戸のS K 16712は②地区の集落域内で検出されている。

第16712号土坑 S K 16712 (第90図)

位置：②-1A IVW-22

形態・規模：調査区境に位置し、全体のほぼ1/4を検出した。検出面での掘り方の直径は約2.5m、底部までの深さ約1mで、逆台形を呈する。底部には直径約55cmの木杵が出土し、出土状況から、くり抜きの井戸杵が埋設されていたものと考えられる。井戸杵は幅2～8cm、最大長51cmで、最深部は検出面から1.2mを測る。

出土状況：井戸杵内より壺、高坏、甕、ミニチュア土器が出土している。

時期：0段階

備考：本遺構や、米貯蔵施設と思われるS K 16700は②地区の集落域内で検出されている。

6 沼址

第2号沼址 S G 2 (第15図)

位 置：①-5 I K-01～I L-03

形態・規模：古墳時代中期～後期の事実記載を参照

時 期：弥生時代後期～古墳時代前期・古墳Ⅰ～Ⅴ期（Ⅱ期中心）

備 考：S G 2は古墳Ⅰ期以降の遺物が主体的に出土するが、弥生時代後期～古墳時代前期の破片も少量見られる。出土層については詳細不明であるが、S G 2は弥生時代後期以降は流路であったと推測される。

第3号沼址 S G 3 (第93図～第108図)

位 置：②-3 A・3 B、②-5 I VI-18～25、I VJ-08～23、I VW-02～09、I VO-01,02

形態・規模：古墳時代中期～後期の事実記載を参照

出土状況：S G 3は古墳時代の遺物が主体的に出土しており、弥生時代後期の遺物はX V～X VI層より若干出土している。

備 考：S G 3のX V～X VI層は砂層と粘土層が交互に堆積しており、該期には流路であったと思われる。

7 不明遺構

第507号不明遺構 S X 507 (第91図)

位 置：①-4C I P-09、14

形態・規模：長径約8m、短径1.6mの南北に細長い範囲に遺物が集中して分布する。上部は削平されたものと思われ、掘り方など明確なプランは認められなかった。

出土状況：検出面において壺、甕、高坏、鉢などが破片で出土する。接合可能な破片が多い。

時 期：1～2段階

第509号不明遺構 S X 509 (第91図)

位 置：①-6 I L-25

形態・規模：長径215cm、短径90cm、深さ約20cmの楕円形で、断面形状はタライ状を呈するが、壁は比較的緩やかに立ち上がる。底部には炭層が認められる。

出土状況：覆土中より高坏脚部が出土。

時 期：1～2段階

第510号不明遺構 S X 510 (第91図)

位 置：①-6 I V-05

形態・規模：長径120cm、短径63cm、深さ約25cmで、南東側をS D 510によって切られるが楕円形と思われる。底部は北側に円形の落ち込みがみられる。

出土状況：覆土中より小型の甕片が出土。

第511号不明遺構 SX511 (第91図)

位 置：①-6 IV-04

形態・規模：長径190cm、短径100cm、深さ約47cmの東西に長い楕円形で、断面形状は中央部が円形に落ち込む漏斗状を呈する。

出土状況：覆土中より甕口縁部が出土。

時 期：1～2段階

第513号不明遺構 SX513 (第92図)

位 置：①-1A III P-02

形態・規模：一辺約5mの三角形に近い不整形で、底面には凹凸が見られる。深さは20～40cmで、壁面は緩やかに立ち上がる。住居址の可能性もあるが、過年度調査時の攪乱により、当初のプランは確認できなかった。小ピットが4基検出されているが、本址に伴うものか不明である。

出土状況：ほぼ床面から大小の壺(2、3、4)、甕(5、7)、高坏(6)などが破片で出土している。

時 期：3～4段階

備 考：①地区の墓域付近に位置し、遺物に小型壺が含まれるなど、墓域との関連が窺える。

第514号不明遺構 SX514 (第92図)

位 置：②-4 IVS-12

形態・規模：住居址に挟まれた検出面に遺物が破片で散在しているが、プランは確認できなかった。径50cmの、炭化物を覆土とする落ち込みも認められたが、焼土は検出されていない。調査時は住居址としたが、整理作業で不明遺構として扱うこととした。

出土状況：甕、高坏、甗などが検出面より破片で出土。

時 期：3～4段階

第516号不明遺構 SX516 (第17図)

位 置：①-1A III P-01

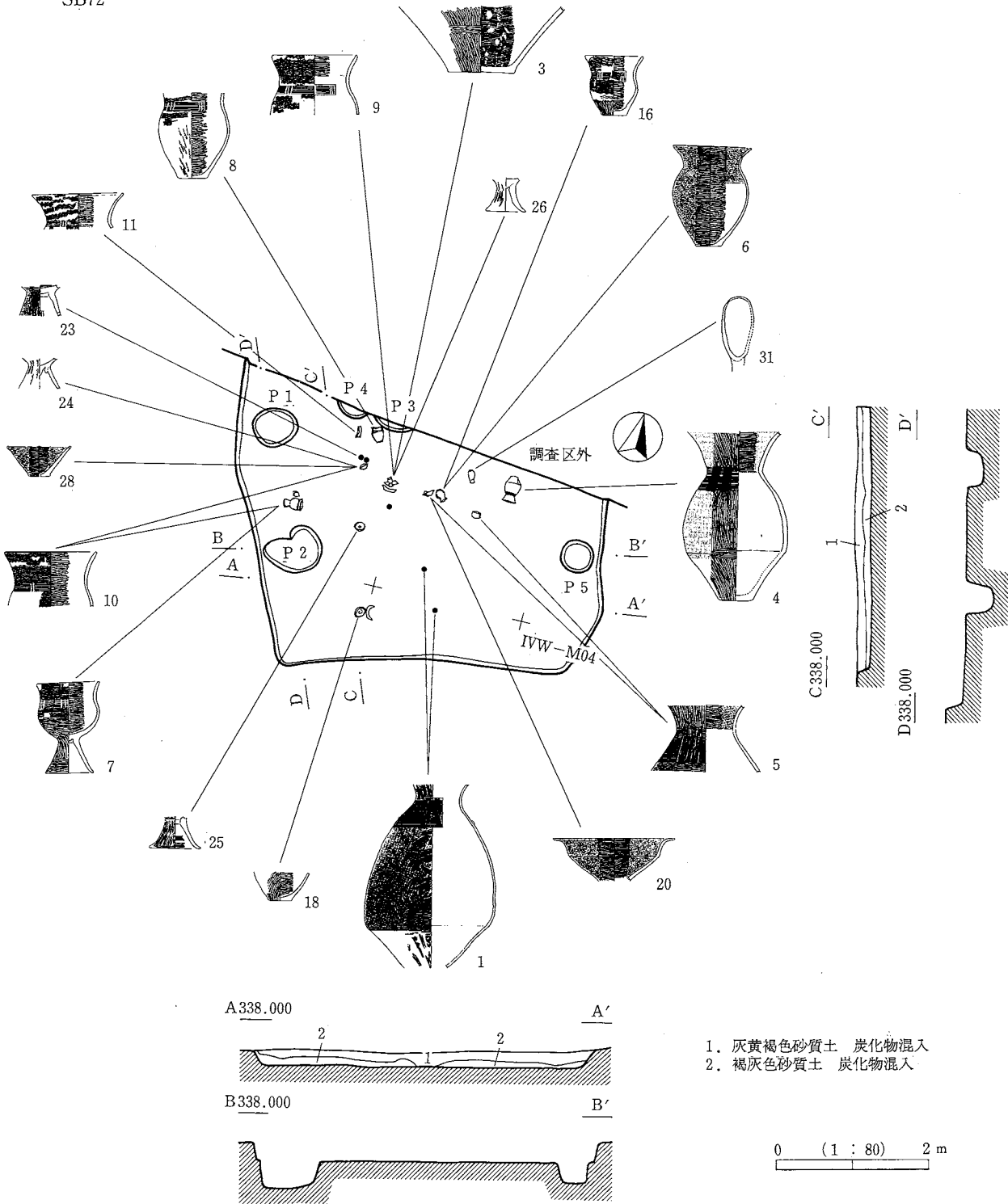
形態・規模：長さ約290cm、幅は残存部で約80cmを測る。北東～南西方向に延びる溝状遺構。南東部分はSB637に切られる。深さは約20cm。

出土状況：覆土中より赤色塗彩された完形に近い大小の壺が出土(1、2)。

時 期：3段階

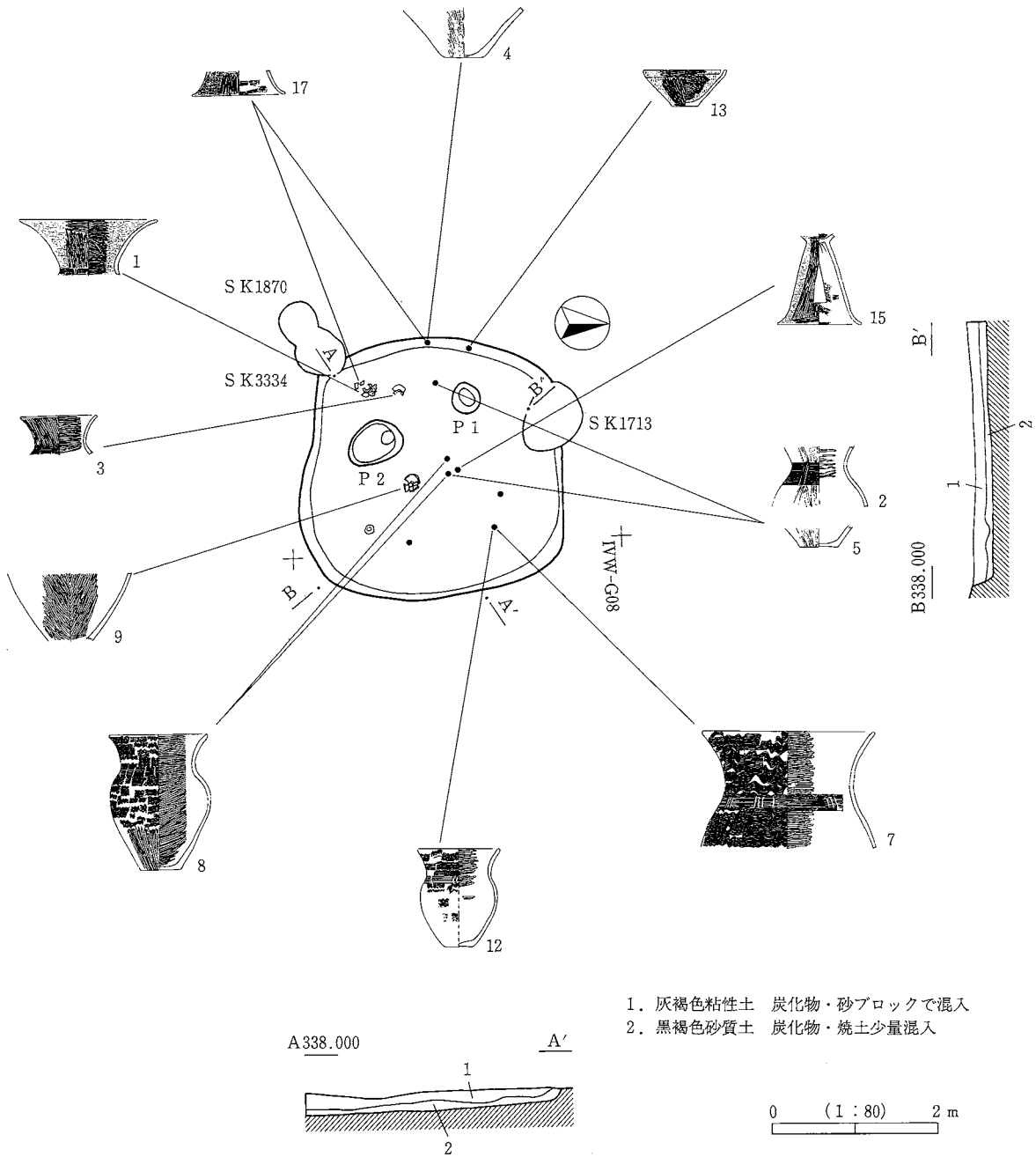
備 考：SXとして登録されているが、遺構の形状、遺物などから①地区における周溝墓の可能性が考えられる。

SB72



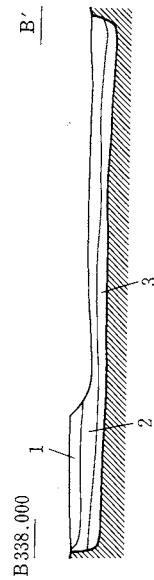
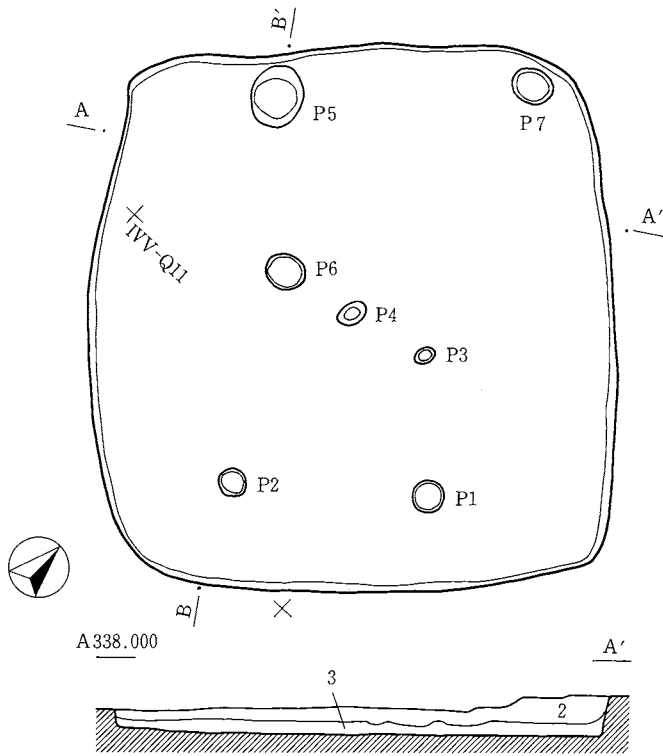
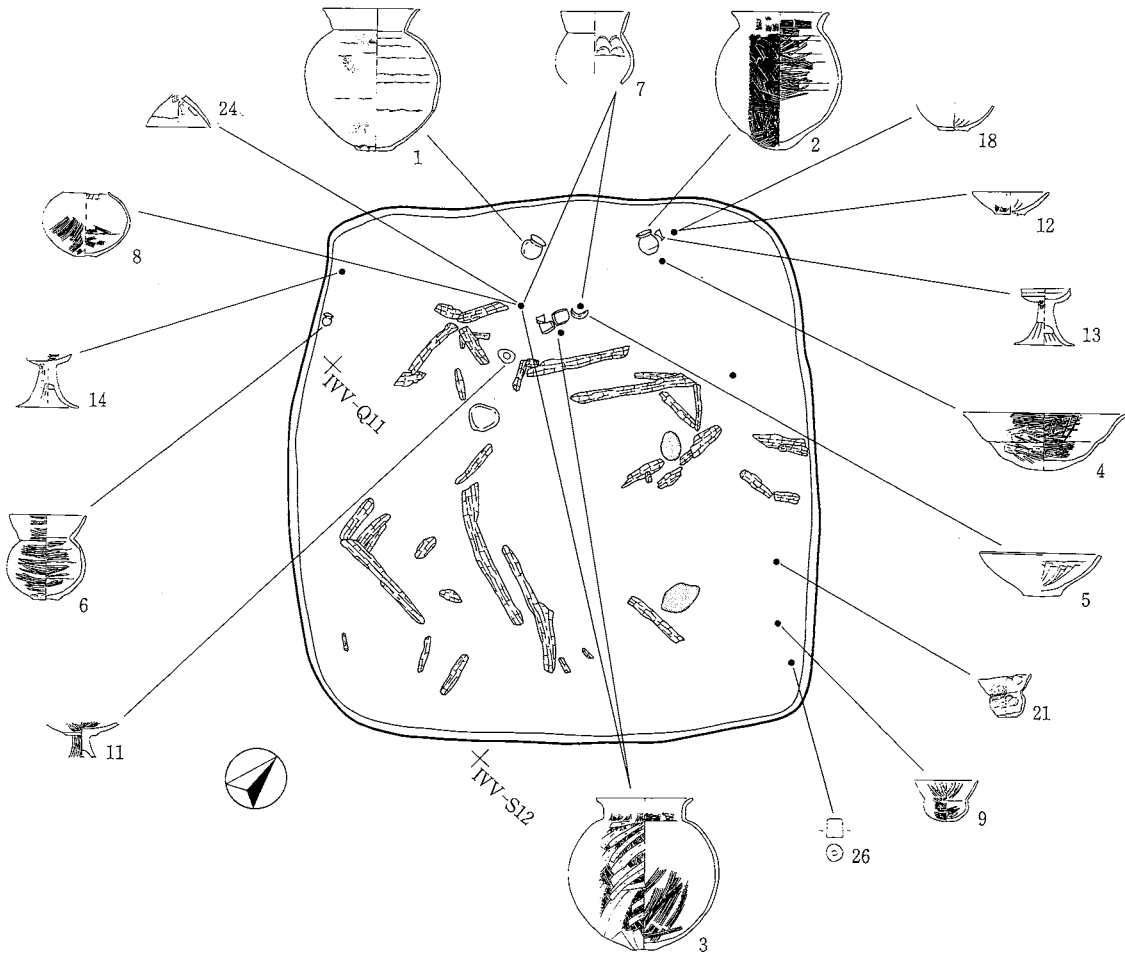
第53図 SB72実測図

SB81



第54図 SB81実測図

SB85

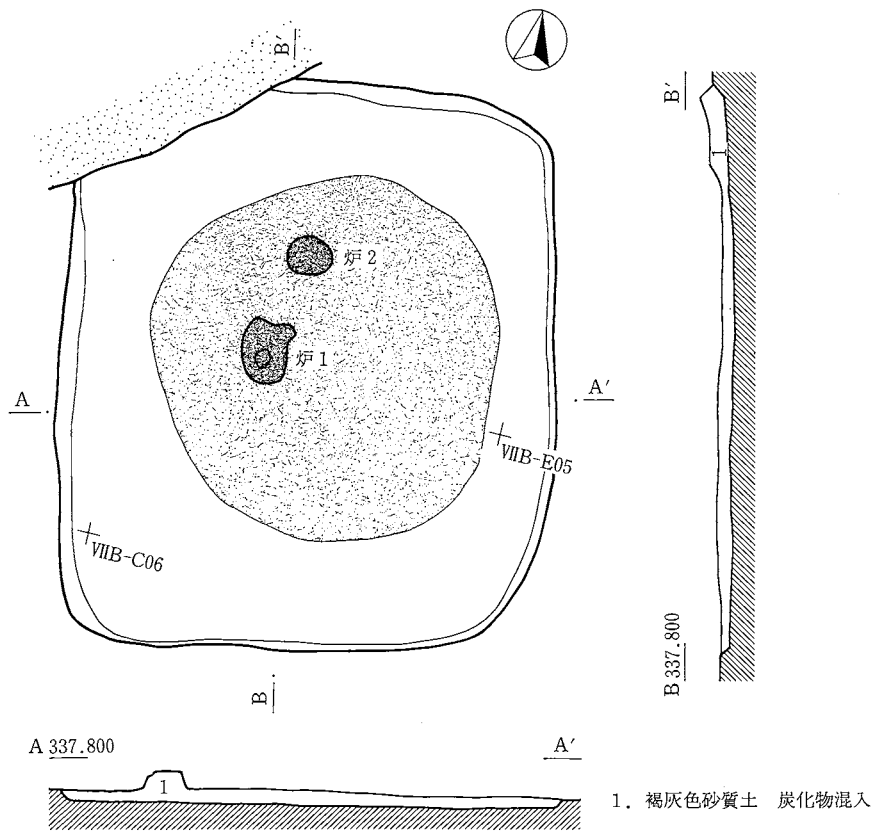


1. 褐灰色砂質土 炭化物・焼土少量混入
2. にくい黄褐色砂質土 炭化物混入
3. 黒褐色土 下位炭化物・炭化材混入

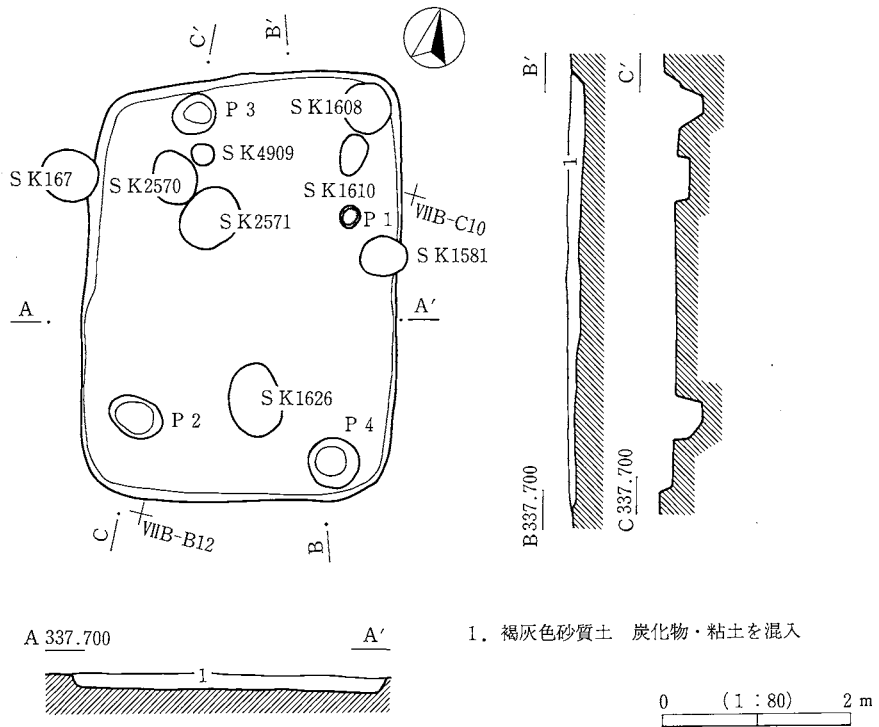
0 (1:80) 2 m

第55図 SB85実測図

SB122

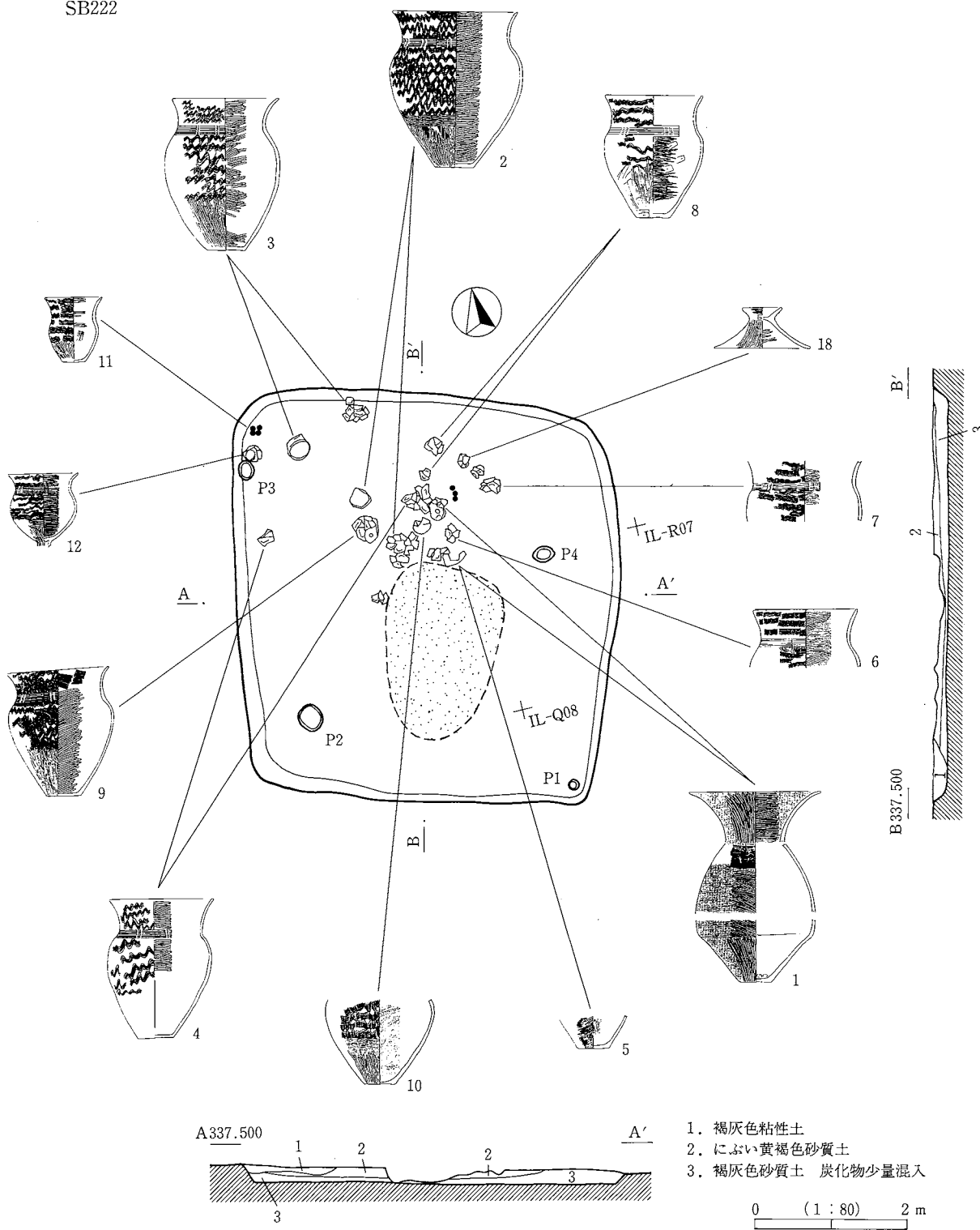


SB124



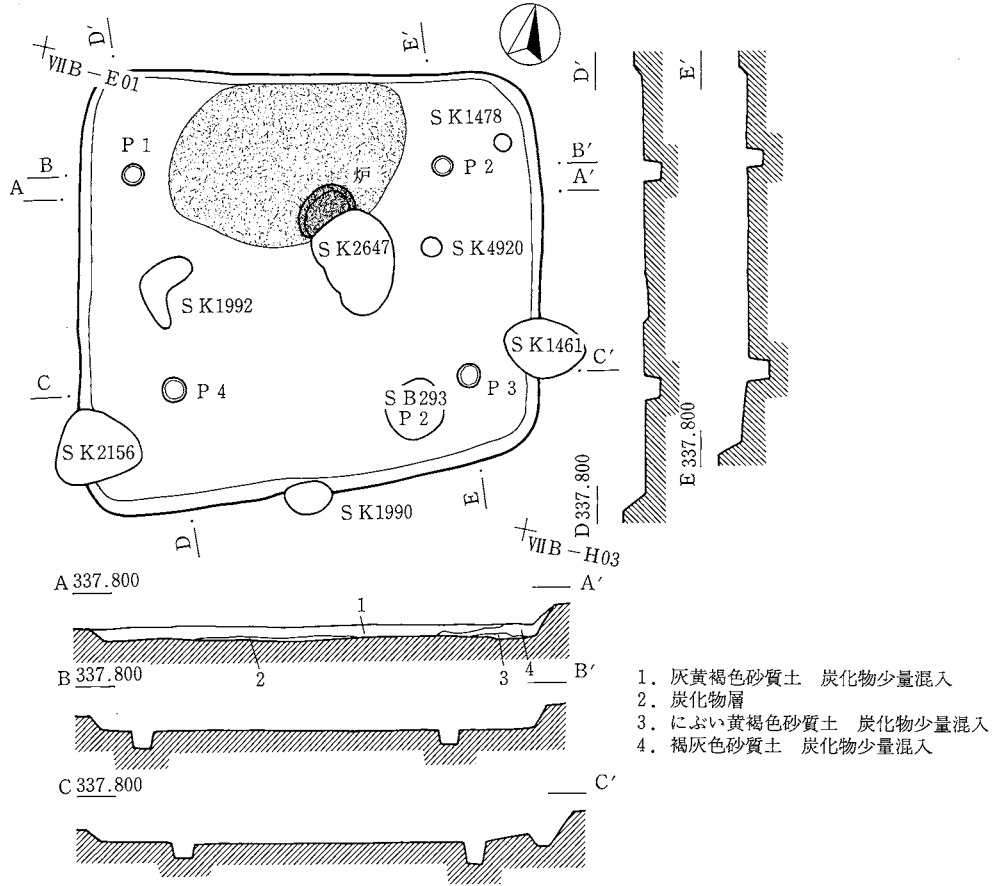
第56図 SB122・124実測図

SB222

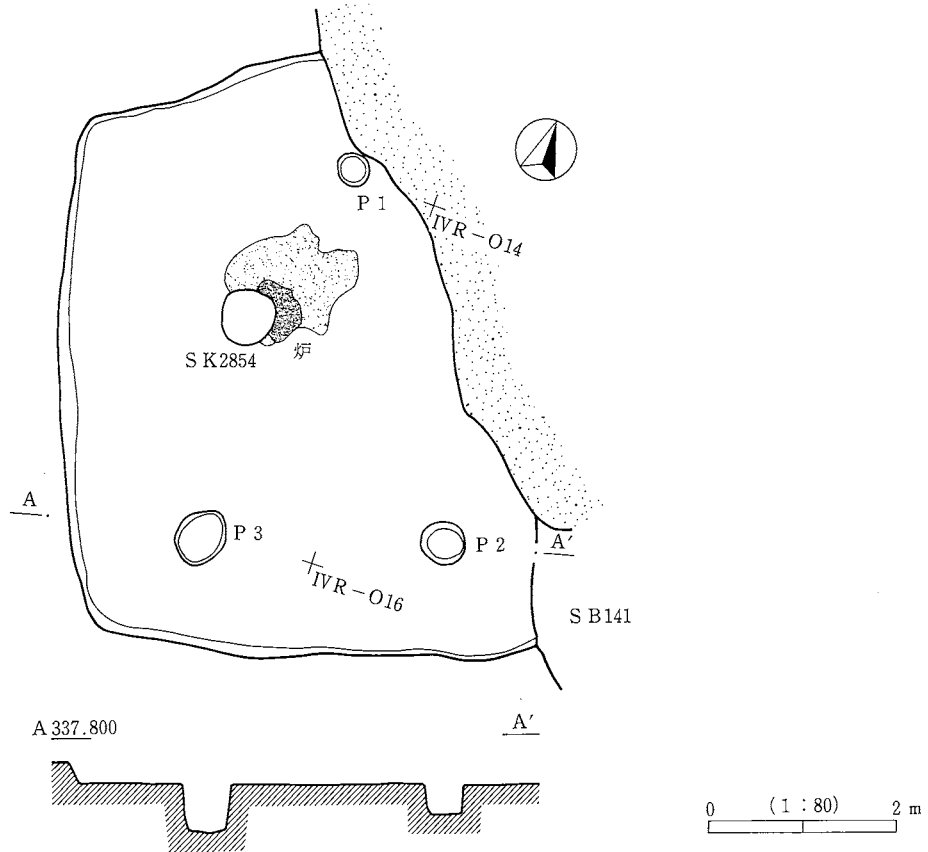


第57図 SB222実測図

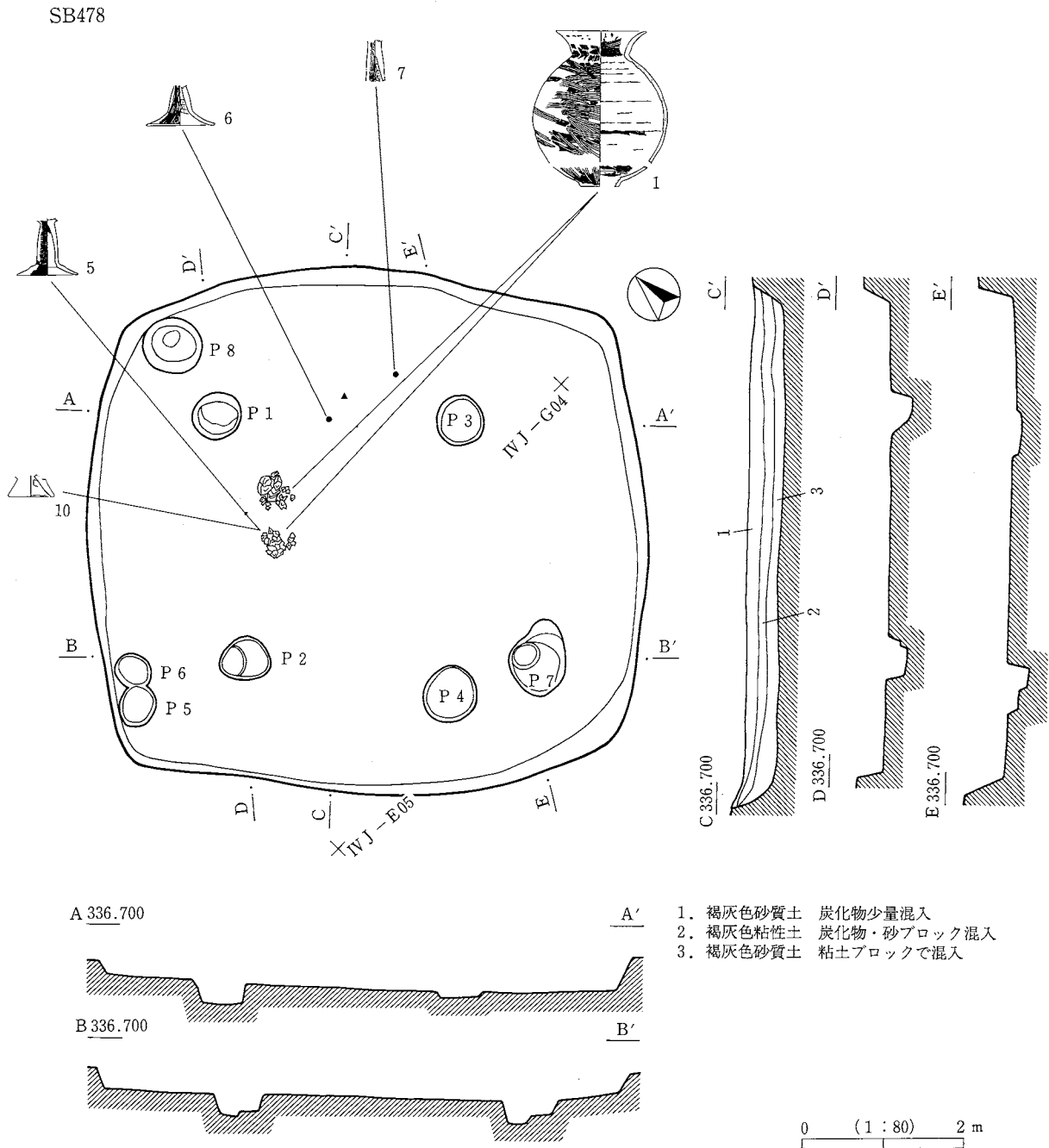
SB297



SB302

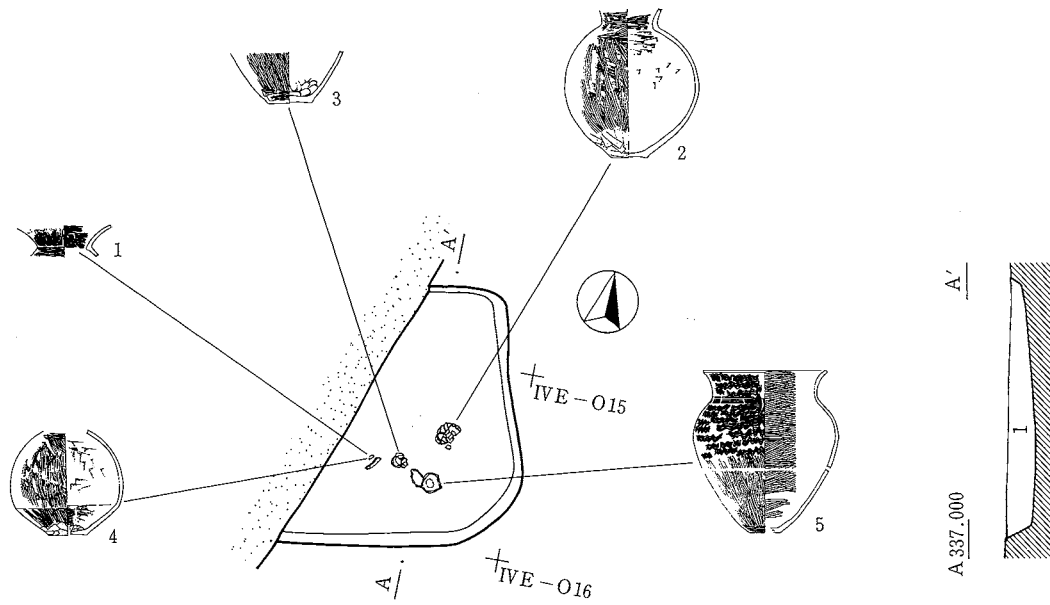


第58図 SB297・302実測図



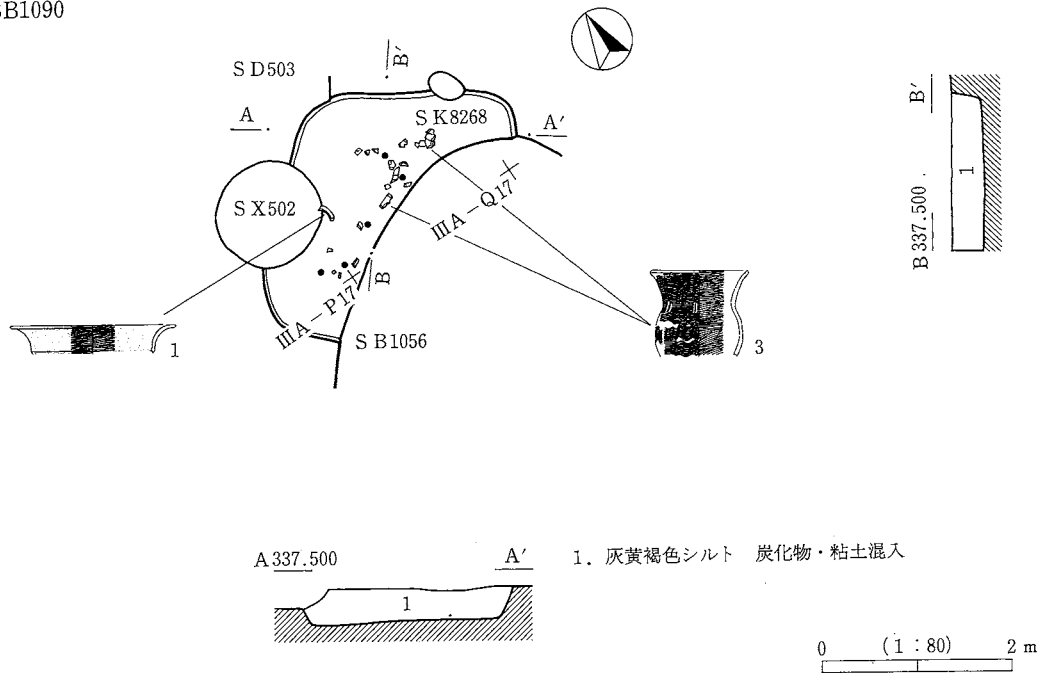
第59図 SB478実測図

SB830



1. 灰色シルト 下位炭化物を混入

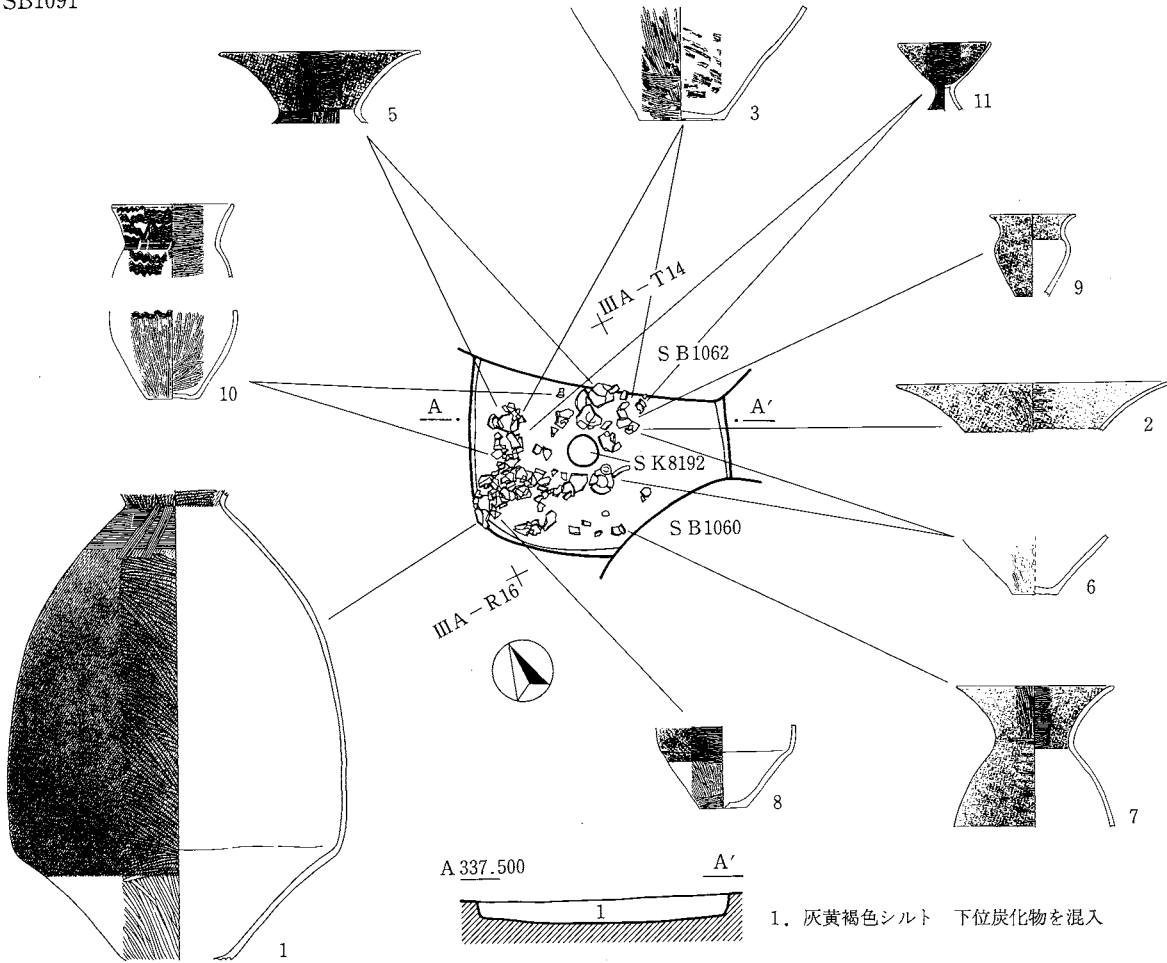
SB1090



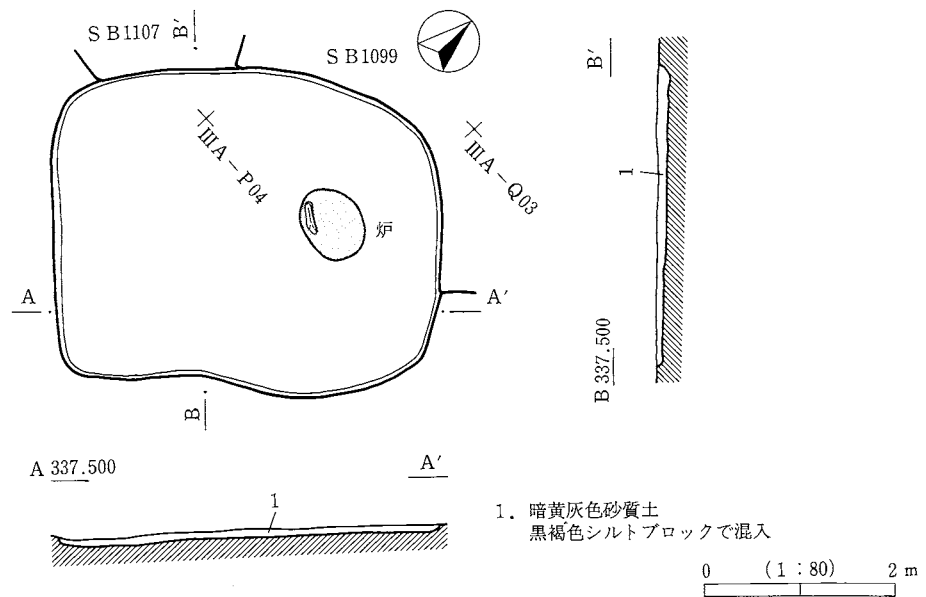
1. 灰黄褐色シルト 炭化物・粘土混入

第60図 SB830・1090実測図

SB1091

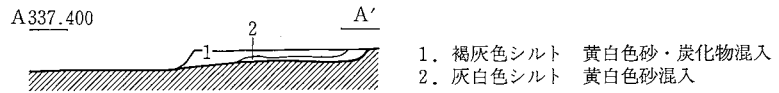
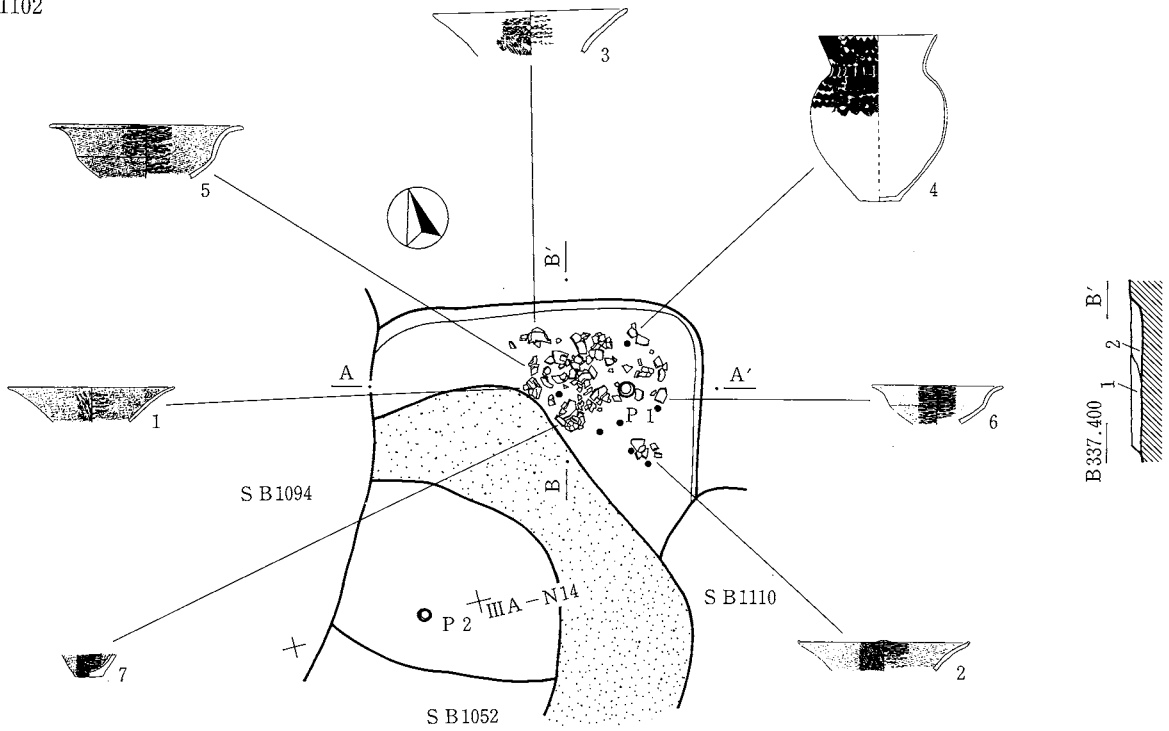


SB1101

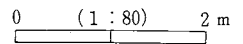
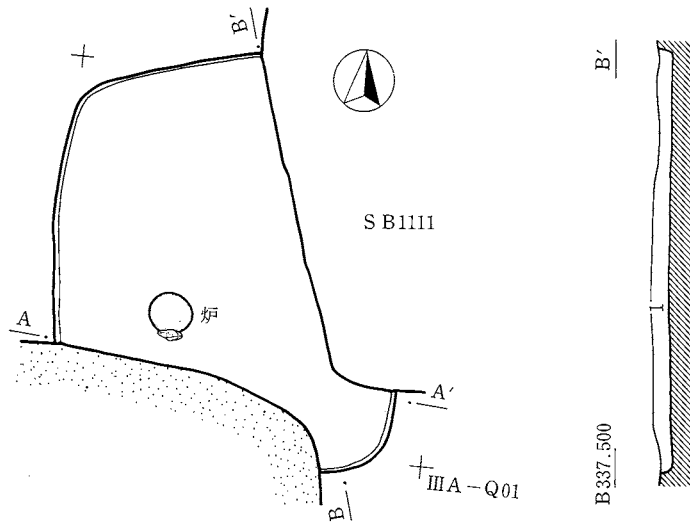


第61図 SB1091・SB1101実測図

SB1102

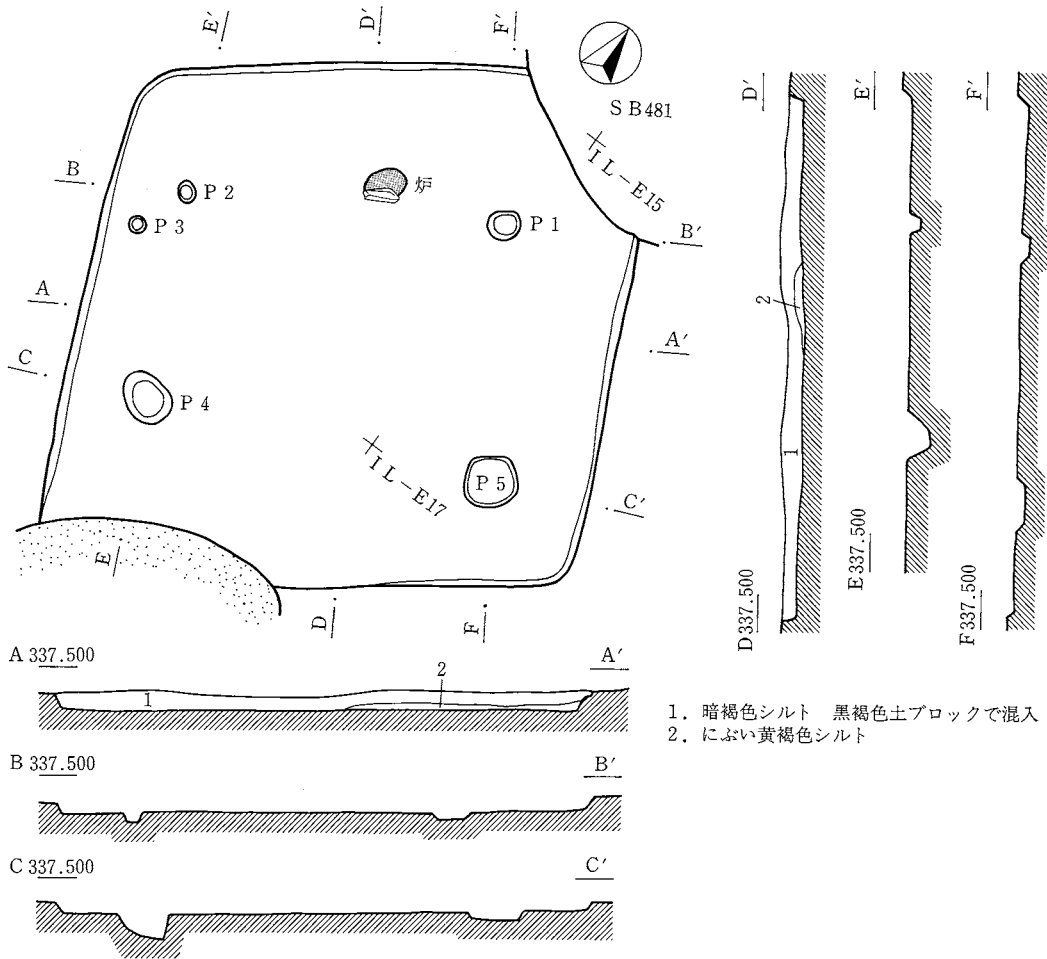


SB1114



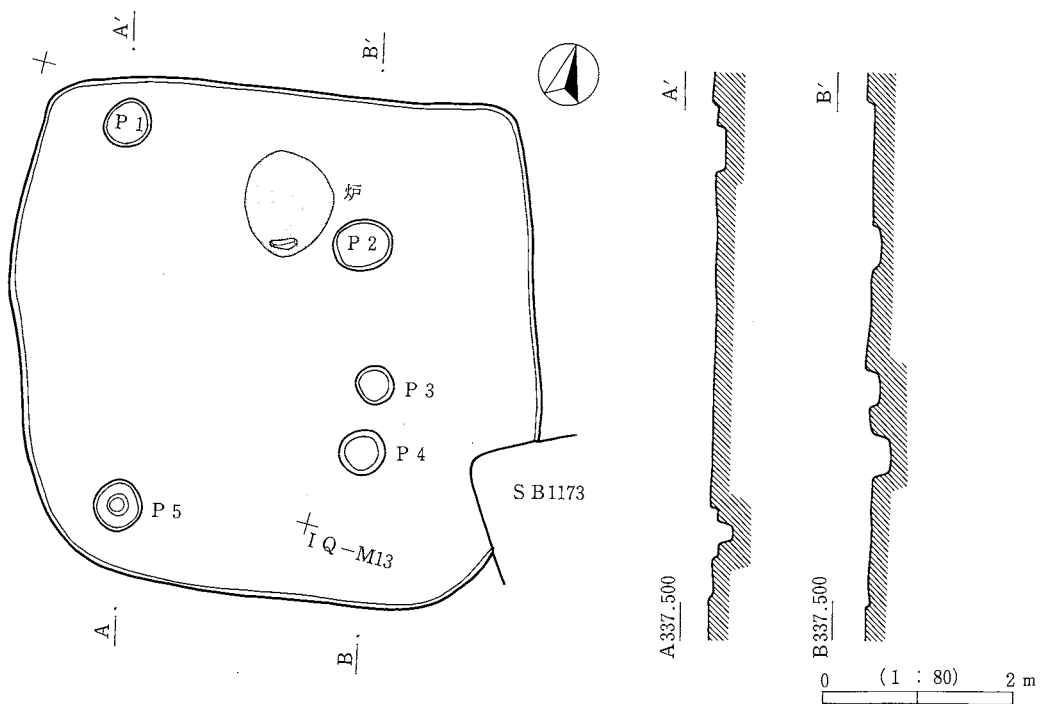
第62図 SB1102・1114実測図

SB1185



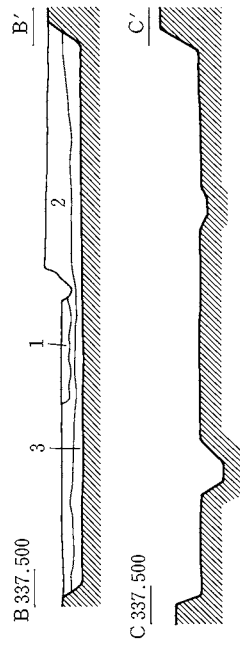
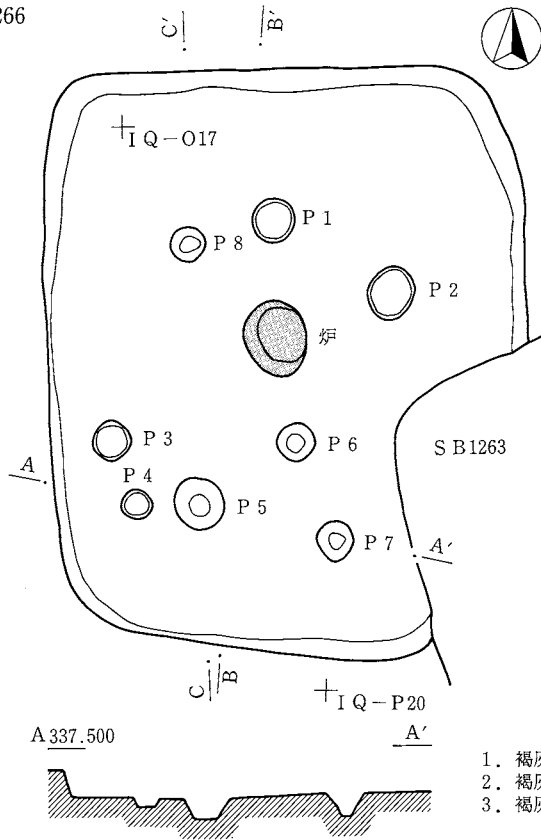
1. 暗褐色シルト 黒褐色土ブロックで混入
2. にぶい黄褐色シルト

SB1188



第63図 SB1185・1188実測図

SB1266

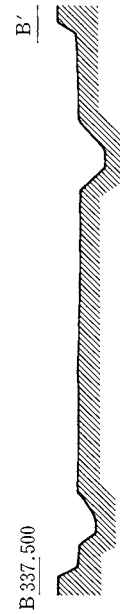
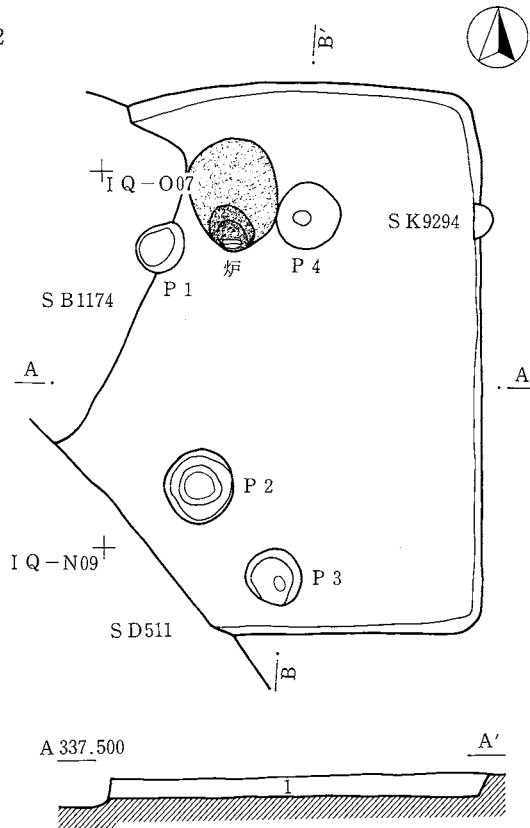


A 337.500

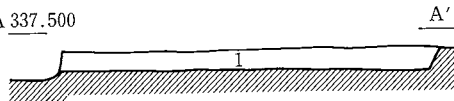


- 1. 褐灰色砂質土 黒褐色土ブロックで混入
- 2. 褐灰色砂質土
- 3. 褐灰色砂質土 黒色土・浅黄橙色土ブロック炭化物混入

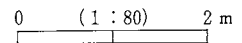
SB1272



A 337.500

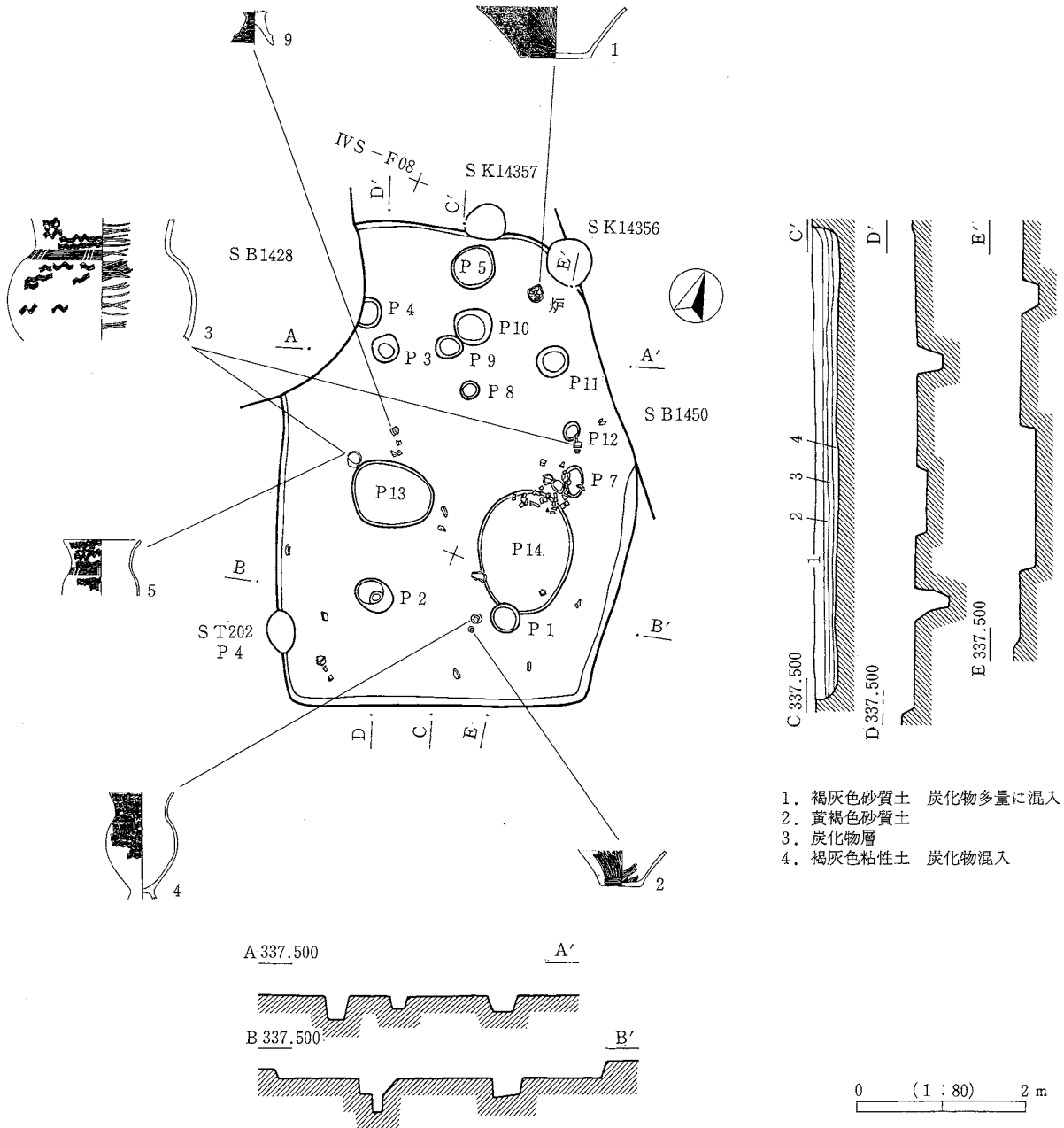


- 1. におい黄褐色砂質土、炭化物少量混入



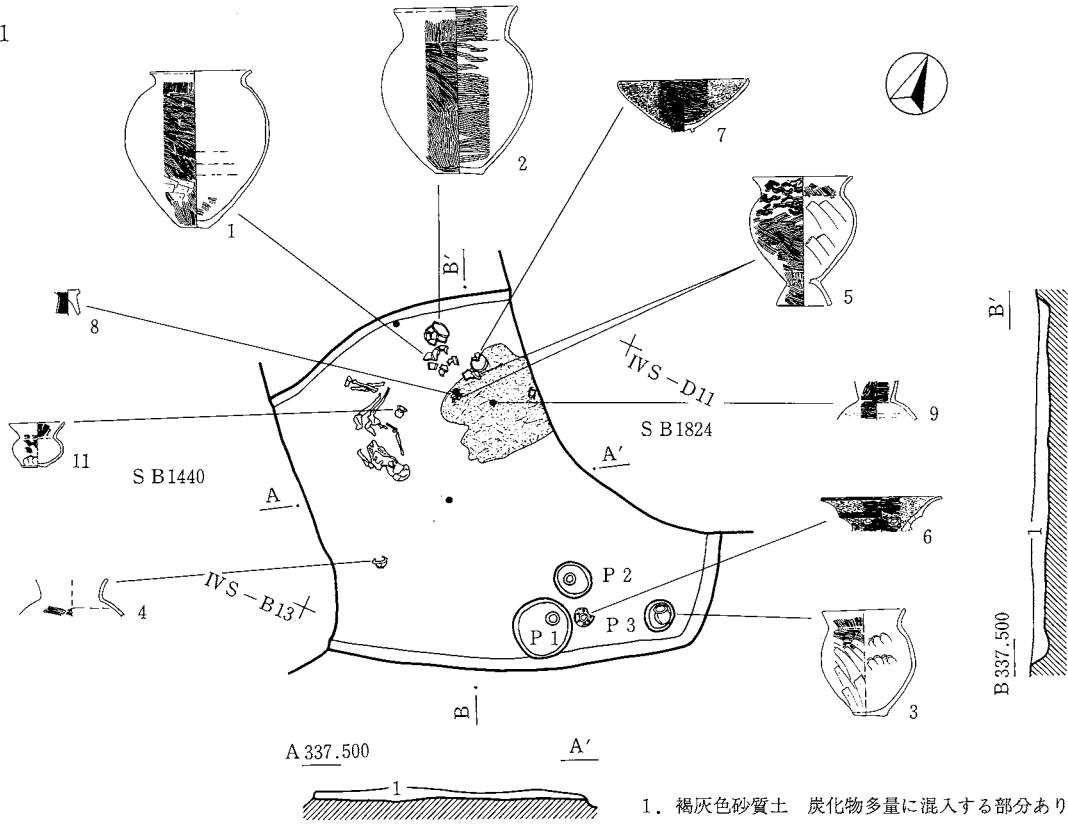
第64図 SB1266・1272実測図

SB1431

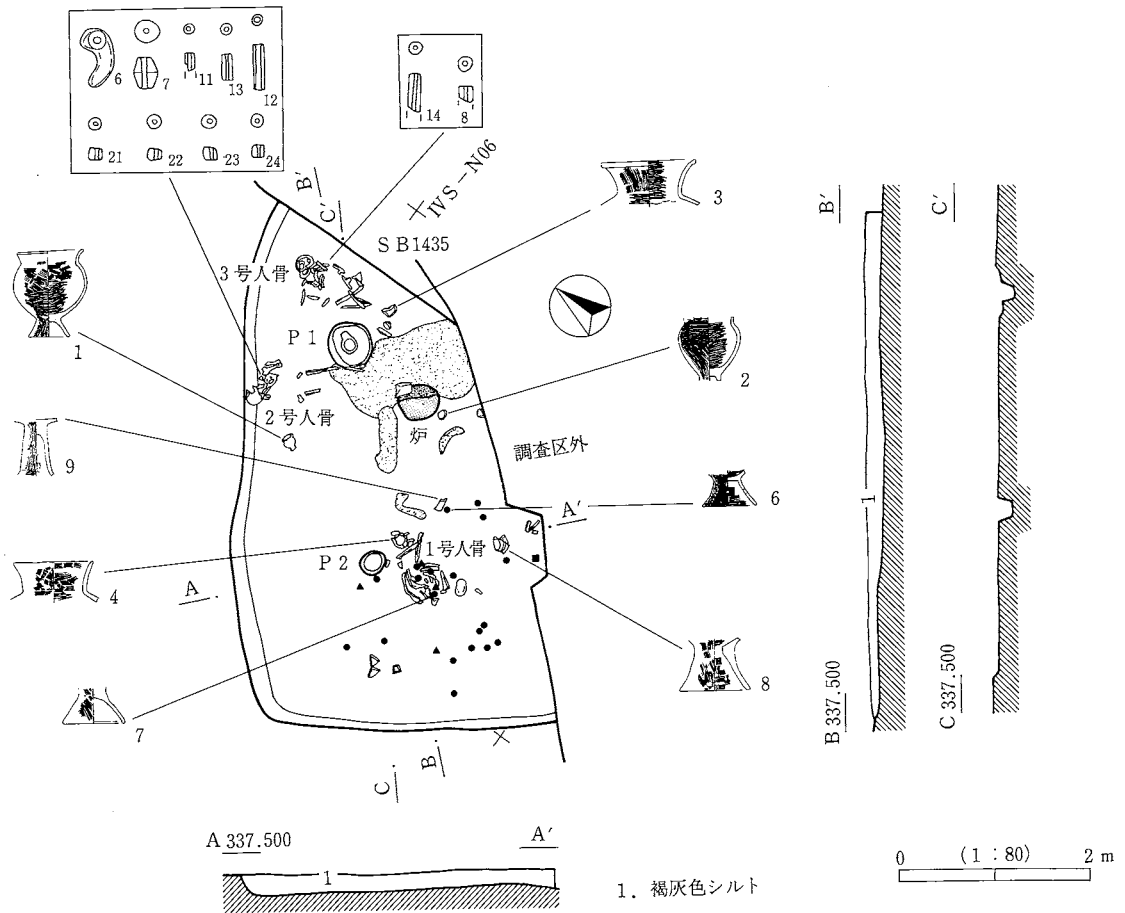


第65図 SB1431実測図

SB1441

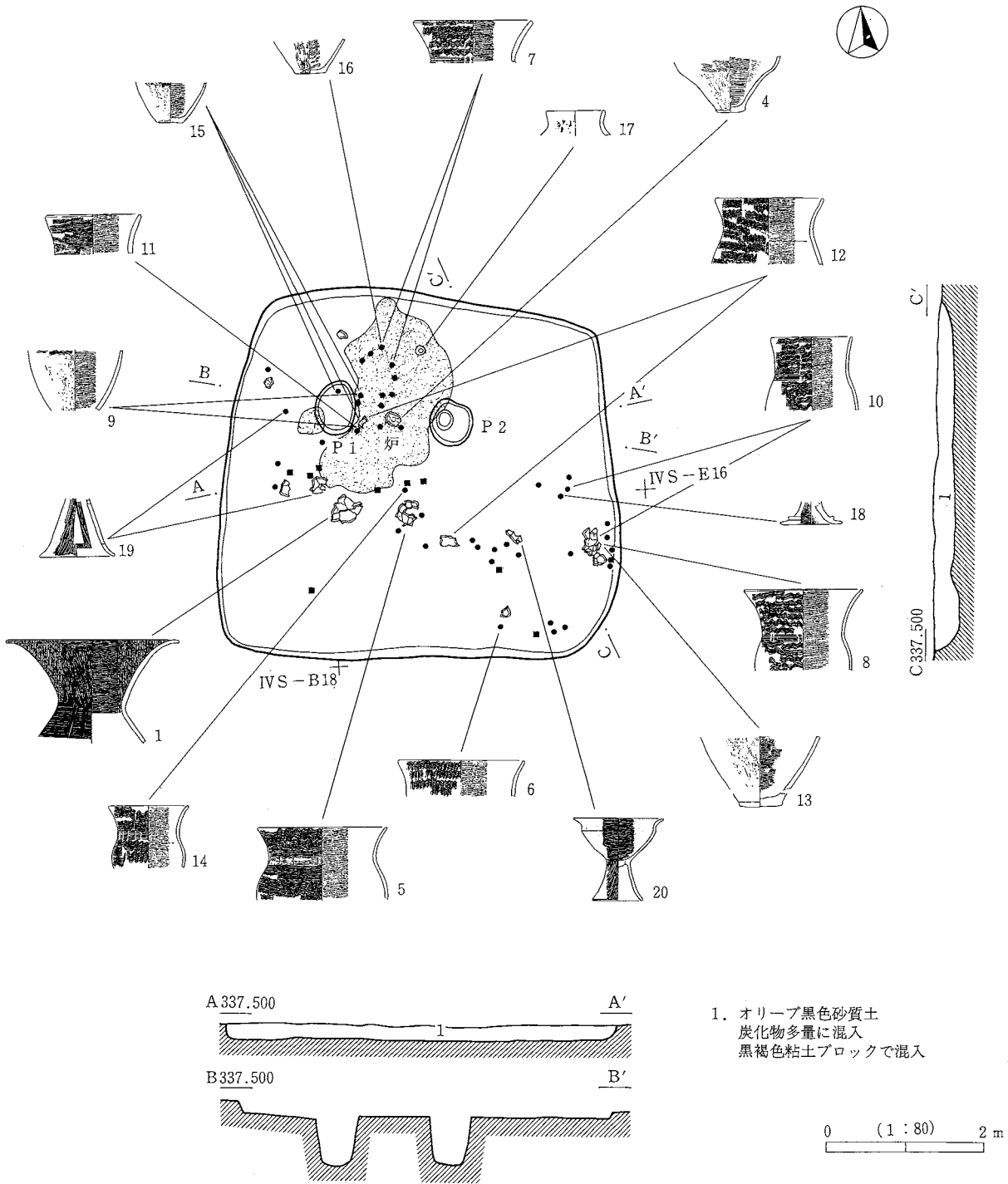


SB1447



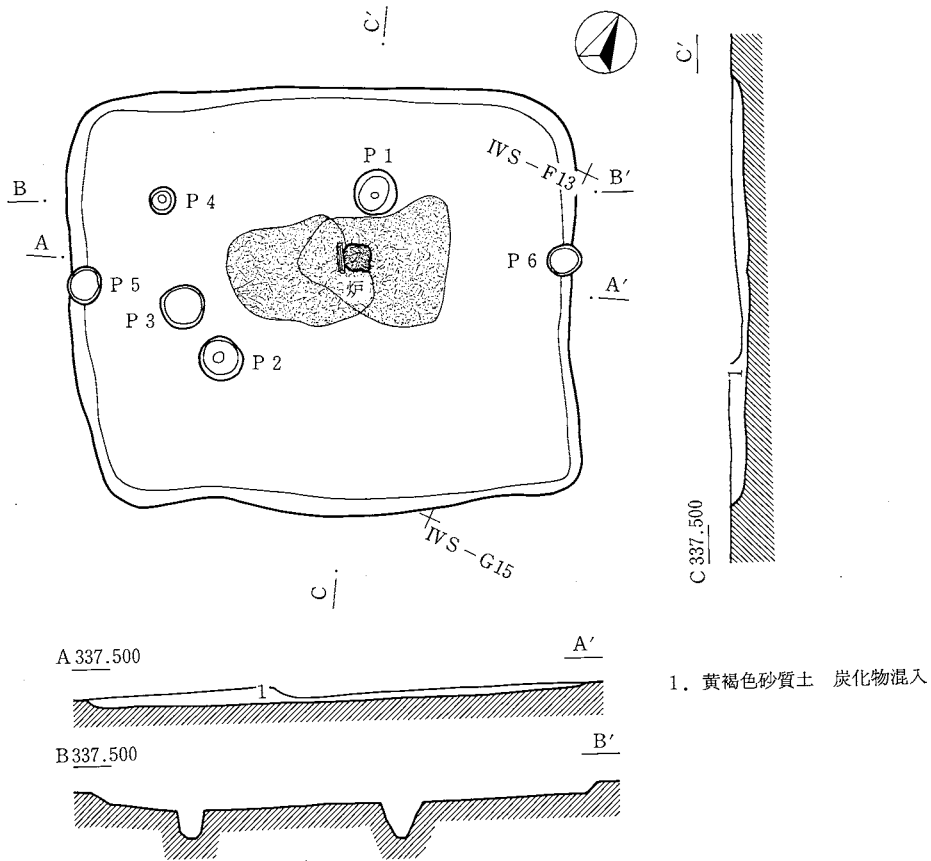
第66図 SB1441・1447実測図

SB1448

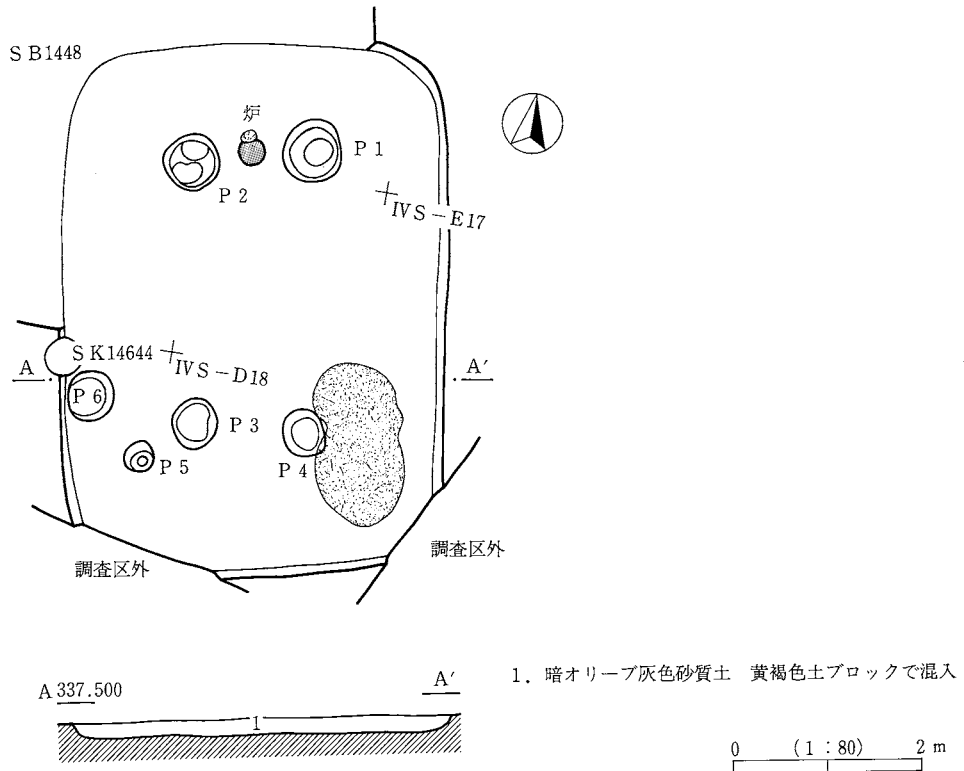


第67図 SB1448実測図

SB1453

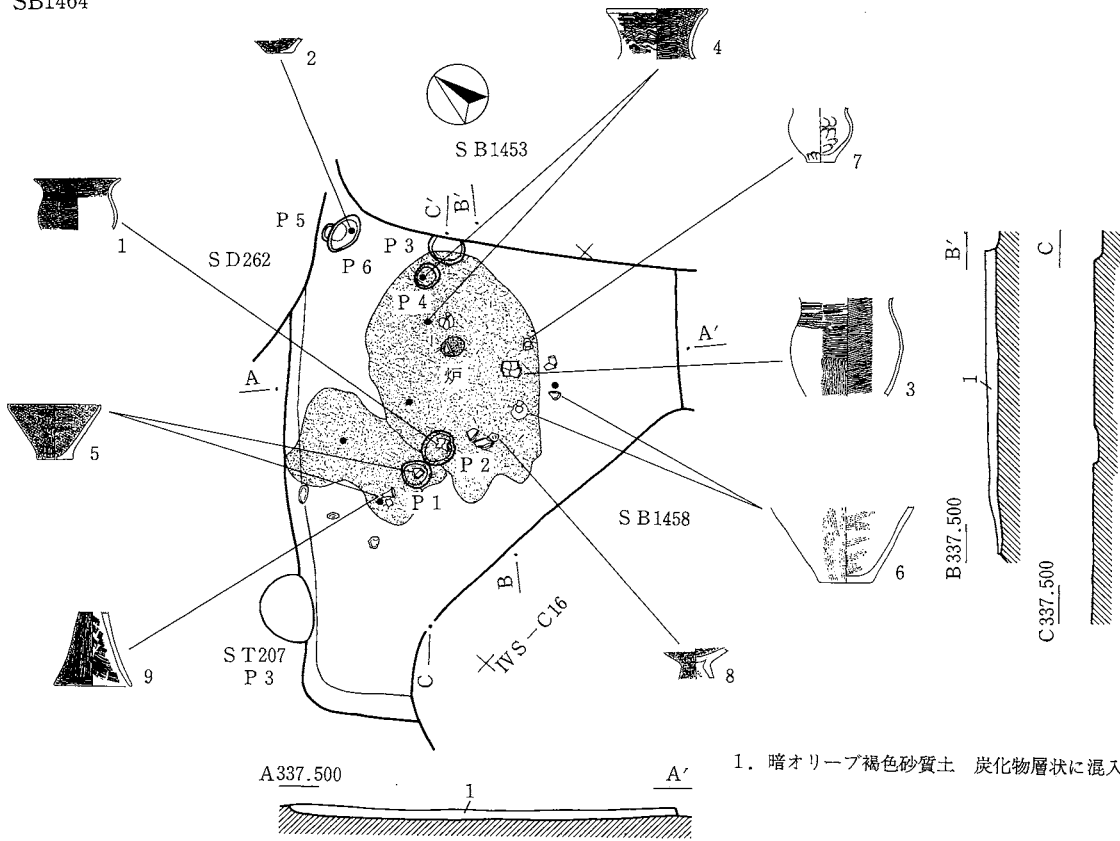


SB1454

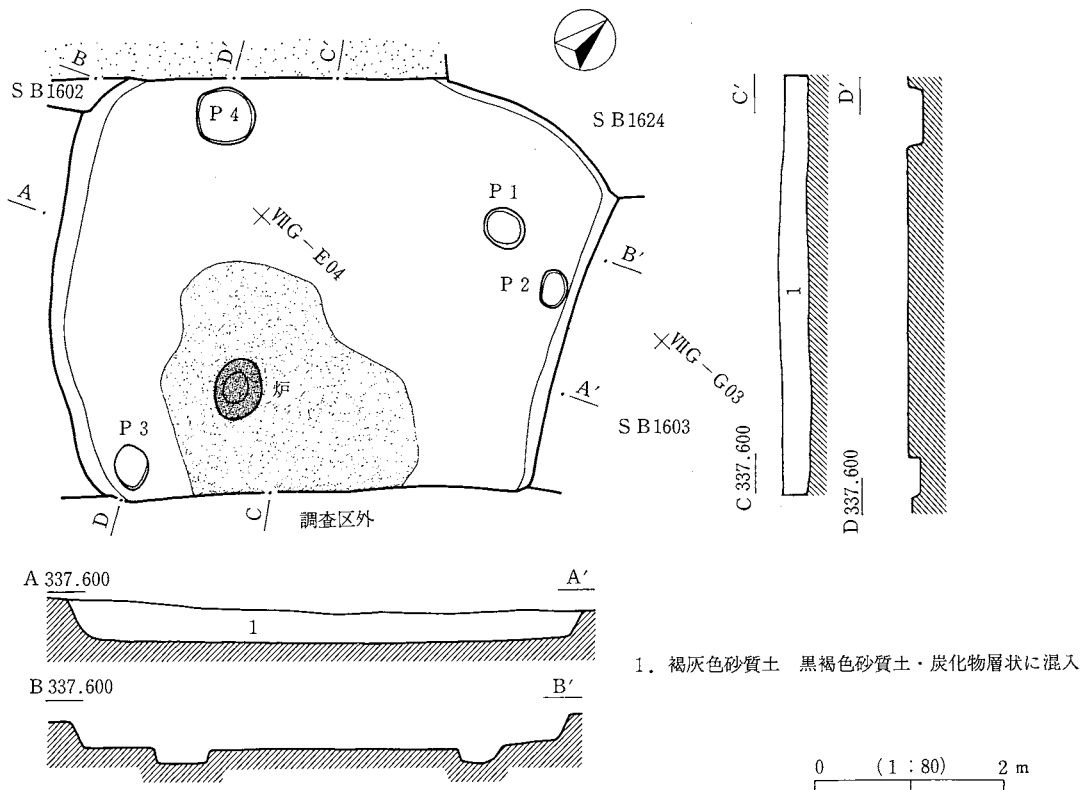


第68図 SB1453・1454実測図

SB1464

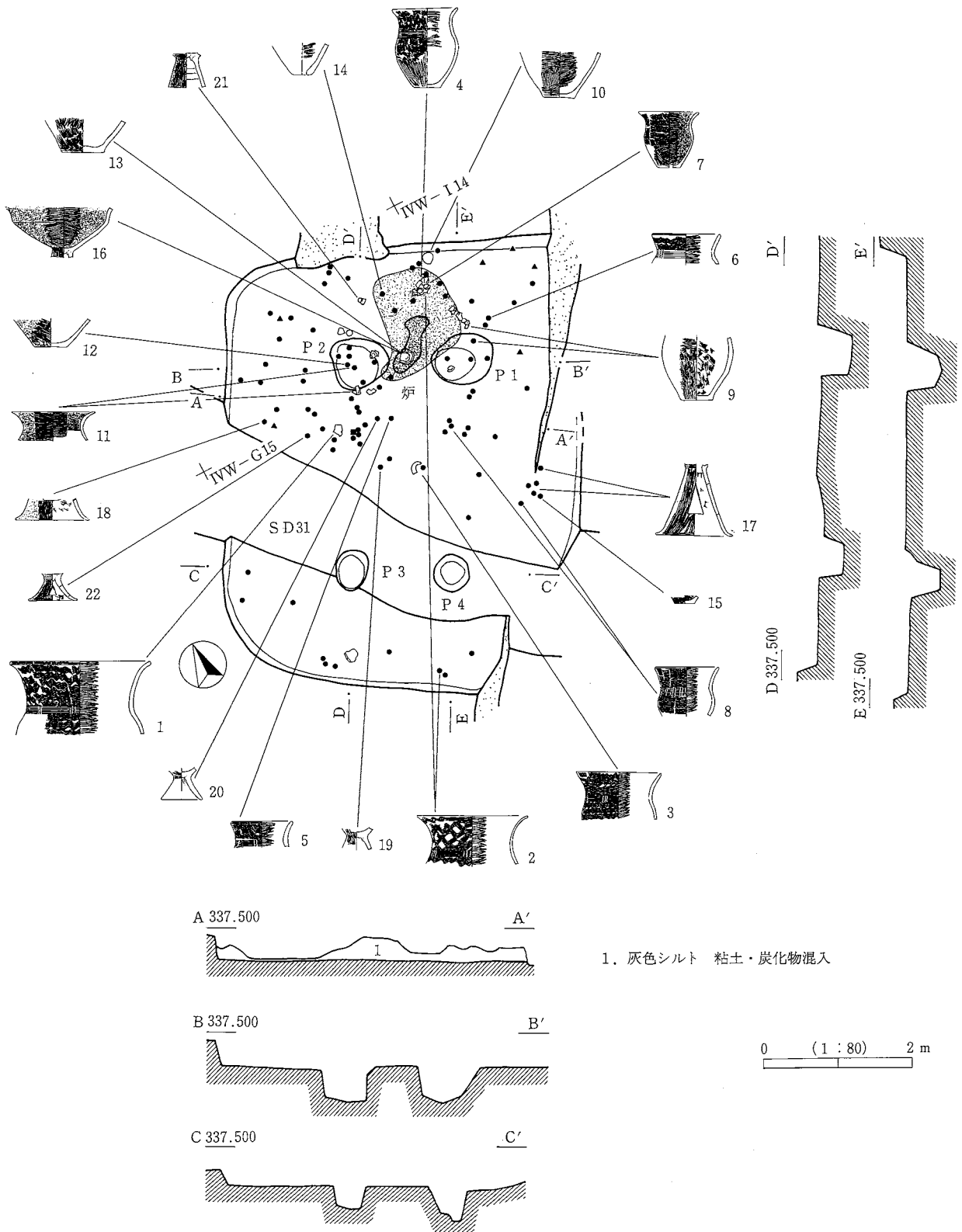


SB1625



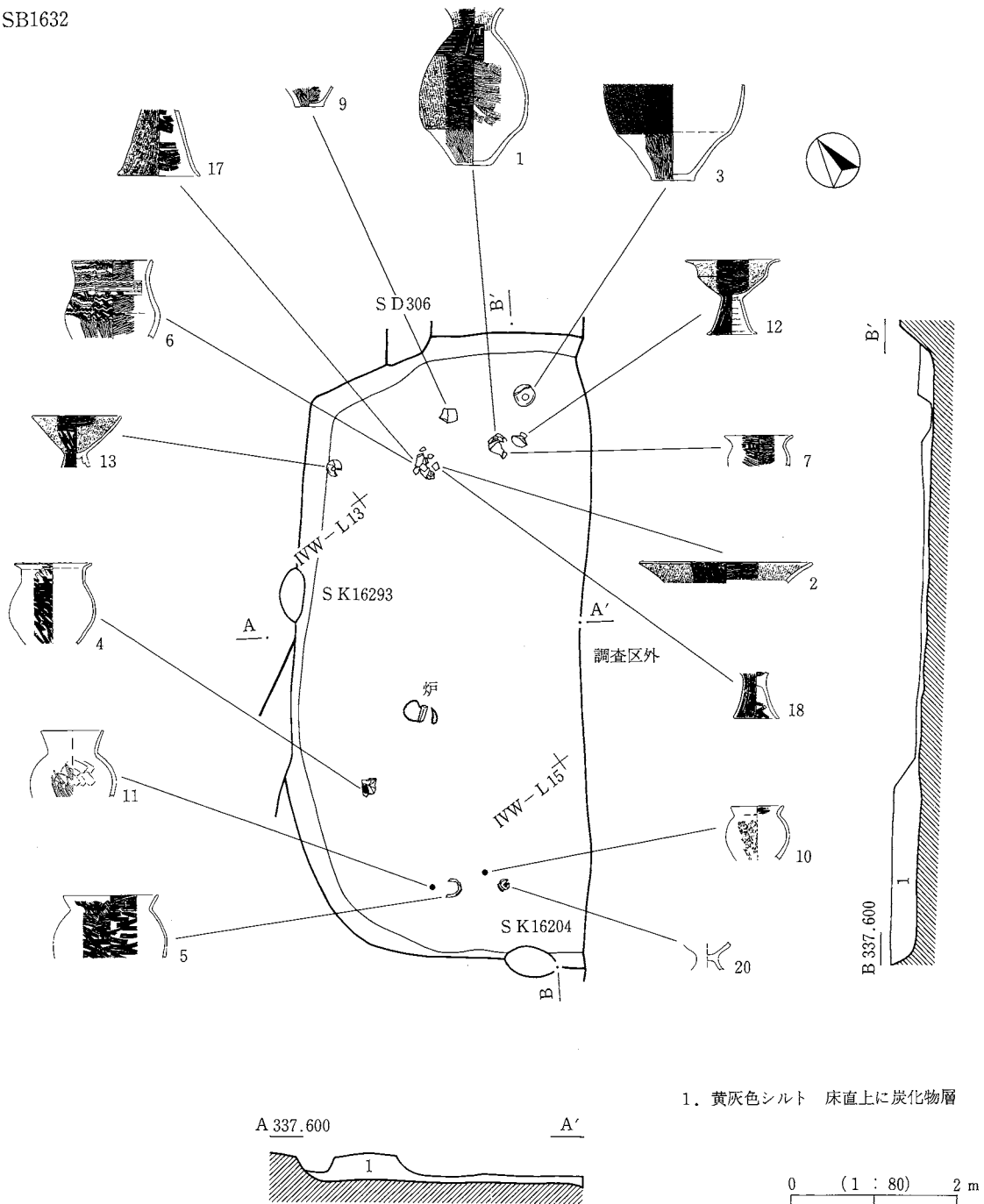
第69図 SB1464・1625実測図

SB1631



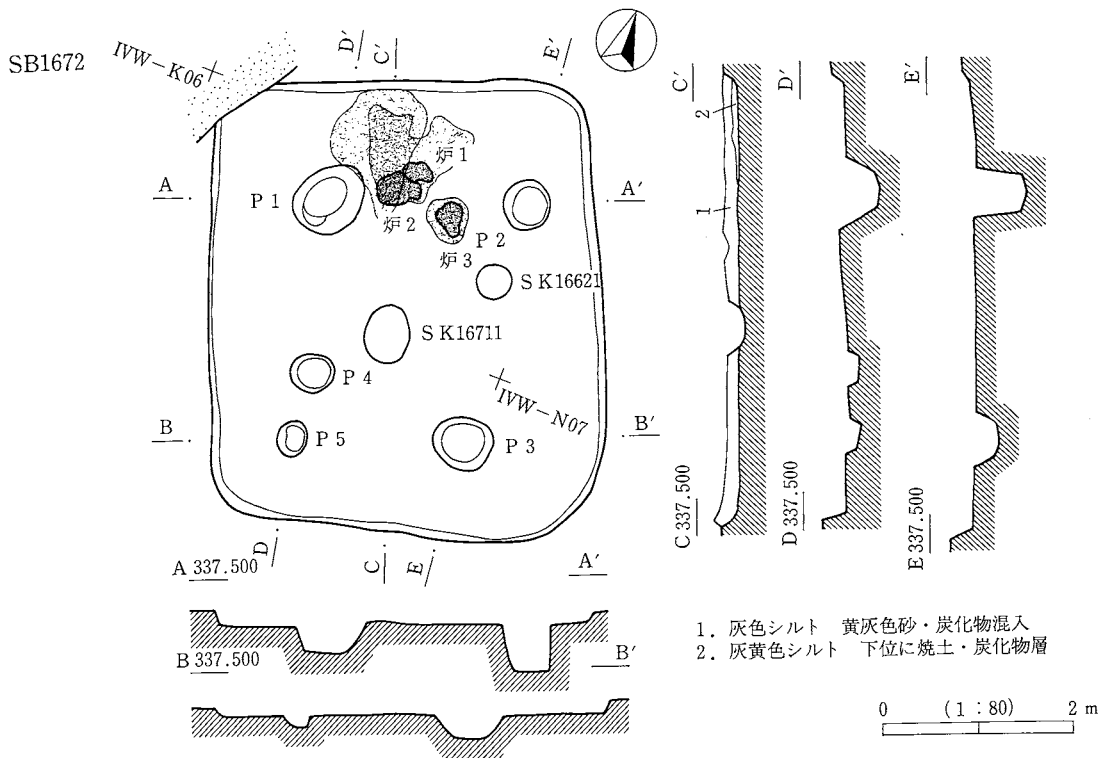
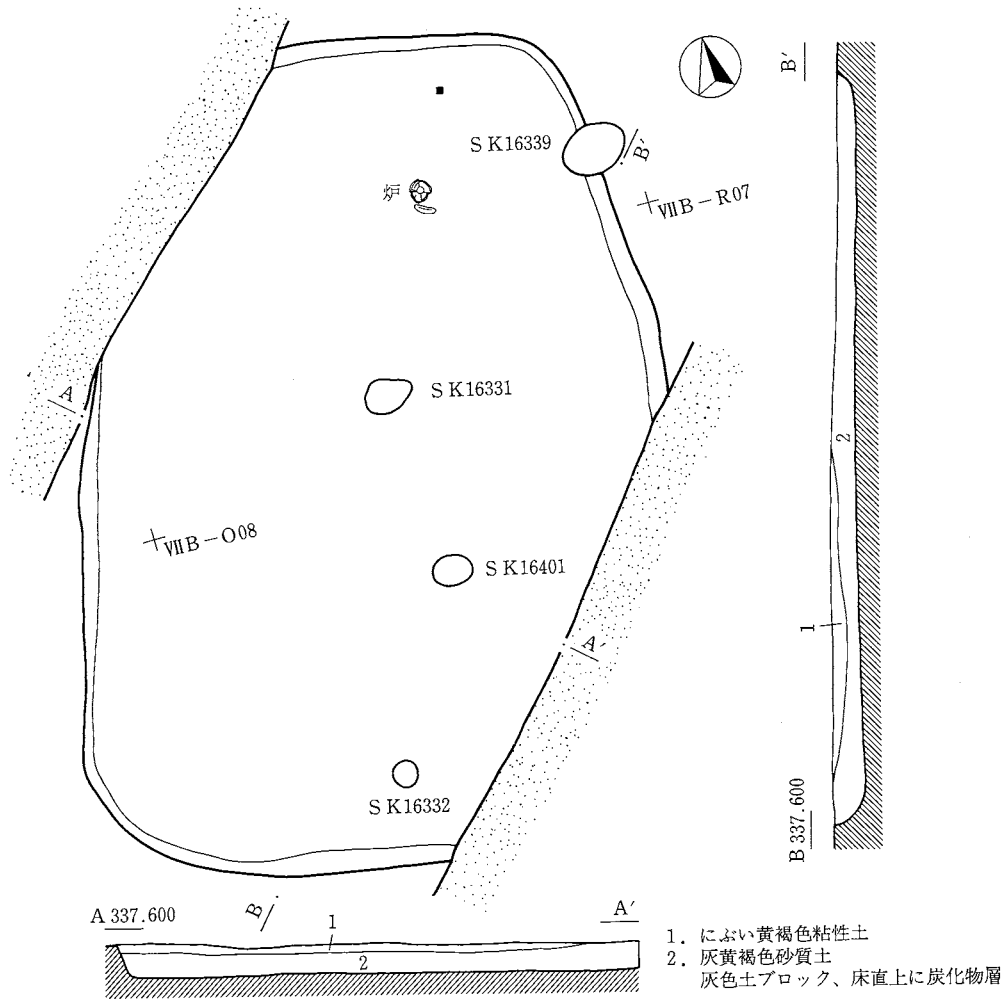
第70図 SB1631実測図

SB1632

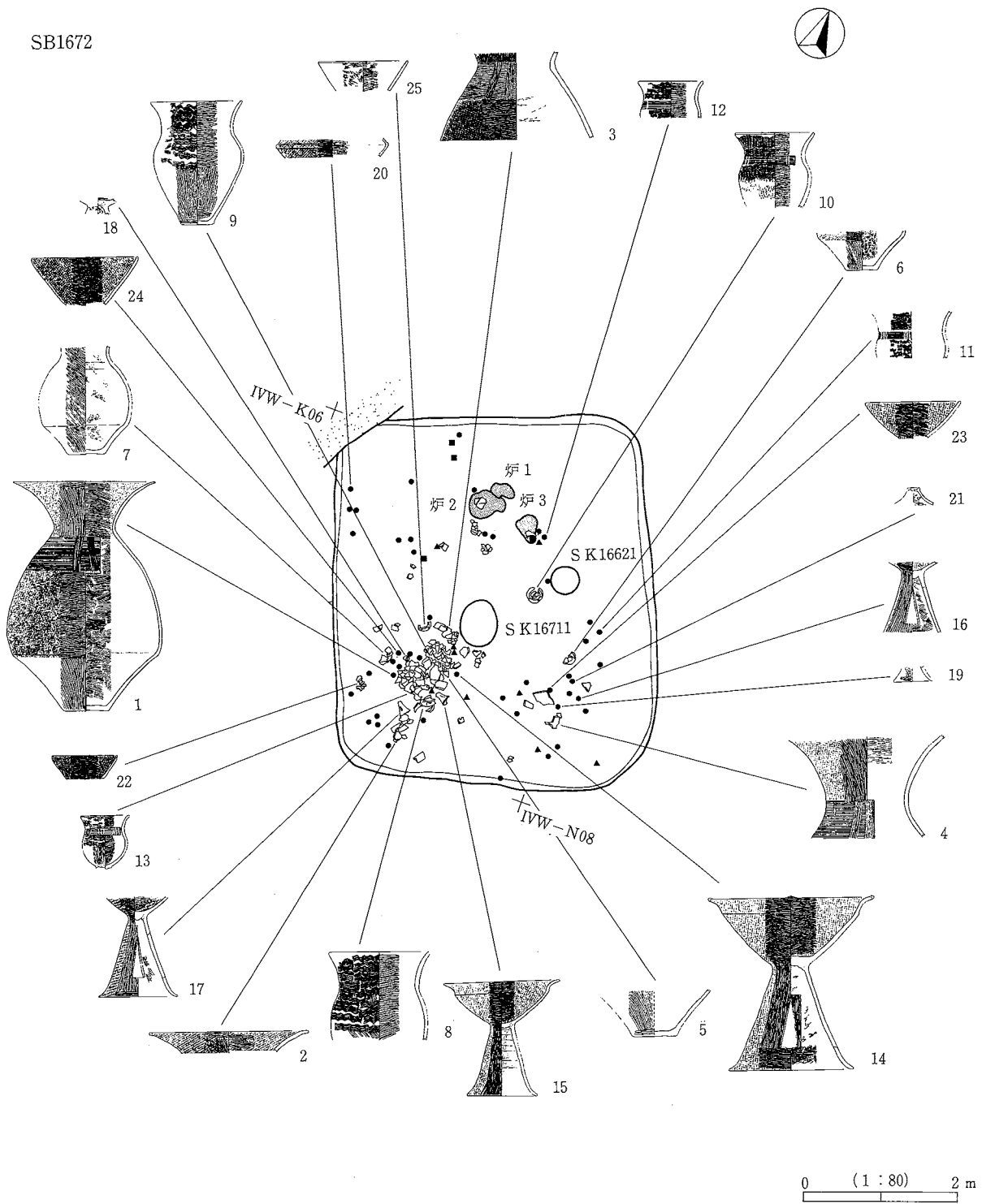


第71図 SB1632実測図

SB1650

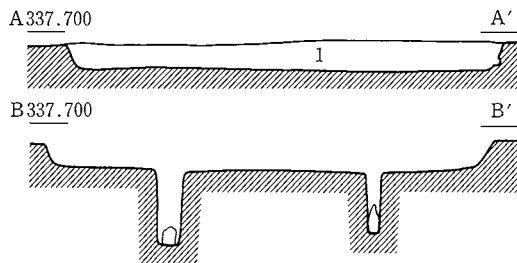
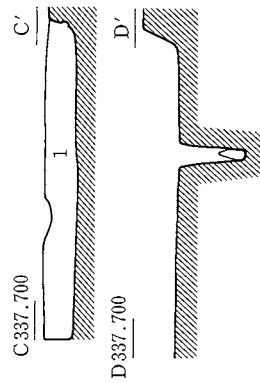
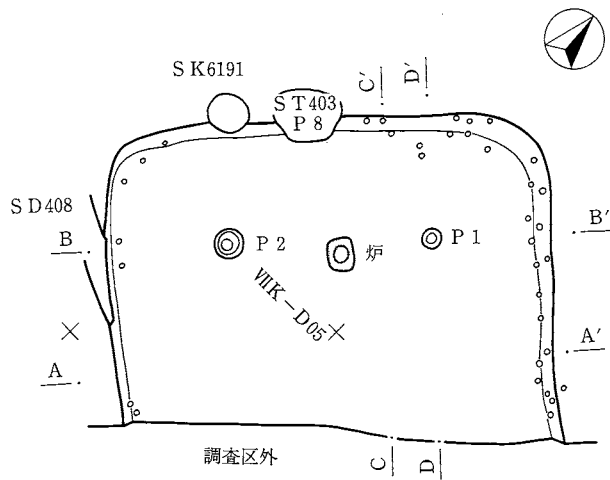
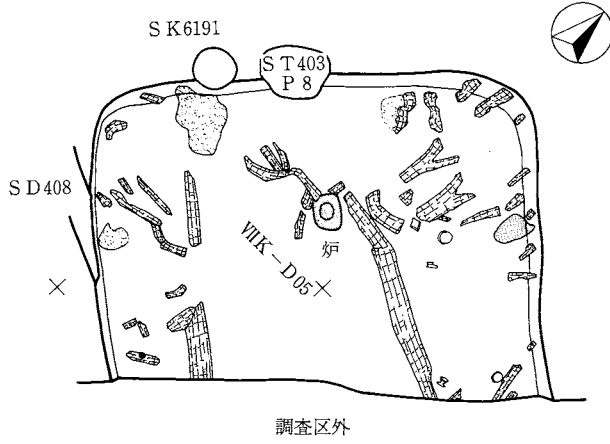


第72図 SB1650・1672実測図

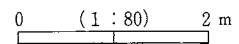


第73図 SB1672遺物出土状況図

SB1801

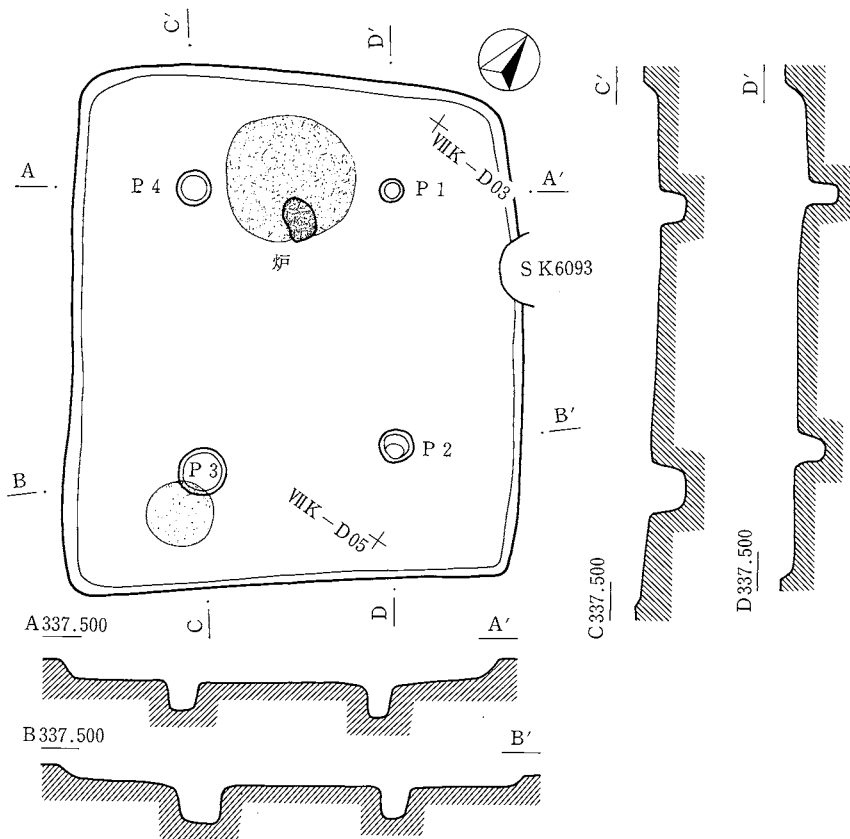


1. 黄灰色シルト
床直上に炭化物・炭化材多量に混入

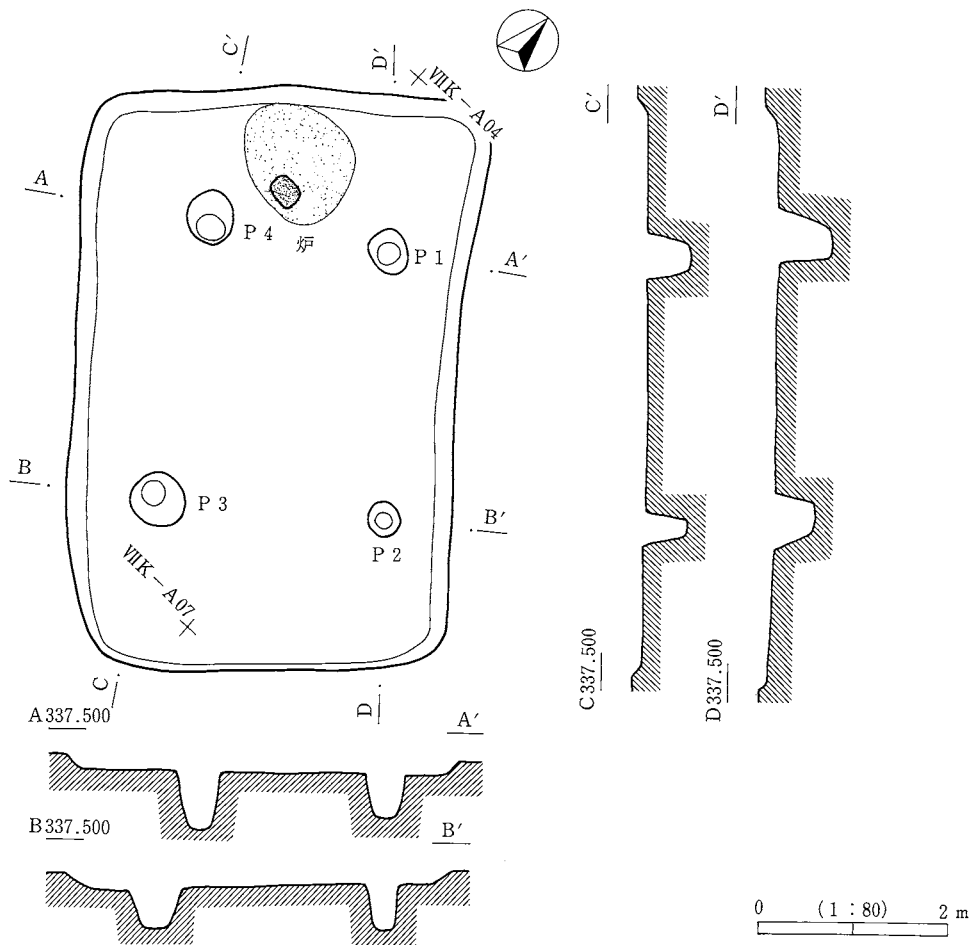


第74図 SB1801実測図

SB1803

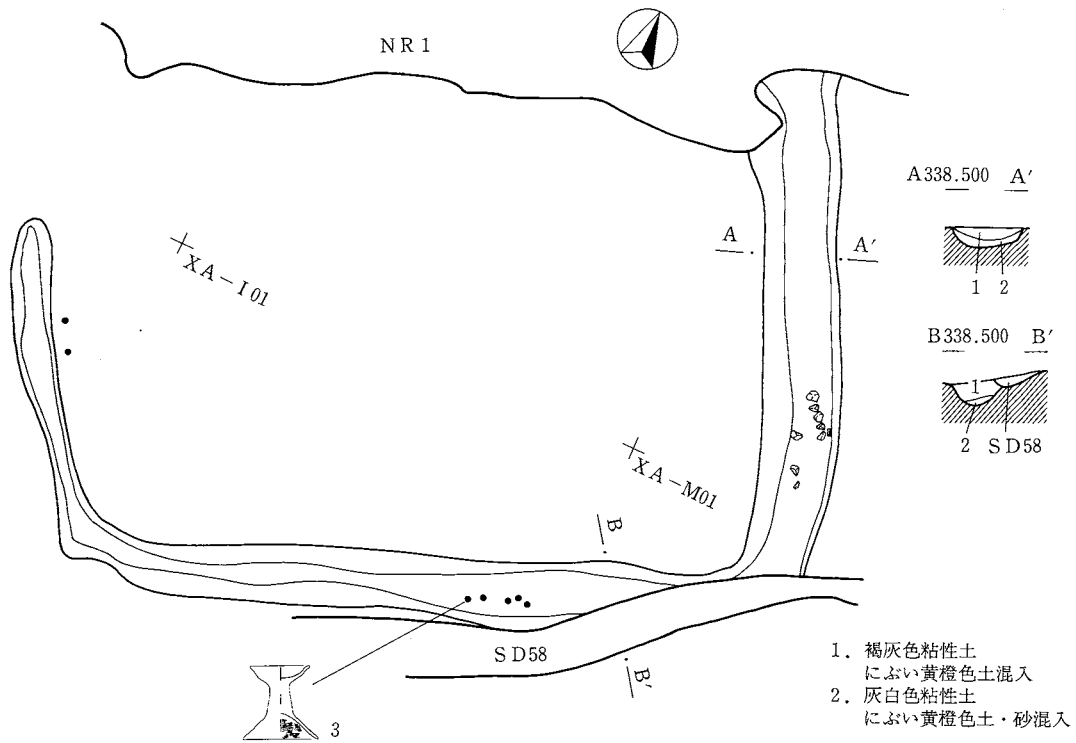


SB1804

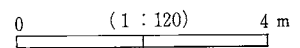
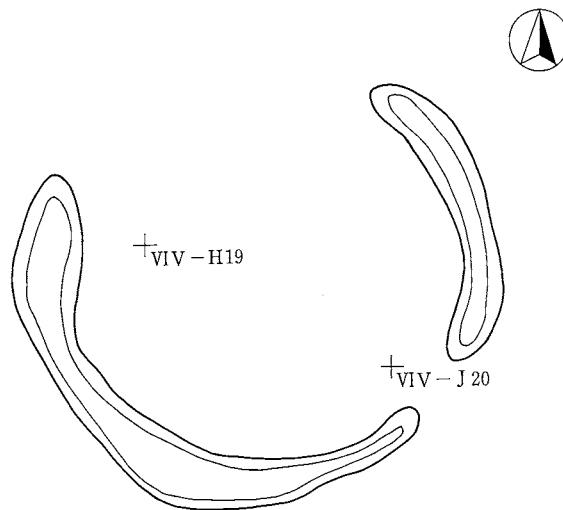


第75図 SB1803・1804実測図

SD62

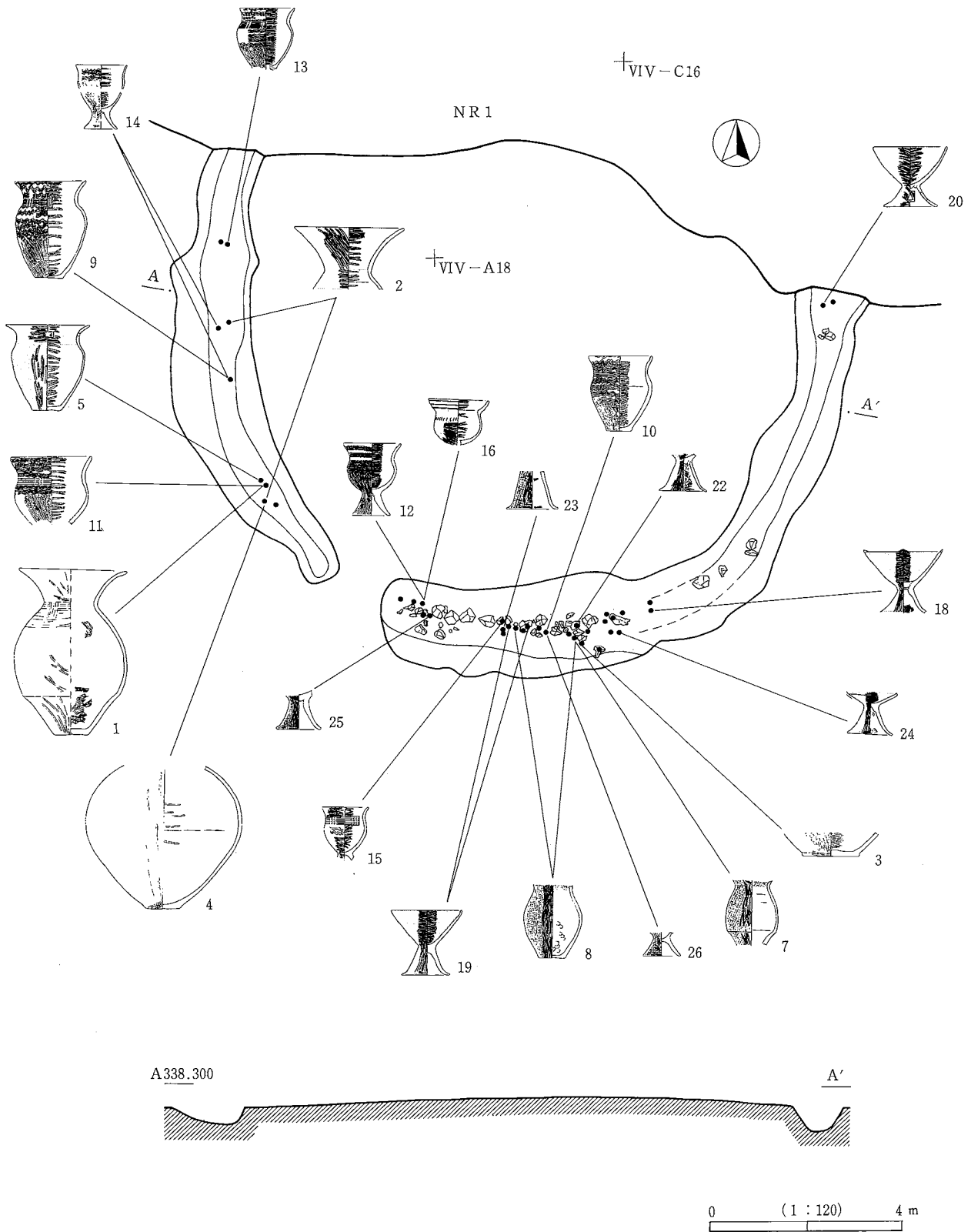


SD115

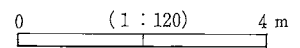
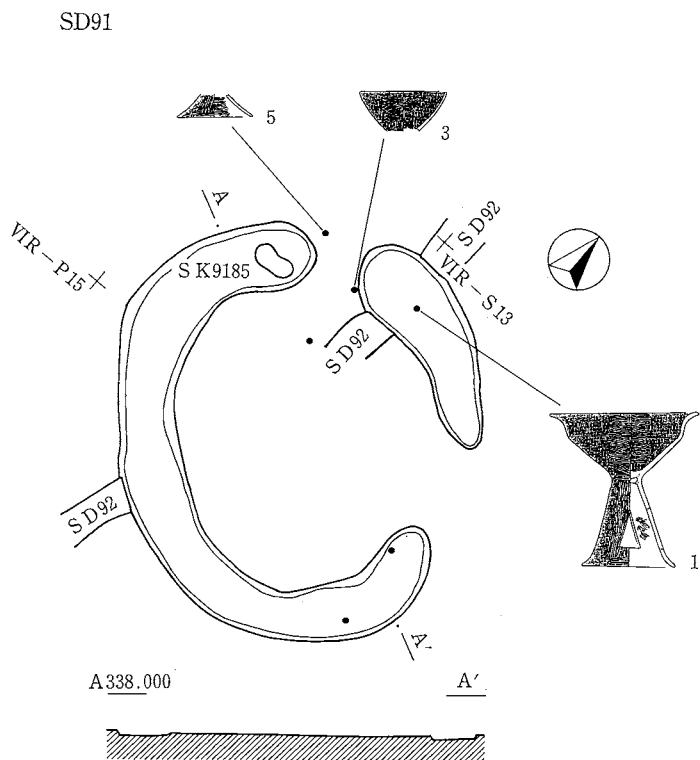
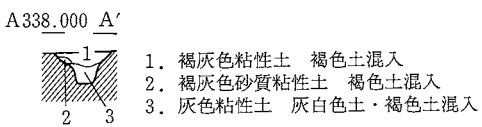
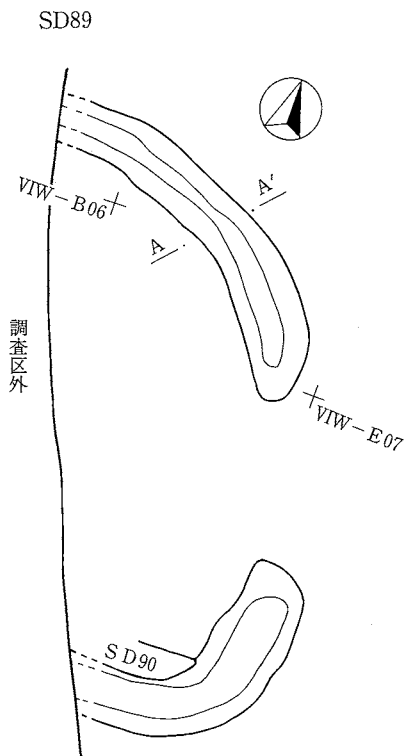
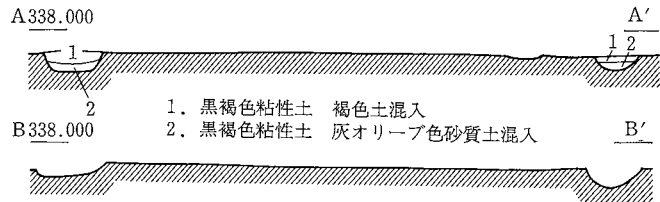
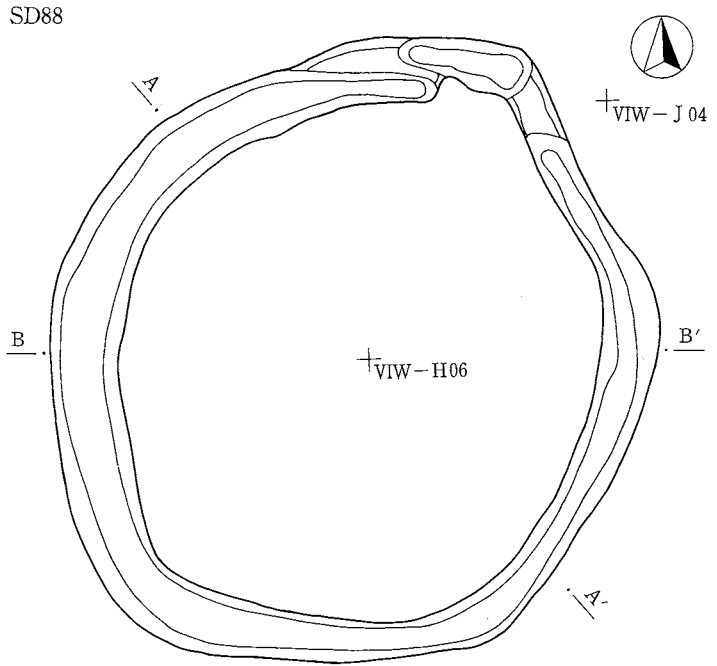
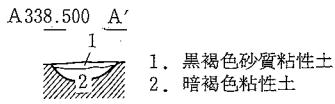
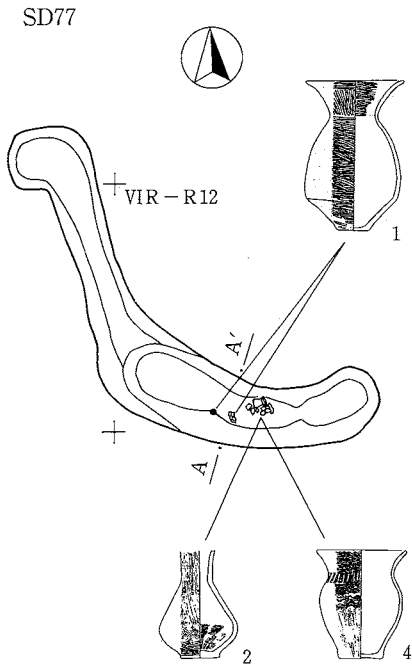


第76図 SD62・115実測図

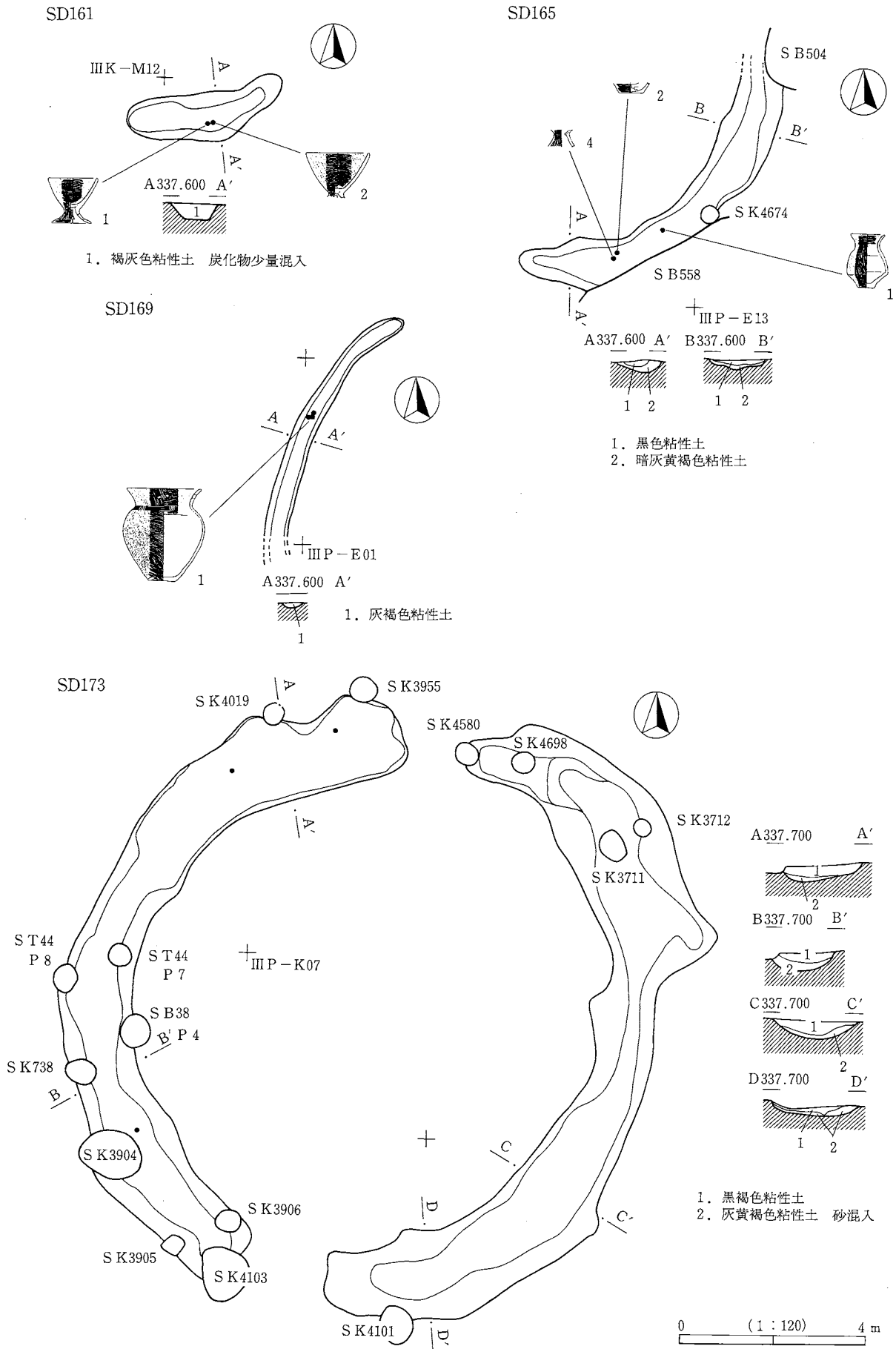
SD63



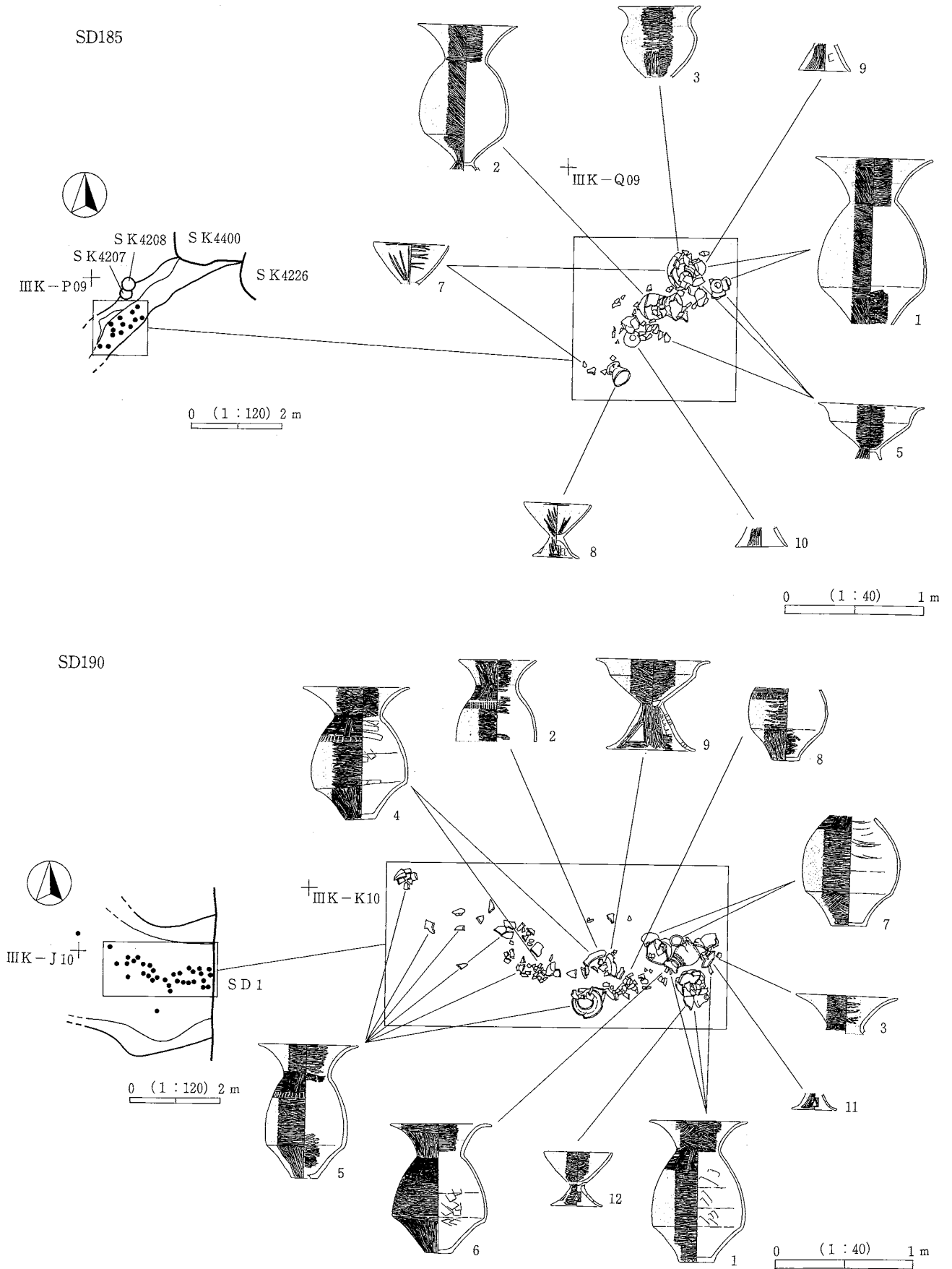
第77図 SD63実測図



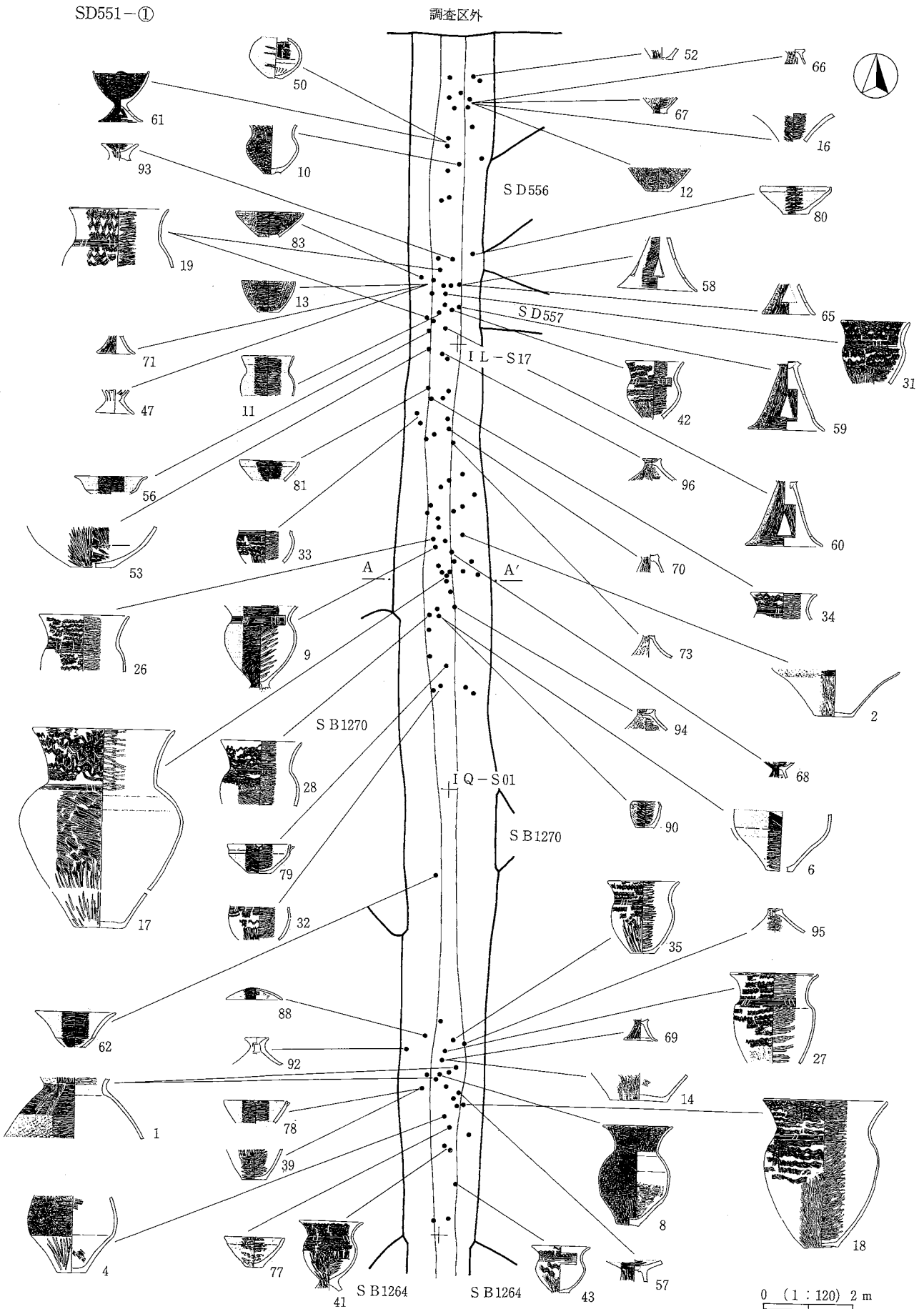
第78図 SD77・88・89・91実測図



第79図 SD161・165・169・173実測図

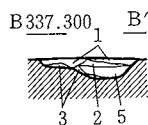
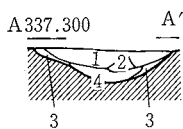


第80図 SD185・190実測図

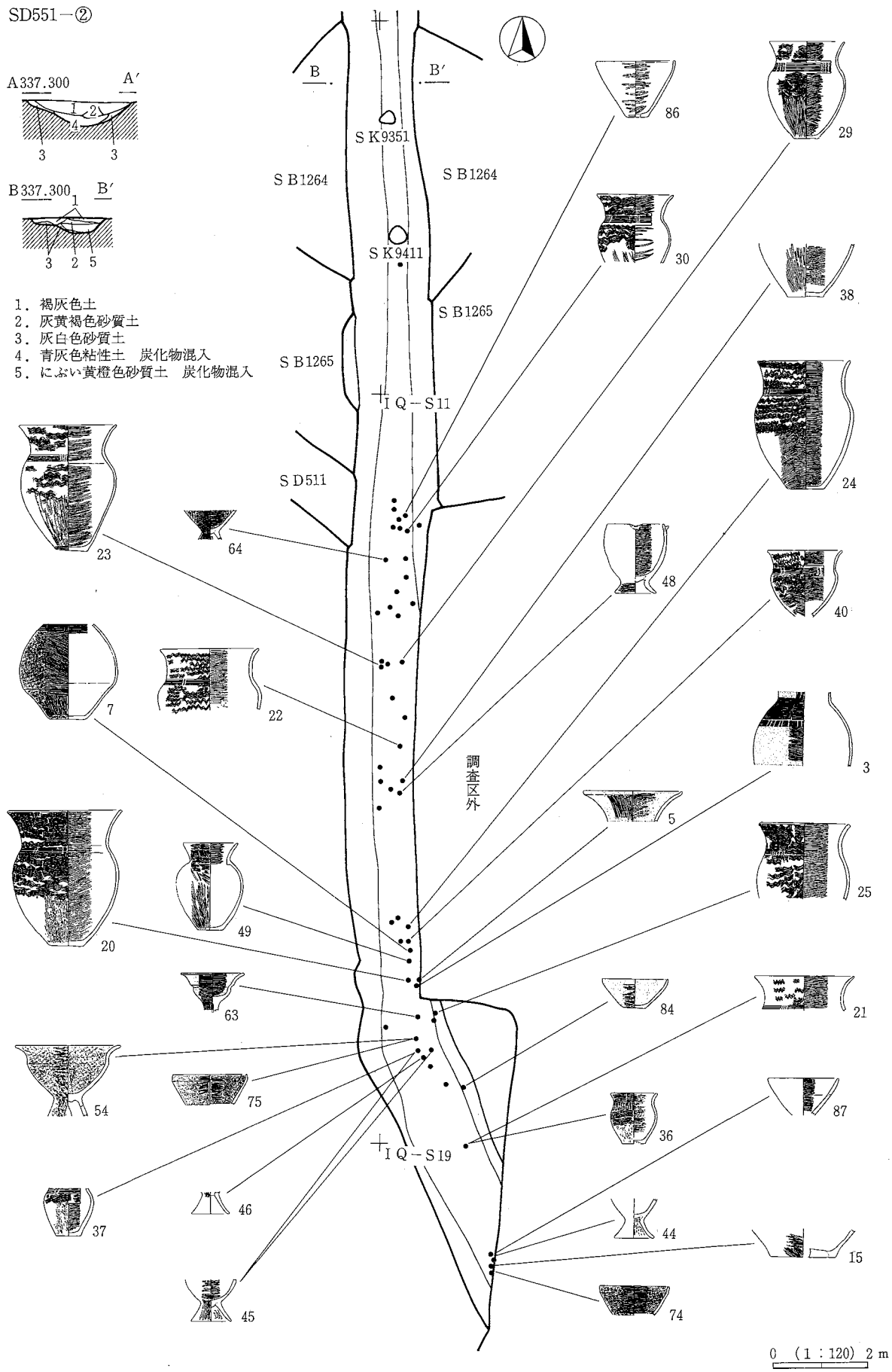


第81図 SD551実測図

SD551-②

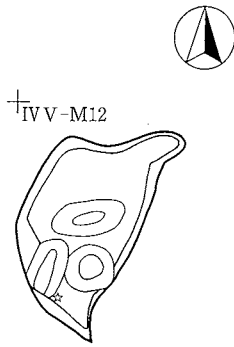


1. 褐灰色土
2. 灰黄褐色砂質土
3. 灰白色砂質土
4. 青灰色粘性土 炭化物混入
5. におい黄橙色砂質土 炭化物混入

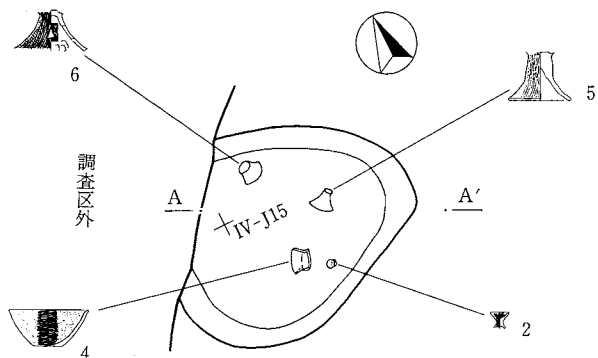


第82図 SD551実測図

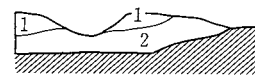
SF6



SF7

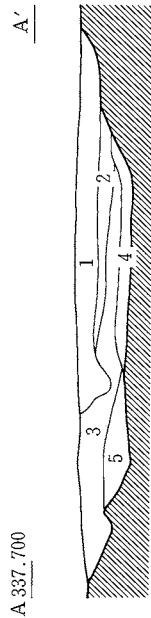
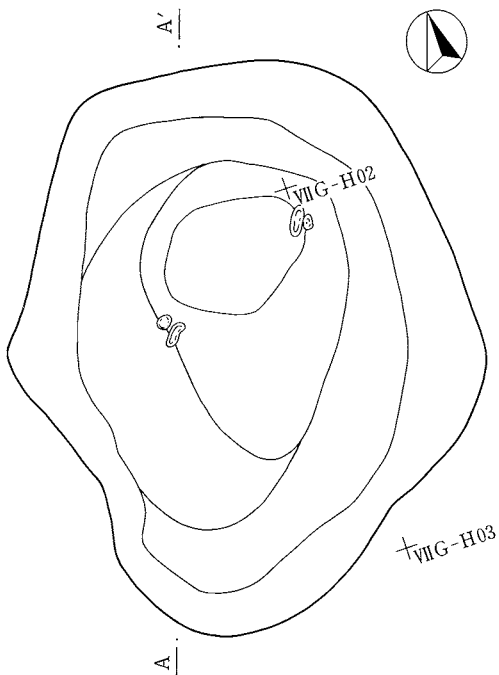


A 337.800



- 1. 灰黄褐色土
- 2. 褐灰色土 炭化物・灰混入

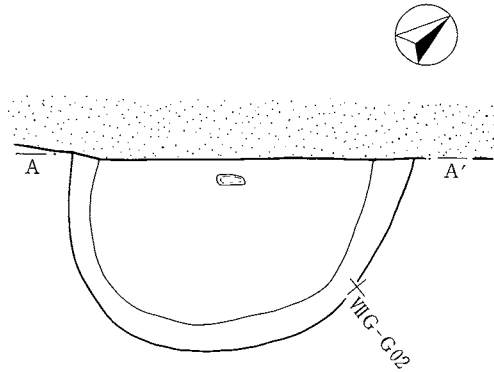
SF303



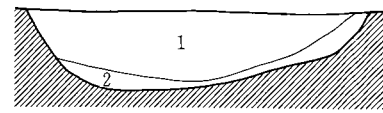
A 337.700

- 1. 褐灰色砂質土 炭化物混入
- 2. 黒褐色土 炭化物多量に混入
- 3. 褐灰色土 炭化物混入
- 4. 黒褐色土 炭化物混入
- 5. 灰黄褐色土 炭化物混入

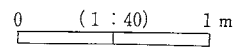
SF304



A 337.800

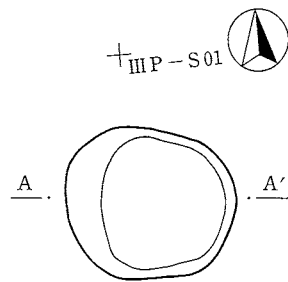


- 1. 黒褐色砂質土
- 2. 炭化物・灰層

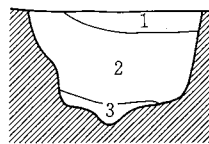


第83図 SF 6・7・303・304実測図

SK703

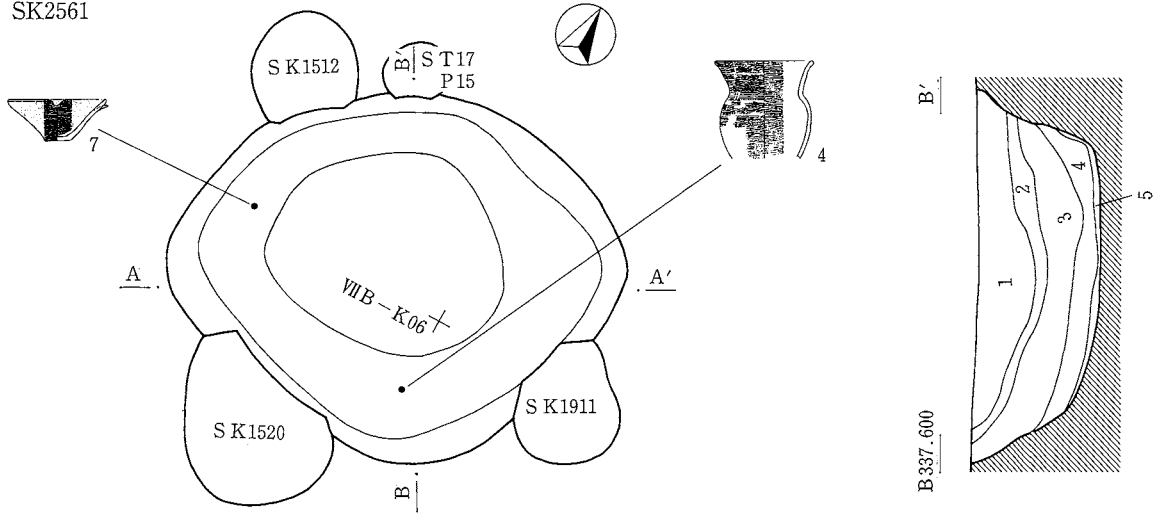


A337.900 A'

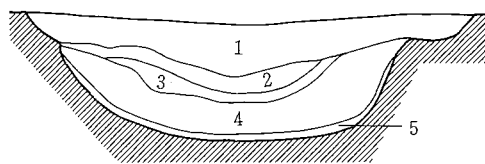


1. 暗オリーブ褐色土 炭化物少量混入
2. オリーブ褐色土 砂ブロック・炭化物少量混入
3. 黒褐色土 炭化物少量混入

SK2561



A337.600 A'

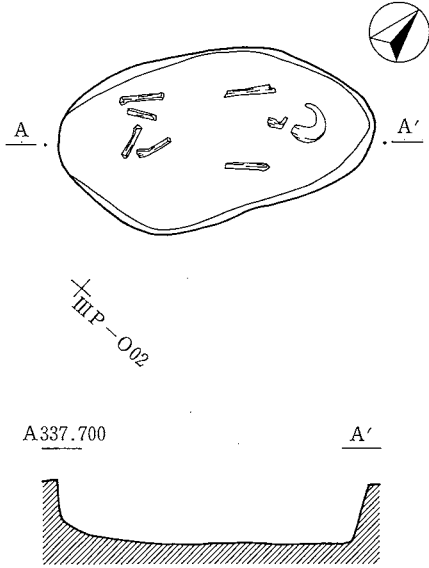


1. 青灰色砂質土 炭化物少量混入
2. 暗青灰色砂質土 炭化物混入
3. 緑灰色砂質土 炭化物混入
4. 緑灰色シルト 炭化物混入
5. 炭化物・灰層 緑灰色シルトをブロックで混入

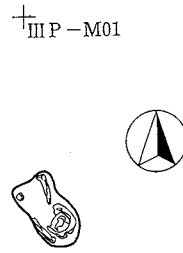
0 (1:40) 1 m

第84図 SK703・2561実測図

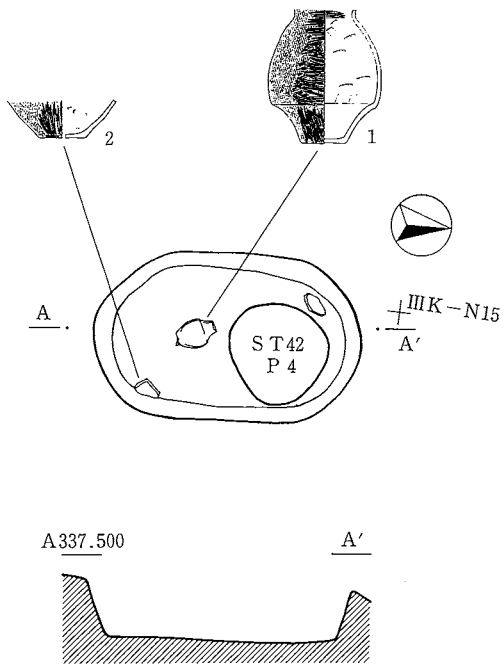
SK3781



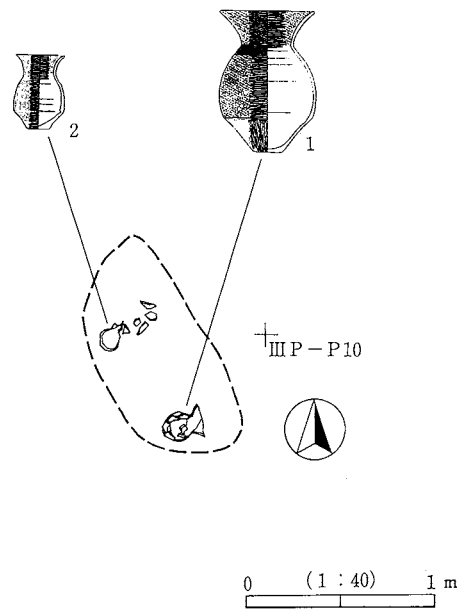
SK3783



SK3875

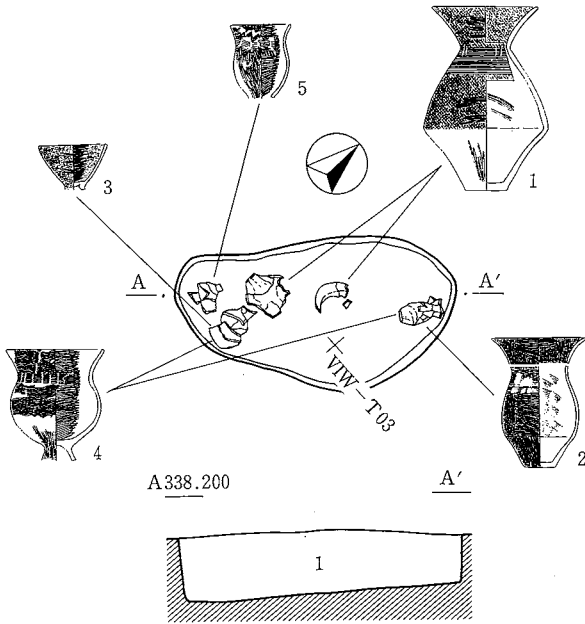


SK4421



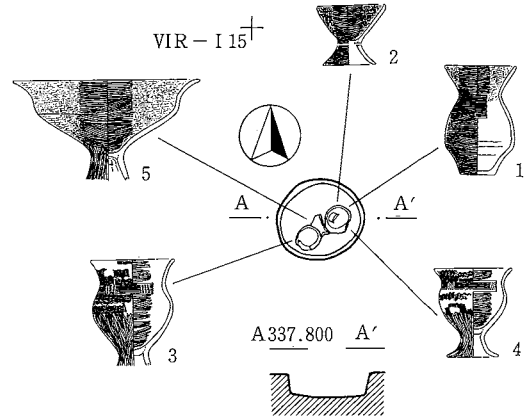
第85図 SK3781・3783・3875・4421実測図

SK5331

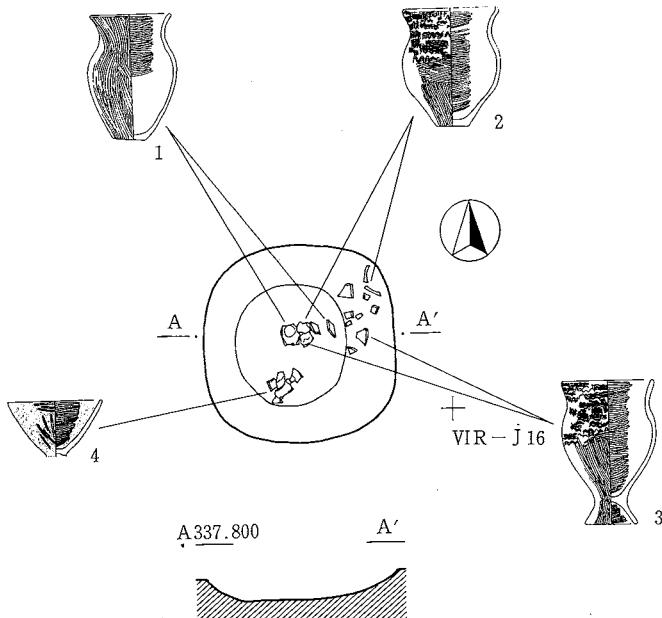


1. 褐灰色粘性土 炭化物少量混入

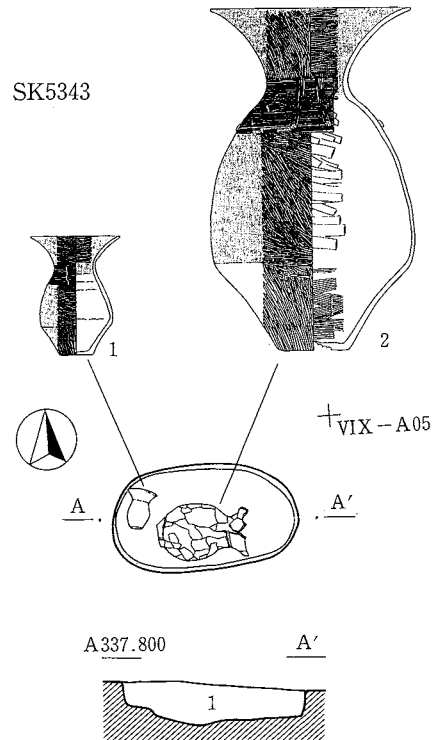
SK5340



SK5341



SK5343

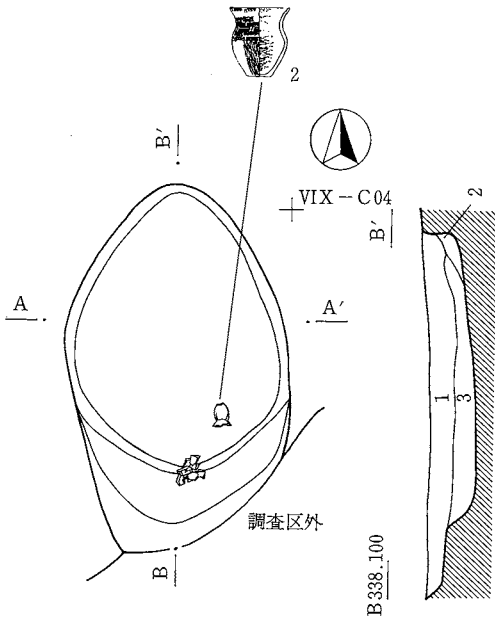


1. 褐灰色粘性土

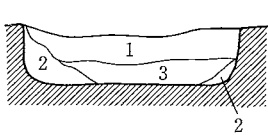
0 (1:40) 1 m

第86図 SK5331・5340・5341・5343実測図

SK5345

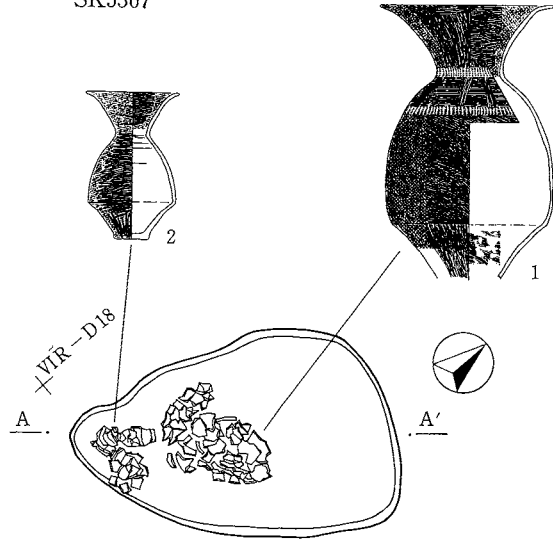


A 338.100

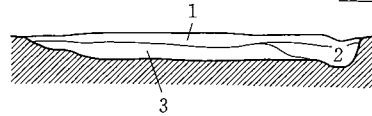


- 1. 褐灰色粘性土
- 2. 黑褐色粘性土
- 3. 灰色砂質土

SK5367

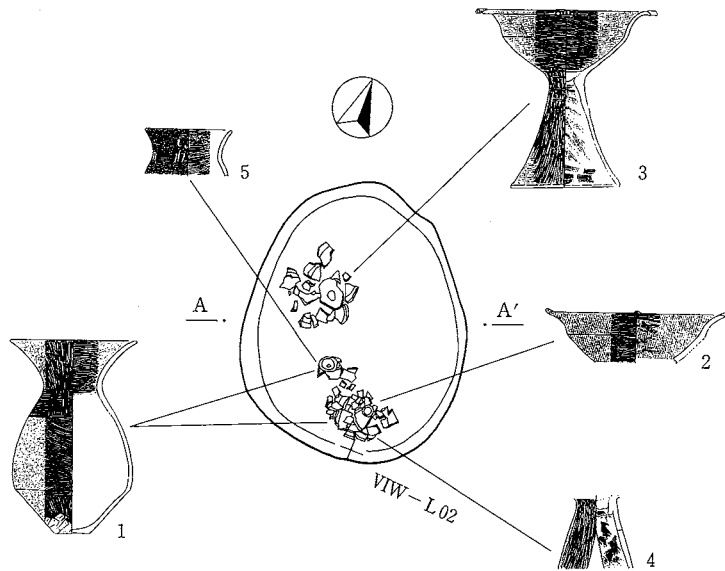


A 337.700

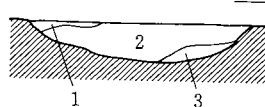


- 1. 黑色粘性土
- 2. 黄灰色粘性土
- 3. 褐灰色粘性土

SK5490

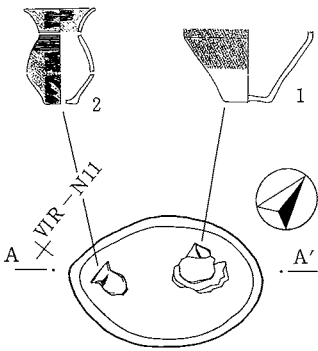


A 337.800

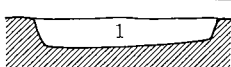


- 1. 黑褐色粘性土
- 2. 黄灰色粘性土 炭化物少量混入
- 3. 灰色砂質土

SK5461



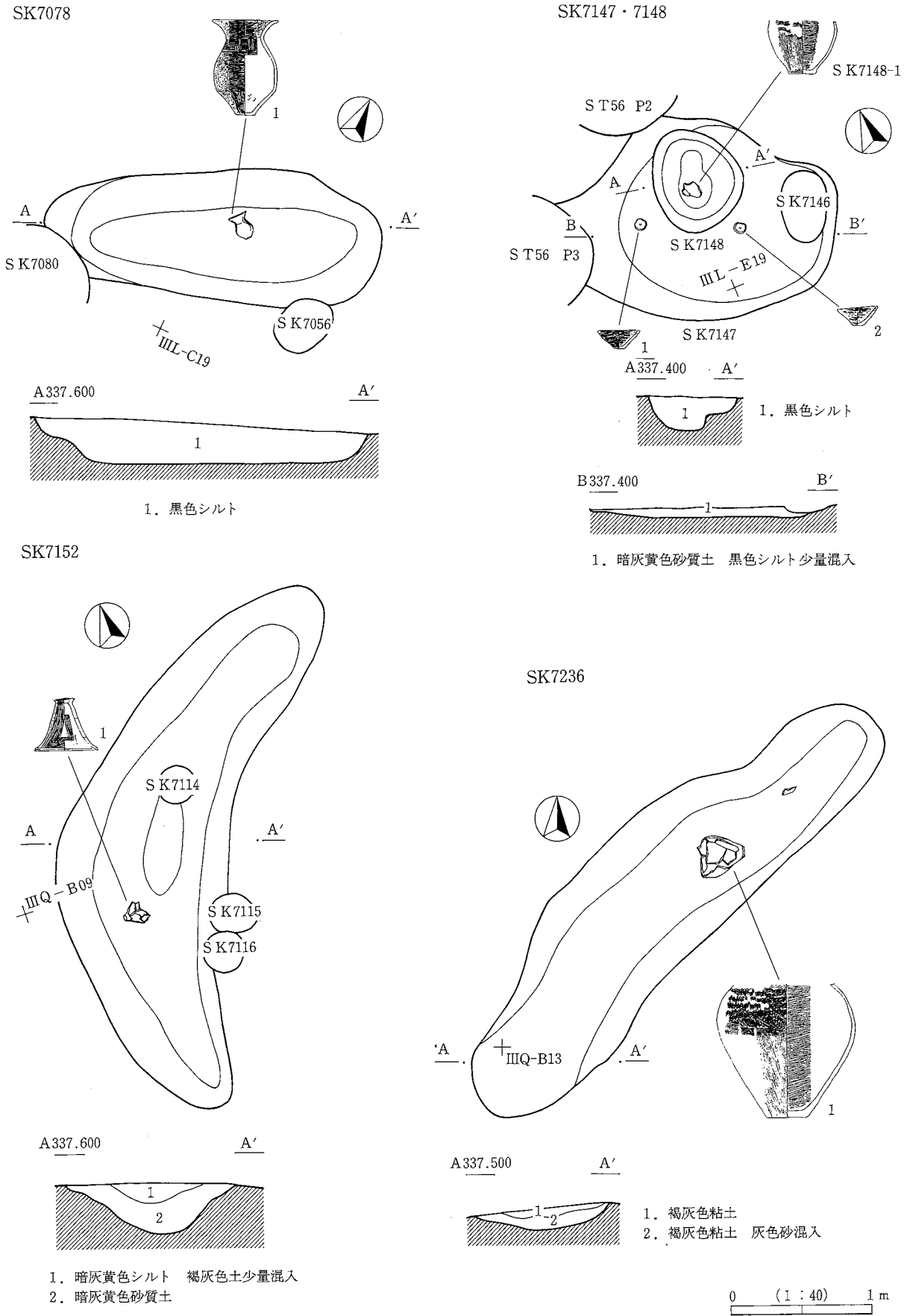
A 337.900



- 1. 褐灰色粘性土

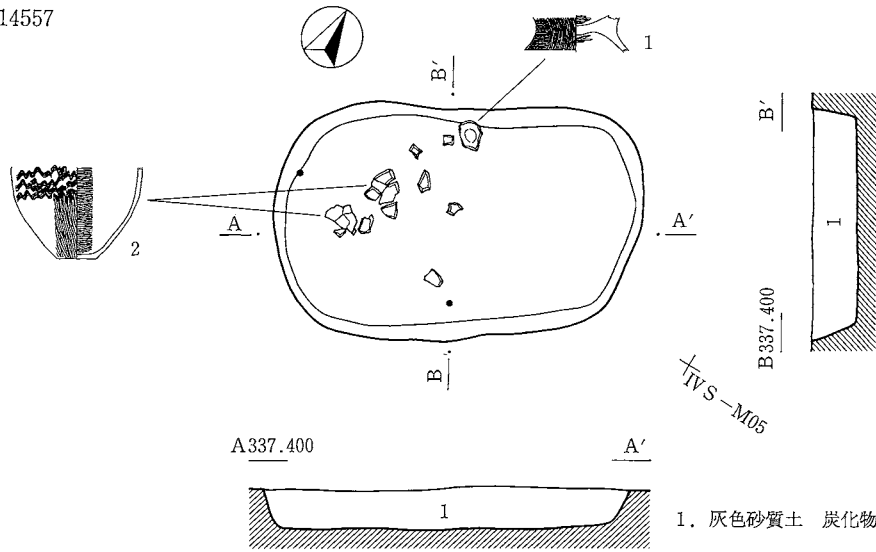
0 (1:40) 1 m

第87図 SK5345・5367・5461・5490実測図

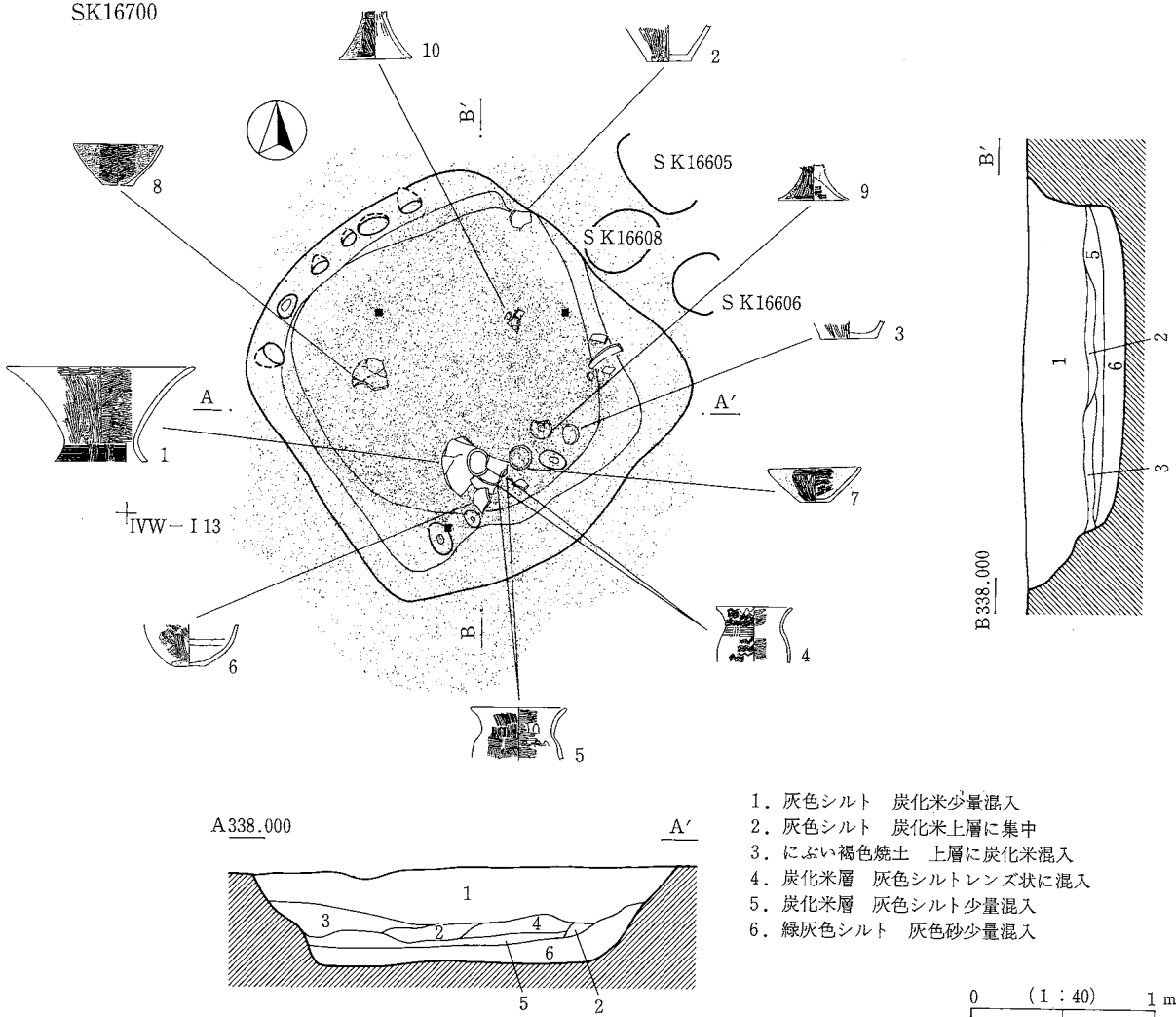


第88図 SK7078・7147・7148・7152・7236実測図

SK14557

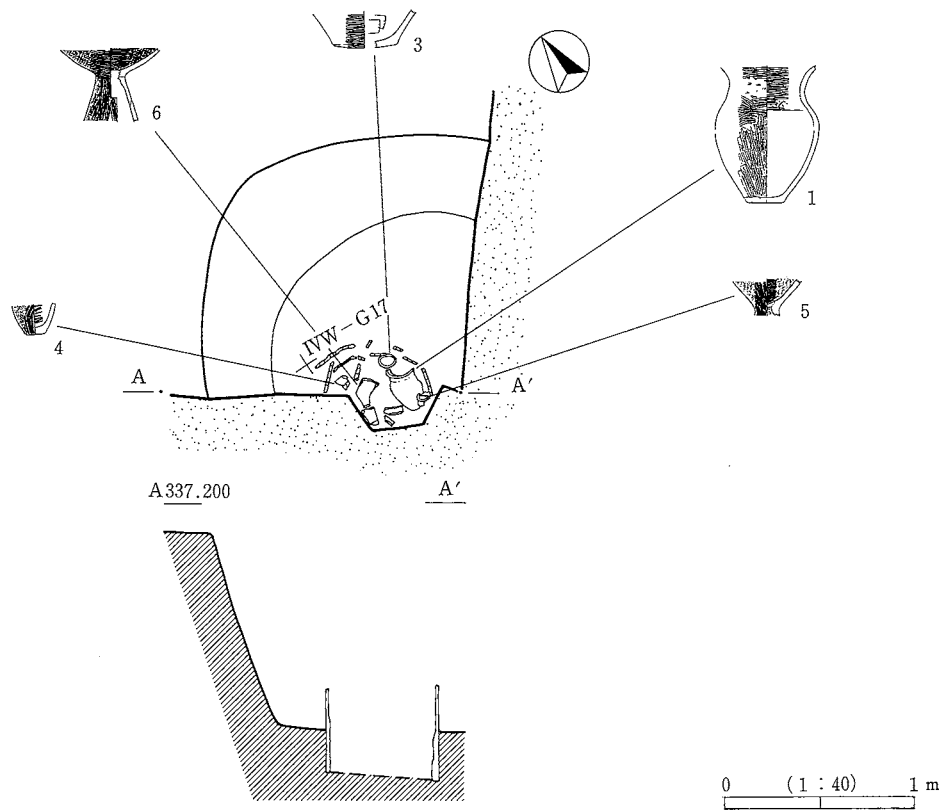


SK16700

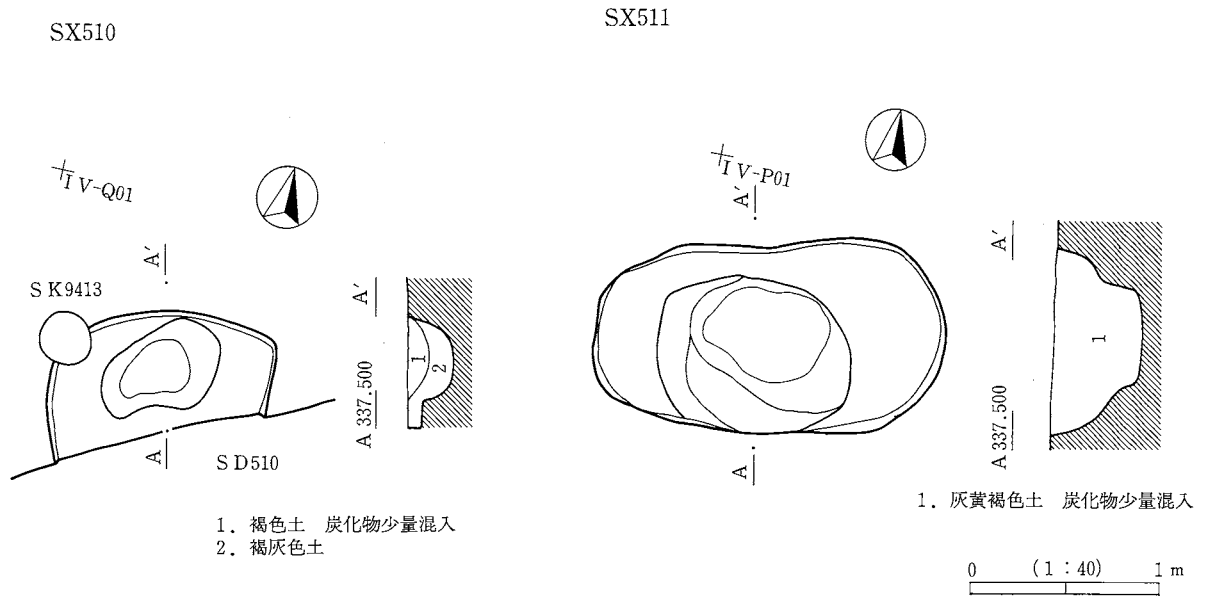
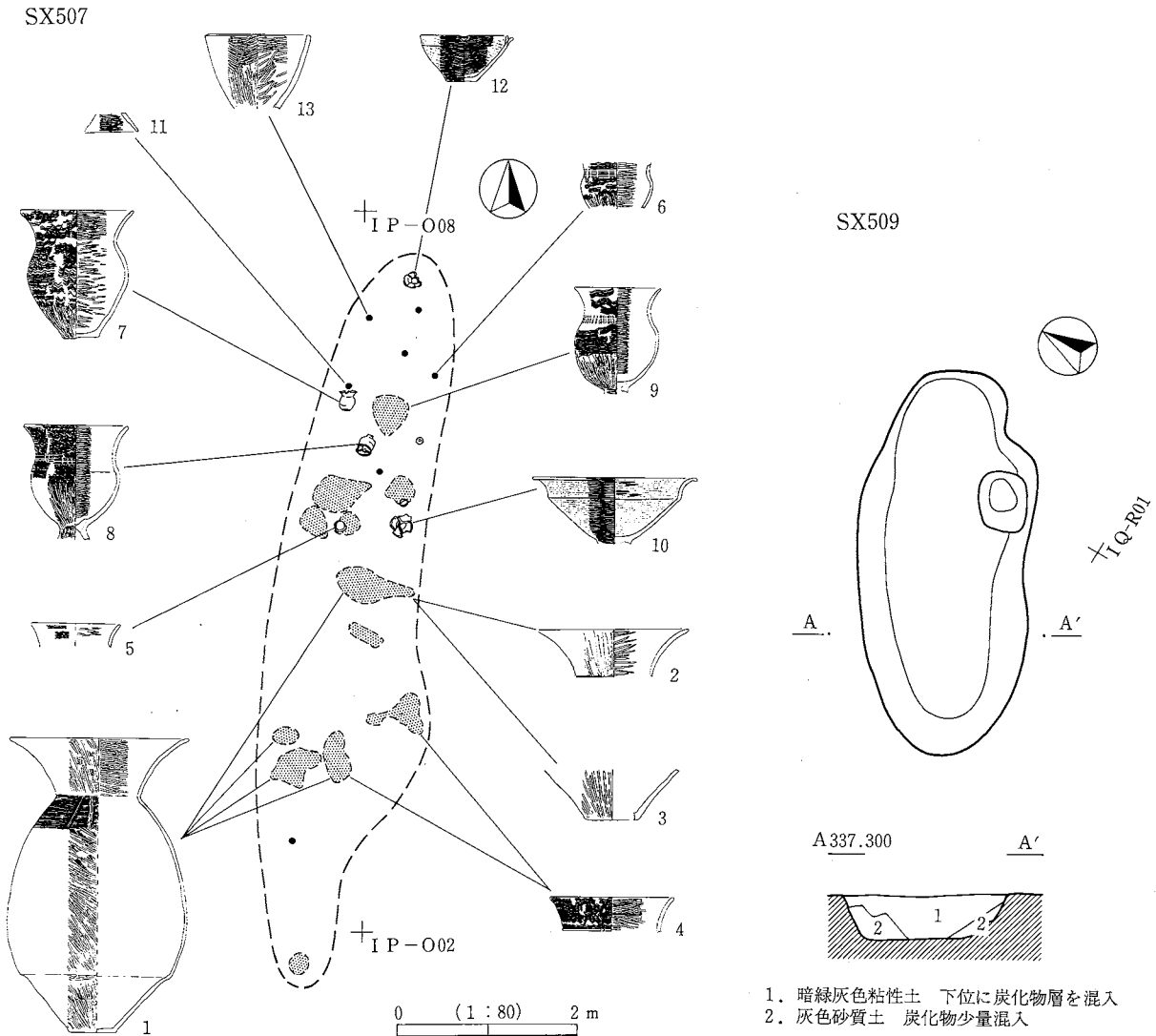


第89図 SK14557・16700実測図

SK16712

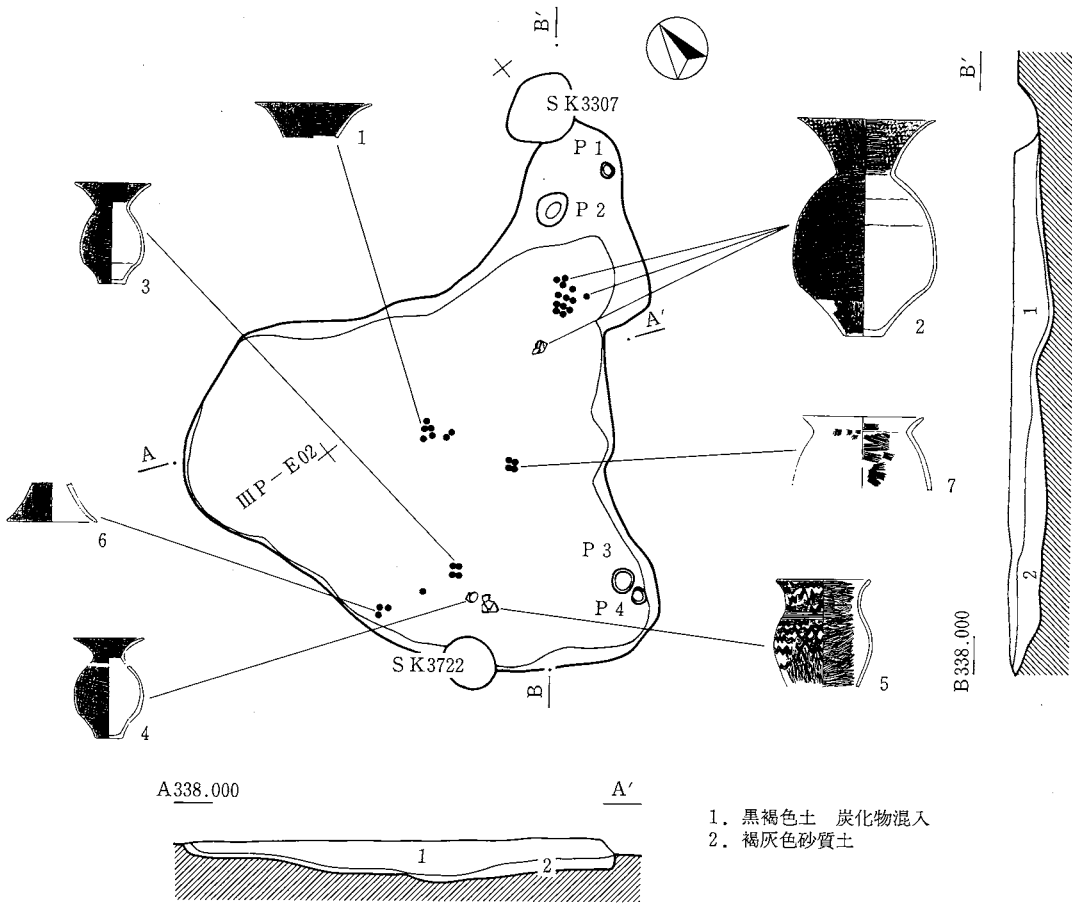


第90図 SK16712実測図

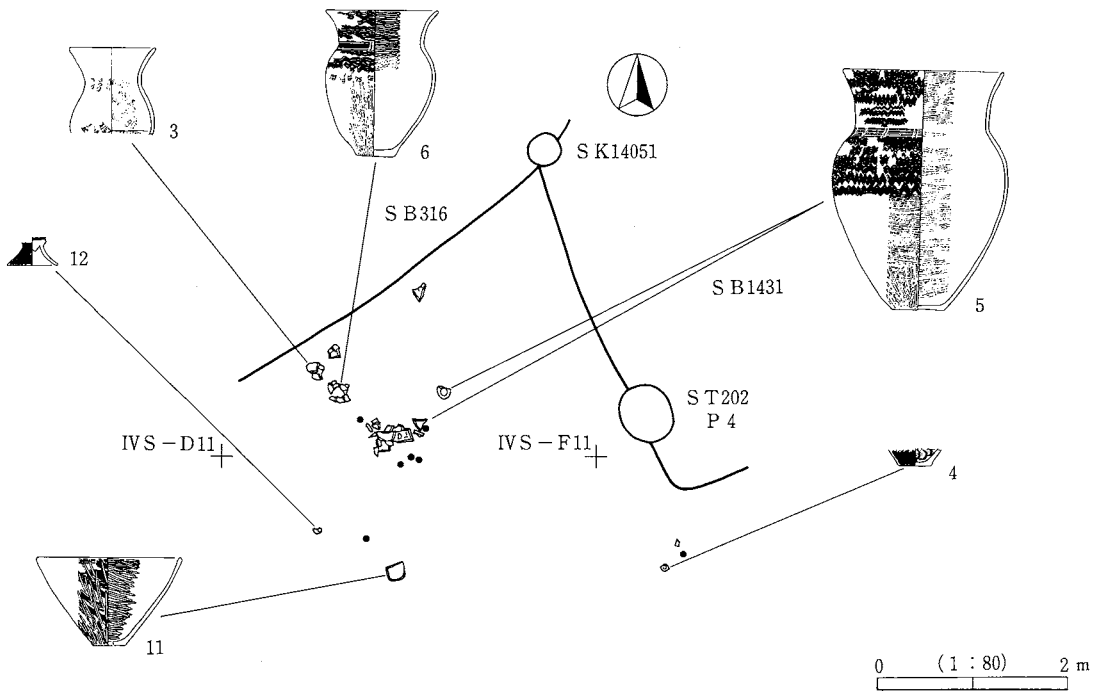


第91図 SX507・509・510・511実測図

SX513



SX514



第92図 SX513・514実測図

第4節 古墳時代中期～後期

1 概要（第15～24図）

古墳時代中期～後期の遺構は現耕土直下のI D層～II層上面で検出され、該期の遺構と明確に認定したのは住居址261軒、溝址や沼址など流路は約10条、土坑3基を数える。また覆土中の遺物より該期に属すると認定した住居址は260軒存在する。この他に覆土中で該期の遺物が少量出土した遺構も存在するものの、これらの遺構は形状や切り合い関係に不明な部分が多く、明確に該期に属すると判断出来ない状況にある。また掘立柱建物址や時期不明遺構の中にも該期の遺構が含まれる可能性もある(第III章第1節)。

抽出した遺構の時期は、住居址で一括出土した土器の様相を、榎田遺跡における古墳時代中期～後期編年(I～V期)に対応させて紹介する(第V章第1節3)。なお遺構の変遷については、時期が明確に判明した資料のみを用いる。以下この時期区分を用いて遺構の時期的変遷について若干触れたい。

榎田遺跡においては、弥生時代後期～古墳時代前期まで続いた集落が一旦途切れ、調査区内で遺構が確認できない時期が存在する。しかし古墳I期になると調査区内で再び遺構が検出され始める。まずは遺跡中央部に位置するSG3の両側で約10軒ほどの住居址が出現する。該期の遺構は、北限が②-5地区、南限が②-1, 2C地区北端までの約300mの範囲内に存在する。またSG3ではI期以降、溝内の滞水が始まる。続く古墳II期になると住居址の軒数が70軒以上と急増し、大半の住居址にカマドが見られる。該期の遺構は北限が①-4A地区、南限が②-1, 2C地区までの約450mに広がる。特にSG3では土器や木製品が大量に出土し、その周辺には多くの住居址が存在するなど、集落の中心部的様相を示す。古墳III期になると調査区内では住居址の軒数は約36軒と減少する。特にSG3以南は住居址が4軒ほどしか確認できない。古墳IV期になると住居址の軒数は40軒以上に増加し、続く古墳V期になると、100軒以上となり、I～V期の中では最も集落が発達する。遺構の確認範囲はIV～V期に最大となり、約700mに広がる。集落の北限は遺構の密集度が低く、流路であるSG2が存在する①-5地区と推測される。一方南限は遺構の密集度が低く、SG4やSD33などの流路が存在する③-1, 2地区と推測される。また同地区以南では古墳I～V期の遺構はほとんど検出されない。

榎田遺跡では古墳V期を過ぎると、奈良時代前葉まで、遺構の空白期間が存在する。

2 竪穴住居址

第42号住居址 SB42 (第109図)

位置：②-2A VIJ-24,25、VIO-04,05

形態・規模：隅丸長方形 4.85×5.55m 床面積 26.92㎡

主軸の方向：N23W

出土状況：土器は床面から多く出土している。カマド左側では坏が5個(1、2、4、6、8)、カマド右側では坏、鉢、甑(3、9、11)、南壁付近では甕、壺(10、12)と鹿角、西壁付近から滑石製の紡錘車2個(51、52)が出土した。

床面：炭化物、炭化材が床全面に広がり、東コーナー付近は堅緻で良く締まっている。

カマド：北壁ほぼ中央に位置するものと思われ、袖、煙道は残存しないが、焼土、炭化物が集中して残存する。

第三章 調査成果

- 柱 穴：8基検出され、P 2 と P 7 が支柱穴と考えられるが、相対する柱穴は検出されなかった。
P 6 には柱根が残る。
- 時 期：古墳Ⅳ期
- 備 考：焼失住居。本住居址では坏G類が6点出土した。G類は小型でミニチュアに近い形態である。この他、鹿角や紡錘車も出土しており、何らかの祭祀行為を行った可能性もある。

第50号住居址 S B 50 (第109図)

- 位 置：②-2B VII F-01,02,06,07
- 形態・規模：隅丸方形 (4.6)×4.55m 床面積 (20.93)m²
- 主軸の方向：N46W
- 出土状況：遺物はカマド右側に集中し、須恵器坏(6)や三枚重ねの坏(1、3、4)が出土した。
- 床 面：軟弱。黒色土を床に貼った可能性も考えられる。
- カ マ ド：北西壁ほぼ中央に位置し、煙道は調査区外か。火床は赤化しており、その上に天井・袖の崩れたものが広がって堆積。
- 柱 穴：6基検出され、P 2、3、5が支柱穴と考えられる。カマド左側のP 6は貯蔵穴と考えられよう。
- 時 期：古墳Ⅴ期

第56号住居址 S B 56 (第110図)

- 位 置：②-2B VII F-07,08,12,13
- 形態・規模：(隅丸方形) 二方を他の住居址と道路によって切られているため全体のプランは不明。
(5.3)×(5.5)m
- 主軸の方向：N60E
- 出土状況：カマド付近に遺物集中。火床部分より大小の長胴甕(21、22)と坏(4)、火床奥より、坏、甑(12、13)が出土。この他カマド両側より甕、甑などが集中して出土。いずれも完形に近い個体が多い。覆土より鹿の尺骨も出土している。
- 床 面：特に堅緻な部分は認められず、不明確。
- カ マ ド：北東壁ほぼ中央に位置するものと思われる。検出面における煙道は短く、袖、天井部は崩落し、黄色土と焼土がブロック状に広がる。
- 柱 穴：4基を検出したが、配列は不明。
- 時 期：古墳Ⅳ期

第64号住居址 S B 64 (第111図)

- 位 置：②-2C VII B-02,07
- 形態・規模：隅丸方形 本址東側はS B 61によって切られる。
4.1×3.75m 床面積 15.38m²
- 主軸の方向：N40W
- 出土状況：火床では高坏が逆位で出土。器面の荒れから転用支脚と考えられる。その上にほぼ同じ長さの長胴甕(10、11)がつぶれて出土し、カマド外の破片とも接合している。その他の土器はカマド右側床面に集中し、カマド左側のP 1では小型甕(6)が出土した。

床 面：炭化物が床全面に分布し、堅緻で良く締まっている。
 カ マ ド：北西壁ほぼ中央に位置し、煙道、袖も明確に確認された。燃烧部は良く焼けて煉瓦状を呈する。
 柱 穴：2基検出され、P1は貯蔵穴と考えられる。
 時 期：古墳II期
 備 考：焼失住居。

第69号住居址 SB69 (第112図)

位 置：②-2C IVW-01,02
 形態・規模：隅丸方形 5.4×5.4m 床面積 29.16㎡
 主軸の方向：N27W
 出土状況：遺物はカマド付近に集中し、完形または完形に近い個体が多い。火床では支脚石の上に甕(24)が置かれた状況で出土した。カマド左側には甑(26)と長胴甕(23)、右側には壺、甑、坏等が集中して出土。住居中央付近からミニチュア土器(18)、覆土中からは管玉が2ヶ(50、51)出土した。
 床 面：全体に軟弱で不明確。
 カ マ ド：北西壁ほぼ中央に位置する。袖は地山で構築されているが、破壊されて燃烧部のみ残存。火床より支脚石が出土。
 柱 穴：検出されなかった。
 時 期：古墳IV期

第73号住居址 SB73 (第113図)

位 置：②-2C IVV-05,10、IVW-06
 形態・規模：隅丸方形 5.35×5.65m 床面積 30.23㎡
 主軸の方向：N27W
 出土状況：カマド内から高坏(22)が出土。器面の荒れから見て転用支脚と思われる。近接して長胴甕(28)が完形に近い状態で出土。この他にカマド右側と南東隅の2カ所で、完形および完形に近い土器が集中出土している。覆土からはミニチュア土器(15)も出土している。
 床 面：特に堅緻な部分は認められず、不明確。
 カ マ ド：北西壁ほぼ中央に位置する。煙道は検出できたが、袖は崩落し火床のみ確認できた。
 柱 穴：4基検出されたが、配列は不明である。P1はカマド左側にあり、貯蔵穴の可能性が考えられる。
 時 期：古墳IV期

第75号住居址 SB75 (第113図)

位 置：②-2C VIIA-15,20、VII B-16
 形態・規模：隅丸長方形 3.0×3.55m 床面積 10.65㎡
 主軸の方向：N20E
 出土状況：土器の出土量は全体に少ない。本址西側では馬の脛骨や歯が炭化物とともに出土している。須恵器蓋(1)は北東隅の床面より出土。

- 床 面：軟弱で、南側はグライ化した青灰色土と黒褐色土が分布する。
- カ マ ド：北東壁中央と東寄りに2つのカマドが検出された。両カマドとも燃焼部には焼土が2 cm程堆積する。東側のカマドは袖のみで、煙道は検出されなかった。
- 柱 穴：7基検出され、カマド東側のP 1は貯蔵穴と考えられるが、支柱穴の配列は不明。
- 時 期：古墳V期

第83号住居址 S B 83 (第114図)

- 位 置：②-2C IVV-15,20、IVW-11,16
- 形態・規模：隅丸方形 5.4×(5.8) m 床面積 31.32㎡
- 主軸の方向：N35E
- 出 土 状 況：土器の出土量は多いが、接合個体は少ない。カマド内では高坏(5、8)が出土したが、器面の荒れが少なく、支脚とは判断できない。カマド右側では甕片(14、16)が、南隅付近床面では坏、高坏、壺、甕(1、6、15、17、19)が破片で出土した。覆土中からミニチュア土器(4)が出土。
- 床 面：本址中央部に広がる焼土の下は、やや堅緻で良く締まっている。
- カ マ ド：北東壁中央に位置し、袖は地山の土で構築されたと考えられる。煙道は確認されなかったが火床は明確で、焼土が全面に広がる。
- 柱 穴：6基検出され、P 2とP 4に柱痕が認められた。位置的にはP 5が支柱穴と考えられるが、相対応するものは検出されていない。カマド左側のP 4は貯蔵穴と考えられよう。P 6は、カマド脇の炭化物を切っておりSKの可能性が高い。
- 時 期：古墳I期

第118号住居址 S B 118 (第114図)

- 位 置：②-2C IVV-24,25 VII B-04,05
- 形態・規模：方形 7.1×6.95 m 床面積 49.35㎡
- 主軸の方向：N50E
- 出 土 状 況：土器の出土量は比較的少ない。カマド内では高坏(3)が逆位で出土し、器面が荒れていることから、転用支脚と思われる。カマド右側では壺(9)、P 3付近では壺、甕(6、10)が出土。また、鹿角(2)、砥石が床面から出土している。
- 床 面：カマド前面に炭化物が分布し、ほぼ全面が堅緻で良く締まっている。
- カ マ ド：北東壁中央に位置し、袖は粘土で構築されている。
- 柱 穴：12基検出され、P 1、6、9、10が横長の長方形に配列する。カマドの両脇にP 5、11が位置し、東コーナー付近にピットが集中するが、性格は不明。
- 時 期：古墳II期

第126号住居址 S B 126 (第115図)

- 位 置：②-3A IVR-13,14,18,19
- 形態・規模：隅丸方形 5.2×5.5 m 床面積 28.6㎡
- 主軸の方向：N44W
- 出 土 状 況：土器の出土量は多いが、接合可能な個体は少ない。特殊遺物は、カマド右側床面より白玉

(97)、北東覆土中から有孔円板(189)が出土している。また床面から鹿の頭蓋骨と指骨が出土している。

床 面：地下水の影響で出水が激しく軟弱ではあるが、明確。

カ マ ド：北西壁中央に位置し、右袖はトレンチにより破壊されているが、地山の土で構築されたものと思われる。

柱 穴：主柱穴と思われる位置にP1を検出した。他は出水が激しく検出されなかった。

時 期：古墳V期

第163号住居址 SB163 (第115図)

位 置：②-2C IVV-13,14,18,19

形態・規模：方形? 6.1×5.95m 床面積(36.3)m²

主軸の方向：N43W

出土状況：カマド右側から完形の坏と甕が集中して出土している(2、3、4、6、7、11)。

中央床面で鹿角が、覆土中からミニチュア土器(8)が出土した。

床 面：一部堅緻な部分が認められ明確。貼り床の可能性も考えられる。

カ マ ド：北西壁中央に位置し、左袖はSB162によって切られる。火床はレンガ状を呈する。

柱 穴：南西側に径30cm前後の浅いピットが集中しているが、性格は不明。

時 期：古墳IV期

第164号住居址 SB164 (第115図)

位 置：②-2C IVV-25

形態・規模：不整な隅丸方形 2.7×2.8m 床面積 7.56m²

主軸の方向：N6E

出土状況：床面より土器片少量出土。

床 面：焼土・炭化物が一部に分布し、全面堅緻で良く締まっている。

カ マ ド：北壁中央に位置する。

柱 穴：検出されなかった。

時 期：古墳II期

第167号住居址 SB167 (第116図)

位 置：②-3C IIIU-17,18,22,23

形態・規模：方形 7.1×6.7m 床面積 47.57m²

主軸の方向：N26W

出土状況：カマド火床前方では、高坏(9)と甕(12)が出土している。高坏は器面が荒れており、転用支脚と思われる。カマド右側では坏(1)、南壁中央付近では坏(4)、甕(11)が出土している。全体に土器の出土量は少ない。

床 面：軟弱であるが明確。

カ マ ド：北西壁中央に位置し、長い煙道を持つ。火床面より緩やかに傾斜し、煙道の天井は崩れずに、直径20cm程の煙道口、煙出口が確認された。

柱 穴：検出されなかった。

時 期：古墳II期

第171号住居址 S B 171 (第116図)

位 置：②-3C IIIU-12,13,17,18

形態・規模：隅丸方形 5.6×5.25m 床面積 29.4m²

主軸の方向：N36W

出土状況：床面及び覆土中から土器片が少量出土、カマド右袖に集中する。覆土中から須恵器出土。

床 面：一部堅緻な部分が認められた。

カマド：北西壁やや北よりに位置し、袖は粘土で構築されている。煙道は長く緩やかに傾斜し、煙道口と煙出口が確認された。

柱 穴：5基検出され、主柱穴（P1、2、3、4）がほぼ方形に配列される。P5は出入口に係わる施設と考えられる。

時 期：古墳I～V期の間。

第172号住居址 S B 172 (第117・118図)

位 置：②-3C IIIU-11,12,17

形態・規模：方形 6.25×6.15m 床面積 38.44m²

主軸の方向：N35W

出土状況：床面及び覆土中から土器破片で多く出土し、カマド付近と壁面に添った床面に集中する傾向がある。カマド内からは高坏（22）が逆位で出土し、器面の荒れから転用支脚と思われる。覆土からミニチュア土器（33、34、35）が出土。

床 面：炭化物、焼土が分布し堅緻な部分もあるが、不明確。

カマド：北西壁やや北寄りに位置し、粘土で構築された袖と煙道が確認された。

柱 穴：主柱穴（P1、2、3、4）がほぼ方形に配列される。

時 期：古墳III期

第180号住居址 S B 180 (第119図)

位 置：②-3C IIIU-22,23、VA-02,03

形態・規模：方形 6.25×6.9m 床面積 43.13m²

主軸の方向：N33W

出土状況：覆土中より土器が破片で少量出土し、カマド内からは坏、高坏、甕、壺（2、5、10、11）などが破片で出土した。

床 面：全体に軟弱であるが、明確。

カマド：北西壁やや西寄りに位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。残存する煙道は約70cmで、S B 233の壁面で煙出口が確認された。

柱 穴：3基の主柱穴が検出され、カマドに対し横長の長方形に配列されるものと思われる。

時 期：古墳II期

第181号住居址 S B 181 (第119図)

位 置：②-3C IIY-25、IIIU-21、IVE-05、VA-01

形態・規模：隅丸方形 5.65×5.55m 床面積 31.36m²

主軸の方向：N155E

出土状況：カマド周辺の床面より、長胴甕2個体（11、12）、坏、甑などが出土。量的には少ないものの、いずれもほぼ完形の状態で出土している。

床面：特に堅緻な部分は認められず、不明確。

カマド：南東壁ほぼ中央に位置し、煙道と灰黄褐色砂質土で構築された袖を検出した。燃焼部には炭層に挟まれた焼土が確認され、天井部の崩落が考えられる。火床では支脚石が出土している。

柱穴：検出されなかった。

時期：古墳V期

第182号住居址 SB182 (第120図)

位置：②-3C VA-01

形態・規模：隅丸長方形 3.6×3.2m 床面積 11.52m²

主軸の方向：N32W

出土状況：大半の土器は床面出土で、住居址北西隅では坏、甕、壺（3、12、15）が、南西隅では鉢、甕（6、11）が出土した。

床面：炭化材が住居址中央に向かって倒れた状態で出土。特に堅緻な部分は認められない。

カマド：検出されなかった。

柱穴：3基検出されたが、いずれも径50～60cmで性格は不明。

時期：古墳II期

備考：焼失住居

第183号住居址 SB183 (第120図)

位置：②-3C VA-02,03

形態・規模：隅丸方形か？ 5.9×(4.9)m 床面積 (28.91)m²

主軸の方向：N66E

出土状況：カマド内で高坏（7）が正位で出土しているが、器面の荒れが無く、支脚とは判断できない。カマド左側で坏（1、3）が出土している。

床面：軟弱であるが明確。

カマド：北東壁ほぼ中央に位置するものと思われる。袖は粘土で構築され、燃焼部より上部の壁面に煙道口が確認されている。

柱穴：2基検出されており、位置的に支柱穴と考えられる。

時期：古墳III期

第186号住居址 SB186 (第120図)

位置：②-3C IIIU-16,21、II Y-20,25

形態・規模：隅丸方形 4.95×5.0m 床面積 24.75m²

主軸の方向：N57E

出土状況：カマド内では小型甕（1）が逆位で出土。支脚と思われる。カマドの右側に長胴甕（6）、

左側に小型甕(2)が出土している。P3東側で長胴甕と壺(8、9)が出土している。

床 面：特に堅緻な部分は認められなかったが、明確。炭化材が住居址の中心に向かって倒れた状態で出土。

カ マ ド：北東壁中央に位置し、袖は粘土で構築される。

柱 穴：主柱穴4基が方形に配列する。P3内からは土器片が出土。

時 期：古墳V期

備 考：焼失住居

第196号住居址 SB196 (第121図)

位 置：②-3B IIY-23、IVE-03

形態・規模：隅丸方形 5.0×5.2m 床面積 26.0m²

主軸の方向：N42W

出土状況：覆土中から甕、坏類が破片で出土している。カマド内では支脚石の上に、底部を欠いた鉢(7)が出土している。須恵器坏(5)はカマドの左袖と壁の境で出土。住居址中央やや東寄りに須恵器の大甕(9)が出土したが、床面よりかなり浮いた状況で検出されている。

床 面：地山の円礫の間に黄色土が散点し、貼り床の可能性が考えられる。

カ マ ド：北西壁中央に位置し、煙道と粘土で構築された袖を検出した。

柱 穴：主柱穴(P1、2、3、4)が方形に配列される。P5は出入口に係わる施設と考えられる。

時 期：古墳V期

第201号住居址 SB201 (第121図)

位 置：②-3B IVE-07,08,12,13

形態・規模：隅丸方形 6.6×6.05m 床面積 39.93m²

主軸の方向：N31W

出土状況：カマド火床では支脚石に近接して長胴甕(9)が出土。カマド右側には鉢と甕(7、11)、カマド前方では高坏と甕(5、8、10)が出土し、いずれもほぼ完形に近い。また、住居西コーナーでは円礫が集中して出土している。

床 面：ほぼ全面堅緻で良く締まっており明確。

カ マ ド：北西壁中央に位置し、煙道と地山削りだしの袖を検出。支脚は円礫が使われている。

柱 穴：6基検出されており、主柱穴(P1、2、3、5)がほぼ方形に配列される。

時 期：古墳V期

第316号住居址 SB316 (第122図)

位 置：②-3A IVS-06,07,11,12

形態・規模：隅丸方形 7.1×6.5m 床面積 46.15m²

主軸の方向：N49E

出土状況：壁際に沿って、完形または完形に近い土器が多数床面から出土。東コーナー付近では坏類(1、2、6、7、8、10)、南東壁では甕(16)が出土した。

床 面：全面堅緻で良く締まっており、間層に厚さ10cmの粘土の貼床が認められた。

炉：中央やや北寄りに掘り込みのある地床炉を検出した。

柱 穴：4基の支柱穴が検出され、いずれも柱根が残り、方形に配列される。
 時 期：古墳II期
 備 考：北東壁から南東壁にかけて深さ約5cmの周溝が確認された。

第321号住居址 S B 321 (第123図)

位 置：②-3B IVE-22,23
 形態・規模：北西側をS B 354に切られ全体のプランは不明であるが隅丸方形の可能性が高い。
 $5.2 \times (4.0) \text{ m}$ 床面積 (20.8) m^2
 主軸の方向：N43E
 出土状況：カマドから完形に近い坏、高坏、甕、鉢などが集中して出土した(1、2、4、9、10、14)。
 出土量が多く、カマド使用時に伴ったものか不明である。
 床 面：軟弱であるが明確。炭化物、炭化材が床全面に分布し、南コーナー付近にはムシロ状の炭化物が出土している
 カマド：北東壁ほぼ中央に位置し、袖は粘土で構築されている。天井部・煙道は検出されない。
 柱 穴：検出されなかった。
 備 考：床面の炭化材は中心に向かって倒れており焼失住居の可能性が考えられる。
 時 期：古墳II期

第322号住居址 S B 322 (第124図)

位 置：②-3B IVD-25、IVE-21、IV I-05、IV J-01
 形態・規模：北西側は調査区外、南東側はS B 380によって切られているが、方形～長方形と考えられる。
 $10.7 \times (7.3) \text{ m}$ 床面積 (78.11) m^2
 主軸の方向：N34E
 出土状況：土器はカマド周辺から中央部にかけての床面に集中し、ほぼ完形になる個体が多いが、大半は破片で出土している。北西の覆土中より白玉(100)が出土。
 床 面：一部に炭化物が分布するが、明確ではない。
 カマド：北東壁ほぼ中央にあると考えられる。破壊されており、煙道と火床が僅かに確認された。
 柱 穴：検出されなかった。
 時 期：古墳II期
 備 考：付近には本址やS B 380、354などの大型の住居が存在する。

第327号住居址 S B 327 (第125図)

位 置：②-3B IVE-13,14,18,19
 形態・規模：方形 $6.1 \times 5.7 \text{ m}$ 床面積 34.77 m^2
 主軸の方向：N52E
 出土状況：土器はカマド右側と南西壁付近の床面より出土。坏類と須恵器甗(12)はカマド右袖付近で出土し、甗、壺(17、18)はカマドと対面する壁際から出土している。その他、床面に長さ10～15cmの円礫が少量検出され、こも編み石の可能性も考えられる。
 床 面：全体に軟弱であるが、明確。
 カマド：北東壁中央に位置し、やや湾曲した煙道と袖を検出した。

第Ⅲ章 調査成果

柱 穴：検出されなかった。

時 期：古墳Ⅲ期

第341号住居址 S B 341 (第126図)

位 置：②-3C II Y-18,19,23,24

規模・形態：隅丸方形 5.3×5.75m 床面積 30.48㎡

主軸の方向：N45W

出土状況：土器はカマド左側の床面より出土し、完形に近い個体が多い。特にP4付近には坏(2、3、4、7、8)が集中している。

床 面：一部堅緻な部分があり明確。

カマド：北西壁中央に位置し、粘土で構築された左袖と煙道を検出した。

柱 穴：4基の支柱穴がカマドに対して横長の長方形に配列される。

時 期：古墳Ⅴ期

第354号住居址 S B 354 (第127・128図)

位 置：②-3B IVE-16,17,21,22

形態・規模：隅丸方形 10.15×10.2m 床面積 103.53㎡

主軸の方向：N48E

出土状況：土器はカマド周辺と南西壁付近の床面から多量に出土。カマド内からは高坏(16)が逆位で出土し、支脚の可能性も考えられる。カマド左側には甗、甕(24、27、28)などが集中する。右側には坏類(3、4、5、7)が多量に出土し、完形または完形に近い個体が多い。覆土中からは細い棒状の銅製品(36)、イヌ類と鳥類の骨も出土。

床 面：カマド周辺部には炭化物や炭化材が分布し、床面は全体に軟弱。

カマド：北東壁中央に位置し、袖は痕跡をとどめるのみであったがわずかに煙道を確認した。

柱 穴：5基検出されておりP1、2、3、4が支柱穴、P5は出入口ピットであろう。

時 期：古墳Ⅱ期

備 考：該期の住居の中では最大クラス。付近にはS B 322,380など同規模の住居が存在する。

第361号住居址 S B 361 (第129図)

位 置：②-3A IVN-18,19,23,24

形態・規模：隅丸方形 8.1×8.0m 床面積 64.8㎡

主軸の方向：N19W

出土状況：土器は北壁付近の床面及び覆土中から完形または完形に近い坏、高坏、壺、甕(1、4、6、7、13、14、17、19、20)などが集中して出土した。NO.12は弥生時代後期の北陸系土器と思われる混入品である。

床 面：部分的に堅緻な部分があるが不明確。

カマド：住居址壁面ではカマドは検出されず、中央部も調査区境の攪乱により、炉の存在を証明することは出来ない。

柱 穴：15基検出されているが配列は不規則である。

時 期：古墳Ⅰ期

第377号住居址 S B 377 (第129図)

位置：②-3C II Y-03,04,08,09

形態・規模：大半をS D 113によって切られているが、方形か？ 5.4×(5.6)m 床面積 (30.24)m²

主軸の方向：N50E

出土状況：土器はカマド周辺の床面に集中して出土し、完形または完形に近い個体が多い。カマド内では長胴甕(9)が逆位で出土し、カマド両袖先端にも長胴甕(10、11)が逆位で固定されている。カマド左側では須恵器蓋(4)、右側では長胴甕(12、13)、覆土からはミニチュア土器が出土している。

床面：特に堅緻な部分は認められず、不明確。

カマド：北東壁中央に位置し、袖は粘土で構築され、先端には甕の上部が埋め込まれている。

柱穴：検出されなかった。

時期：古墳V期

第380号住居址 S B 380 (第130・131図)

位置：②-3B IV J-01,02,06,07

形態・規模：西コーナーが張りだした不整形な隅丸方形。 8.9×8.1m 床面積 72.09m²

主軸の方向：N58E

出土状況：土器は破片での出土が多く完形の個体は少ない。カマド内では坏(8)が伏せて置かれ、中に粘土が詰まった状態で出土している。その隣では高坏(20)が正位で出土しているが、器面が荒れており支脚であった可能性もある。カマド右袖付近では破片で、高坏、甕(19、22、26、29)などが出土している。住居址西コーナー付近の床面では、坏、高坏、甕(1、9、23、28)が、P 6内からは壺、甕、ミニチュア土器(14、16、25、32)などが、いずれも破片で出土している。

床面：軟弱であるが明確。

カマド：北東壁やや北寄りに位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。

柱穴：8基検出されたが配列は不明。P 3、4は出入り口ピットの可能性が考えられる。大型住居でもあり6本柱も考えられよう。

時期：古墳II期

備考：付近ではS B 322、354など同様の大型住居が確認されている。

第383号住居址 S B 383 (第132図)

位置：②-3B IVE-13,17,18,19,23

形態・規模：隅丸方形 9.05×8.55m 床面積 77.38m²

主軸の方向：N25W

出土状況：土器は破片で床面から多く出土し、集中箇所が見られる。住居址北西側で鉢と甕(29、32)、坏、高坏、甕、ミニチュア土器(6、19、24、30)が出土し、南壁付近では坏、高坏(8、13、16、20)が出土している。さらにP 1内からも坏、高坏(9、12)が出土した。覆土中からは白玉(109)が出土し、住居址北側ではムシロ状の炭化物が、ほぼ床面から出土している。

床面：軟弱

第III章 調査成果

カマド：検出されなかった。南東壁付近に焼土塊を検出したが炉の可能性は低い。
柱 穴：2基検出されているが、性格は不明。
時 期：古墳II期

第450号住居址 S B 450 (第132図)

位 置：②-3C II Y-13,14,18,19

形態・規模：周囲を他の住居址によって切られ全体のプランは不明。

主軸の方向：不明。

出土状況：ほぼ完形の須恵器の壺と土師器の台付鉢(1、2)が床面よりやや浮いた位置で出土したが、他は破片が多い。また、床面より白玉が21個(113~132)出土した。北西壁際から獣骨が出土したものの、残存状態が悪く種別は不明。

床 面：一部に炭化物が分布し、全面堅緻で良く締まっており明確。

カマド：検出されなかった。

柱 穴：検出されなかった。

時 期：古墳V期か？

備 考：住居址で玉類が一定量出土する例は少なく、壺や獣骨も出土するなど、注目される。

第477号住居址 S B 477 (第133図)

位 置：②-3B IV J-06,07

形態・規模：やや不整形な隅丸方形 5.0×4.8m 床面積 24.0m²

主軸の方向：NS

出土状況：土器の出土量は全体に少なく、本址ではP5において集中的に遺物が出土した。完形の甕(5)(中に炭化米を含む)がP5から出土し、覆土上部から小型壺と甕、高坏(5、6、7、8)、白玉(134)が出土している。本址北西側の覆土中からはモモの種が出土。

床 面：一部に炭化物が分布し明確。

カマド：カマドは検出されなかったが、北側の支柱穴間に炭化物が分布し、炉またはカマドが存在した可能性が考えられる。

柱 穴：7基検出され、支柱穴(P1、2、3、4)が方形に配列される。P5は一辺約90cmの方形で、深さは約40cmを測り、上部にテラス部を有する。貯蔵穴か、祭祀に関わるピットか性格は不明。

時 期：古墳II期

第486号住居址 S B 486 (第133図)

位 置：①-1 III Q-01,02,06,07

形態・規模：やや不整形な方形 4.1×4.1m 床面積 16.81m²

主軸の方向：N20E

出土状況：土器はカマド右側の床面から少量出土。床面よりやや浮いた位置では馬の頭蓋骨や歯が出土しているが詳細は不明。また、覆土から紡錘車(26)が出土している。

床 面：全体に軟弱であるが、黄色土を貼った貼り床を確認した。

カマド：北東壁中央に位置し、地山の粘土で構築された袖と煙道を検出した。支脚は砥石を転用し

ている。

柱 穴：2基検出されたが、P2は炭化物の多い覆土で、灰溜めピットと考えられる。
時 期：古墳V期

第526号住居址 S B 526 (第134図)

位 置：①-2 III P-16,21

形態・規模：隅丸方形 4.35×4.85m 床面積 21.1m²

主軸の方向：N13E.

出土状況：完形または完形に近い土器がカマド付近に集中する。カマド内には支脚石が残り、長胴甕(11)が正位で出土、焚口前方部でも長胴甕(13)が出土している。カマド右袖付近では長胴甕、坏、甗、鉢などが集中して出土(5、12、14、16)。口縁部に孔を有するミニチュア土器(9)が西壁付近の床面より出土。

床 面：炭化物が一部に分布するが、不明確。

カマド：北壁やや西寄りに位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。支脚石には円礫が用いられている。

柱 穴：4基検出され、直交軸とは平行しないが主柱穴と考えられる。

時 期：古墳V期

第531号住居址 S B 531 (第135図)

位 置：①-2 III P-16,17,21,22

形態・規模：やや横長の隅丸長方形 3.95×4.4m 床面積 17.38m²

主軸の方向：N50E

出土状況：カマド内から長胴甕(7)が出土。本址中央部に炭化物が分布し、その範囲の床面から坏、紡錘車(27)、馬と鹿の歯などが集中して出土している。また、床面に長さ15cm前後の円礫が多く点在しており、こも編み石の可能性も考えられる。他の遺物と同時に廃棄されたとすれば何らかの意味付けが必要となろう。

床 面：炭化物がほぼ全面に分布しており、明確。特に中央部は炭化物が厚く堆積する。

カマド：北東壁北寄りに位置し、地山で構築された袖と煙道を検出した。支脚は確認できない。

柱 穴：検出されなかった。

時 期：古墳V期

第542号住居址 S B 542 (第135図)

位 置：①-2 III P-23,24

形態・規模：南半分を他の住居址等に切られているが方形か? 6.2×(4.5)m 床面積 (27.9)m²

主軸の方向：N71E

出土状況：土器はカマド付近から完形に近い土器が多く出土した。カマド内では支脚石の上に小型甕(6)が伏せられた状態で出土し、近接して鉢(5)や長胴甕が二つ倒れた状態で出土している(8、10)。カマド左袖先端部には長胴甕(7)が逆位で、右袖先端部でも甕片が逆位で埋め込まれている。また西コーナー付近の床面直上に長さ15cm前後の円礫が集中出土している。こも編み石の可能性が高い。

第三章 調査成果

床 面：一部に炭化物が分布するが、不明確。
カ マ ド：東壁ほぼ中央に位置する。地山の土で構築された袖と煙道が検出された。
柱 穴：検出されなかった。
時 期：古墳Ⅴ期

第578号住居址 S B 578 (第136図)

位 置：①-1B1 IIIK-16,17,21,22
形態・規模：隅丸方形 5.55×5.65m 床面積 31.36㎡
主軸の方向：N52E
出土状況：カマド内と、カマド左側の床面よりやや浮いた位置に坏、長胴甕、甗が集中し、東コーナーからも長胴甕が2点出土している。西コーナー付近の床面からは須恵器の甗(14)が出土した。覆土中、土器破片が小礫とともに多量に出土しているが、接合できる破片はほとんどない。
床 面：中央部は、小礫が敷き詰められたように分布しており、明確。
カ マ ド：北東壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。支脚には石が用いられている。
柱 穴：5基検出され、支柱穴(P1、2、3、4)が不整形な台形に配列されている。
時 期：古墳Ⅳ期

第595号住居址 S B 595 (第137図)

位 置：①-1B2 IIIK-23,24、III P-03,04
形態・規模：方形 4.65×5.0m 床面積 23.25㎡
主軸の方向：N78E
出土状況：土器はカマド周辺と北西コーナー付近に集中している。床面からの出土は少なく、大半は覆土中より破片で出土。カマド内においては高坏(9)が逆位で置かれているが、外面は脚裾部が若干荒れているものの、脚部から胴部にかけてはミガキも明確に残る。カマド内に埋設した状況も確認できず、支脚とは断言できない。
床 面：特に堅緻な部分は認められず、不明確。
カ マ ド：東壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。
柱 穴：6基検出され、位置的にP2、P4が支柱穴と考えられる。
時 期：古墳Ⅲ期

第625号住居址 S B 625 (第138図)

位 置：①-3A2 IIIK-05
形態・規模：隅丸長方形 4.2×4.65m 床面積 19.53㎡
主軸の方向：N15W
出土状況：カマド内では大・小の長胴甕と甗(19、20、23)がつぶれた状態で出土。さらに高坏の脚部(13)が出土し、器面の様子から支脚の可能性が考えられる。北西コーナーではほぼ完形の坏、高坏、壺(3、6、10、24)などが集中し、P5からは完形の高坏と坏2点(1、4、11)が出土している。須恵器坏蓋(16)は西側覆土中より出土。覆土からはこぶし大の石も一定量出土している。

- 床 面：炭化物が床全面に分布し明確。炭化材や焼土が分布する部分も認められた。
- カ マ ド：北壁やや西寄りに位置し、粘土で構築された袖を検出した。支脚は高坏の脚部が用いられた可能性がある。
- 柱 穴：5基検出されているが、配列は不規則である。
- 時 期：古墳Ⅲ期
- 備 考：焼失住居の可能性あり。

第635号住居址 S B 635 (第139図)

- 位 置：①-1A II T-05, 10, III P-01
- 形態・規模：隅丸方形 7.1×7.05m 床面積 (49.35)m²
- 主軸の方向：N28W
- 出 土 状 況：土器はカマド周辺に集中する。火床では高坏 (13) が逆位で出土し、脚部の器面が荒れていることから、支脚の可能性はある。カマド両側では完形に近い遺物も出土する。覆土中の土器は破片が多い。
- 床 面：炭化物が全面に分布し、堅緻で良く締まっている。
- カ マ ド：北西壁中央に位置し、粘土で構成された袖と煙道を検出した。側壁、天井部は不明。
- 柱 穴：6基検出され、支柱穴 (P 2、3、5) が方形に配列されるものと思われる。
- 時 期：古墳Ⅲ期
- 備 考：焼失住居

第641号住居址 S B 641 (第140図)

- 位 置：①-3A1 III K-10
- 形態・規模：隅丸方形 4.25×4.25m 床面積 18.06m²
- 主軸の方向：N23W
- 出 土 状 況：土器は床面、覆土とも破片で多く出土。特にカマド周辺と南東壁付近に集中する。
- 床 面：全体に締まりはよいが不明確。S K 4100によって中央部分が切られる。
- カ マ ド：北西壁中央に位置し、一部粘土が確認されているが、袖は地山の砂質土で構築されたものと考えられる。煙道は確認されなかったが、土製の支脚 (4) を検出した。
- 柱 穴：7基検出され、支柱穴 (P 1、2、7、8) がほぼ方形に配列される。P 3、P 6は支柱穴の外側に配列され、P 7とP 8の建て直または補助柱穴の可能性が考えられる。
- 時 期：古墳Ⅱ期

第644号住居址 S B 644 (第140図)

- 位 置：①-3A1 III G-21, III L-01
- 形態・規模：隅丸方形 6.1×6.05m 床面積 (36.91)m²
- 主軸の方向：N18E
- 出 土 状 況：土器は床面、覆土とも破片が多い。カマド内でほぼ完形の長胴甕 (10) がつぶれた状態で出土。カマド左側にも甕類 (8、11、14) が集中して出土している。また、南側の床面より、長さ15cm前後の円礫が集中して出土した。こも編み石の可能性が考えられる。
- 床 面：全面堅緻で砂混じり粘性土の貼り床と考えられる。また、西壁際や中央部に炭化材やムシ

口状の炭化物が出土している。

カマド：北東壁中央に位置し、粘土と砂質土で構築された袖を検出した。支脚には石が用いられている。

柱穴：6基検出され、支柱穴（P 2, 4, 5）が方形に配列されるものと思われる。P 1、P 3は補助柱穴、P 6はカマド脇の灰溜めピットと考えられる。

時期：古墳Ⅳ期

備考：焼失住居。

第645号住居址 S B 645 （第141図）

位置：①-3A1、①-1C III L-01,02,06,07

形態・規模：隅丸方形 9.1×9.45m 床面積（86.0）㎡

主軸の方向：N43E

出土状況：土器は覆土、床面とも破片が多い。カマド周辺に坏、長胴甕が集中するが、完形の個体は少なく、カマド内からも長胴甕（11）が破片で出土している。また、カマド燃焼部手前のP 14には、2本の羽口（1、2）が口を合わせた状況で埋設されていた。覆土から紡錘車（28）が出土し、こぶし大の礫も一定量出土している。

床面：特に堅緻な部分は認められず、不明確。

カマド：北東壁中央に位置し、粘土で構築された長い袖と煙道を検出した。煙道は3本検出され、残存するカマドは調査区外に煙出口が確認されている。他の2本の煙道に伴う袖は検出されていないが、火床が確認されており、作り替えの可能性が考えられる。支脚は石を用いており、上に高坏の脚部（7）が伏せられた状態で検出された。

柱穴：16基検出され、支柱穴（P 2、3、5）が方形に配列するものと思われる。P 10、P 11は灰溜めピットであろう。西側の壁付近をめぐる柱穴については、発掘時の所見で本址の柱穴とされていたが、次年度調査区で対応するピットは検出されていない。

時期：古墳Ⅴ期

備考：P 3の西側に幅、深さ約20cmの溝状の落ち込みが確認された。間仕切りの可能性がある。

第663号住居址 S B 663 （第142図）

位置：①-3A2 III K-02,03

形態・規模：隅丸長方形。北側は調査区外。 3.85×(4.4) m 床面積（16.94）㎡

主軸の方向：N58E

出土状況：カマド内から大小の長胴甕が出土（11、12）。カマド左側では坏、鉢類（1、2、4、9）、右側では小型甕、甑（8、10）が、いずれも完形または完形に近い状態で出土している。

床面：全面堅緻で良く締まっている。

カマド：北東壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。支脚石が出土。

柱穴：7基検出されているが、壁にかかっているものもあり、配列は不規則である。

時期：古墳Ⅴ期

第685号住居址 S B 685 （第142図）

位置：①-1C III L-12,13,17

形態・規模：東側を調査区外によって切られているが、隅丸方形と考えられる。

7.4×(6.85) m 床面積 (50.7) m²

主軸の方向：N28E

出土状況：カマド内から小型の長胴甕(12)が逆位で出土し、支脚と考えられる。カマド右袖先端では長胴甕(11)、左袖内には長胴甕(10)の上半部が正位で埋設された状態で出土した。いずれも構築材への転用と思われる。この他に左袖付近で坏、甕(4、5、13)が出土。

床面：床全面に炭化物が分布し明確。炭化材がほとんど見られないことから焼失住居の可能性は薄い。

カマド：支柱穴の配列から推考すると、北東壁やや東寄りに位置する。残存するカマドの北西側に煙道のみを検出したが、中央部にあったカマドを東寄りに作り替えたものと思われる。また、北西壁北寄りに煙道のみを検出しており、カマドの作り替えが推測される。

柱穴：8基検出され、支柱穴(P1、2、3)がほぼ方形に配列されるものと考えられる。P1には柱根が残存した。

時期：古墳V期

第702号住居址 SB702 (第143図)

位置：①-1C III L-16,17,21,22

形態・規模：隅丸方形 6.4×(6.4) m 床面積 (40.96) m²

主軸の方向：N50E

出土状況：カマド内から高坏(8)が破片で出土。カマド左側から北コーナーにかけては坏類(1、3、4、7)が、いずれも床面から破片で出土している。覆土および床面からこぶし大の礫が出土し、こも編み石の可能性も考えられる。覆土中から鹿の肩甲骨が出土。

床面：ほぼ全面が堅緻で良く締まっている。炭化物が床全面に分布し、炭化材が住居の中心に向かって倒れた状態で出土している。

カマド：北東壁やや北寄りに位置するが、東側が調査区外のため右袖と煙道は検出されてない。

柱穴：検出されなかった。

時期：古墳III期

備考：焼失住居の可能性有り。

第742号住居址 SB742 (第143図)

位置：①-1C III U-09,10,15

形態・規模：東側を調査区外によって切られているが、隅丸長方形と考えられる。

5.0×(4.8) m 床面積 (24.0) m²

主軸の方向：N48E

出土状況：住居址中央部から北西側にかけての床面及び覆土からこぶし大の礫とともに土器がまわって出土。壺、甑、甕(10、12、15、16)などはほぼ完形に近い。土器も礫も集中する傾向があり、一括廃棄された可能性がある。

床面：特に堅緻な部分は認められず軟弱である。

カマド：調査区外のため検出されなかったが、北東壁に存在する可能性が高い。

柱穴：3基検出され、P2、P3が支柱穴と考えられる。P1は壁に近接し、性格不明である。

時 期：古墳Ⅳ期

第746号住居址 S B 746 (第144図)

位 置：①-1C III P-15,20、III Q-11,16

形態・規模：隅丸方形 5.0×5.25m 床面積 (26.25) m²

主軸の方向：N50E

出土状況：カマド内より長胴甕(6)、カマド右側より、坏、長胴甕、甑(1、2、3、4、5、7)が出土している。また、P1付近の覆土中より耳環(27)が出土している。

床 面：全面堅緻で良く締まっている。

カ マ ド：北東壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。支脚石が出土。

柱 穴：2基検出されたが配列は不明。

時 期：古墳Ⅴ期

第752号住居址 S B 752 (第144図)

位 置：①-1C III P-19,20,24,25

形態・規模：隅丸長方形 3.8×4.4m 床面積 16.72m²

主軸の方向：N12W

出土状況：カマド部分はS K 7204により破壊され詳細は不明。土器は特定の場所に集中せず、住居址全体に広がり、完形に近い土器が床面より出土している。また、10~15cm前後の円礫も多数出土している。中央部付近の床面からは、土製の紡錘車(31)が出土している。

床 面：特に堅緻な部分は認められず不明確。床全面に炭化物が分布し、炭化材は中心に向かって倒れた状態で出土した。中央付近2ヶ所に粘土の高まりが確認されている。

カ マ ド：北壁中央に煙道と火床の痕跡を検出したが、袖は確認されなかった。北東コーナーに粘土で構築された袖と火床が検出され、中央にあったカマドの作り替えと考えられる。

柱 穴：検出されなかった。

時 期：古墳Ⅴ期

備 考：焼失住居

第756号住居址 S B 756 (第145図)

位 置：①-1C III P-25、III U-05

形態・規模：南西壁を他の住居址によって切られているため、全体のプランは不明であるが隅丸方形の可能性が高い。(3.0)×3.5m 床面積 (10.5) m²

主軸の方向：N58E

出土状況：カマド火床より長胴甕(4)が、カマド前方では鉢(3)が出土。特殊遺物としては床面より子持ち勾玉(49)と白玉(139~141)が出土している。

床 面：全体に軟弱で不明確。

カ マ ド：北東壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。カマド右袖の内側には甕の破片が張り付けられたような状態で出土した。

柱 穴：2基検出されたが、性格不明。

時 期：古墳Ⅴ期

第803号住居址 SB803 (第145図)

位置：②-5 IVN-10、IVO-06

形態・規模：隅丸方形 5.0×4.9m 床面積 24.5m²

主軸の方向：N170E

出土状況：土器は床面より破片が少量出土しているが、カマド左側に集中する傾向がある。また、床面より石皿(6)が、北壁付近で白玉(142)が出土した。覆土からは紡錘車(32)も出土している。

床面：特に堅緻な部分は認められず、不明確。

カマド：南壁西寄りに位置するが、焼土の分布とわずかな袖の痕跡をとどめるにすぎない。

柱穴：4基の支柱穴がほぼ方形に配列される。P4には柱根が認められた。

備考：古墳V期

第806号住居址 SB806 (第146図)

位置：②-5 IVO-06,07

形態・規模：本址の約半分が調査区外のため、全体のプランは不明であるが、柱穴の位置から推考すると横長の隅丸長方形の可能性が高い。(3.45)×5.55m 床面積 (19.15)m²

主軸の方向：N40W

出土状況：遺物は全体に少ない。カマド内では土師器蓋(5)が伏せた状態で検出。器面が荒れており、転用支脚と思われる。その上には若干焼土が堆積し、高坏(7)が逆位で出土しているが、器面の荒れはみられない。カマド左側の炭化物集中範囲からは坏(1)、カマド右側では須恵器坏身(6)が出土している。また、カマド左側の床面から鹿骨(椎骨、足根骨、中手骨)が、南西壁付近では管玉1点(62)が出土した。

床面：間層に炭化物、炭化材の集中する層があり、床面は堅緻で良く締まっている。

カマド：北西壁中央に位置し、粘土で構築された袖を検出した。

柱穴：5基検出され、支柱穴(P1、3、4)が横長の長方形に配列されるものと考えられる。P5はカマド脇の灰溜めピットであろう。

時期：古墳II期

備考：焼失住居。

第811号住居址 SB811 (第146図)

位置：②-5 IVE-10

形態・規模：西側を調査区境によって切られ、全体のプランは不明だが隅丸長方形と考えられる。5.6×(4.1)m 床面積 (22.96)m²

主軸の方向：N38E

出土状況：カマド内からは完形の坏(1)と長胴甕(11)が破片で出土した。カマド右側では坏、甕、鉢、甗など(4、5、6、10、12)、左側では坏、甕、壺(2、8、9、11、13)が出土しているが、いずれも完形または完形に近い個体が多い。また、管玉(63)がカマド右袖付近の覆土中より出土。

床面：全面堅緻で良く締まっている。

カマド：北東壁東寄りに位置し、粘土で構築された袖を検出した。右袖は左袖よりも長く、左袖の

前面には炭化物や灰が厚く分布する。カマド内からは支脚石が出土した。

柱 穴：3基検出されたが、柱間間隔が狭く性格不明。

時 期：古墳Ⅴ期

第813号住居址 S B 813 (第147図)

位 置：②-5 IVE-10、VA-06

形態・規模：隅丸方形 4.85×4.6m 床面積 22.31㎡

主軸の方向：N90E

出土状況：東壁付近の床面から甗、甕、高坏（2、3、5、6）などが破片で出土。また、南壁際より
白玉（143）が出土している。

床 面：炭化物が全面に分布し、明確。炭化材が倒れた状態で出土している。

炉：中央やや北よりに径約30cmの地床炉を検出した。

柱 穴：3基検出されたが、性格は不明。

時 期：古墳Ⅱ期

備 考：焼失住居。

第818号住居址 S B 818 (第147図)

位 置：②-5 VA-06,11

形態・規模：約半分が調査区外のため、全体のプランは不明であるが方形の可能性が高い。
(5.3)×6.7m 床面積 (35.51)㎡

主軸の方向：N32W

出土状況：カマド内では坏（1）が伏せた状態で出土し、その上に高坏（4）が逆位で重なる。高坏
は器面が荒れており、支脚に転用したと思われる。カマド右側では高坏脚部（5）、左側
では高坏、甕、壺（6、8、9）が破片で出土している。特殊遺物としては覆土中より管玉
（64）、白玉（144）が出土した。

床 面：炭化物が床面に分布し、明確。

カ マ ド：北西壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。

柱 穴：検出されなかった。

時 期：古墳Ⅱ期

備 考：壁に沿って、幅25～30cmのテラス状の施設が検出された。

第825号住居址 S B 825 (第148図)

位 置：②-5 IVE-19,20

形態・規模：隅丸方形 5.65×5.8m 床面積 32.77㎡

主軸の方向：N14W

出土状況：住居址北側の炭化物集中範囲から、甕・高坏などが破片で出土し（16、20、26、27、29）、東
側には坏が集中する傾向がある。また、北壁付近から白玉が151点（145～159）集中して出
土し、覆土からモモの種も出土した。

床 面：炭化物が一部に分布し明確であったが、湧水が激しく床面は泥沼状態であった。

カ マ ド：北壁の西コーナー寄りにわずかに煙道を確認したが、袖、燃烧部は検出されなかった。土

器集中部分の東側には土器を中心とした炭化物の集中部分があり、地床炉が存在した可能性もある。

柱 穴：検出されなかった。

時 期：古墳Ⅱ期

第1006号住居址 S B 1006 (第148図)

位 置：①-3B III F-18,19,23,24

形態・規模：隅丸方形 6.0×6.15m 床面積 36.9m²

主軸の方向：N22W

出土状況：カマド内より高坏（7）が逆位で出土。器面の荒れが少なく支脚の可能性は低い。カマド左側床面では完形に近い坏、高坏、甑などが集中して出土（1、4、5、6、8、9、10、12、14）。

床 面：比較的堅緻で良く締まっており明確。

カマド：北壁ほぼ中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。

柱 穴：7基検出されたが配列は不規則。

時 期：古墳Ⅲ期

第1015号住居址 S B 1015 (第149図)

位 置：①-4A III A-24,25、III F-04,05

形態・規模：隅丸方形 4.5×4.6m 床面積 20.7m²

主軸の方向：N36E

出土状況：カマド内から大小の長胴甕（9、11）が並列して出土し、煙道口付近より坏（1）も出土している。南東側の床面では坏、壺、甕（6、8、12、14、15）が破片で出土。

床 面：全面堅緻で良く締まっており、明確。

カマド：北東壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。支脚は確認できない。

柱 穴：7基検出され、やや不規則な配置のP1、3、5、7が支柱穴と考えられるが、その他のピットの性格は不明である。

時 期：古墳Ⅴ期

第1023号住居址 S B 1023 (第149図)

位 置：①-4A III G-01,02,03

形態・規模：隅丸方形 6.0×6.6m 床面積 (39.6)m²

主軸の方向：N37E

出土状況：カマド内からはミニチュア土器（4）、小型甕（6）が出土しているが、全体に破片が多い。特殊遺物としては覆土中より紡錘車（33）、管玉（65）、土製支脚（19）が出土している。

床 面：全面堅緻で良く締まっており、明確。

カマド：北東壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。

柱 穴：7基検出され、支柱穴（P1、2、4、5）はすべて柱根が残存し、ほぼ方形に配列される。

時 期：古墳Ⅴ期

第1027号住居址 S B 1027 (第150図)

位 置：①-4A III B-21, 22、III G-02

形態・規模：隅丸長方形 5.1×4.3m 床面積 21.93㎡

主軸の方向：N40E

出土状況：カマド内から完形の鉢(10)が1点出土。この他に土器はカマド両脇のコーナー付近の床面に集中して出土。

床 面：全面堅緻で良く締まっており、明確。

カマド：北東壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。左袖はS K 8124によって切られている。

柱 穴：4基検出され、径30cm前後の主柱穴(P 1、2、3、4)がほぼ方形に配列される。

時 期：古墳II期

備 考：北東と南東壁の一部を除き、壁に沿って、深さ15cm前後の周溝が検出されている。

第1032号住居址 S B 1032 (第151図)

位 置：①-3B III G-06, 07, 11, 12

形態・規模：方形 6.35×6.15m 床面積 39.05㎡

主軸の方向：N29E

出土状況：カマド内から高坏が出土し、器面の荒れから転用支脚と思われる。須恵器甕(12)はカマド内と北西コーナーで出土したものが接合する。カマド右側では長胴甕(10、11)が2点出土。ミニチュア土器(2)は覆土中からの出土。

床 面：一部堅緻な部分があり、明確。

カマド：北東壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。

柱 穴：8基検出され、主柱穴(P 2、3、5、7)が方形に配列される。P 5には柱根が2本残存し、P 1、4、6は建て直しの可能性も考えられる。P 2、3覆土は間層に炭化物を挟む。

時 期：古墳V期

第1034号住居址 S B 1034 (第151図)

位 置：①-3B III G-06, 11

形態・規模：やや不整形な隅丸方形 4.5×5.0m 床面積 (22.5)㎡

主軸の方向：N45W

出土状況：住居址中央部付近の床面よりやや浮いた位置から坏、甕、甑などの土器が破片で多量に出土(2、3、8~20)。接合によりほぼ完形になる個体が多い。土器の他にこぶし大の礫が多く出土し、共に廃棄されたものと思われる。

床 面：特に堅緻な部分は認められず、明確ではない。

カマド：北西壁ほぼ中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。支脚には石が用いられている。

柱 穴：検出されなかった。

時 期：古墳IV期

第1044号住居址 S B 1044 (第152図)

位置：①-4A IIIA-22,23、III F-02,03
 形態・規模：隅丸方形 4.0×(4.0)m 床面積 (16.0)m²
 主軸の方向：N29W
 出土状況：土器は全体に少なく、住居中央の床面から甕(4)、北コーナーから坏、甑(1、2、5)が出土している。特殊遺物としては、北西壁付近の覆土中から、羽口2本(4、5)と椀形滓?(12)が出土している。羽口の周囲には炭化物や焼土の広がりは見られず、鍛冶遺構の可能性は低い。羽口が本址に伴うか、廃棄されたのかは不明である。
 床面：構築時の排土を用い床を貼っているが、特に堅緻な部分は認められず不明確。
 カマド：検出されなかった。
 柱穴：方形に配列された主柱穴が4基検出された。
 時期：古墳V期

第1065号住居址 SB1065 (第152図)

位置：①-4A IIIB-11,12,16,17
 形態・規模：隅丸方形 7.1×7.1m 床面積 50.41m²
 主軸の方向：N72E
 出土状況：住居西壁で坏(1、2)が出土している以外は、カマド側壁面に集中する傾向がある。P4南側では長胴甕(5、6、7)、P1、P5の北側では甕、壺、鉢(4、8、10)が出土したが、カマド内から土器は出土していない。
 床面：特に堅緻な部分はみられないが明確。
 カマド：北東壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出。燃焼部からは土製支脚(17)が出土。
 柱穴：5基検出され、主柱穴(P1、2、3、4)が方形に配列される。P5は貯蔵穴と考えられる。
 時期：古墳IV～V期

第1086号住居址 SB1086 (第153図)

位置：①-4A IIIB-17,18
 形態・規模：隅丸方形 4.2×4.5m 床面積 18.9m²
 主軸の方向：N45E
 出土状況：カマド内から完形の甕(4)や坏、鉢(3、6)が出土。カマド右側では甕、壺(5、7)が出土し、カマド左側では甑(8)が出土している。
 床面：全面堅緻で良く締まっており、明確。
 カマド：北東壁中央に位置する。支脚は検出されなかった。
 柱穴：7基検出されたが、配列は不規則。
 時期：古墳V期

第1087号住居址 SB1087 (第153図)

位置：①-4A IIIB-07,12,13
 形態・規模：隅丸長方形 3.4×3.75m 床面積 12.75m²

主軸の方向：N20E

出土状況：カマド火床には坏と壺（7、13）が出土。カマド左側には甕（9）が、住居址東コーナーでは坏（2、4、6）が、中央部では壺（12、15）が、いずれも床面において破片で出土している。

床面：特に堅緻な部分は認められず不明確。

カマド：北壁中央に位置し、地山の砂質土で構築された袖と煙道を検出した。支脚には石が用いられている。

柱穴：1基検出したが性格は不明。

時期：古墳V期

第1093号住居址 SB1093 （第154・155図）

位置：①-4A IIIA-09,10,14,15

形態・規模：隅丸方形 8.85×8.65m 床面積 76.55㎡

主軸の方向：N32W

出土状況：カマド内では高坏、甕（17、27、31）がつぶれた状態で出土。特に高坏（17）は器面が荒れており、転用支脚と思われる。その他の土器はカマド両側と住居壁面沿いの床面で出土し、全体に破片での出土が多い。カマド左側P7では甕、壺（29、32）がほぼ完形の状態で出土している。須恵器樋口縁部（25）は覆土中より出土。また、南東壁中央部の覆土中からニホンジカの骨や歯も出土した。

床面：特に堅緻な部分は認められずやや不明確。南東側は礫が床面に露出しており、カマドに近くなるほど床面レベルは深くなる傾向がある。

カマド：北西壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。また、発掘時の所見で煙道が2本の可能性を示唆しているが、断面図のみで明らかではない。

柱穴：7基検出し、6基の主柱穴が方形に配列され、P1には柱根が残存する。P7は炭化物、灰が集中し、甕、壺が出土している。

時期：古墳II期

第1131号住居址 SB1131 （第156図）

位置：①-4B IU-13,14,18,19

形態・規模：西側を調査区外によって切られているが隅丸方形と考えられる。

7.7×(6.2)m 床面積 (47.74) ㎡

主軸の方向：N17E

出土状況：カマド内では長胴甕（7）が出土。カマド左側では甕、甑、壺（2、3、4、5、6）などが完形または完形に近い状態で出土。P4南では完形に近い甕（8）が破片で出土。

床面：堅緻な部分もあり明確。北東コーナーには炭化物が集中し、中央部にはオレンジ色に焼結した焼土が塊状で検出された。また、P1南側には粘土が5~10cmの厚さで広がる。

カマド：北東壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。また、左袖西側には焼土が集中し、壁に接した位置に内側がチョコレート色に焼けたピットを有することから、カマドの作り替えが考えられる。支脚には石が用いられている。

柱穴：6基検出され、主柱穴（P1、3、4、6）が方形に配列される。P2は灰溜めピットと考

えられる。

時期：古墳V期

第1144号住居址 SB1144 (第157図)

位置：①-4B IQ-22、IV-02,03

形態・規模：隅丸長方形 6.1×5.35 m 床面積 (32.64)m²

主軸の方向：N21W

出土状況：カマド内からは坏(3)が出土し、近接してほぼ完形の長胴甕が出土した。カマド左側のP8からは甕が2点(6、7)、カマド右側では甑と壺がいずれもほぼ完形の状態で出土。また、東側の床面からは砥石(31)が出土している。

床面：特に堅緻な部分は認められず、不明確。

カマド：北西壁やや西側に位置し、粘土で構築された袖を確認したが、煙道は不明。土製支脚(1)が出土。

柱穴：7基検出され、支柱穴(P1、3、5)が方形に配列される。

時期：古墳V期

第1151号住居址 SB1151 (第157図)

位置：①-4C IQ-23

形態・規模：横長の隅丸長方形 3.5×4.6m 床面積 16.1m²

主軸の方向：N64E

出土状況：甕、壺などが南側の床面から破片で出土している(5、6、7)。また、南西壁中央付近に円礫が集中して出土し、こも編み石の可能性が高い。

床面：全面堅緻で良く締まっており明確。

カマド：北東壁中央に位置し、粘土で構築された袖を検出したが、煙道、支脚は検出されなかった。

柱穴：12基検出され、支柱穴と考えられる柱穴が不規則に配列される。P6以外は補助柱穴を伴うものと考えられる。南側に小さなピットが集中するが、性格は不明。

時期：古墳V期

第1159号住居址 SB1159 (第158図)

位置：①-4C IQ-08,13

形態・規模：横長の隅丸長方形 3.7×5.2m 床面積 19.24m²

主軸の方向：N76E

出土状況：カマド内ではほぼ完形の長胴甕(7)が出土し、カマド奥ではミニチュア土器(3)も出土している。カマド左側には完形の壺、甑(8、9)、右側の南東コーナーには、完形の鉢、坏と甕、甑(1、5、6、10)が出土した。西側の床面からは長さ10～15cmの円礫が多数出土している。

床面：全面堅緻で良く締まっており明確。

カマド：東壁やや南に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。支脚石が出土。

柱穴：11基検出されたがいずれも浅く、配列は不規則である。

時期：古墳V期

備考：近接するS B1151も、本址と同様に横長の隅丸長方形を呈し、多くの柱穴が不規則に配列されている。

第1165号住居址 S B1165 (第158図)

位置：①-4C I Q-01,02

形態・規模：横長の隅丸長方形 3.5×4.6m 床面積 16.1㎡

主軸の方向：N31W

出土状況：カマド内では、完形に近い大小の甕(4、8)が並列して出土。カマド右側では長胴甕(7)が、左側では坏、高坏(1、2、3)が出土している。

床面：比較的締まっており明確。

カマド：北西壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道をわずかに検出した。支脚石も出土。

柱穴：6基検出されているが、配列は不規則である。

時期：古墳V期

備考：S B1151、S B1159と類似した形態を持つ。

第1212号住居址 S B1212 (第159図)

位置：①-6 IIIB-23,24、IIIG-03,04

形態・規模：隅丸方形 5.85×5.5m 床面積 32.18㎡

主軸の方向：N22W

出土状況：カマド内では坏や球胴甕が破片で出土(10、20、25)。住居址東側では坏、高坏が、西側には甕、甑が集中して出土しているが、完形または完形に近い個体が多い。

床面：床全面に炭化物が分布し、炭化材が中心に向かって倒れた状態で出土している。また、西壁から北壁に沿って周溝が検出されている。

カマド：北西壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道をわずかに検出した。支脚は不明。

柱穴：7基検出され、主柱穴(P2、4、6、7)が方形に配列され、P3は貯蔵穴と考えられる。

時期：古墳II期

備考：焼失住居

第1219号住居址 S B1219 (第160図)

位置：①-6 IIIB-09,10

形態・規模：隅丸長方形 3.1×4.0m 床面積 12.4㎡

主軸の方向：N28E

出土状況：カマド周辺に完形または完形に近い土器が集中して出土。カマド内では坏と壺(1、2、22、24)が出土している。住居址中央床面より、頭位を南東に向け、下肢は伸展状態の人骨1体が出土した。人骨の北側には、平行して板材が出土しているが、右腕が板材の外側に伸びており、棺の一部かどうかは不明である。胸部では朱が検出されているが、玉類は出土していない。さらに覆土中、人骨直上や周辺からこぶし大の礫が多量に出土している性別は男性であると推測される(第VI章第7節)。

床面：比較的堅緻で締まっており明確。

カマド：北東壁やや北寄りに位置し、地山の土で構築された袖と煙道を検出した。支脚石も出土。

柱 穴：人骨北側に2基検出したが、人骨取り上げを優先させたため調査されなかった。
 時 期：古墳Ⅴ期
 備 考：遺物や人骨の出土状況から見て家屋墓と思われる。本遺跡では本址とS B 1262で確認されている。

第1262号住居址 S B 1262 (第161図)

位 置：①-6 I Q-19,20

形態・規模：隅丸方形 3.1×3.15m 床面積 9.77m²

主軸の方向：N43W

出土状況：カマド内からは坏、鉢、甕（1、2、3、8）が出土し、住居壁際から坏、甑、壺などがほぼ完形の状態で出土。床面からは人骨が少なくとも3体以上出土している。最も残存状況の良い人骨は頭位を南東に向け、伸展状態で出土している。その他は残存状態が悪く、詳細は不明である。（第Ⅵ章第7節）。人骨の上部では若干のレベル差を有して、こぶし大の礫が多量に検出されている。また、西コーナー付近の壁際より朱が集中して出土している。

床 面：比較的堅緻で締まっており明確。

カ マ ド：北西壁北寄りに位置し、煙道と支脚石を検出した。

柱 穴：3基検出したが、人骨取り上げを優先させたため調査されなかった。

備 考：遺物や人骨の出土状況から見て家屋墓と思われる。家屋墓はS B 1219と本址で確認されているが、両者には若干の時期差があり、遺物の出土傾向も異なる。

第1263号住居址 S B 1263 (第162図)

位 置：①-6 I Q-24,25

形態・規模：隅丸方形 5.1×5.0m 床面積 25.5m²

主軸の方向：N12W

出土状況：土器はカマド内では出土していない。カマド右側及び住居址南東側の床面よりやや浮いた位置に集中して出土している。また、土器とほぼ同位置にこぶし大の礫が分布する事から、土器廃棄時に投げ込まれたと考えられる。

床 面：比較的堅緻で締まっており明確。西側の壁に沿って深さ5cm前後の周溝が検出された。

カ マ ド：北壁ほぼ中央に位置し、地山で構築された袖と煙道を検出した。

柱 穴：5基検出され、支柱穴（P 1、2、3、5）が方形に配列される。

時 期：古墳Ⅴ期

第1264号住居址 S B 1264 (第163図)

位 置：①-6 I Q-10,15

形態・規模：隅丸方形 5.35×5.15m 床面積 27.55m²

主軸の方向：N33E

出土状況：カマド内からは長胴甕底部（7）が出土。カマド両脇の床面近くから、完形または完形に近い長胴甕、甑、坏、鉢が出土。P 5覆土上部からは小型壺（8）が出土している。

床 面：比較的堅緻で良く締まっており明確。

カ マ ド：北東壁中央に位置し、地山で構築された袖と煙道を検出した。支脚は検出されていない。

第Ⅲ章 調査成果

柱 穴：5基検出され、主柱穴（P 1、2、3、4）が方形に配列される。P 5は灰溜めピットまたは貯蔵穴と考えられる。

時 期：古墳Ⅴ期

第1401号住居址 S B 1401 （第164図）

位 置：②-4 IVS-12,17

形態・規模：隅丸長方形 5.6×5.0m 床面積 (28.0) m²

主軸の方向：N40E

出土状況：カマド内からは小型甕（7）が逆位で出土し、器面の荒れから支脚と考えられる。近接して長胴甕と円筒型土器（10、12）がほぼ完形で出土。またカマド右では完形に近い甕、壺、甑（5、8、9、11、13、16、17）が出土している。また、覆土中より横櫛（128）が出土したが、上部に攪乱が存在するため、本遺構に伴わない可能性がある。この他、覆土中でこぶし大の礫が多数出土している。

床 面：一部炭化物が分布するが不明確。

カマド：北東壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。

柱 穴：検出されなかった。

時 期：古墳Ⅴ期

第1427号住居址 S B 1427 （第165図）

位 置：②-4 IVS-08

形態・規模：隅丸方形 4.25×4.55m 床面積 19.34m²

主軸の方向：N5E

出土状況：床面及び床面よりやや浮いた位置から、多量の土器が破片で出土。規則性はなくピット内からも多く出土している。カマド内では甕と高坏が破片で出土（8、22）。特殊遺物ではカマド右側の土器片集中部分から勾玉（40）が出土している。南壁付近から骨片が出土したが、残存状態が悪く詳細は不明。

床 面：特に堅緻な部分は認められず不明確。一部炭化物の広がる範囲が見られる。

カマド：北壁中央に位置し、袖は破壊され床面に痕跡のみを確認した。煙道はS K 14092により壊されている。

柱 穴：9基検出され、主柱穴（P 4、6、7、10）が方形に配列される。P 1、P 2は貯蔵ピット、P 9は周囲がやや方形に落ち込んでおり、出入り口ピットが考えられる。

時 期：古墳Ⅱ期

第1608号住居址 S B 1608 （第166図）

位 置：②-1A IVW-14,18,19

形態・規模：東側半分が調査区外で、全体のプランは不明。隅丸方形か？
5.2×(2.5) m 床面積 (13.0) m²

主軸の方向：N38E

出土状況：床面及び床面よりやや浮いた位置から高坏、丸底壺が破片で出土している。また西コーナー付近には、こぶし大の礫が集中し、砥石（41）も出土している。

床 面：一部に炭化物が分布するが不明確。
 カ マ ド：調査範囲では検出されなかった。
 柱 穴：2基の主柱穴が検出された。
 時 期：古墳Ⅰ期

第1611号住居址 S B 1611 (第166図)

位 置：②-1A VII B-10, 15
 形態・規模：南東側をS D 301に切られて全体のプランは不明。4.1×(1.8) m 床面積 (7.38) m²
 主軸の方向：N53W
 出土状況：カマド内から高坏(5)が逆位で出土し、器面の荒れから支脚の可能性が高い。カマド周辺と北東壁周辺には土器破片が集中する。カマド左側覆土中からは勾玉(41)が出土した。
 床 面：軟弱であるが、床全面に炭化物が薄く分布し明確であり、黒色の土を貼った貼床が認められた。
 カ マ ド：北西壁中央に位置し、粘土で構築された袖と煙道を検出した。煙道の先端は攪乱により検出されなかった。
 柱 穴：カマド右側に灰溜ピットを確認した。
 時 期：古墳Ⅲ期

第1627号住居址 S B 1627 (第167図)

位 置：②-1A IV W-08, 13, 14
 形態・規模：隅丸方形 6.2×6.1 m 床面積 37.82 m²
 主軸の方向：N81E
 出土状況：土器は覆土上面と床面よりやや浮いた位置から破片で多量に出土。特に高坏の脚部、丸底壺の出土が多い。ミニチュア土器(42)、白玉(166)なども覆土中からの出土である。遺物の分布は2層に分かれている。
 床 面：遺構の集中地区で、多くのS Kに切られているものの、炉周辺に炭化物の分布がみられ明確。
 炉 : 中央から東寄りに炉を検出。中心は床面が焼けており、周辺には炭化物が厚く広がる。
 柱 穴：5基検出され、主柱穴(P 1、2、3、5)が方形に配列される。
 時 期：古墳Ⅰ期
 備 考：調査時は同位置の2軒の住居と判断していたが、遺物や炭化物の分布状況からみて1軒と判断した。

第1644号住居址 S B 1644 (第168図)

位 置：②-1B IV W-21、VII B-05、VII C-01
 形態・規模：やや不整形な隅丸長方形 5.05×5.9 m 床面積 29.8 m²
 主軸の方向：N33E
 出土状況：カマド内から高坏(5)が逆位で出土し、器面の荒れから支脚に転用と思われる。カマド前方には土器破片が集中し、西コーナー付近から出土した破片とも接合する。また、覆土中からミニチュア土器、管玉(67)が出土している。北コーナー付近の覆土中から鹿の上

腕骨が出土している。

床 面：床全面に炭化物が分布するが明確ではない。北西壁から南西壁にかけての床面に溝状の掘り方を検出した。

カ マ ド：北東壁東寄りに粘土で構築された袖を検出したが、煙道はS D 85に切られ不明。

柱 穴：検出されなかった。

時 期：古墳Ⅱ期

3 溝址

第30号溝址 S D 30 (第20図)

位 置：②-1A, 1B、②-2C IVW-01, 06, 12, 17, 18

形態・規模：調査区を北西-南東方向に横断し、長さ約40mにわたって確認された。幅約100cm、深さ約20cm。断面形状はU字状を呈する。覆土下部には砂層が堆積する。

出土状況：覆土中から若干の土器片出土。

時 期：古墳Ⅰ～Ⅴ期

備 考：S D 30に近接してほぼ同方向の溝が複数存在しており（S D 85など）、古墳時代の一定期間において本溝周辺に流路が存在した可能性がある。これらの溝は住居址とも切り合うものの、新旧関係には不明な部分が多い。

第85号溝址 S D 85 (第21図)

位 置：②-1A, 1B、②-2C IVV-14, 20、IVW-21、VII C-01

形態・規模：調査区を北西-南東方向に横断し、長さ約35mにわたって確認された。幅約150cm、深さ約20cm。断面形状はU字状を呈する。覆土下部には砂層が堆積する。

出土状況：覆土中より坏、高坏、甕、甑などが破片で出土（1～15）。分布は特定の場所に偏らない。

時 期：古墳Ⅱ期中心

備 考：S D 30に類似した溝と思われる。

第122号溝址 S D 122 (第19図)

位 置：②-3B IVJ-02, 03, 06, 07

形態・規模：S G 3北側に位置する南西-北東方向の溝址で、約28mにわたって確認された。溝の両端は調査区外で切られる。幅約70cm、深さ約20cmで、断面形状は浅いU字状である。

出土状況：溝内では多くの植物遺体が検出され、用途不明の木製品（204、222、259）が出土している。土器は少量出土する。

時 期：古墳Ⅲ～Ⅴ期 本址とほぼ並行するS D 123, 125も土器が少なく、時期を明確に出来ない。

備 考：S D 122 周辺には類似した溝が幾つか検出されている（S D 121、123、124、125、126）。いずれもS G 3と近接し、流路の軸も同方向である。また、本址延長上には木製品が出土したS K 10130、S K 10132などの浅い土坑が点在し、本址の一部または同様の性格を持った遺構と考えられる。S G 3では古墳Ⅱ期に、流路の岸部まで堆積が進んでおり、周辺には同時期の住居址が確認されている（S B 321、322、355、380、827）。S D 122周辺の溝はこれらの住居址の上で検出されており、S G 3が溢水した後の流路の一部の可能性が推測される。

第413号溝址 S D 413 (第22図)

位置：③-1 VIO-14

形態・規模：北西-南東の方向で調査区を横断する。両端は調査区外で不明だが、長さ約15mを確認。幅約100cm、深さは約20cm、断面形状は不明。

出土状況：古墳時代の土器片が少量出土。

時期：古墳I～V期

備考：周辺にはS D 418(弥生時代後期～古墳時代前期)やS D 33(奈良時代～平安時代)が存在しており、付近一帯は弥生時代後期以降、流路が形成されやすい場所であったと思われる。

第511号溝址 S D 511 (第169図)

位置：①-4C, ①-6 IK-20, IL-16, 21, 22, IQ-02, 03, 08, 09, 14, 15

形態・規模：北西-南東方向の溝址で、北西側はS G 2によって切られる。幅約150cm、深さ約20cmで底部が平坦な皿状を呈する。

出土状況：全体に遺物は少ないが、IQ-02付近の底部から人骨と金環が2点(33, 34)出土している。人骨の頭位は南東方向であるが、上半身は残存状況が悪く詳細は不明。金環は頭骨に近い部分から出土。壺底部とミニチュア土器(1, 2)は脚部西側で出土。人骨鑑定結果によると、性別は女性である可能性が高い。(第VI章第7節)。

時期：古墳I～V期

4 土坑

第2936号土坑 S K 2936 (第170図)

位置：②-3C ILY-14

形態・規模：長径3.5m、短径2.2m、深さ7～8cmの不整な隅丸長方形で、底部は平坦な皿状を呈す。

出土状況：北東コーナーでは甕、甑(1, 2)が出土し、西壁付近の底部から、鹿の頭蓋骨と歯が出土した。東側中心にこぶし大の礫も出土している。

時期：長胴甕の形態からすると古墳III～V期か。

第9048号土坑 S K 9048 (第170図)

位置：①-6 IIIG-18

形態・規模：長径94cm、短径78cm、深さ35cmの楕円形で、断面形状はタライ状を呈する。

出土状況：底部よりやや上部で坏、高坏、丸底壺(1, 2, 3)などが出土している。

時期：古墳I～II期

第10132号土坑 S K 10132 (第18図)

位置：②-5 IVE-24

形態・規模：長径3m、短径2m、深さ10cmの不整円形で、断面形状は不明。

出土状況：土坑内に植物遺体を多く含む。覆土中よりガラス玉(33)が出土したが、本址に伴うかは不明。

時期：古墳I～II期

備考：本址はSG3の北側に近接して位置する。SG3流路内の堆積が進んだ後に溝から溢れた一部分より形成されたと推測される。近接するSK10102、10104、10114、10130なども同様の遺構である。

5 沼址

第1号沼址 SG1 (第21図)

位置：②-1A、②-1B、②-2B VII F-05～VII G-01付近

形態・規模：東西幅約14m、南北幅約24mを測る。形態はPEAT質土の広がる範囲として把握しており不整形。PEAT質土は約90cmの厚さで堆積している。本址の北端は調査区内で途切れており、北西方向のプランは不明である。

出土状況：PEAT質土より古墳III～IV期中心の遺物(1～13)と少量の弥生時代後期土器片が出土。

時期：弥生後期・古墳III～IV期

備考：本址はSD22(近世)とSQ1(奈良時代)に切られ、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構を切っている。本址周辺には多くの流路が確認されており、古墳時代前期以降、生活に不適切な場所だったと考えられる。

第2号沼址 SG2 (第15図)

位置：①-5 IK-01～IL-03

形態・規模：遺跡の北端に位置し、南西～北東方向に約13mの幅で広がり、北西方向にも幾つかの流路が確認できた。両岸に人為的痕跡は確認できず、かつては自然流路として機能したと考えられる。またPEAT層の堆積状況から見ると、古墳時代以降に沼地化した可能性がある。

出土状況：土器・木製品が一定量出土する。出水が激しく出土状況の詳細は不明。土器は古墳I～II期の破片が中心で、若干III～IV期の遺物も含まれる。また弥生時代後期～古墳時代前期の破片も少量出土する。木製品は下駄(119、120)、横槌(77、79)、剝物容器(136)、有頭棒状木製品(184)、杭(271)などが出土している。

時期：弥生後期～古墳前期、古墳I～V期(II期中心)

備考：本址は遺跡調査区の最北端に位置しており、南東側には弥生時代～古墳時代の住居が点在する。しかし遺構の密集度が低く、本遺跡における生活域の北端と推測される。

第4号沼址 SG4 (第21図)

位置：②-1A、②-1B VII B-22,23,24

形態・規模：東西幅約20m、南北幅約8mを測り、不整形。深さは推定50cm。

出土状況：古墳IV～V期の土器やこぶし大の礫が底部よりやや浮いた位置で多く出土。管玉(73)、土版(9)、紡錘車(38)なども出土した。

時期：古墳IV～V期、弱干奈良・平安時代の遺物も含む。

備考：SG4は弥生時代後期の遺構(SB1620、SD323)を切り、その南西にも弥生時代後期～古墳時代前期の遺構を切るSG1が存在する。また近世の遺物を含むSD22も近接している。SG4周辺は弥生時代後期～古墳時代前期には住居が存在するものの、以後は流路が形成されやすく、居住域として不適切な場所であったと推測される。

6 第3号沼址 (SG3) (第93～108図 PL37～39)

位置：②-3A、②-3B、②-5 IVI-18～25、IVJ-8～23、IVW-2～9、IVO-1～2

(1) 概要

SG3は榎田遺跡のほぼ中央に位置し、調査区内を南西～北東ラインで横断する。調査区内での長さは約50m。流路上端で幅約30m、調査最終部分との比高差は約3m。断面形状は南岸が急斜面、北岸が緩斜面の非対称V字形を呈する。流水方向は南西→北東と推測され、主軸方向はN60Eを指す。

遺構内の堆積土から推測すると、古墳時代前期以前から存在した流路が、古墳時代中期以降に堆積が進んでいたようである。遺構内ではIV～VIII層から多くの遺物が出土しているが、分布の中心は流路南岸にあり、大量の土器・木製品や玉類・石製模造品・骨角器・金属製品・その他植物遺体が看取される。時期的には古墳I～II期(5世紀代)を中心とする。III層以上では、習書木簡以外の遺物は出土していない。調査時点に於いては沼址と考えられていたが、検討の結果、自然流路との認識に至っている。

(2) 周囲の遺構との切合い関係

SG3南岸のIVO-1グリッドにおいてはSB841、843(共に弥生時代中期)を切って、SG3の側面が確認されている。同様に②-3A地区の南北セクションにおいてはSG3覆土が弥生時代中期面と弥生時代後期～平安時代面の一部を切る形で堆積している。SG3南岸のII層はSB803(古墳V期)、SB807(古墳IV～V期)の上を覆う状態で検出されている。北岸ではSB321、322、355、380、827(古墳I期～II期)などを切る形でSD121～126が検出されている。これら溝群はSG3と並行しており、古墳I～V期の土器が若干出土している。またSD122からは木製品が出土しており、SG3との関係がうかがわれる。更にIVE-20, 24, 25グリッドではSK10102、10104、10130、10132が検出されている。これらはSD122の東延長上に位置し、植物遺体を多く含む木製品も出土している。これらのSD、SK群とSG3との直接的切合い関係は把握できないものの、植物遺体を多く含む、SG3と並行している点から、IV層堆積後に溢水した際に取り残されたSG3の一部の可能性があろう。

一方、SG3に近接して住居址も多く検出されている。南岸ではSB806、808(古墳II期)、北岸ではSB355(I期)やSB321、322、380、827(古墳II期)などである。SG3IV～VIII層の遺物の時期も古墳I～II期中心と考えられ、SG3が滞水する頃には周囲に幾つかの住居址が存在していたと考えられる。

(3) 調査手順と記録方法

SG3は、平成4年度の②-3A・②-3B地区、平成5年度の②-5地区に分割して調査が行われた。その主要部が調査されたのは②-5地区においてであり、本報告の大部分は②-5地区の成果によるものである。②-3A地区では調査期間の制約と出水の激しさから、面的な精査は困難であり、土器集中範囲と調査区の南北セクション図の記録のみが実施された。②-3B地区では北岸の一端がわずかに検出されている。②-5地区では、IVOグリッドからIVJグリッドに広がる灰褐色の落ち込み部分を確認し、過年度検出したSG3の一部として調査した。この際セクションを複数設定し、16枚の堆積土を確認、文化遺物を包含する層毎に調査したが、流路の下部は安全面を考慮して調査範囲を縮小している(調査区東側境界は用地外水田の護岸のために未調査の部分もある)。また、出水が激しく各層の範囲と境界についても不明な部分がある。

遺物の取り上げと記録は次のように行った。大量に出土した木製品は大部分の木を図化して取り上げた後に、遺物と自然木に分離した。土器や他の遺物は、識別できた個体は図化し、それ以外は遺物集中範囲や、8 mグリッド単位で出土位置を記録している。また遺物集中区 (IV J-21, 22, IVO-1, 2グリッド) では4 mグリッドに分割して取り上げている。

(4) ②-5 地区における基本土層

遺物の集中した南岸部は、遺構の中央部で発達していたV・VII層がほとんど堆積せず、IV・VI・VIII層間がほぼ接した状態となる。このため上層で取り上げた遺物が下層出土の遺物と接合するなど、層位間接合の例が少なからず見られる。また出土地点が不明瞭な資料が多く、遺物の出土層や分布範囲の傾向を示す場合にも限界がある。

I層 現耕土。

II層 II層はSG3埋没過程の最後に堆積した層である。本地区ではI～II層を削平中にSG3が検出されており、SG3南岸IVO-6, 7グリッド付近の古墳時代住居の上でわずかに検出されたのみである。遺物は含まれない。

III層 黒褐色シルト層。南岸はIVO-1, 2グリッド付近、北岸ではIVJ-13グリッド付近まで確認された。IV層の上にレンズ状に堆積しているが、検出時に上部を削平されているので堆積当時の範囲は不明。遺物はIVO-1グリッドより習書木簡が出土している。これ以外ではIV層の土器と接合する破片が若干存在するのみである。本層はほとんど攪乱を受けていないので、遺物を大量出土したIV層以下をほぼバックする様相を呈する。

IV層 暗褐色～茶黒褐色土層。本層検出時に大量の土器(古墳II期中心)、木製品が出土し、ほぼ全面を調査している。IV層はSG3の落ち込み部の内外に堆積しており、IV層の落ち込みラインをもってSG3の流路範囲としている。南岸ではIV層がIVO-1, 2グリッドの流路外方まで堆積し、下部は急激に落ち込んだ斜面に延びる。同様に北岸でもIVJ-8, 9グリッド付近で流路の落ち込み部が確認され、IV層はこの落ち込み部上面のテラス部分にまで堆積している。また北岸ではI～III層が削平されたためIV層からの調査となる。IVJ-8, 9, 12グリッドでは、遺物の出土量は少ない。

V層 黒褐色土層。多量の植物遺体を含み、IV層よりも黒みが強い。遺物は若干存在するのみである。本層は南岸でIVJ-22グリッド、北岸でIVJ-13～18グリッドの範囲で確認されるが、曖昧な部分もある。遺物も若干出土しており、V層として紹介しているが、整理段階ではIV層の一部と認識して遺物出土状況図を作成した。

VI層 茶黒褐色粘土層。土器(古墳I期新相中心)・木製品を多く含む。本層も南岸でIVN-5～IVO-2グリッド、北岸ではIVJ-12, 13グリッドまで広がる。ほぼ全範囲を調査している。IVJ-8, 9, 12グリッドではIV層と同様に遺物の出土量が少ない。

VII層 灰褐色粘土層。遺物をほとんど含まない。詳細な範囲は不明。遺物が大量に出土した南岸では堆積が薄く、明確な分層が出来ない状況にある。整理段階ではVIII層の一部と認識している。

VIII層 茶黒褐色粘土層。土器(古墳I期古相中心)・木製品を含む。本層の出土遺物は上部に集中し、VI層からの流れ込みの可能性も指摘されている。本層の調査範囲はIVJ-17, 18, 21, 22, IVN-5, IVO-1, 2グリッドである。

IX層 砂層。遺物をほとんど含まない。南岸ではほとんど堆積がみられず、詳細な範囲は不明。

X層 黒褐色粘土層。少量の土器・木製品と植物遺体を含む。本層以下最終層までの調査範囲はIVJ-

21, 22、IVN-5、IVO-1, 2グリッドである。

- X I層 青灰色砂層。炭化した植物遺体を少量含む。南岸ではほとんど堆積していない。詳細な範囲は不明。
- X II層 黒色ピート層。詳細な範囲は不明。古墳時代前期～中期の遺物をわずかに含む。
- X III層 ピート層。古墳時代前期以降の土器片を含む最後の層。
- X IV層 茶黒褐色粘土層。
- X V層 青灰色砂層。弥生時代後期土器片を若干含む。SG 3南岸では本層の直下でXVII層となる。
- X VI層 茶黒褐色土。粘土層 弥生時代後期土器片を若干含む。植物遺体をほとんど含まない。河床にわずかに堆積する。(北岸には存在しない?)
- X VII層 礫層。流路上端から約3m下にある。この礫層はSG 3より北側では次第に地表に延びて行くが、IVJ-21, 22グリッド付近から南側では急に落ち込み、最深部を確認することが出来ない。溝の形状もVI層までは推定できるものの、最下層までの断面形状は不明である。

上記の所見を基に、SG 3の堆積過程を検討したい。

まず礫層直上のXIII～XVI層は、砂層と粘土層が交互に堆積し、植物遺体も少ないことから流水による堆積作用によって形成されたものと推測される。堆積時期は溝の切り合い関係と出土遺物から見て弥生時代中期～後期の間と思われる。

流水方向については、SG 3自体が千曲川の旧河道と考えられ(第二章第2節)、現河道の流水方向が南→北である点、SG 3の南岸が急斜面で北岸が緩斜面という断面形状から、南岸に流水が強く当たっていたと推測され、SG 3は南西→北東に向かって流れていたものと考えられよう。

IX～XII層は、薄く部分的に見られるものの、植物遺体を含む点から見て、滞水が始まったと推測される。堆積時期は古墳I期頃までと思われる。出土土器は量的に少ないものの、VIII層以上と同様の特徴を有しており、VIII層に近い時期に堆積した可能性がある。

IV～VIII層は、厚く、大量の植物遺体も含まれ、沼地化が進んだ時期と思われる。出土遺物からすると古墳I～II期を中心とする期間と推測される。

I～III層は、詳細不明の部分が多いものの、IV層が堆積した後も付近に住居が存在し、II層が古墳IV～V期の住居を覆って堆積している点から見て、古墳V期以降に堆積したと考えられる。

(5) 付属遺構

SG 3では、河川の改修や護岸工事を積極的に示す証拠は検出されていない。断面形状についても、IV～VI層は全面を調査するものの、VII層以下では出水が激しく測量は行われていない。唯一出土遺物の垂直分布図(第107・108図)から推測すると、南岸が急傾斜で、北岸は緩やかに落ち込む傾向が読みとれる。

一方、関係は不明であるが、SG 3内において若干の遺構が検出されている。まず、IVJ-12～14グリッド付近のIII～IV層境界面において、倒木がまとまって検出されている(第97図)。範囲は幅1.5mで、東西方向は約10mの長さに及ぶ。この付近には杭が何本か不定間隔で打ち込まれており、倒木が木道として機能した可能性が考えられる。杭はいずれも先端の検出であり、IV層に打ち込まれているのは確認できる。しかし杭の打ち込み面は確認されておらず、検出状況にも不明な部分があるので、III層以上に属する可能性もある。

この他にも遺構内では不規則な配置の杭が見られるが、SG 3における性格は不明である。またIVJ-17, 18グリッド付近のVI層～VIII層間では流路に直交する形で長さ約8mの大木が3本検出されている。しかし加工痕などもなく、人為的に持ち込まれた可能性については検証できない。

最後に、遺構として検出できないものの、SG3出土の木製品の中には一定量の未製品が含まれており、SG3の周辺に木製品の製作所あるいは貯蔵場所が存在した可能性が推測できる。

(6) 遺物およびその出土状況

以下②-5地区における出土状況を遺物の種類別に紹介し、その中で分布範囲や層位毎の特徴に触れて行きたい。なお出土層や位置が不明の資料についても各種遺物の項目(第V・VI章)で触れたものもある。

A 弥生時代後期土器 (第96図、図版217, NO.566~572)

SG3ではXIII~XVI層は流水に伴う堆積土層と推定されている。そのうちXV~XVI層においては弥生時代後期土器が若干出土しており、これにより流路の存在時期が推測される。

B 土師器 (第93~96図、図版187~218、PL85~95)

SG3出土土器は、各層毎と層位間の接合を試み、約1/4以上残存している個体を実測し、器形が1/2以上判明する個体を層位毎に図示した。層位間接合した個体は、上部に位置した土器が岸の下部へ落ちるケースが主体であり、またIII層以上は遺物がほとんど出土せず、攪乱も受けていないので、基本的に接合関係中の最上層で紹介した。なおSG3出土土師器の時期区分については第V章第1節3を参照されたい。

IV層 南岸のIVN-5、IVO-1, 2とIVJ-22グリッドにおいて集中的に発見されている。集中範囲は東西約12m、南北約4mを測り、岸に沿って広がる。集中範囲内の分布状況に明確な規則性は見られない。一方SG3中央部や北岸では土師器の出土量が激減する。

IV層内においては、土器集中範囲が上部、木製品が下部に堆積し、いわば土器集中範囲が木製品をバックするような状況が観察できる(第107図)。

約300個体を実測した。これ以外の破片がテン箱約40箱。坏・高坏・壺・甕・甑・甌など遺跡全体の組成と大差ないが、しかし住居址内であまり見られない器種も存在する。器種別に見ると、壺類は出土量が多く住居内の組成比率よりも多い印象がある。これらは接合して略完形になる個体や胴上半部のみが復元できる個体が目立ち、有段口縁の壺A類(236, 241, 242, 245, 246, 247)なども含まれる。この他に小型丸底壺のK類が10点(127~136)、壺L類も6点(137~142)出土した。坏類はA・B類が目立ち、黒色処理された個体が一定量含まれる。高坏類は屈折脚を有するA類が主体的に出土する。形態的には短脚化した個体が目立つ。その他B・D・F類なども出土する。しかし模倣高坏類の出土は少なく(111~113)、特に調査区内では脚部に透かしを有する高坏K類はほとんど出土しない。甕類はA・C・D類が出土しており、その中には内面に煮焦げ痕が確認できる個体もある(186, 188, 197, 198, 199, 200, 202, 204, 209, 211, 219)。また長胴甕に伴う大型甑類も少量出土する(228~231)。

IV層出土土師器は、坏A・B類や、高坏A類の量が多い点。球胴甕のA類や、壺A類が存在する点など、土師器の器種組成から見ると古墳II期を中心とした様相を示す。また小型丸底壺K類の存在など古墳I期的様相も若干見られる。一方IV層には、古墳III期以降の資料も若干出土するものの、長胴甕D類が少量であり、III期の示標となる模倣高坏K類がほとんど確認できないなど、該期の様相が安定して見られず、II期の特徴を持つ土師器群とは出土傾向が異なる可能性がある。

IV層の土師器は古墳II期段階でSG3南岸に集中的に持ち込まれ、III期以後は少量の土器が単発的に持ち込まれたと推測する。

この他②-3A区のIVN-4, 9グリッド付近でも土器集中範囲が確認されている(第19図、図版219~223, NO.1~84)。出土状況や層位的な把握については詳細不明な部分が多い。規模は東西4m、南北2mで岸と並行に広がる。実測数は約120個体。破片数はテン箱約15箱。時期的には古墳II期中心の様相を示し、②-5区の土器集中範囲と類似する。ここでも壺A類が6点出土し(79~84)、②-5地区では出土し

なかった坏蓋も6点出土するなど(48～53)、住居址における通常の組成とは異なる様相が見られる。

V層 実測数は6個体。破片数はテン箱2箱。

VI層 IVO-1, 2, IVJ-22グリッドを中心に分布する。VI層中では木製品が上部、土器類が下部に堆積する。実測数は約300個体。これ以外の破片がテン箱約20箱。IV層と同様に、接合で略完形になる個体も多い。器種別に見ると、坏類はIV層に比べて出土量が少ない。特に坏A類が目立ち、器形の個体差が激しいのが特徴である。黒色処理の坏類は少ない。この他に坏A4類(294)が出土している。SG3出土の坏類の中で精製品はこの1点のみである。高坏類はA類を中心とする。IV層よりも出土量が多く、脚部が若干長い個体が多い。模倣系の高坏はほとんど発見されていない。甕類は球胴形が大半を占め、内面に煮焦げ痕を有する個体も見られる(430、433、434、442、445、446、447、448、449、450、452、457)。大型甕はない。壺類は6個体とIV層より少なく(459～464)、明確な有段口縁の壺は見られない。小型丸底壺K類は約20個体出土した。

VI層出土土師器は、坏類が少ない中でA類が目立つ点、球胴甕が多く大型甕が出土していない点などから、古墳I期新相を中心とする。しかし高坏A類や壺K類が目立つなど、I期古相的な様相も見ることができる。一方で坏類についてはII期以降の様相も若干含まれる。

VII層 実測数は7個体。破片数はわずかである。

VIII層 IVO-1, IVJ-21, 22グリッドで出土する。分布に明確な傾向は見られない。層位的にはVI層の土器と接する状況で出土しており、層位間接合も見られる。またVIII層では上層と異なり、土器と木製品が混在して出土するのも特徴である。土師器の実測数は約80個体。破片数はテン箱約10箱。VIII層では高坏A類と小型丸底壺K類が主体的に出土する。坏類や大型壺はほとんど出土しない。甕類は球胴甕のみ少量出土。一部の甕(546、549)には内面に焦げ痕が見られる。

VIII層出土土器の様相は、高坏A類、小型丸底壺K類が主体的に出土しており、古墳I期古相の様相を示すと思われる。IV、VI層に比べて他時代の遺物を含まないのも特徴である。

X層 実測数は4個体。破片数はわずかである。

XII層 調査範囲内で若干出土。実測数は15個体。破片数はテン箱2箱。坏(554)や小型丸底壺K類(560～562)などを含み古墳I～II期的な様相と思われる。しかし鉢(555)など古墳時代前期的な様相も含まれる。SG3の調査においてはX層以下は作業の安全上、限定した範囲内で調査したため、セクションで確認された層との間に若干混乱が生じている。IX層以下の所見は基本土層で示した通りであるが、X・XII層出土遺物はVIII層の遺物との比高差がほとんど存在せず、土器様相もVIII層以上と類似する。X～XII層の遺物は出土記録に従い分離しておくが、VIII層に近似した様相と認識している。

C 須恵器 (第93図) (第V章第1節4)

識別可能な個体は破片を含めて紹介している。甕類は接合後に略完形になる個体も目立つ。接合後の破片はSG3全体でテン箱1箱のみ、土師器の破片数とは対照的である。層位毎の特徴を上げると、IV層では坏3点(155、156、157)、高坏1点(158)、壺甕類が破片を含めて13点出土している。この中で甕・横瓶などの大型品はIV層のみで確認でき、土器集中区での出土が目立つ(255～258、260、261)。これらのうち一部の坏・高坏(155、158)や、口縁端部直下に断面三角形の突帯を有する甕口縁片(160)、体部内面の当て具痕の一部をスリ消して外面に沈線を施す甕(259)などは初期須恵器と推測される。一方で4個体出土した横瓶(255～258)は古墳時代後期以降の様相を示し、住居址ではほとんど出土しない器種である。IV層以下においてはVI層で坏片(309)と高坏片(341)が出土するのみである。

D ミニチュア土器 (第V章第1節5)

口径約11cm以内に収まるか、一見してミニチュアと判断できる資料を抽出している。層位別に見るとIV

層では11点出土、このうち南岸のIVN-5とIVO-1、2グリッド出土が7点である。VI層では土器14点と鏡形土製品(414)1点が出土し、南岸から溝中央部まで広く分布する。VIII層では4点出土。IVJ-21, 22グリッドに集中する。XII層では1点出土(563)。

E 木製品 (第97・98・101・102図、図版302~348、PL167~205) (第V章第3節)

SG3では大量の木製品が出土している。南岸の流路落ち込み付近から中央部に向けて集中し、一部北岸まで広がる。出土層位はIV・VI・VIII層を中心とし、III層以上ではほとんど出土しないのが特徴である。また南岸のIV層においては上部に土器集中範囲があり、その下部に木製品が堆積しており、土器群がIV層以下の木器をパックしたかの様相を示す(第107図)。VI層では上部に木製品、下部に土器があって、IV層とVI層の木製品は接するように堆積している。VIII層においても木製品は出土するものの、IV・VI層より少ない。

SG3全体の実測個体数は、層位不明品を含めて工具8、農具72、紡織具8、武具14、馬具2、容器23、雑具6、建築188、杭16、祭祀具6、服飾具9、その他1、用途不明74、木屑24を数える。また製品以外に大量の自然木も出土している。

これら木製品の位置、層位等の出土状況には、下記のような特徴がある。

工具 斧柄はIV層1点、VI層4点、VIII層1点、層位不明2点出土。これらのうちIV層1点(8)、VI層2点(3、4)、VIII層1点(6)の合計4点は未製品の可能性がある。何れも面的、層位的な分布傾向は見られない。

農具 IV層11点、V層1点、VI層41点、VII層1点、VIII層7点、XII層1点、層位不明10点を数え、VI層での出土が目立つ。IV、VI層では南岸に中心が見られるものの、北岸まで広く出土し、集中的に出土する傾向はない。又、農具には製品と未製品が見られる。以下器種別に見たい。**曲柄平鍬**はIV層2点、V層1点、VI層9点、VII層1点、VIII層1点、層位不明2点とVI層以上で目立つ。これら曲柄平鍬には、V層の1点(16)を除けば、総てU字形鍬鋤先の装着部を有する。**曲柄又鍬**はVI層で3点、層位不明1点出土するものの、V層以上では確認できない。このうち2点(28、30)には鉄刃が装着されていた可能性がある。**直柄横鍬**は5点が出土したが、この内4点がVI層出土、1点が出土層位不明となる。4点中3点は柄孔や泥除け装置の装着孔を穿孔する直前段階の未製品であるが、出土位置や出土状況に特殊性は見られず、他の木製品と混在した状況を呈している。**豎杵**はIV層1点、VI層9点、VIII層2点、層位不明1点でVI層出土品が目立つが、出土地点はまとまらない。この中で未製品はVI層(63、64、65)とVIII層(66)の4点である。**木錘**はV層1点、VI層5点出土し、未製品(85)は1点。

この他の主な農具として、**泥除け**(37)はVI層1点。**一木鋤**はIV層3点、VIII層1点。**組み合わせ多又鋤**(47)はVIII層1点。**えぶり**(38)はIV層で1点。**大足**はIV層2点、VI層2点。**横槌**はIV層1点、VI層5点、VIII層1点、XII層1点、層位不明3点。**鎌柄**はIV、VI、VIII層で各1点などが出土している。

紡織具 VI層6点、VIII層1点、層位不明1点を数える。櫛はIV~VI層より出土しているが、分布に傾向は見られない。VI層では楕円形櫛が2点(93、94)IVJ-9グリッド内で近接して出土。同一個体の可能性も推測されるが、破断面が摩耗しており明言できない。この他VI層では3点(90、91、92)出土している。**棹**(86)はVI層より出土。黒漆塗りの**紡錘車**(88)はVIII層で出土。黒漆塗りで線刻を有する**杼**(87)の出土地点と層位は不明である。

武器 弓と劍鞘が出土している。**弓**はIV層6点、V層2点、VI層3点を数える。分布については南岸から遺構中央部にかけて広く出土する。唯一IV~V層のIVJ-13グリッドにおいて白木弓が5点集中出土した(95、97、99、100、101)。しかし同一層における他の弓は調査範囲の中で不規則に出土している(96、98、

106)。この中で5点(95～100)は欠損状態で出土しており、対応する部分は発見されていない。またIV J-18グリッド出土の1点(106)は黒漆塗りである。この弓は中央付近で2本に分離して、近接した場所で発見された。VI層においては4点(102、103、104、105)出土するものの集中傾向は見られない。この中で2点(102、103)は欠損状態で出土しており、対応する部分は発見されていない。NO103は黒漆塗りで桜の皮も残存するが、握り部のみ出土している。別の2点(104、105)はIV J-9グリッドにおいて近接して出土した。何れも漆は施されていないものの、背部分に樋が彫られ、同一個体と思われる。しかし弓中央部の握り部が存在せず、両者は接合しない。**剣鞘**(107、108)は2枚の組み合わせ式で、鞘の内側には剣の形に溝が掘り込まれている。VI層のIV J-22グリッドでは2枚が近接して出土しており、形状、材質から見て同一個体と判断した。しかし鞘の前後にはめ込む柄頭と鞘尻は出土しない。

馬具 IV層では**壺鍔**(110)が出土している。左足用で外面全面に黒漆を塗る完成品である。VI層では**鞍**(109)が出土している。後輪の可能性のあるものの、未製品である。両者は出土層位も異なり、位置的にも②-5地区の南西端部で約5m離れて出土している。

雑具 VI・VIII層のみで出土している。VI層では**案?**(113)、**腰掛け**(114、115)が出土している。この中で腰掛け(115)は馬具の鞍(109)と近接して出土した。VIII層ではIV J-22グリッドで**案?**(112)、**腰掛け**(116)が近接して出土した。雑具全体では分布傾向は見られない。

服飾具 **きぬがさ**はIV層で4点出土している(124、125、126、127)。しかし分布傾向は見られない。この中でNO127はIV J-13グリッドにおいて白木弓の一群と近接して出土。NO124と126は近接して出土し、形状から同一個体と判断した。**下駄**はIV層で2点出土(117、118)。**木履**はVI層で1点(121)、VIII層で2点出土(122、123)。

容器 **曲物**はIV層で8点、VI層で2点層位不明で2点出土している。IV層では沼全体に分布しており、出土傾向は把握できない。いずれも底部のみ出土。**刳物**はIV層2点、VI層3点、VII層1点、VIII層1点が出土している。**円筒状容器**はV層で1点、杓子形はIV層とVI層で1点ずつ出土。この他**曲物**(155)と**挽物**(169)は形状から古墳時代の遺物とは判断できないがSG3内において地点・層位不明で出土している。

祭祀具 **剣形**はVI層のIV J-18グリッドで1点出土(174)。**刀形**はIV層2点、VIII層1点、層位不明1点が出土。出土状況に傾向は認められない。**鳥形**(175)はIV層で出土しているが、形状から古墳時代の遺物とは判断し得ない。

用途不明品・木屑 SG3内においては85点の用途不明品を図化している(178～262)。これらの中には有頭棒状木製品や製品であるが用途不明の例などが見られる。木屑はIV～VIII層間から一定量発見されている(281～305)。これらは農具の未製品なども含めSG3周辺で製品の製作が行われた可能性を示している。

F 建築部材 (第99～102図、図版349～373、PL206～231) (第V章第4節)

建築部材についてはIV層48点、V層5点、VI層96点、VII層3点、VIII層5点、X層2点、XII層1点、層位不明28点が出土しており、IV～VI層に集中する傾向が見られる。分布としてはSG3南岸、特にIV J-17、18、22グリッドでの出土が目立つ。またVI層ではIV J-9、13、14グリッドなどSG3北岸まで分布範囲が広がるのに対し、IV層ではIV J-13、14グリッド以北の出土例はほとんど見られない。これら部材の用途については、性格が特定できた部材の大半が高床式建物の構成材であると分析された。一方でこれら部材の多くには転用後の2次加工痕が確認でき、SG3出土の部材は建物を解体した直後の部材ではないことも明らかにされた。これら部材については分布についても一定の傾向が存在するとの所見も得られている。

出土傾向の概要として、推定材を含めて層位別に見ると、**縦材**はIV層5点、V層で4点、VI層で14点、

層位不明6点とVI層の出土量が目立つ。特にVI層ではIV J-13, 17, 18, 22グリッドでの出土が多い。横架材はIV層35点、VI層49点、VII・VIII・X・XII層で各1点ずつ出土し、層位不明10点。IV・VI層における出土量が多く、両層ともIV J-17, 18, 22グリッドでの出土量が目立つ。屋根材はIV層6点、V層1点、VI層21点、VII層1点、VIII層2点、層位不明9点とVI層の出土量が目立つ。

特定の部材別ではVI層のIV J-13グリッドでは扉板(328)と蹴放材(327)の上に棟木(333)が横たわって出土。IV J-17グリッドでは二重梁(335)、IV J-18グリッドでは柱材(386)、VII層のIV J-17グリッドでは梯子(330)が出土している。

G 習書木簡 (図版392、P L245) (第V章第8節1)

III層のIVO-1グリッドにおいて出土するものの、III層においては遺物がほとんど出土せず、木簡の時期を推測することは難しい。

H 玉類・石製模造品 (第103~106図、図版374~378、P L234) (第V章第2節2)

SG3ではふるいを用いた玉類の抽出は行われていない。調査時の所見でも玉類が集中出土した記録は見られない。全体に量が少なく分布傾向は明確でない。

勾玉は4点。出土地点に傾向はない。IV層ではSG3中央部IV J-18グリッドで土製の大型品1点(39)、北岸のIV J-8グリッドで石製1点(45)出土。VI層ではIV N-5グリッドで石製1点(43)出土、VIII層ではIV J-17グリッドで石製1点(44)が出土。管玉は4点。何れも南岸のIVO-1、IV J-22グリッドで出土している。層位が明確なのはIV層の2点(69, 71)である。白玉はVIII層IV J-22グリッドで1点(167)出土。丸玉は土製品が1点(181)地点不明で出土。滑石製模造品は有孔円板がIV層より2点出土(192, 193)。192は北岸のIV J-9グリッド出土。ガラス玉はXII層のIV J-21で1点(31)とSG3に近接するSK10132で1点(33)出土。

I 紡錘車 (第103~105図、図版379~382、P L237) (第V章第2節3)

紡錘車は8点(土製1、石製7)出土。これらはSG3の南北両岸での出土が目立つ。層位が判明した資料はいずれも石製でIV層3点(67, 68, 71)、VI層1点(70)である。この他VIII層より黒漆塗りの木製紡錘車が出土している(第V章第3節)。

J 金属製品・製鉄関係 (第106図、図版383~387、P L238, 239) (第V章第6節)

金属製品では銅釧がXII層のIV J-22グリッドで1点(37)出土している。しかし出土レベル的にはVIII層遺物との差は見られずVIII層に近似した時期に属する可能性がある(土師器XII層記載参照)。この他、鉄片がIV層のIV J-3グリッドで1点(2)、V層のIVO-1グリッドで1点(4)出土している。製鉄関連では高坏の屈折脚を転用した羽口(10)が層位不明のIVO-2グリッドで出土している。

K 骨角器・鹿角切断品 (第103~104図、図版389, 390、P L244) (第V章第7節)

骨角器はIV層のIV J-22グリッドでヤス(7)、IVO-1グリッドで骨鏃(8)が出土している。鹿角切断品は19点確認され、出土層・地点に傾向が見られる。特にIV層出土の16点の大半はSG3南岸(IV N-5、IVO-1グリッド)に集中する。この中で1点(23)には柄穴が彫り込まれている。VI層ではIV J-22グリッドで2点確認されたのみである。

L 骨類 (第103~105図) (第VI章第7節)

SG3出土の骨類を鑑定した結果、ニホンジカ255点、アナグマ4点、イヌ4点、イノシシ16点、ウマ56点、クマ2点、タヌキ7点、トリ3点、不明18点が確認された。これは鑑定破片数であり、動物の個体数を示す訳ではない。全体的にはニホンジカとウマの骨が多く、特定の部位に偏らない。分布にも傾向が見られる。出土層判明破片はIV層で221点ある。特に北岸のIV J-13グリッドで124点、南岸のIVO-1, 2とIV J-22グリッド(土器集中範囲)で34点出土し、分布に若干傾向が見られる。VI層では33点中32点が

IVN-5、IVO-1グリッドで出土と、分布に中心がある。Ⅷ層は1点出土している。発掘所見ではⅣ層の骨は土器集中範囲と同じレベルで出土したとされる。

上記の骨類の中にはカットマーク（解体痕）が見られる例が多い。しかし微小な傷であり、部位にも目立った傾向はない。SG3ではイノシシ4点、ウマ3点、クマ1点、ニホンジカ51点から確認されている。ちなみにSG3以外で出土した骨類のカットマークを合計するとウマ1点、シカ10点となる。

M 種子（第Ⅵ章第1節）

SG3においては大量の植物遺体が出土しており、その中で種子について鑑定を行った。その結果、ヒョウタン類が300片以上、モモの種は270個以上、サルノコシカケ約200片、オニグルミ約20個、クリ2個などが確認された、他にも幾つかの種が確認された。これらは調査時に発見された個体のみで、沼全体の傾向を示している訳ではない。数量も破片を含めての合計である。出土地点は沼のほぼ全域に広がるが、分布傾向については不明。

N その他

SG3では握り拳大の石も一定量出土している。土器集中範囲にも見られるが詳細は不明。

(7) まとめ

SG3はⅧ層の堆積以前は自然流路であり、流水方向は南西→北東と推測される。本節では前段で検討した遺物出土状況をふまえ、Ⅳ～ⅩⅡ層間の遺物分布と特徴をまとめておきたい。

②-5地区におけるSG3の遺物出土状況は、南岸から北岸にかけて遺物が分布するものの、南岸における出土数が圧倒的に多い。南岸においては岸辺からの廃棄により堆積が進み、流路方向に広がった可能性がある。一方北岸では遺物量も少なく、岸辺に集中する傾向は見られない。また遺物はⅣ層以下で出土し、Ⅲ層以上ではほとんど見られない点から、Ⅳ層形成時まで継続した廃棄行為がⅢ層形成時点以降中絶した。つまりSG3の自然環境または周辺の土地利用が変化したものと思われる。

南岸における遺物分布を見ると、まずⅣ層内の上部IVO-1、2とIVJ-22グリッド付近で、岸に沿って土器の集中範囲が存在する。この集中範囲では古墳Ⅱ期の様相を示す土師器がまとまって出土する傾向があり、接合して略完形になる個体も少なからず存在する。その中でも土師器壺類と須恵器坏類、甕類は住居址における組成比率より多い印象がある。特に土師器の壺は約20点存在し、SG3で集中的に出土している。その中には有段口縁部を有するA類も含まれる。須恵器は接合後に略完形になる個体が多く、未接合の破片量が少ないのが特徴であり、単純な廃棄とは考えにくい。若干ながら初期須恵器を含む点も注意される。上記の出土状況からは古墳Ⅱ期にSG3へ土器が集中的に持ち込まれた可能性が浮上する。一方で土師器は細片が非常に多く、完形に近いものだけが持ち込まれたわけではない。また古墳Ⅲ期以降の土器も若干含まれる点から、SG3では古墳Ⅲ期以降も単発的に土器が持ち込まれたと思われる。

この他にも、Ⅳ層土器集中範囲においては、鹿角切断品や、馬や鹿などの獣骨が比較的集中して出土する。更に、レベル的には不明だが管玉も南岸での出土が目立つ。これら遺物もⅤ層位下ではほとんど出土しないため、Ⅳ層の遺物集中には単なる廃棄とは異なる性格が推測される。

上記の遺物は古墳Ⅱ期の土師器を中心としてⅣ層下部の木製品の上に覆い被さるように堆積する。また層位間接合も若干見られるものの、木製品の堆積範囲の中では土器の出土量は少なく、滞水していたとすれば、同一堆積過程の中ではあっても、木製品が水没するまでの時間の経過の後に、土器が投棄されたことになろう。また湿地状態であれば、一連の廃棄行為の中で、木製品→土器という順序が意図されたものであった可能性がある（第107・108図）。

つぎにⅣ層下～Ⅵ層における木製品の特徴と分布について触れたい。木製品はⅣ層内の下部に堆積する

ものの、更にその下にはVI層の木製品が接するように堆積し、一部両者の間を貫く木製品も存在する。出土品の中では農具の点数が非常に多い。その中でもVI層以上で主体的に出土した曲柄平鍬の大半にU字形鍬鋤先の装着痕が確認され、V層以下で出土した曲柄又鍬にも鉄刃が装着された可能性があるなど農具に鉄刃が普及していたと考えられる。また袋状鉄斧の装着部を有する斧柄も出土している。

この他、竪杵や直柄横鍬など農具の中には加工途中の未製品や木屑などが出土しており、SG3周辺において木製品の製作が行われ、木屑などが廃棄された可能性がある。しかし分布に規則性は見られない。

一方、農具以外の製品では、量的には少ないものの特殊品の存在が特筆される。先述したように武具では弓が合計12本出土したが、単純に廃棄されたのか、意図的に折られて廃棄されたのかは不明である。馬具については壺鐙と未製品の鞍、紡織具では櫛が5点出土、雑具においてはIV～VIII層中で案?・腰掛けが破片を含め5点出土する。この他にきぬがさ、剣形、刀形なども数点出土した。

建築部材については、用途が特定できた部材はほとんど高床式建物の構成材という結果を得ている。しかし部材の規格の分析から2棟分が混在する可能性があり、出土した部材の多くには2次加工痕跡が残るなど、当初の形状が不明な材が多いのが特徴である。分布についてはVI層において扉、二重梁、垂木など特定部材の周辺で部材が集中する傾向が存在する。

VI層以下では、IV層下部～VI層上部に堆積した木製品の下に再び土器の堆積範囲が確認できる。この層の下には接するようにVIII層が堆積し、VI層土器との層位間接合も見られる。

VI層出土の土器の分布範囲はIV層とほぼ同位置である。しかし高坏A類や壺K類が多く、坏類や長胴甕が少ない点などから、IV層出土土器群よりは古いI期新相を中心とする様相を示すと思われる。又、IV層集中範囲と異なり、土器が特定範囲に集中せず、有段口縁壺も目立たない。また須恵器甕類が存在せず、周囲に骨類の出土がわずかである。これらから判断するとVI層の土器はIV層より若干古く、分布の性格も異なる姿が浮かんでくる。続くVIII層出土の土器については坏類がほとんど出土しない点、高坏A類と壺K類が多い点、長胴甕が見られない点などからI期古相を中心とする様相を示す。しかしVI層にも同様の特徴が若干含まれており、VI・VIII層が接している点からも、時間差については微妙な部分が存在する。土器の出土量はVI層よりは少なく、分布にも特定の傾向は見られない。

VIII層においても若干の木製品が見られる。しかし、曲柄平鍬、曲柄又鍬、直柄横鍬と武具・馬具の大半はVI層以上で出土しており、VIII層ではほとんど見られない。

IX～XII層間については先述したとおり、VIII層に近接して少量堆積したため、面的調査において混乱が生じた可能性が指摘されており、出土遺物についてもVIII層とほぼ同一レベルで取り上げている。特にXII層より銅釧が出土しており、共伴する土器はVIII層以上の様相と類似している。

この他SG3全体ではミニチュア土器、玉類、紡錘車などが少量出土するものの、分布に明確な傾向は見いだすことは出来ない。またVIII層以下においては遺物の出土量自体も激減しており、SG3においてはIV～VIII層間の遺物の堆積を一つのまとまりとして把握する事が出来る。

なお上記で触れたIV～VIII層の堆積時期については本報告における古墳時代土器の年代観に合わせると、VIII層は古墳I期古相（5世紀第1四半期）中心、VI層は古墳I期新相（5世紀第2四半期）中心、IV層はII期（5世紀第3～4四半期）中心、となる。しかし間層が発達しない状況から判断して堆積時期が近接した可能性もあり、IV～VIII層の堆積期間を厳密に推測することは困難な状況にある。

ただしSG3出土の木製品についてはIV層土器集中範囲の下部からVIII層までに堆積している点から、その帰属時期を5世紀代に納めることが可能と思われる。

最後に上記の分布傾向をふまえてSG3の性格について触れてみたい。まずSG3のVIII～VI層出土の土器様相は古墳I期中心である。この時期はSG3の両側に数軒づつの住居址が出現する。榎田遺跡におい

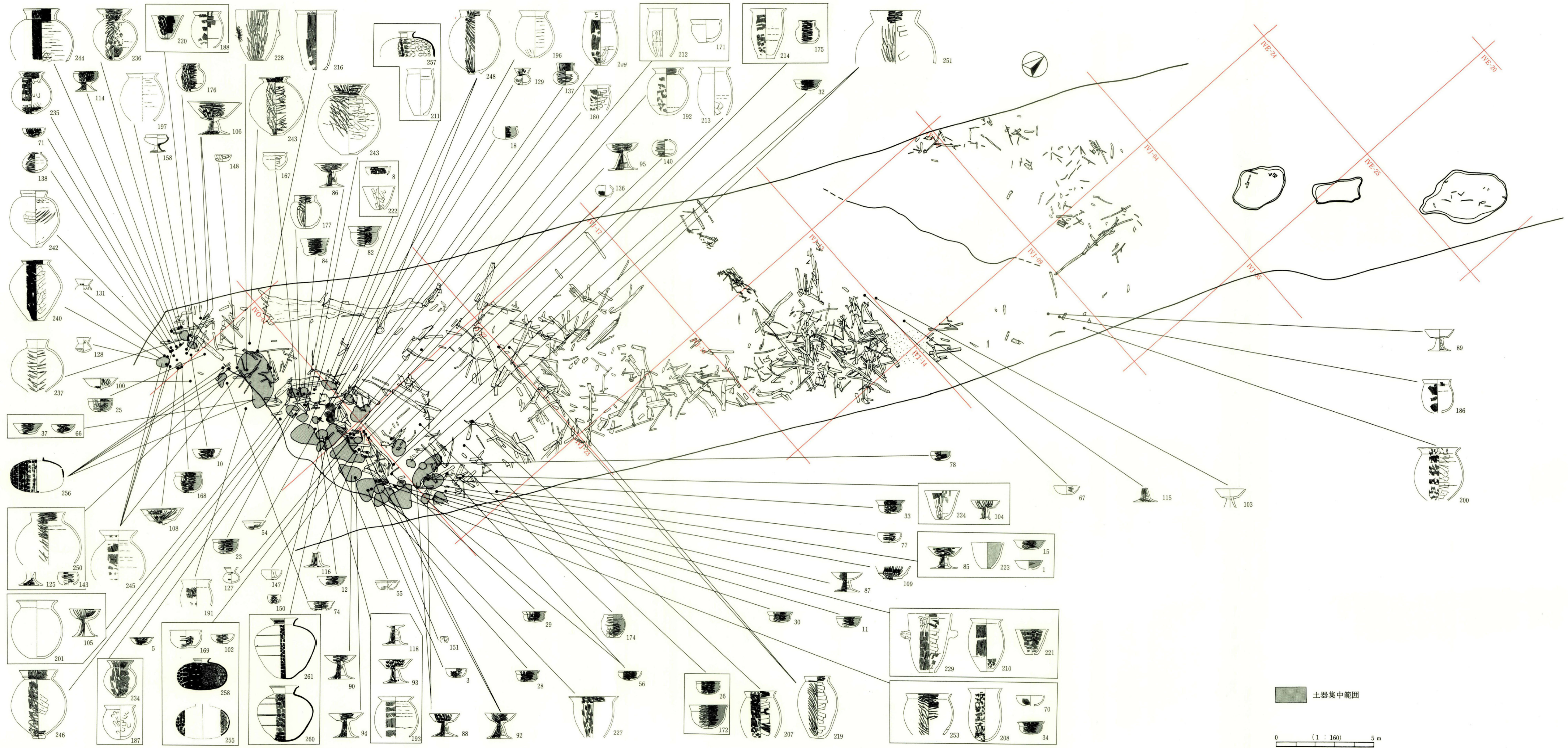
ては古墳Ⅰ期以前に集落が確認されない期間が存在し、SG3のⅧ層以下でも遺物がほとんど出土しない状況から見るとⅧ～Ⅵ層土器の堆積時期は集落の出現期と一致すると思われる。

続くⅥ～Ⅳ層の時期においては集落が確実に定着・増大し、特にSG3周辺には大型住居が集中する傾向がある。また住居址の大半にカマドが確実に登場する(第4章第3節)。一方SG3Ⅵ～Ⅳ層における木製品の中には工具・農耕具・建築材など多様な木製品が見られる、その中には鉄刃の装着部を有する耕作具が数多く出土しており、これらの道具を用いて居住域、生産域の拡大が進められたと思われる。また木製品の中に未製品や木屑がある点などから、SG3周辺に木製品を製作する集団が存在した可能性があり、SG3に製作時の木屑が廃棄されたと推測できる。また、建築部材の大半に転用された2次加工痕が見られ、解体した建物を2次転用後にSG3に廃棄、又は再度転用するために蓄積した可能性も推測できる。

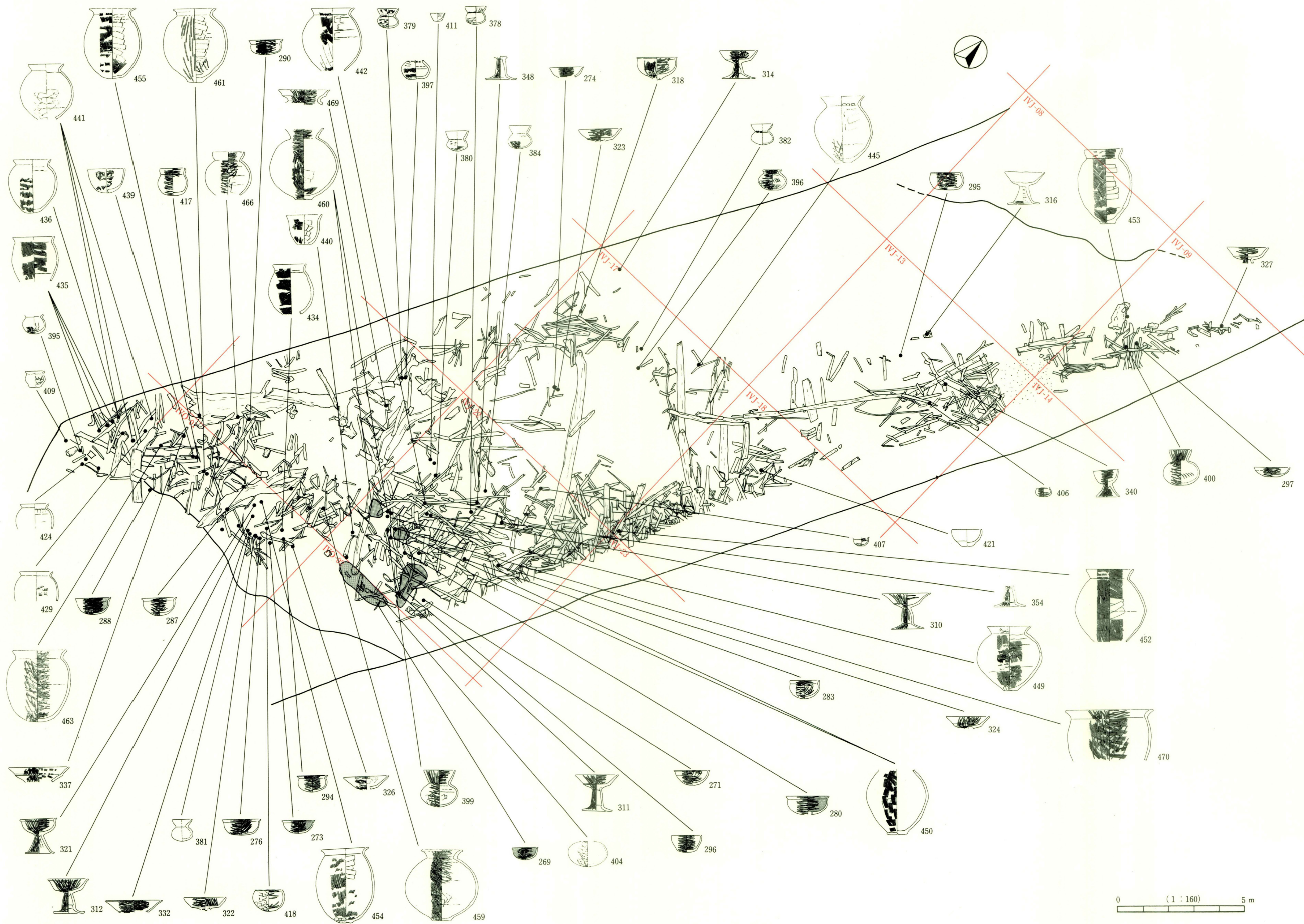
この他木製品の中には、弓類・劍鞘・馬具・きぬがさ・案?など通常の一般農民層が所有し得ない製品も存在する。これら木製品には未製品も含まれており、SG3に持ち込まれた背景として、製作途中でSG3に廃棄された、SG3における祭祀に用いられた、何らかの祭祀が行われた後にSG3に廃棄された、など複数の可能性が考えられる。何れにせよこれら特殊品の生産またはそれを用いた祭祀にかかわる有力者層の存在が推測できる。

Ⅳ層上部に目を向けると、古墳Ⅱ期を中心とする土器の集中・玉類・骨類の分布は、Ⅵ・Ⅷ層における出土状況とは異なる様相を示しており、単純な廃棄が行われたとは考えにくく、該期にSG3南岸で何らかの祭祀行為が行われていた可能性がある。この他Ⅳ層では古墳Ⅲ期以降に属すると思われる横瓶が4点出土し、時期不明の鳥形木製品なども出土している点から、Ⅲ期以降にも祭祀的行為が行われた可能性もある。しかし、Ⅳ層土器集中範囲では細片の出土量も多く、土器の廃棄場所としての役割も果たしていたと思われる。

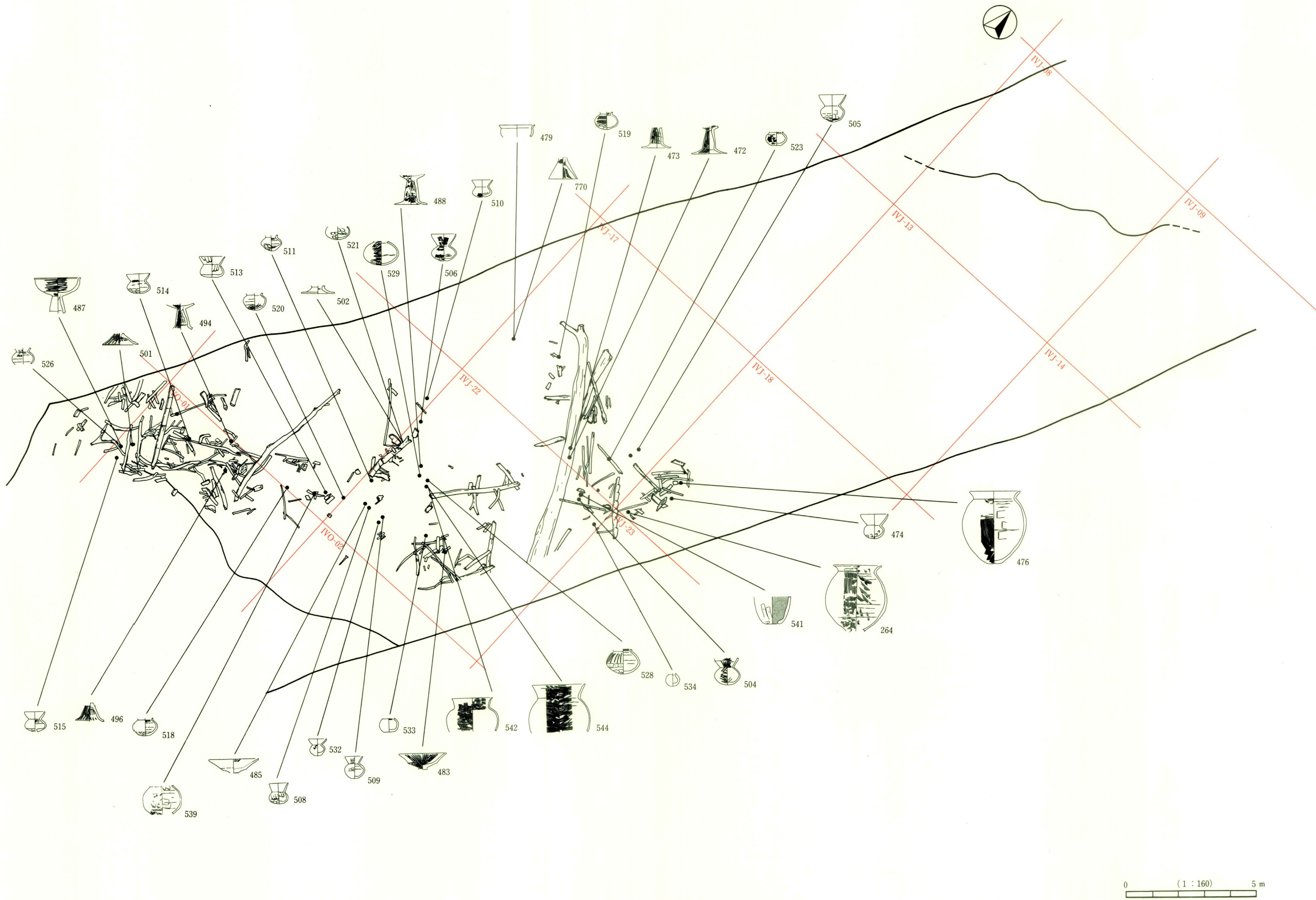
以上のとおり、SG3には大きく廃棄・祭祀という2つの性格と、周辺での木器製作集団の存在などが浮かび上がる。しかしこれらの性格が特定の期間のみ存在したとは思われない。確かに祭祀的様相のうかがえる遺物の出土状況は、面的に見るとⅣ層の土器集中範囲が中心と推測できるが、その下部に堆積するⅣ～Ⅵ層の木製品の堆積時期が、それと一連のものであるかどうかは断言できない。武具・馬具などの特殊品も同様である。またこれらをすべて祭祀行為の結果と見ることもできないように思われる。一方で、鉄刃を装着した農具や、初期須恵器・武具・馬具など特殊品は一般農民層が容易に入手可能な製品ではなく、背後に有力者層が存在したと思われる。榎田遺跡においては古墳Ⅰ期以降に有力者層の下で集落が発展し、SG3は成立・定着期の集落の中心にあった。そこは集落において多様な機能を果たした場所であったと推測される。



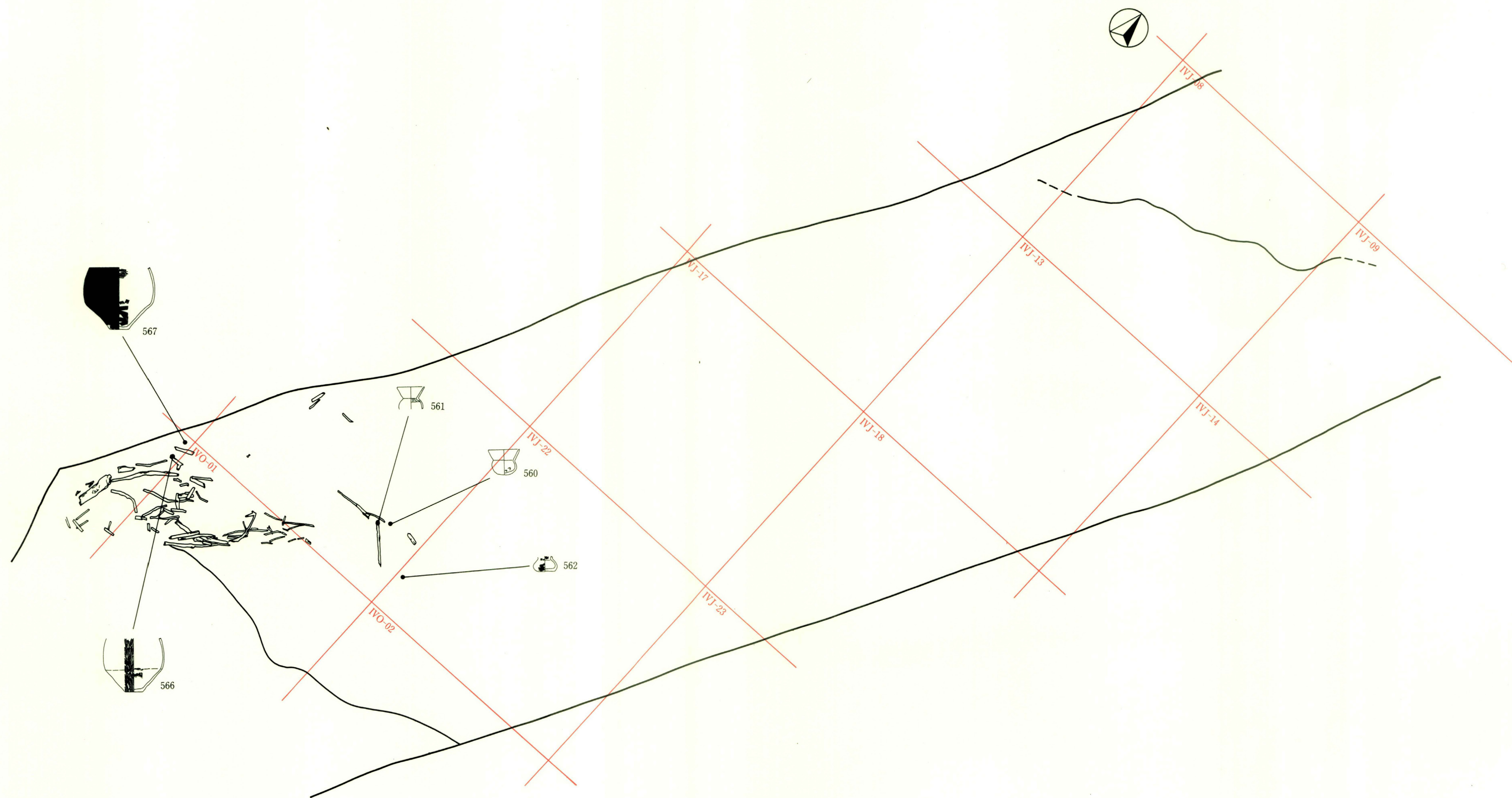
第93図 SG3 IV層土器出土状況



第94図 SG3 VI層土器出土状況



第95図 SG3 VII・VIII層土器出土状況



第96図 SG3 X～XVI層土器出土状況